
相棒以上恋人未満

不可思議

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

相棒以上恋人未満

【Nコード】

N9427L

【作者名】

不可思議

【あらすじ】

コ哀、新志を中心に短編をポツポツ書いていこうと思います。短期の連載も含め。
了解出来る方だけ、読んでみて下さい。

哀・アイ・傘（前書き）

小説というものを初めて書くので、おかしな所が沢山あるかもしれませんが。

哀・アイ・傘

どんよりとした雲に覆われて、生暖かい空気をまとった昼過ぎから雨が降り出した。

天気予報では今週か来週から梅雨入りだと言っていた。

グレイに染まる低い空を横目に、簡単すぎて退屈な授業をやり過ぎす。

雨はあの日を思い出して少し憂鬱にさせる。

隣を見ると同じく簡単すぎて退屈な授業と給食の後での相当な眠気に耐え切れない彼は、うとうと意識を飛ばしている。

哀は小さく欠伸を噛み締めた。

「やつべー、カサ忘れちゃった！」

放課後になり元太が騒ぎだす。

雨はしとしと降り続け何もかもしっとりと濡らし続けている。

新緑の緑が更に色濃くなったように見える。

「全く、この間も元太くんは忘れたと言ってたじゃないですか！

今日は雨降るってテレビで言っていましたよ」

呆れたように言う光彦に、元太は口を尖らせた。

「はい」

哀が鞆から取り出した折りたたみ傘を差し出す。

「置き傘もあるから」

と続ける。

「サンキュー、灰原！」

ニッコリ笑って元太は受け取った。

「哀ちゃんは帰らないの？」

教室から出て行くこうとする哀を、歩美が引き止めた。

「先生に用事を頼まれたから。先に帰ってて」

がっかりしたような寂しそうな顔する歩美。

「そっかぁー残念だな。じゃあまた明日ね」

「ええ。さようなら。気をつけて帰りなさい」

口元をあげて微笑むと、可愛く手を振って歩美は笑った。

慌てて光彦も元太もさようならと手を振る。

哀が教室から出て行くと、ポケットとしていたコナンに帰るぞと元太から大声がかかる。

先生の用事は思ったより時間がかかり、少しだけ薄暗い廊下を急いで教室に向かった。

教室のドアを開けて驚いた。

「工藤くん？どうして」

教室に一人眼鏡をかけた賢そうな少年、コナンが小説を読んでいた。

「オメーを待ってたんだよ。傘がないと思ってさ」

「え？」

「やっぱり。ついこの間も元太が傘忘れて貸したじゃねーか。忘れてただろ？」

そつえばと哀はロッカーを開く。傘はない。

数日前にも元太に傘を貸したことを思い出した。

「返して貰ってなかったわ」

博士は夜まで打ち合わせで帰ってこないから、迎えにはこられない。コナンが待っていないかったら、濡れて帰らなくてはいけなかった。

「そんな事だろうと思ったぜ」

小さな推理が当たって得意げに笑う。憎たらしいと少し思った哀は息を吐いた。

帰ろうとコナンが言うと、哀は黙ってついていく。

雨は更に激しくなり止みそうもない。

靴を履いているときに気づいた。二人に傘は一つ。

つまり。いわゆる。相合い傘だ。

パサツと傘を広げてコナンが呼ぶと、哀は戸惑いながらも黙って傘のなかに入る。

傘の外で雨のカーテンが二人を包みこむ。

いつもの通り無言で歩いているのだが、何故か落ち着かない。

傘一つでいつもより距離が近い。

雨の音でそんなはずはないのだが、呼吸まで聞こえて来そうだ。

「もうちょっとこっち来いよ。肩濡れてる」

「大丈夫よ」

心なしか心臓の動きが早く、声が大きくなる。

近すぎて触れそうになる度、哀は傘からはみ出していたのだ。

そんな心の動揺をしている哀には全く気づかないコナンは、難無く哀に近づいてくる。

(本当に、恐ろしく鈍感な人ね)

哀は既に触れあう肩を見ながら、小さく笑った。

触れ合う半身の温もりが馴染んできたと思ったら、もう探偵ビルの前だった。

夢のような空間もこれで終わり。

「なあ、灰原。階段でちょっと待っていてくれるか？」

「え？」

コナンは返事も聞かず傘を哀に渡して走りだす。
数分後、ランドセルを置いたコナンが来て再び同じ傘に入るこ
となる。

「いっせ」

ニッコリ笑う彼が眩しかった。

どうやら遊びに来るらしい。

博士が帰ってくる夜までいるつもりだろう。

まっすぐに勘違いする程の優しさは、彼特有の何の意図もない行動だ。

今日はその優しさに甘えよう。

哀は傘のなかでほんの少しコナンに密着する。

家まであと少し。

二人の相合い傘は続く。

探偵事務所の上から蘭が、かわいらしい少年少女の相合い傘を微笑ましく見ていた。

哀・アイ・傘（後書き）

思っていることを文章にするって、こんなに難しいとは思いませんでした。

事件のあとで（前書き）

コ哀。先日のごスロリ殺人事件後の話です。
蘭が壊れてるかも。

事件の後で

犯人が逮捕されて、店から慌ただしく警察が出ていく。
小五郎は目暮とともに出ていった。

「ねえ園子！これ見て。可愛い！！」

蘭が何かを見つけて飛びついた。

事件があったというのに可愛いものに目がない、女というものはよく解らない。

半目でコナンは蘭達を見ていた。

営業用の顔になった店員が蘭達に近づく。

「子供用のゴスロリ服よ。さっき入荷したの」

ひらひらしたフリルのついたワンピースを持ち上げ、蘭は笑顔だ。
しかし子供用ゴスロリってどんな奴が買うんだろう？明らかにおか
しな奴だよなとコナンはげんなりした。

「小さいから尚更可愛く見えるわね」

「うん。人形の洋服みたい」

小さいスカートや小さい髪飾りと豊富な子供コーナーの商品を次々
手に取ってみる二人。

しばらく見ていた二人が、息を合わせたように目を合わせた。

「似合いそうだと思わない？」

「確かに、あの小生意気な顔にピッタリかもしれない」

「だよ。哀ちゃんに絶対似合うと思う！」

「…え、灰原？」

意外な名前が出て、コナンは目を開いて蘭達を見つめる。

レースやフリルのついたゴシックなモノクロ服は、灰原にとても似合うだろうと思われた。

「…何かしら？」

眉ひそめて灰原が動揺している。

蘭と園子がニコニコしながら、博士の家の玄関に立っていた。

園子がお邪魔するわよと靴を脱ぐと、蘭も続いてお邪魔しますと大きな荷物を持って家の中に入った。

「え…ちよつと！」

慌てている灰原は中々見られないので、貴重だなとコナンはおもった。

「どづいづいとよ？」

後ろにいたコナンの顔に近づき、半目で睨みながら聞いてくる。

「やあ？」

とコナンはすつとぼけた。

これから更に慌てる哀を見られるかと思うと少し期待してしまつ。
いつもお高くすましているその顔に、表情が出てとても可愛い・・・
・・・ん？可愛い？

「あの…一体…」

リビングに行く、何処でもいいから部屋に行きたいと蘭と園子が言う。

「コナンくんはここにいてね。覗いたら回し蹴りよ」

人差し指を立ててお姉さんらしく言う蘭の本当の強さを知っている
コナンは、はいと子供らしく返事よく答えた。

「え？どういっ」

哀の両腕を掴んで蘭と園子が部屋に拉致をした。
なんだか蘭がとても生き生きしている気がする。
博士の家にある読みかけの小説を引っ張りだし、コナンはソファに寝そべった。

「……………」

しかしどうもドアが気になって落ち着かない。

さっきから同じ行を何度も目で追っている気がする。

最初、灰原の叫び声が聞こえていたが今は静かだ。

本を置いてドアに近づこうと歩き出した時、ドアが一気に開いた。

「キヤー、可愛い！！」

と蘭と園子の絶叫が響いた。

「見て見て、コナンくん！哀ちゃん超カワイイの！」

嫌よという哀の腕を引っ張り、蘭がコナンの前に哀を連れていく。さっきの店で、お金持ちのお嬢様が服や小物を一式買ってしまったのである。

絶対似合うと言う自信から、哀は着せ替え人形のように着替えさせられた。

哀はすでに白目になり超絶に不機嫌なのだが、そのヒラヒラしたゴシックロリータが本当に良く似合って、人形のようにだった。

赤みがかった茶髪も白人譲りの彫りの深い顔立ちも、白と黒のシンブルな色とゴージャスな飾りに良く映える。

「ね！絶対似合うとおもったんだー」

と蘭は得意げに写メを撮りまくる。

「あー。やっぱりハーフって良いわねー」

と園子が羨ましがる。

哀はうんざりして、反論も抗議もする気がない。

「コナンくん、どうしたの？」

コナンがぼーっとして全く動かないので、蘭が覗き込む。

「あまりにこの娘が可愛くて、いっちょ前に見とれてたんじゃない？」

ニヤニヤと園子がコナンを見る。

「え……」

「ちっ……違っ」

否定するも、凶星のコナンの顔は真っ赤だった。
クスクスと蘭が笑う。

しかし本当に灰原によく似合うとコナンは思って、また見つめてしまった。

「何よ。笑うなら笑いなさいよ」

と哀は横を向いた。

「……いや……すげえよく似合う」

コナンが素直に答えたので、哀はビックリしてコナンを見つめた。
コナンは照れて笑う。

「あら。ガキンチヨ達、いい雰囲気」

蘭と園子がケータイを構えた。

「は？」

「もう一着あるから、こっちに来なさいよ」

「今度は甘めなゴスロリよ」

「私達とお揃いの！」

哀は再び拉致され、更に辱めを受けることになった。

後日。

蘭から和葉経由で送られた写メの中に、コナンと哀が向きあい

「いい雰囲気」

な画像を見た服部にからかわれるのコナンだが、この時はまだ知らずに甘めゴスロリの哀を楽しみに待っていた。

事件のあとで（後書き）

このあと可愛すぎる哀ちゃんを関西から和葉が勢いで着替えさせる
…って
書かないけど思いました。

今夜も眠れない

少年探偵団と博士はキャンプに来ていた。途中エンストする等のアクシデントはあったものの、無事目的地のキャンプ場に到着楽しく時間を過ごした。子供と年寄りしかいないので寝てしまうのはあつという間だ。テントの中でコナンは眠れずに起き上がった。

「あれ？灰原がいねー」

布団は冷たい。大分前にテントから出たようである。皆を起こさないように静かにテントから出る。

暗闇の天井に幾つもの小さな光が浮かびコナンは圧倒された。都会では決して見ることの出来ない星空だ。遠くで蛙や虫、鳥の音がする。

暗闇に目が慣れ、テントから少し歩いた所に小さな黒い塊が見えた。

「一人で何してんだよ」

コナンが話しかけても振り向かず空を見つめている哀。

「眠れないのよ」

普段夜遅くまで起きているので、こんな時間に眠れる訳がない。

「本当に凄い星空ね。一つ一つが輝いて、星と星の隙間がないみた

い。」

「ああ。俺もこんな凄いの初めて見た」

「眠るのもつたないわね。綺麗すぎて吸い込まれそう…」

一瞬、灰原が消えそうな気がしてコナンは慌てた。思わず肩を掴んでいた。

「…何？」

はっと気づいて手を退けるコナンに、哀は首を傾げる。

「まだ戻らないのか？風邪ひくぞ」

「もう少し…」

フワツと暖かいものがかけられた。

コナンがテントから持ってきたものである。なんとなく必要な気がした。

そして哀の隣に座り、一緒に肩にかけた。

「…優しいのね。ありがとう」

灰原が横目でコナンを見る。コナンは素直な哀に答えようとした。が、

「…でも、変なことしないでよ」

コナンはずっこけた。

「バ、バーロー！誰がするか」

真っ赤になっているコナンの顔は暗闇では気づかれなかった。一方の哀も顔が赤かったのだが、こちらにも気づかれずにすみそうだった。

しばらく二人で星空を見ていると、目の前に淡い光がふわっと通った。

時々いくつかの流れ星を発見してたが、それとは違う。

「蛍…？」

コナンが立ち上がる。

「灰原、こっち」

哀の手を引いてコナンは小さな蛍を追い掛けた。

高い草木をかき分けると、水場があった。

そこには無数の蛍がいた。

「凄い…綺麗」

蛍のあかりで辺りがぼんやりと明るい。

コナンが横向くと、光に照らされた哀が優しい顔で蛍を見つめていた。

「綺麗だな」

コナンが答える。手は繋いだままだ。離したくなかった。力強く握ったので哀が気づいた。慌てて手を離し、離れようとして後ろに転んでしまう。しかし手を離そうとしないコナンも一緒に転んでしまった。

蛍が一斉に舞い上がる。

コナンは哀の上に覆い被さるような体制になり、蛍の光に浮かんだ。

子供と年寄りの朝は早い。

叩き起こされたコナンは寝ぼけ眼で、視界に哀を捕らえた。夜の事は夢だったのか、よく解らなくなった。

小さく欠伸をした哀は、コナンに向かって囁いた。

「変なことしないで言っただでしょ。嘘つき探偵さん」

「えー。変なことって何ですかー？」

光彦が聞いていたらしく大きな声で聞いてくる。

不安になった歩美と、興味津々な元太まで加わってコナンは言い訳に困り果てた。

哀はクスクス笑って知らん顔。

賑やかな朝が始まった。

今夜も眠れない(後書き)

なんだかベタなようになつまらない話でした。
すみません。

名もなき人の疑問（前書き）

コ哀ですが恋愛ではありません。オリジナルキャラ目線であただのおふざけです。

ごめんなさい。苦情は受けません。

名もなき人の疑問

お金持ちの暇つぶしパーティーは本当に退屈で仕方ない。

世界で注目されている新作ゲームの披露パーティーと言う事で、お金持ちや有名な子供も沢山いる。

時々見かける団体。鈴木財閥のお嬢様と、アなんとかと言う発明家、毛利小五郎家族も、煩い子供を幾人か連れていた。

まあ、中学生の私もそのお金持ちのうざい子供の一人なのだが、全く、退屈で仕方ないとため息をついた時、事件は起こった。

「キヤー！」

新作をいよいよ発表と言う時、会場にいた不動産会社の社長が殺されたのだ。

しかし、この会場には毛利小五郎がいる。

すぐさま会場を閉鎖し、警察を呼んだ。

叫び声を聞いて、死体に駆け付けたのは小五郎だけではなかった。

一緒に来ていた眼鏡をかけた小学生の男の子だ。

毒を盛られ血を吐いた死体に、小学生が近づいている。

(え？あんな子供なのに死体平気なの？)

と思わず見てしまう。

何かを見つけてハンカチで取り上げる。

(もしかして指紋つかないように？)

そして驚いたことに、もう一人、赤みがかった茶髪のお人形さんみ

たいな可愛い女の子が、男の子に呼ばれて死体に近づいた。

(探偵の知り合いのお子さんかしら？死体の周りにいて平気なのね)
自分なら真つ平ゴメンだな。と思ってたら毛利探偵に怒られて男の子は追っ払われた。
なんだか気になって、彼等を探してしまう。
二人は壁の近くで話していた。

(…なんか、凄い大人っぽく見えるのは何故かしら？)

ドキドキする。人の陰に隠れて聞き耳をたてた。

「この毒は即効性ね。匂いがなく、一瞬にして大量の血を吐かせる、恐らく　　か、xxx」

「つまり、被害者の周りにいたあの6人が怪しい」

「ええ、これは揮発性があるから密閉性の容器に…」

何を言っているのかよく解らなかった。

いつちよ前に推理しているのは解ったが、あんなに幼い子供から、なんだかよく解らない難しい単語が出てくるなんて。驚いた。

そういえば騒いでた他の子供達と違って、この2人は後ろで静かに子供達を見守っていたっけ。

2人ともなんとなく雰囲気似ている。

ドンと大きな身体の男の子とぶつかった。

「イッテ」

「ああ、だから走っちゃ危ないって言ったじゃないですか。元太くん」

「お姉さん大丈夫？」

カチューシャの小さい女の子が私を心配する。
体格のいい男の子は、ばつが悪そうに私を見上げた。

「…ごめんなさい」

「大丈夫よ」

(あ、このご達確か)

「ねえ、君達学年は？」

「え？一年生です。」

「眼鏡の子も、かわいらしい茶髪の子も一年生？」

「そうだよ。同級生なの。お姉さんコナンさんと哀ちゃん知ってるの？」

「う、うん、さっきそこに…あれ？いない」

「あいつらやっぱりぬけがけしてんだよ！」

「探しましょう!」

「うん!」

賑やかに去っていった。

(小学校一年生って6才か7才か…)

明らかにあの2人は異質だ。

そばかすの子も賢そうだったが、2人の雰囲気と同じには見えない。ふと見ると警察が到着し、その周りをあの2人がうろうろしていた。普通、警察は子供がうろうろしていたら追いつくのに、あの子達には言わない。

むしろ、眼鏡…コナンで名前だけ。コナン君が話すことに真剣に耳を傾けている。

(あ、さっき壁のところで話してた喋り方と違う…)

マヌケそうな若い刑事だけでなく、恰幅のいい上司みたいな人も、賢そうな美人刑事も、7才くらいの子供の話に誘導されている。あの有名な毛利探偵も、茶髪…哀ちゃんにたしなめられてタジタジだ。

(なんで…なんで誰も疑問に思わないの…?)

その後は、何故か眠りの小五郎が推理を始め事件は解決した。でも、私はあの2人ばかり注目したので、コナン君が腕を触つてから毛利探偵眠るのにタイミングよく椅子を用意し、その後ろで、何かしているのを見ることができた。ハンカチで包んだ証拠もいつの間にか毛利探偵が見つけたことになっていた。

「すぐ事件解決したな。オメーがいてくれて良かったよ。」

「あら、私は何もしてないけど」

「素直じゃねえな」

「褒め言葉として取っておくわ」

「……………」

「……………」

「……………さつきから見られてるような気しなーか？」

「ええ、感じるわ」

私は気づかれないように慌てて隠れる。

(こんなに大人っぽい会話ができる小学生一年生って他にいるのか

しら？

2人は何者？

そしてこの2人を疑問にも思わない周りの人達)

このあとすぐに、不思議な2人は連れと帰っていった。

この街は事件が多いから、きっとまた事件があればあの2人を見られそうな気がする。

退屈なパーティーもたまには面白いのかもしれない。

名もなき人の疑問（後書き）

ごめんなさい。決して悪意はありません。子供が殺人現場で不振な動きしてたら普通バレるだろ！と時々無性にツッコミたくなるんです。

名もなき中学生も毒薬もみんな適当です。

次は普通に恋愛書きます。

再会（一）（前書き）

新志です。新一目線で書いてみました。

再会（一）

組織を倒して、解毒剤を完成させた灰原と俺は元の身体に戻れた。

あれから数ヶ月。

高校生探偵で相変わらず忙しい俺と、博士の紹介で薬学の研究所で働きだした灰原：宮野にほとんど接点もなくなるとまに顔を合わせる程度だった。

「でね、園子がいうには…新一？新一！」

しばらく事件がないので、普通に高校生をやっている。

いつも通り蘭との帰り道。

「新一！」

「ん…ああ」

「また、話聞いてない。もー、また事件の事考えてるの？」

「…いや、そういう訳じゃ」

なんでだろ？最近まで小学生のフリしてたせいかな？

自分が自分じゃない気がする。

クラスでの違和感。蘭との違和感。

心に穴が空いたような…。

最近ずつと考える。同じ時間を過ごしたあいつ…灰原は…

「新一、明日出かけない？」

「…え？いいけど何処に」

「さつき話した映画。聞いてなかったでしょ」

「ああ、スマン。解った、明日行くうぜ」

「本当？」

太陽のように笑う蘭。ああ、まただ…。ちくりと胸が痛い。

俺、なんでまだ告白出来ずにいるんだろう…？

「あ、哀ちゃんのお姉さん！」

博士の家の前に車が止まっている。

そこに玄関から淡いパステルのサマーニットと白いパンツをはいた宮野が出てきた。

蘭にはまだ何も言っていない。だから少年探偵団のあいつらと同じく、宮野は灰原哀の姉だという認識だ。

「相変わらず綺麗な人ね。一個上なのが信じられないくらい大人っぽいな」

いつも近くにいた時には解らなかったが、宮野は第三者から見ても間違いなく美人だろう。

ハーフというのもあって、そこらへんの女とは段違いだ。久々にみた宮野は更に綺麗になって輝いている気がする。

「あら？」

「こんにちは。お久しぶりです」

「こんにちは。相変わらずお似合いのカップルね」

「ちげーよ。そんなんじゃない」

「違います。新一とはそんなんじゃない」

顔を真っ赤にして二人で否定していると、宮野はフツと笑う。脱力するように綺麗に笑うな…と思っていたら、睨まれた。

(まだ、何も言っていないのね…)

と、声が聞こえた気がする。

解ってるよ。今の状態が不自然なのは。

「志保くん、お待たせ」

玄関から男が出てきた。初めて見る。

20代後半くらいの知的で優しい顔をしている男だ。

「別に待つてないわよ。博士落ち着いた？」

「うん。志保くんを宜しく頼むつて…あれ？」

ぼかんとしてる俺と蘭に気づいた。

「ああ、お隣りに住んでる工藤新一くん。とその彼女毛利蘭さんよ」
再び真つ赤な顔で否定する俺らに、宮野は涼しく無視して続ける。

「こちらは、研究所の上司で海堂さん」

「こんにちは」

人の良さそうな顔をして笑う海堂に、なんとなくイラツとした。
いや、それよりさつき何を話していた？

「志保くん、もう出ないとみんなに怒られる」

「ああ、本当だ。仕事に戻らないと。それじゃ、お二人さんお幸せに」

志保くん…海堂が志保くんと呼ぶたび顔がひきつる気がする。

宮野は、安心したように表情を出している気がして、胸がキリキリした。

「じゃあね」

宮野が車に乗って去っていく。

仕事の最中に研究所の上司と何しに来たんだろう？
宮野はあんまり俺を見てくれなかった気がする。

「新一？どうしたの顔怖いよ」

「…え？」

さつきから胸がモヤモヤする。宮野達の会話を聞いてから？あの海堂が現れてから？…いや、宮野をこの目で見てから…

「でも海堂さんいい人そうね。彼氏かな？」

憧れの眼差しで蘭が何気なく呟いた言葉に、頭を殴られたようだった。

「…彼氏？…まさか！あの宮野が…」

「新一？」

顔が歪む。から笑いをして口が止まらない。

「あんな仏頂面で、愛想なくて意地悪な宮野に彼氏なんて…」

「ちよつと、新一失礼な。」

頭に血が一気にのぼったような気がする。

胸がチリチリと熱い。

「志保さん綺麗だし、あの人優しそうだし、お似合いだと思うけどなー？」

宮野に彼氏…？

宮野が女の顔をして、あの男に…。
考えたくない！と想像しかけたことを振り払うように頭を振る。

「蘭、用事思い出した。またな。気をつけてて帰れよ」

「う、うん。あ、明日何時に…」

蘭の言葉が聞こえない。

家の門を開けドアまでふらふら歩く。

「新一！後で電話するから！」

辛そうな顔でため息をつく蘭に、俺は気づく余裕がない。

再会（一）（後書き）

短く終わらせる予定だったのに…あれ？なんでこんなにダラダラするんだろ…。

終わらないので続きます。

文章で難しい。

再会（二）（前書き）

続きです。関係ありませんが、題名付けるのにも苦労します。苦労しますが、いつも適当につけます。皆さんどうやってつけているのでしょうか。

一人称で簡単そうで難しいです。新一が別人のようです…無駄話すみません。暇な方はお読みになって下さい。

再会（二）

宮野に男が…。

そりゃいくらツンツンしてようが、あれだけの美人モテない訳がない。

社会人だし、色んな出会いがあるだろう。

でも、あんまり社交的ではない彼女がこんなにも早く、人を受け入れるなんて。

海堂と笑顔で話す宮野。

俺には見せたことのない表情で話すのだろうか。

さっきから頭の中でぐるぐる考えが回る。

制服のまま部屋のベッドに沈んで一時間経っていた。

俺はなんで、なんでこんなに宮野を気にしてるんだ？。

良いことじゃねえか…

『別に待ってないわよ。博士落ち着いた？』

『うん。志保くんを宜しく頼むって…あれ？』

さっきの会話を思い出した。

博士落ち着いた？志保くんを宜しく頼む？

この会話って…嘘だろ…まさか…！

その言葉が出てくる前に、走りだしていた。

「博士！！」

息を切らせてチャイムを鳴らす俺に、慌てて巨体を動かして博士がやってきた。

「どうしたんじゃ新一、そんなに慌てて？」

「はあっはあっ、……結婚…はあっ…するの…？」

海堂に宜しく頼むって、そういうことしか思いつかない。
胸が悲鳴をあげている。

否定して欲しかった。

「なんじゃ、もう知っておったのか」

「…！」

足元がガラガラ崩れた気がする。

宮野が結婚…する？

「今夜お前さんを呼んで報告しようと思ったんじやが…そういつい
とじや」

「……………」

「こんな歳で恥ずかしいんじやが、志保くんもけじめつけたほうが
いいと説得されてな…」

「……………は？」

「式は内輪でささやかに…おい、新一。何マヌケな顔しておるんじ
や？」

「…は、博士が結婚すんのか？」

「そうじやよ。誰が結婚すると思つとたんじや？」

宮野じゃなかった…良かった…

俺は一気に安心して力が抜けてへたりこんだ。

博士は意味が解らず、オタオタしていた。

その夜、宮野が帰って来て改めて博士の結婚報告の祝いの食事をした。

長い間思い合って、妻になる銀杏の彼女の横で、博士はとても幸せそうに笑っている。

「博士、おめでとう」

宮野と博士を祝福する。

博士には色々迷惑かけてるし、幸せになって欲しいと心から思った。

食事が落ち着いて、博士がフサエさんを送って行った。洗いものをする為にキッチンに立つ宮野の側にいく。

「あら、珍しい。手伝ってくれるの？」

「珍しいってなんだよ。片付けは大体手伝ってるだろ」

「そうだったけ？」

「なんだよ。さっきまでしおらしく泣いてたくせに」

「！」

やべっ。つい余計なことを言ってしまった。

久々に会ったというのに、つい軽口を叩いてしまう。

宮野は一瞬俺を睨んで、息を吐いた。

「そうね。博士は父親みたいなもの。幸せになってくれて凄く嬉しいわ」

ふわりと笑う。

「思わず泣いちゃった」

無性に抱きしめたくなった。

息が苦しい。

そんな笑顔が出来るようになったんだな。胸が締め付けられる。

「ほら、早く食器拭きなさい」

照れ隠しに命令する。

その姿もまた可愛くて、触れたくなる。

…なんだよ…この気持ち。

慌てて食器を片付けていて、しばらくすると思いだした。

「なあ、博士の結婚祝いに何かプレゼントしねえか？」

「プレゼント？良いわね」

「明日仕事休みだろ？明日どうだ？」

別に緊張することでもないのに、デートに誘うような緊張感が身体を襲う。

「明日は…駄目なの」

「何かあるのか…?」

フツと唇間の男の顔が頭を過ぎる。

「ええ、物件を見に行くの」

「物件?」

「もう決めているんだけど、一応見ようと海棠さんが…」

海…堂…?

あ、また。顔が引き攣る。

「お前引越すのか?」

今気づいたように、宮野はキョトンとした。

「ああ、言っの忘れたわね。私、ここから出てくのよ」

「どっして…」

「だって、博士は新婚さんよ。邪魔する訳にはいかないでしょ?」

「…そりゃ、そうだけど!…博士がよく許したな」

博士が娘のような宮野を手放すはずはないと思ってた。

「ええ、だから昼間説得するのに大変だったのよ。海棠さんがいてくれて良かったわ」

また海棠…

「まあ、仕事に近い所へ引越したかったし、ちょうど良かったわ」

「…あいつと一緒に住む為にか？」

「…は？」

さっきから胸の中がドロドロしている。

一体俺はどうかしてしまったのか。
感情がコントロール出来ない。

「明日海棠さんと一緒に物件見に行くんだろ？」

「え…ええ」

「一緒に住むための物件を…」

「ちょっと待って！意味が解らないんだけど。何故海棠さんと住まなくちゃいけないの？」

「何故って…」

「まさか、私と海堂さんが付き合っていると勘違いしてたの？」

宮野の顔が強張る。

「付き合あって…ないのか？」

「あの人、既婚者よ」

「き、既婚者…。奥さんいるのに、宮野に手だしたのか？」

「工藤くん！冗談もいい加減にして頂戴。彼はそんな人ではないし、奥さん一筋よ」

宮野が更に顔を厳しくする。

「………すまん」

と謝る心の奥で、俺はホツとしていた。

「部下が急に引つ越さなくちゃいけなくなっただって聞いて、知り合いの不動産から良い物件を見つけてくれたのよ。博士と一緒に説得してくれたし」

「そうなのか。それはすまなかった…」

「何をどうしたら、付き合っていると、勘違いするのかしら？」

「…「ごめんなさい」」

あいつは彼氏じゃない。

「夫婦ともいい人で、よくお世話になっているのよ。海堂さんに失礼だわ。」

海堂さん、ごめんなさい。

「・・・あなたは本当に残酷な人ね」

「え？」

宮野はテーブルを拭きにリビングに去っていく。

最後になんて言ったのかよく解らなかった。

しかし、宮野が結婚する訳でもなく、彼氏が出来た訳でもないと解って心が軽くなった。

さっきまでの気持ちは一体なんだったのか？

でも。

よく解った。

思い知らされた。

「俺は、宮野志保が好きだ」

学校から帰って来てからの一喜一憂。
自分がこんなに単純だとは思わなかった。
ずっと宮野のことを考えていた気がする。

「工藤くん？あなた何してるの？」

キッチンに突っ立たままの俺をいぶかしげに見上げる。
大きな切れ長の瞳をさらに大ききくさせて、形の良い眉をひそめる。

ほら、また俺の身体が宮野を抱きしめたいと叫んだ。
でも、必死に我慢する。

「コーヒー飲むか？入れてやるよ」

「…ええ、ありがとう」

抱きしめたり好きだと言ったら、確実にこの笑顔はない。
今は、これでいい。

暖かい笑顔の宮野が見たいから。
博士、ゆっくり帰ってこいよ。

再会（二）（後書き）

ダラダラ長くてすみません。短編向いてないのか…いや、そもそも文章を書くのに向いてないのか…。

溢れる妄想が頭の中にあるのですが、形にするのは難しい。こんな書いて言いたいこと少しも書けてない気がする。

でも書きたくなるくらいコ哀（新志）は魅力的なキャラなんですよね。

読んでいただきありがとうございました。

時には可愛く（前書き）

コ哀です。またふざけた話で短いです。
久々に子供らしく振る舞う哀ちゃんが見たいなー…。

時には可愛く

哀は博士の研究発表で軽井沢に来ているが、ついて来なかったほうが良かったと後悔している。

例のごとく、事件を呼んでしまふ探偵さんが一緒だからだ。

「い・や・よ」

「だから頼むって。一回だけでいいから。減るもんじゃないだろ」

「減るわよ」

「そんな事言わずに…」

「ナンと哀はさっきからこの調子である。」

「大体なんで私が子供のフリをしなくちゃならないのよ」

「…お前、普段だって少しくらい気を使って子供らしいフリしろよ…じゃなくて！」

「あの長野の刑事さんが来るまで待つてればいいじゃない」

「長野市から来るから時間かかるらしんだよ。待つてたら、犯人なんて捕まえられない！頼むよ灰原。あの鑑識の人子供好きみたいだから、灰原が歩美みたく無邪気に可愛くお願いしたら、証拠品見せてくれるかもしれない」

「それって…口」

「とにかくくー！一言でいいから」

「…高くつくわよ」

「なんでもいいから！」

「うわーすごいねー。テレビみたい」

コナンが鑑識の警察に近づく。

後ろから乗り気のしない哀が顔をだす。

「ほんとだ！すごいカッコイイ！」

可愛い子供が無邪気に褒めたので、特に美少女に褒められ調子に載った鑑識は、まんまと策に嵌まり証拠品をコナン達に見せてくれたのだった。

博士が無事研究発表が終わった頃、事件も解決していた。帰りの車で、悪びれないコナンが言う。

「お前、子供のフリしていると可愛いじゃねーか」

「新一、なんのことじゃ？」

「……………それ以上言ったら殺すわよ」

苦笑いするコナンを横目に、フンと窓に顔を向けた哀は、

(可愛い、ね…疲れるけどたまに子供のフリも悪くないかも)

と思ったのだった。

時には可愛く(後書き)

子供っぽく可愛い台詞が思いつかなかった…

あいっだけはやめておけ(前書き)

「哀前提の 光彦です。哀ちゃんは出てきません。
きのご狩りの台詞は間違ってるかもしれません。」

あいつだけはやめておけ

給食が終わり、授業までの自由時間。トイレでも行ってくるかと教室から出ると呼び止められた。

「あの、コナンくん」

「なんだよ。光彦」

「前にきのご狩りのときに言ってたことですが…」

「きのご狩り？なんか言ってたっけ？」

「『悪いことは言わない。あいつだけはやめておけ。』」

とても手におえない』」

そういえば…とコナンは指で顎を触りなが思い出す。

あの時、光彦が哀に憧れの眼差しをガンガン向けていて、つい言うてしまったのだ。

まあ、手におえないからやめとけは今でも充分すぎるほどに思うが。

「あれって…」

「……………」

「ライバルにけんせい（牽制）って事ですか？」

「はあ？」

コナンはマヌケな声を出した。

「だってそういうことですよね。手におえないからあきらめろって遠回しに言ってるんだし」

「…う」

「なんでそんな事言ったのかなと考えました」

「…え」

「ズバリコナンくんも灰原さんが好きなんですよね」

「……………」

コナンは目を点にした。

でも、あ、そうか。

そうだったのか。

「コナンくん？」

「光彦！俺、自分の気持ち解ったわ。サンキューな！！」

キラキラした笑顔でコナンは光彦の肩を叩いた。

「……………え？」

今度は光彦の目が点になる。
スキップで浮かれたコナンが教室へ戻っていく。

「…え…えええーっ！」

光彦は強力なライバルを作ってしまった、と後悔しながら絶叫した。

あいっだけはやめておけ(後書き)

私の書くコナンは少しアホっぽいかもしれない…。

再会（三）（前書き）

新志。再会の続きで、志保目線。時間が少し重複しています。

別物を書いていたのですが、きちんと終わってないのが気になって先にこちらを投稿。

短編なのに続きものって変ですね…すみませんダラダラ長くてオリジナルキャラがいます。

再会（三）

「志保くんて意外に解りやすいタイプだね」

車が発進して間もなく、海堂さんが言った。

「どつという意味かしら？」

運転席の海堂さんはバックミラーで後ろを確認しながら、笑う。

「彼も解りやすい」

次の日は朝から、急遽引越す予定でお世話になる海堂さんのお宅へ向かう。

でも、何故か工藤くんがついてくる。

暇だかららしい。

いい加減、彼女に告白でもなんでもしてデートでもすればいいのに。何をしているんだろう？

マンションのエレベーターで上がると待ち構えてたように、海堂さんが待っていた。

「いらっしやい。待ってたよ。早く早く」

「あの、突然ボクまですみません」

「工藤くんだっけ？気にしないで。人数多いほうが嬉しいよ」

「？」

玄関にはいると、良い臭いが充満している。リビングには身重の奥さんがいた。

「お邪魔します」

「いらっしやい」

「こんにちは。ご無沙汰してます。お腹大きくなりましたね」

「来月よ予定日。生まれたら見に来てね。あら？彼氏？」

「違います」

「そ、そんなんじゃ…」

即答で否定した私と对象的に工藤くんは何をそんなに慌ててるのか、大袈裟にリアクションをし半目で私を睨んだ。

「隣人です。暇で勝手について来たの」

「なんだよ、ヒデー言い方だな」

「本当のことですよ」

そうよ。暇ならデートでもなさいって言ったのに、無視して来るって決めたのはあなたじゃない。

口論を始めそうになった私達に、奥さんはまあまあと間に入って、バルコニーに案内した。

「うわ、スゲー」

工藤くんが驚いて声をあげた。

このマンションのバルコニーはとても広い。

そこに所狭しと野菜が作られていた。

海堂さんはご満悦に料理を机に運ぶ。

「もしかしてこれ、海堂さんが作ったの？」

工藤くんが聞いてくる。

「ええ。彼の趣味の野菜づくりよ。そして、もうひとつ……」

私は目線を、テーブルからはみ出しそうな料理たちに向けた。

「料理も趣味なんだ」

工藤くんが納得した。

ブランチは美味しく、あっというまに時間が過ぎる。

途中、奥さんが工藤くんを高校生探偵だと気づいてサインを貰ったり、お腹いっぱいなのに、更に食べると薦めてくる海堂さんにごんざりしたが楽しかった。

「いつもこうなのか？」

海堂さんから逃げだし、マンションからの景色と野菜を見に行く。工藤もお腹がいっぱいらしく逃げ出してきた。

「そうよ、だからお腹すかせて来なさいって言ったでしょ」

うんざりした顔の工藤くんを見て笑う。

工藤くんが珍しく笑う私を一瞬驚いて見て、優しく笑った。

その笑顔に心拍数が上がった。

「宮野？」

いけない。また、気が緩むところだった。

昨日久々に会って、彼女とお似合いな二人を見てホッとしたはずなのに。

やっとそう思い始めたのに。

「そろそろ時間ね。海堂さん！」

スツと工藤くんから離れ、夫婦のところへ向かう。

「また、そんな顔してる」

「え？」

海堂さんは食器片付けるから待ってて、と言って工藤くんを呼んだ。

「女性は座ってお茶を飲んでてね。ですって」

「良い旦那さんですね」

「本当、こつちが申し訳なるくらい優しいわ」

幸せそうにお腹をさする奥さんは綺麗だ。

「彼もとても優しい人じゃない？」

奥さんが、家の中の工藤くんに目を向ける。

彼は海堂さんと並んで洗い物を必死にやっていた。それに少し口が緩む。

「ええ。とても優しい人…」

そして残酷な人。

胸がズキリと痛んだ。

「志保ちゃんは、彼の事が好きなのね」

「!?!」

息が止まった。どうして…？

「違います！何を言って…」

「そうかしら？貴方達、とってもお似合いよ」

お似合い？
そんな訳ないじゃない。

影に生きるしかなく黒い闇にいた私と、明るい太陽の下で幸せに生きた光のような彼。

正反対なのよ。不釣り合いもイイトコロ。

「彼には、彼にピッタリな彼女がいるんです。同じ光の中を一緒に歩いてゆける彼女が」

「…志保ちゃん？」

胸が痛い。さつき取れたカサブタの傷口が更に開いた気がする。

「お似合いなのは、あの二人。…私には、年上のほうが合うと思いません？海堂さんみたいなの」

「え？」

意表を付かれた奥さんの顔が面白く、吹き出してしまった。

「冗談ですよ」

「もー、志保ちゃんたら！」

笑っていると、急に真面目な顔になった奥さんが

「色々あるだろうけど、自分に嘘はついちゃ駄目よ。身体に悪いわ」

「……………」

「でもどうしても嘘つきたいなら、たまには素直になりなさい」

「…え？」

「少ーしだけ、素直になるの。そしたら楽になるわよ」

片付けを終えた二人が戻ってくる。

「随分楽しそうだったな。なんの話してたんだ？」

奥さんは私にウィンクして、女同士の話だから内緒と笑った。

「俺達も男同士の話は内緒だよな。なー」

海堂さんは工藤くんの肩に手を置き、対抗した。

工藤くんは苦笑いしている。

そして私を見た。

何の話したか、後で聞いてきそうね…。

ふんわり工藤くんが優しく笑ったので、私は体温が上がるのを感じて素早く横を向いた。

奥さんに御礼を言って、不動産屋と待ち合わせに向かう。これが今日のメインなのに正直どうでも良くなってきた。

疲れた。

奥さんにさえ気づかれていたなら、海棠さんにもとつくにバレているだろう。

私の演技が鈍ってしまったのかしら。

今の私が組織にいたら出世出来ないわね。

今度はもっと上手くやらないと。傷口は心の奥の更に奥に隠さなくちゃ。

気がつくと帰り道。工藤さんと駅から二人歩いて帰っている。

物件は研究所にも近く、博士の家からも遠くない物件で、日当たり良くまあまあな部屋だった。

断るつもりもないから、そのまま決めてきた。

「宮野疲れてない？」

「ええ。とつても疲れてるわ」

貴方のせいだね。

「じゃあ。夕飯は何か出前取って食おう」

「…あなた、夜までうちにいる気なの？」

「悪いか？」

「悪いわよ」

「そんなつれないこと言わずに…」

「…新一？」

家まであと少し、聞き慣れたあの人の声。

ゆっくり振り向くと、不安げにこつちを見る蘭さんが立っていた。

「どういうこと？事件…解決したの？」

事件？工藤を見ると罰の悪そうな顔をして俯いている。

蘭さんの大きな目に涙がみるみる溜まる。

「嘘…ついたの？」

再会（三）（後書き）

終わらない。何故…？

最低あと二話はあるかもしれない。てか確実に。

オリジナルキャラが要らないのに、沢山でしゃべるからこつなるんだらうな…。

スパッと言いたい事短く書ける術を身につけたいものです。

再会（四）（前書き）

新志。志保目線の続き。

再会（四）

「新一、事件が起きたから映画には行けなくなった。そういったよね？嘘だったの？」

蘭さんが信じられないと言う顔で工藤くんを見る。大きな瞳に涙を浮かべて。

工藤くんは俯いたまま何も言わない。

バカね、どうしてそんな嘘をついたのかしら。

何があつたのか知らないけど、大事な彼女を悲しませてどうするの。

「事件はさつき終わったのよ。工藤くんのおかげで無事解決したわ」

「…宮野」

「良かったわね。彼女迎えに来て貰って」

今はこれで納得するでしょう。詳しい言い訳は工藤くん任せるとして。

私は二人を置いてこの場を去ろうとした。

「…本当？新一？」

疑惑でいっぱいだった蘭さんの顔が少し緩む。だけどまだ信じられないと不安な顔で工藤くんに聞いている。

「……いや、俺嘘ついた」

「!?!」

…何を言い出すのよ工藤くん？
私がせっかく話を合わせたのに。

「どうして？どうしてそんな嘘ついたの!」

「蘭、すまない。後できちんと話すから、今は…」

「どうして今言えないの？志保さんがいるから？」

「宮野は関係ないよ。話が長くなるから、ゆっくり落ち着いて話したいんだ。宮野。話合わせてくれて、気を使わせて悪かったな」

「…いいえ、こちらこそ余計なことしたわね」

工藤くん、あなた一体何考えてるの？

「長くなるって何？新一解らないよ。志保さんと一緒だったんでしょ？何処へ行ってたの？」

「それも、後で話す」

「…なんだか信じられないよ。後でまた嘘つくつもり？」

「蘭…」

「新一のばか!?!」

涙を流して蘭さんが走っていった。

工藤くんは辛そうに、その後ろ姿を見ている。

「何してるの、追いかけなさい！」

私は怒鳴った。

工藤くんが何を考えてるのかさっぱり解らない。

「蘭さん変な誤解してるみたいなんだから、ちゃんと説明すべきよ。

「…誤解？」

工藤くんがぼつんと呟いた。

「あなたが何で事件だなんて嘘ついたかは知らない。でも、物件見に行っただけって言ってあげれば良かったんじゃないの？」

「……」

「私とあなたにの間には何も無いのに、彼女誤解してるわよ」

自分で言って、少し胸が痛んだ。

「工藤くん！」

「追いかけない」

「どっして…」

道端で騒いでいたので、近所の人が集まりそうになっていた。

話は一次中断。二人で家のなかに入る。

博士は夜まで帰ってこない。

リビングに入って私はすぐ工藤くんを諭す。

「今ならまだ間に合うわ。追いかちなさい」

彼女はきつと追いかけるのを待っているはず。

「今、蘭は興奮して話をきちんと聞けない。もう少し経って…明日落ち着いたら話すよ」

「時間経って更にこじれる可能性だってあるわよ」

「大丈夫。蘭なら解ってくれる」

…そうね。幼なじみで誰よりも解りあってる二人だものね。
私が心配する必要なんて、なかったのかしら。

また胸が痛む。無理矢理口元をあげてフツと息を吐いた。

「痴話喧嘩か何か知らないけど、早めに謝って仲直りする事ね。彼女泣いてたんだから」

「……」

「今度は私まで巻き込まないで欲しいわ」

「…俺、なんで嘘ついて宮野と出掛けたと思う？」

工藤くんが私をじっとみる。今日の工藤くんは変だ。

「知らない。どうでもいい」

本当にどうでもいい。

知りたくもない。

「蘭って、俺にはもったいないくらい出来た女だよな」

・・・は？

「美人で優しくて強い。誰からも愛される女だよな」

ソファーに座り工藤くんが蘭さんの惚気を始めた。

一体なんなのよ。

「・・・・・・・・ここで、そんな惚気言う前に、告白すればいいじゃない！」

「宮野？」

「蘭さんがいい女過ぎて自信がなくて悩んでるみたいだけど、安心なさい。告白すれば丸く収まるんだから」

「違う。最後まで話聞けよ」

「嫌、聞きたくない。いい加減にして！もう真っ平」

限界だ。さっきから心が血だらけで痛い。

誰が見たって両想いで、一足踏み出せば簡単に恋人同士になれるの

に、工藤くんは何を迷っているんだろう。
悩むことないほど、あなたたちお似合いよ。

「宮野、どうしたんだよ？」

工藤くんが私の腕を掴んで覗きこんでくる。

「離して」

「嫌だ。最後まで話し聞いてくれるまで離さない」

「私には恋愛の相談は向いてないわよ」

「だから話聞いてくれよ！頼むから！」

「だから聞きたくないって言うてるじゃない！…腕離してよ」

捕まれた腕が、痛い。

工藤くんと離れば、見なくて済む。

離れてる間に二人はくっついて幸せになってるかと思ってた。

離れば、余計な気持ちは心に封印できるかと思っていた。

なのに、今のこれは何？

痴話喧嘩に巻き込まれるわ、惚気は聞かされそうになるわ。

今日何度も工藤くんに見つめられて、気持ちが浮き上がるのを抑えるのに苦労した。

『自分に嘘つくのはやめなさい』

「…苦しいの」

そうか。心に嘘をついてたから、傷が治らないのね。
私は矛盾していた。

工藤くんが好き。

その気持ちを一切否定し続けた。忘れたフリをした。

一方で好きだという気持ちも誰にも知られちゃいけない。言つつも
りもない。
そんな資格ないもの。
と、心に決めている。

だから、そんな気持ちが苦しい。

『少し、素直に…』

「苦しいのよ…お願い。早く解放してちょうだい」

「…宮野？」

これは工藤くんに八つ当たりだ。
私の問題を工藤のせいにしてている。
でも二人が早く、くっついて見せつけてくれれば、この未練がまし
い恋心が収まってくれるかもしれないのだ。

「一日でも一秒でも早く蘭さんに告白して、恋人になりなさい」
きつと諦められるわ。

「お願いよ…」

「……………」

工藤くんが驚いて私を見ている。

泣く気はなかったが、勝手に涙が出てきた。

工藤くんには見られたくないけれど、相変わらず手を離してはくれないから隠せない。

「…俺が蘭に告白しないから、宮野は苦しんでるの?」

「え?…痛っ」

工藤くんが更に腕に力を込めてきた。

「その苦しいって…自惚れじゃなければ…」

「!?!」

私はミスをした。

一番知られたくない人に、何てことを言ってしまったのだ。
恋愛音痴で鈍感でも探偵でカンが良い人だ。
苦しいなんて言うんじゃないかった。

「俺のこと…好きってこと？」

再会（四）（後書き）

どんどんどんどん長くなるー。

余りに長くてまた分割してしまいました。

志保ちゃんに苦しい解放してって言わせただけなのに…
違う話はいつ投稿できるのか…

そして終わるのか…

再会（五）（前書き）

新志の続きです。引き続き志保目線です。長い嫌な方はこのシリーズ飛ばしてください。

再会（五）

「俺のこと…好きってこと？」

息が出来ない。頭が回らない。

涙は止まったが、瞳が工藤くんを見つめたまま動けないでいる。
どうしよう…

「告白しないから期待してしまって苦しい。俺と蘭がくっつけば、諦められて楽になれる…つまり、俺が好きってそういう事だよな？」

…流石探偵…これはまずい…どうしよう。なんて答えればいいのか？
黙ってれば肯定になってしまう。

…工藤くんから目が反らせない。

「キヤ！」

突然腕を引っ張られてバランスを崩す。

そのまま工藤くんの胸にぶつかり抱きしめられた。

…何？…何が起きたの？

「宮野、俺が好きなのか？」

「ち…ちが」

声を出そうとしたら、更に強く抱きしめられた。

「嬉しい」

「え？」

「すっげー嬉しい!」

「……は？」

頭が真っ白になっている。

「宮野は、俺に興味ないか嫌なやつだと思ってる、と思ってた。おめえいつもツンツンしてたし…。元に戻ったら、さっぱり会ってくれないし」

それに関しては、あなたが探偵で忙しいからじゃ…と私はぼんやりツツコムのを忘れない。

「同じ気持ちだったなんて」

「……は？」

今、なんて言ったの？

見上げると工藤くんは嬉しそうに優しく微笑んでいる。

「俺も、宮野が好きだ！」

「……はい？」

今日何度工藤くんを瞬きしないで見つめただろう。

「……ちよ、ちよっと待って！」

胸を押しつけるように手を突っ張るが、力が弱く逃げられない。抱きしめられたまま、私は抗議する。

「あ、あなた、何言ってるの？頭大丈夫？」

私は本気で心配する。

「あなたの好きな人は蘭さんでしょ？何血迷ったこと言ってるのよ」

「血迷ってなんかいない。俺はお前が好きだ。蘭は……蘭はただの幼なじみだ」

これは、夢だ。私は都合のいい悪夢を見ているのだ。

工藤くんがこんな事いうはずがない。

あんなに蘭さんの事好きだったんだから。

「気づいたのは昨日なんだけどさ……宮野？」

違う。違う。違う。

私は無言で首を振り続ける。

「宮野…」

「あなたが好きなのは、蘭さんよ…そうでしょ？」

お願い。そうだと行って。

工藤くんが目が悲しそうに私を見つめ細くなる。

横に降る首を止めるように私の頬を手の平で掴んだ。

「蘭のことは好きだよ」

ほらやっぱり。

「小さい頃から一緒にいてそれが当たり前だった。ずっと一緒にいたいと思ってた。でも」

私に言い聞かせるようにゆっくりと話す。

「それは、恋愛じゃない」

「恋愛じゃ…ない？」

「ああ。俺がずっと蘭が好きだと思ってた感情は、家族に対しての愛情だったんだよ」

家族に対しての愛情？

蘭さんを好きなのは変わらないでしょ？

恋愛の好きと何が違うというの？

「宮野を好きだと自覚した時、凄く抱きしめたくなくなった。今、おめえが俺を好きだって解って、キスしたいと思っている」

「キ…」

顔に血液が上がる。

また工藤くんが私を抱きしめた。

「あー、宮野可愛いな。このまま離したくない！」

彼は明らかに浮かれている。

心臓が壊れそうだ。人間の心臓はこんなに速く脈が打つ事ができるのか。

私の全身熱が上がる。

信じられない…どうして。

「蘭にはこんな気持ち起こらなかった」

どうして工藤くんが私を好きになんかなるの。

昨日、工藤くんは何があつたの？

「好きだ…宮野」

工藤くんの声が掠れている。

工藤くんの胸からも心臓の音が聞こえる。私と同じく速い。本気…なの…？

見上げると工藤くんの顔が近い。

私の瞳孔が開いた。

工藤くんの柔らかくて熱い唇が私の唇に重なる。

私は工藤くんとキスをしている。――

！RRRR…

突然、工藤くんの携帯が鳴った。驚いた瞬間私達は遠くに離れる
私も工藤くんも顔が赤い。

もつずっと心臓が破裂しそうだ。
息が苦しい。

唇にまだ、彼の温もりが残っている。

『ちよつと新一くんごーゆうことよ！』

携帯から大きな声が漏れてくる。

どうやら相手は鈴木さん。街で泣いている蘭さんに会って事情を聞
いたらしい。

「だから、蘭とは明日二人で話すから…うん。そこにいるんだろ？
伝えてくれ。…え？今から？」

蘭さん…。そうよ。

私何を考えていたのかしら？

スーツと気持ちが沈んでいくのが解る。

私は組織の人間で、知らないとは言え開発した薬が沢山の人を殺した。

工藤さんと蘭さんを半年以上引き裂いてしまった。

何をどうしたら、工藤くんが私を好きだと思ったのかは解らない。

でもそれは一次の気の迷いだ。

きつとすぐまた蘭さんに戻っていく。

薬…そうだ。

「宮野」

電話を終えた工藤くんが、私に近づいてくる。

「悪い。今から蘭と話してくるよ。どうしても今日話すって聞かないんだ」

工藤くんの手が私の髪の毛に触れる。

梳くように優しく撫でてくすぐりたい。

「俺の気持ち、おめえとのこと全部話してくるから。蘭には辛いだろっがきつと解ってもら…」

「何を勘違いしてるか、知らないけど…」

自分でも驚くほど、冷たい声が出た。

「私、あなたの事好きでもなんでもないわ」

「！」

工藤くんの顔が一瞬にして固まる。

肩を捕まれ、いきなりどうしたんだ！と揺さぶられた。

「私の作った薬で、半年以上あなたの時を止めてしまったわ。

本当に申し訳ないと思っているの。だから…」

私の声は震えてないかしら？

「私が苦しかったのは、罪悪感から抜け出したいから。あなたが告白して蘭さんと恋人になり、幸せになることを早く見届けたかったの」

「宮…野」

悲痛な顔で私を見る工藤くん。今彼をととても傷つけている。

「勘違いさせて、ごめんなさいね…」

工藤くんは黙って玄関に消えていった。

これで、これでいい。

私は床に崩れ落ちる。

「…どづいっ…どづいっ…」

憎むなら憎めばいい。

あなたが蘭さんと幸せになれればそれでいい。

玄関の扉の閉まる音がする。

「くっ…くっめ…やい」

全身の水分が集まったように、涙が後から後から出てきて止まらな
い。

それは床に次々に落ちて水溜まりになっていく。

再会（五）（後書き）

まだ続きます。ここで終わったらバッドエンドになってしまふので
…。
ちゃんとハッピーエンドで終わる（予定）。

再会（六）（前書き）

新志です。再び新一目線に戻ります。
会話も少なく独白ばかりです。

再会（六）

宮野志保を好きだと自覚したのは昨日。

宮野は運命的な縁で出会い奇妙な体験を経て、気持ち共有できる大きな存在だった。

多分小さくなつてた時から、なんでも素を出す事が出来ていたあの頃から惹かれていたのかも知れない。

半日前 - -

「工藤くん。君は志保くんの事が好きかい？」

持っていた皿を落としそうになって、海堂さんが慌ててキャッチする。

「な・・・」

「昨日、私の事睨んでたでしょ。あれで、ね。解っちゃった」

そうだ。俺の知らない男が宮野と仲が良さそうだったから嫉妬していた。

あの時自分では気づいてなかったが、この人は人をよく見ている。

「…すみません。」

「謝る必要はないよ。ただ、二股で志保くんを傷つけてほしくないからさ」

二股？ああ、あの時蘭がいたのか。

「…彼女は幼なじみです。ずっと一緒にいた、妹で姉のような存在です」

自分で言って驚いた。俺にとって蘭てそんな存在だったことに気づいたからだ。

笑い声が聞こえた。

外で宮野が笑っている。

初めて会った頃には見ななかつた笑顔。

綺麗に輝く彼女に胸締め付けられる。

「俺宮野が好きです。どうしようもないくらい」

きっぱりと言ったら、海堂さんが笑顔になった。

海堂さんは、部下の宮野を妹のように大事にしているんだと感じる。ふと、博士の顔が浮かんだ。

「…しかし、志保くんて意地っ張りで頑固な所があるから、君は苦労しそうだね」

ハハ…確かに。とげんり肩を落とすと再び海堂さんは笑った。

あの時も好きだと認識して、本気で宮野が欲しいと思ったんだ。見つめすぎて顔背けられたけど。

…ああ、駄目だ。今はこんなことを考えている時じゃないのに。今から蘭に会って話さなくてはいけないんだ。何から話せばいいのかまだ考えていない。

蘭に見つかった帰り道。

あの時も、何からどうやって話していいか解らなかった。

幼なじみで大事な蘭。なるべくなら傷つけたくない。

でも結局傷つけている。そしてまた傷つける。

全てをありのまま話したいと思った。あんな道端で感情的になった蘭と話したくなかった。

そういえば、あの時も宮野は気を利かせてフォローしてくれた。

いつもそうだ。理由も聞かず、相手の気持ちを察知して先回りする。普段はツンツンして、言いたいことをバシバシ言うから誤解されやすいけど。

彼女ほど優しい人はいない。

何かと自分より他人の気持ちを優先させる。

厳しい言葉も、それは言葉を選んだ真実で、彼女の優しさだ。

興味のない振りして、黙って静かに一步引いてるのもまた彼女の優しさ。

だから、それに気づいている探偵団のあいつら、博士、海堂さんは宮野を大事にしているんだろう。

歩美は宮野が灰原と同じだとは知らないが、灰原と宮野同じように慕っている。

そっぴや…と、笑ってしまった。

人の気持ちを敏感に察知する割には、恋愛には鈍感だな。

惚気だとか恋愛相談とか。随分誤解していた。

そして、…本当に驚いた。
宮野が俺を好きだと気づいた時。
こんなに早く気持ちを通じ合えるとは思わなかった。

震える彼女を抱きしめて、離したくなくて華奢な身体を強く抱いた。
あの時も、…今もまだ彼女は素直になれないでいる。
優しいから。優しさ故に。
唇に残るキスした温もりが、また熱をあげた。
小さく舌で唇をなめる。

…っと！また宮野の事考えちまった。
オイオイ。全く重症すぎるぞこれは。
宮野志保を好きと自覚してから2日目、これから益々好きになって
いったら、俺どうなっちゃうんだろう？
自分が怖い。
でも、この気持ちは止められない。止めるつもりもねえし。

園子の馬鹿デカイ家の前に着いた。
今から蘭と話す。
もちろん園子には席を外して貰う。てか、追い出す。
蘭は解ってくれるだろうか。
解ってほしい。
贅沢を言うなら、これからも幼なじみとして一生近くにいたい。
勝手だけど、蘭が幸せになるなら努力する。

そして、話が終わったら帰るんだ。
上手く身をひいたつもりで、泣いてる不器用なお姫様の元に。

再会（六）（後書き）

終わりです。（二）と同じく新一ご気楽エンドで含みを持たせました。

いきあたりばつたりで勢いで書いたのですが、ちょうど新一志保とも3話づつだからいいかなと思いました。

このあとの話も考えてはありますが、また長くなりそうな感じなので。

「これじゃハッピーエンドじゃねーよ。ふざけんな！糞タレ！こちらら梅雨でカビやすい時期なんだよ！！」って方が沢山いたら…それはまた考えます。

二人の気持ちをリンクしながら双方で書いてみましたが、逆に解りにくかったかもしれない。

ここまでお付き合い下さってありがとうございました。

短編はまだ続きます。（妄想のストックがまだまだあるんです…すみません）

女刑事の野望（前書き）

一応新志ですが佐藤さんが主人公です。新一志保は同じ高校生という設定。

ただの息抜き作品です。気軽に書きましたので適当にお読みください。

被害者の名前がああ作家バレバレとか、毒が適当とかそつというのは読み流して許してください。

女刑事の野望

殺人が起きたと報告を受け現場へ向かう。

「高木くん！報告は」

「被害者は会社員北野圭吾26才。毒殺です。飲んでいたコーヒークップから検出されました」

現場の喫茶店を見回すと、異質な風景が飛び込んできた。制服のままの高校生男女がふたり。事件現場の周りで動き回っている。

「工藤くん？志保ちゃん？」

「佐藤刑事。こんにちは」

「あなたたち、事件起きた時ここにいたの？」

「ええ、事件を呼び込む体質の誰かさんのお陰でね。ただコーヒーを飲んでいただけなのに」

ニヤローと工藤くんは半目で志保ちゃんをジトつと見た。デートしてたらまたもや事件に巻き込まれたって訳ね。（デートっていったら否定されるから言わないけど）

最近見かけないあの探偵と不思議な眼鏡の男の子を思い出す。元気でいるのかしら。

そういえば。あの子のうしろにいつもいた、可愛い女の子も不思議

な雰囲気を持っていたわね。
小さい子供なのに、時折まるで大人のようにに思えた。
コナンさんと哀ちゃん。新一さんと志保ちゃん。
よく似ているわ。

「…北野さんの袖口に付着してました。同じものが…」
いけない。仕事中だった。
でもこの二人がいたら、仕事が楽なのよね…

「主な毒成分はアルカロイド系のアコニチン。アコニチンの致死量はおおよそ2mg程度…。」

アル…なんですって？

「トリカブトのことよ」

はあ…。なんで高校生がそんな事知ってるのよ…。

二人のおかげで犯人逮捕で、事件はスピード解決。
彼の推理力と彼女の着眼点と知識（とくに薬関係）が飛び抜けている。恐ろしいわね。

「貴方達。卒業したら警察官にならない？」

私は前か思っていたことを言うことにした。
これは警察の未来に関わるスカウトね。素晴らしい青田刈だわ。

「ああ。僕、探偵なんで無理です」

「血生臭い事には興味ないの」

「・・・・・・・・」

なんて清々しい断られ方だろう。
二人はあっさりと帰っていった。
本当に手強い似た者カップルね。

…ああ！でも諦めるには惜しいわ！

女刑事の野望（後書き）

新一志保になると、何故か重く暗くなってしまうので明るいものが書きたかったのです。

次はまた、新しい新志を始める予定です。

あれ？コ哀は…

制服と私（一）〜始（前書き）

新志です。かなり似ていますが再会とは別話。組織倒して間もなく、
新一は高校生に戻り、志保は家で博士の研究を手伝っています。題
名と中身は余り関係ないです。

制服と私（一）始

家のチャイムが鳴る。

日差しが和らいできた午後。

無視しようかと一瞬頭をかすめるが、ため息をついて玄関へ向かう。

ドアを開けると

「ただいま！」

と、元気よく男性が入ってきた。

「帰る家を間違えてないかしら？」

腕を組み冷たい言葉をかけても全く気にしていないようだ。

「まあ、いいじゃねーか。喉渴いたんだけど」

工藤新一はクーラーのきいたリビングで涼みながら、アイスコーヒーを待つことにした。

宮野志保はなんとも言えない顔をしてキッチンに立つのだった。

数ヶ月前に黒の組織が壊滅。

薬のデータを入手し、解毒剤を完成させたのだ。

その時、灰原哀として人生をやり直し生きていくか、とても迷っていた。

戻っても誰も待ってくれる人はいない。

しかし、お姉ちゃんが願う宮野志保として生きるのを逃げるなど、

新一に説得されて一緒に戻ることを決めたのだ。

転校、引越しと小学生2人の存在を消し、最終検査を終えやっと元の生活に戻ったのはついこの間。

志保は心に蓋をして覚悟を決めていた。

宮野志保として、工藤新一が戻ってから毛利蘭に告白をし、見事恋人になるところまで見届けようと。

そして幼児化したことの秘密もなくなり、検査も終えた新一は普通の高校生に戻るの、志保とはあまり関わらなくなるだろうと。

しかし、ここ一週間。

毎日新一はやつてくるのである。

図々しくも夕食を食べ、下手するとお風呂まで入っていくのだ。

付き合いが稀薄になると覚悟していたので、表面には出さなかったが、最初は嬉しかった。

一方で恋人同士になれたと報告を待っているのに、その話もない。何度聞いても、歯切れの悪い答えしか返ってこなかった。

まさか・・・フラれたの？

私のせいで。

私が2人を引き裂いたから？

と悩んだりもしたのだが、毎朝新一を迎えにくる蘭にそんな心配は杞憂だった。

「なあ、宮野」

アイスコーヒーが半分くらい無くなった頃である。

「何？」

雑誌から顔をあげて志保は新一を見る。

新一は真剣な顔をしていた。

もしかして、蘭さんとうまくいったことを報告に来たのかしら？

志保は身を固くした。

「・・・オメー高校生やってみる気ねえか？」

「はあ？」

「いや、大学卒業資格取ってるのは解ってるんだけどよ。日本の高校生経験したことないだろ？」

「...ええ」

「一度くらい経験してみるのもどうかなって」

「.....」

「博士の研究の手伝い終わったら考えてみてくれねえか？」

「どうして？」

「えっ？」

「どうしてそんな事考えたの？」

「……どうしてって言われても」

言葉を選んでいるのか、考えてなかったのか解らないが新一の言葉が詰まる。

「…普通の女の子として学生生活体験するのも悪くなくね？」

「…別に、興味ないわ」

そこで話が終わりまたお互い無言になり、雑誌を読んだりアイスコーヒーを飲み切ったりしている。

何故新一は突然、高校へ行くこうと誘ったのだろう。

高校には彼女がいるではないか。

幸せを見届ける覚悟はしたが、毎日見せつけられて平気でいられる自信はない。

「俺がお前と一緒に高校行きたいからって理由じゃ駄目か？」

「え？」

また突然の話に志保はついていけない。

「俺、宮野と高校行きたい。だから一緒に高校行こうぜ」

「……あなた何言ってるか解ってるの？あなたには蘭さんが…」

「蘭？」

キョトンとする新一に、志保がハッと口をつぐむ。

「蘭が何か関係あるのか？」

恋愛については物凄く鈍感な人だ。自分の言葉の重要性を理解してないのだろう。

仲良く二人で登校していたのに、そこに見ず知らずの志保が入りこんで、彼女が楽しいはずではないか。

優しい人だから、そんなあからさまな態度はしないだろうが、傷つかないはずがない。しかも志保が隣に住んでると知ったら、更に複雑な思いになるに違いない。

彼は小学生みたいに皆で楽しく登校でもしようと考えているのかもしれない。

今まで気がつかなかったが、新一は哀から志保に戻るように説得した事に責任を感じていたのだ。

だから学生としての居場所を作ろうとしているのか。

優しい人。

だけど…幼なじみで想いあう二人を間近で見てもいいのか。側にいれば確実に目の当たりにしなくてはいけない。

………本当に残酷な人。

一息ついて新一をまつすぐみる。

「一緒に行きたいって言うてくれたのは嬉しかったわ」

これは本音だ。一瞬嬉しかった。勘違いしそうになった。

「私が研究の手伝いしかしてないから暇だと思ったみたいだけど、案外忙しくてやり甲斐あるのよ。終わったら次の事はまだ考えていけど。大丈夫。私のことは気にしないで」

「宮野…それは違っ」

「私の心配してるより他に大事な事を考えるべき女性がいるでしょ？」

「……………」

「余計な事考えるのはやめなさい」

「……………ちが」

それは違つと新一は消え入りそうな声で呟いたが、志保の耳には届かなかつた。

また、新一も言うつ氣力を失っていた。

日はすっかり傾いてリビングは夕焼け色に染まる。

「博士、いつてきます」

あの日から一ヶ月後。

何故か帝丹高校の制服を着た志保を、眩しそうに見て満面の笑顔の博士がいる。

玄関の扉を開ける手を止める。博士が心配そうに志保を伺った。志保は間をあけて深呼吸し、一気に扉を開けた。

制服と私(一) ～ 始(後書き)

最後に意味が解らない終わり方…そう、また。続きが…

終わりと始まり（前書き）

新志です。制服と私の前の話。

終わりと始まり

戻らないと言われたとき、取り残されるような気がした。

これからも横にいるのが当たり前で、刺激しあえて、信頼しあえていられると思った。

そして、彼女の孤独の闇に気づいてやれない自分の力のなさにも悔しさをいっばいだった。

だから必死だった。

新しい人生をやり直したほうが何倍も幸せになれるかもしれないのに。

自分のエゴで辛い道を選択するよう、必死に説得したのだ。

嫌がる彼女を無理矢理隣に立たせる為に。

俺は…

「お互い無事戻れたみたいね」

ドアが開くと子供の時より少し低めで、その分艶のある声が耳に入ってきた。

赤みがかった茶髪は変わらない。切れ長の大きな瞳は硝子のような青緑の色をしてこちらを見ている。

その目に被る長い睫毛が憂いを感じさせるが、知的に伸びた眉が引き締めていた。

鼻はすつと厭味なく高く、小さい口はみずみずしいほどピンク色をし艶やかだ。

輪郭も子供の時より鋭角になり、綺麗な卵形をしている。

手足は長く博士が用意した薄い水色のワンピースからスラッと伸びている。

意外に胸もある。

くびれからもスタイルはかなりいいのかもしれない。こんなに

(こんなに美人だったのか…)

元に戻った所は初めて見た訳ではないが、あの時はじっくり見る暇なんてなかった。

だから、こんなに美しい女性を目の前にして新一はマヌケにも口を開けてぼーっと見とれていた。

「工藤くん…？何処か具合でも悪いの？」

新一の異変に、志保は覗き込むように近づいた。

いきなり志保の顔がドアップになったので、新一は飛び上がって後ろの壁に激突した。

「だ、大丈夫！」

顔は真っ赤だったが、見とれていた事はなんとかバレずに済んだ。

(はず)

志保は血液検査をするから来てと言って地下室に行ってしまった。

新一はため息をついて

(ハーフの迫力って凄いなー)

とぼんやり思っていた。

終わりと始まり（後書き）

前の話と合わせると、新一の気持ちが少しだけ解ると思います。

順番が逆なのは、新一の気持ちを制服と私の中に入れたいなかったからです。

二つの話は綱がっていますが、それぞれ独立しているつもりで書きました。

意味わからなくてすみません。

7月7日、晴れ（前書き）

コ哀です。哀が失踪し一年が経ち、コナン達は二年生になっていた。たまたま聞いた曲から話も出来たのでタイトルに付けてみた。内容はまるで関係ないです。少し話が長いです。

7月7日、晴れ

小学二年の夏。

コナンは走り続けた。

七夕飾りを作ろうとクラスでワイワイしている最中、光彦が言った一言だった。

「灰原さんに似てる人を見かけた」

窓から校門に立つ小さな少女が見えた。

別人かも知れない。

赤みがかった茶髪は結構珍しく目立つからたまたま見かけて、灰原に似ていると光彦は感じたのかもしれない。

それでも、コナンは走り続けた。

一年前に消えた灰原哀を捜すために。

「また、朝まで研究してたのかよ」

日に日にやつれていく灰原に、コナンは心配でたまらなかった。

「大丈夫よ」

そういう灰原は寝不足で顔色が悪い。

組織を倒した時、薬のデータを処分されてしまった。

灰原はその日から毎日、薬の研究に没頭するようになったのだ。

「な」。薬出来るより先にオメーの身体がまいっちまうだろ？そんなに頑張らなくてもいいよ」

「何言ってるの。薬が完成出来なかったら、元の工藤新一に戻れないのよ」

「それでも、オメーが倒れたら意味ないだろ」

「だから大丈夫ってい…」

貧血を起こし灰原の身体が揺れた。

「灰原！」

過労と寝不足と栄養不足。

灰原は倒れた。

通学路から、交差点を通り探偵事務所まで来た。

息があがる。でも走るのを止めるわけにはいかない。

早く、早く灰原を見つけるんだ。

「新出先生帰ったのか？」

「今、帰った。哀くんが倒れたのはワシのせいじゃ。一緒に住んで

いながら、体調管理を怠っていた…」

「博士のせいじゃねーよ。灰原は何言っても聞かなかったんだから」

「せめて無理矢理食事くらいはさせるべきじゃった…」

博士が肩を落として涙ぐむ。

栄養剤と薬を打ってもらい灰原は静かに寝ていた。とても疲れた顔をしている。

触れた頬は冷たい。

「俺のせいだよ。俺が早く元に戻りたいってしょっちゅう言ってたから、灰原は責任を感じていたんだ」

「新一…」

「俺が追い詰めた」

博士と工藤の家の前まで来る。

でも、灰原は見つかからない。

走り続けて息が切れてる。コナンは道路にへたりこんだ。

やっぱり光彦が見かけた灰原は別人だったのか。

学校に戻るしかなかった…。

「どづいづことだよ博士！」

「解らない。哀くんが出ていった…」

哀が倒れて3日後。コナンが学校から急いで帰ってくると博士が真つ青な顔で新一…と呟いた。
嫌な予感がして、哀の部屋に行く。誰もいない。
荷物も少し無くなっているような気がする。

「薬を完成させなくちゃ」

あるときベッドの中で灰原は眠りながら無意識に呟いていた。

地下の部屋は更に荷物が無くなっている。
多分データをみんな持っていったのだ。
コナンは力が抜けて椅子に倒れこんだ。
机の下に何か落ちてている。

「…短冊？」

数日前。歩美達がお見舞いに来たとき、何かお願いごとを書いてと持ってきたのだ。
オレンジ色の短冊をひっくり返してコナンの動きが止まる。顔が大きく歪む。

” 工藤くんを元に戻せますように”

7月7日だった。

とぼとぼと歩いて学校へ戻る。

行きと違い足取りが重く、果てしない遠い道を歩いているようだった。

駅の近くで人が多い。

「ねえ、学校はどうしたのかな？」

補導員だ！

平日の昼間に子供が歩き回ってたら目立つ。

声はコナンではなく、違う子供に話しかけている。

見つかったら面倒だ。

逃げようとした時、コナンの視界に赤みがかつた茶髪が入りこんだ。ずっと捜していた人。

「灰…原」

「哀くんは何処へ行ってしまったんじゃろうか…」

灰原が失踪してから、博士は小さくなってしまった。

学校には家庭の事情でしばらく海外へ行ったと報告している。

突然灰原が学校にこなくなつて探偵団も元気がない。

しかし、1番元気がなく変わってしまったのはコナンだった。

あんなに好きだった事件にも興味を持たず、毎日ぼんやりと暮らしている。

蘭が心配して色々尽くしてくれるが、コナンはおとなしく暗い子供

になっていた。

始めは手を尽くせるだけ尽くして捜した。

しかしなんの手掛かりもない。

学校から帰り、地下室でオレンジの短冊を見つめている毎日だった。

「ねえ、お名前は？おばさんは怪しい人じゃないのよ。お嬢ちゃん達が危ない目に合わないように、見回りをしている補導員なの」

「やっと見つけた」

「…工藤くん！どうして…」

灰原の震えた声。

やっぱり本物の灰原だった。

「迷子になっちゃったんだよね。クラスの皆があっちで待ってるよ」

「え・・・？」

「行くっ」

灰原の手を引いてコナンは小さく耳打ちをする。

「走るぞ！」

「あ、ちょっと待ちなさい」

思い切りダッシュをして補導員を振り切る。

人混みに紛れれば、小さな二人は見えなくなる。

息を切らして川の橋の下で止まる。

補導員はついてきていない。

辺りにも人は見えず誰もいない。

「ごめんなさい」

コナンに背中を向けて灰原が言う。

相変わらず痩せているが、身長は伸びた気がする。

「ごめんなさい。まだ薬完成していないの」

「ちゃんとご飯食べているのか？」

「え？」

灰原が振り向く。その目には涙が浮かんでいた。

「ちゃんと寝ているのか？」

コナンは続ける。

「…ええ」

「そっか、良かった」

コナンがホッとしたりのように笑うと、灰原が眉をひそめる。

「どうして笑えるの？私、まだ薬を完成させてないのよ？まだ元の身体に戻れないのよ？」

「どうにかして薬のデータを手に入れようと、したけど見つからなかった。日本のあちこちにも海外にも組織の隠れ家にも行ったのに、ひとつも見つからなかった」

「私なりに何度も薬を思い出して作ったわ…でも完成品はつくれなかった」

灰原の目から涙が落ちた。

この一年、どんな気持ちで灰原は過ごしていたのだろう。

コナンの為に身を費やしてくれていた。

海外や日本のあちこちに行くには子供一人じゃ無理だ。

大体検討がついていたが、FBIのジョディ先生か赤井さんに協力して貰っていたのだろう。

何度か連絡しても、知らないと口を揃えたように冷たい返事だったが。

「心配なんかしないで、責めなさいよ」

コナンは灰原を抱きしめていた。

「…ごめんなさい。完成するまではあなたに顔見せるつもりなかったのに…」

灰原は震えていた。

「私は意志が弱いわね。近くまで来たらしい学校へ行ってしまった」

嗚咽して泣いている灰原をコナンは更に強く抱きしめた。
灰原が落ち着くまでしばらくそのままだった。

「…絶対に完成させるから」

泣きながら灰原は言う。

「もう、解毒剤は作らなくていい」

「！」

灰原がコナンを押し附けた。

「な…に…行ってるの？」

「もう、解毒剤は要らない」

コナンはきつぱりと宣言する。

「俺は工藤新一を捨てて、江戸川コナンとして生きる」

「…！！」

驚愕した灰原が何も言えずまた涙を流した。

「もう、時間が経ちすぎたんだよ。今戻っても多分違和感しかない。
俺はもう工藤新一じゃない。江戸川コナンだ。」

「わ…たしのせい…」

力が抜けて座り込みまた涙を流す灰原。

「私が工藤くんを殺してしまったのね。工藤くんの人生を目茶苦茶に……」

「灰原違う」

コナンはしゃがんで同じ高さに視線を合わせる。
流れる涙を拭く。

「灰原は工藤新一を助けたんだ」

「……え？」

「あの時、好奇心で組織に近づいて殺されかけた俺を助けたのは、オメーだ。」

オメーの薬で俺は生きている。

江戸川コナンとして命をくれたんだよ」

「私を恨んでないの？どうして……どうしてそんなにお人よしなのよ……」

再び、コナンは灰原を抱きしめた。

「灰原がいなくなって、必死になって捜した」

「気が狂うかと思った。」

オメーのいない一年は心に穴が空いたようだった」

抱きしめられながら、灰原はコナンを見た。

震えている。コナンの顔が押し付けられた自分の肩が湿ってきた。

「薬があつたつて、意味がない。

オメーが側にいないと意味がないんだよ！」

コナンの言葉が灰原の胸に刺さる。

「私…あなたの側にいいいの？」

「ああ。灰原哀として一緒に生きよう。二度と俺の前から消えないでくれ」

真剣な眼差しでコナンが見つめる。

涙が止まらない。

返事をする代わりに、コナンの背中に手を伸ばして顔を埋めた。

コナンもまた灰原を抱きしめた。

お互い強く強く抱きしめた。

「コナンくん帰ってきませんねー」

「腹減つて家に帰ったんじゃないか？」

「元太くんじゃないんですから…コナンくんはそんなことしませんよ」

「…光彦くんが見かけたの哀ちゃんだったらいね」

歩美が辛そうに窓の外を見る。
移動授業なので、そろそろ教室から出なくてはいけない。
準備してない元太が慌てて自分の席に荷物を取りに行く。
机にぶつかり中のものが落ちる。

「あー、元太くん。何やってるんですか」

「大丈夫？元太くん？」

そこはちょうどコナンの席だった。
落ちた教科書やノートの中に水色の短冊がある。
そこに書いてある願い事を見て、三人はハツとした。

前の時間に作った七夕飾りの笹に、水色の短冊を取り付ける。
チャイムが鳴る。授業に遅刻だ。
三人は廊下を思い切り走りだした。

窓から来る風に揺れる七夕飾り。
水色の短冊が揺れてひっくり返る。

” 灰原が戻ってきますように ”

7月7日、晴れ（後書き）

七夕だから織り姫彦星みたいなコ哀を書きたかったのですが…話が
変わってしまいました。

星や硯や糸巻きや…絡めたかったんだけど…難しい…

二十五夜（前書き）

「哀前提の哀とキッドの話。あまりよく知らないので喋り方やキャラが違うかもしれませんが。皆様の小説を読んでいたら書きたくなりました。」

二十五夜

夜もだいぶ深くなってしまった。

有明月に近い下弦の月が頼りなく浮かんでいる。
まだ眠れない。

ベランダに出て空を見る哀の瞳には闇がうつる。

朝の気配が近いのか、澄んだ空気が静かに街の夜景を包んだ。

ふと、闇に動くものが見えた。

目を凝らしているとバサツと白い物体が落ちてきた。

「…随分変わった登場の仕方ね」

「…あ、こんばんはお嬢さん」

格好つけてもあまりさまにならなかったのだが、一応礼儀として怪盗キッドは答えた。

白い衣装に身を包み、世間を騒がす怪盗。

「今夜の闇は暗いわよ。気をつけて飛ばないとね。さ、入りなさい」

少女がいきなり部屋に入れと命令する。

疑問に思ったが、そしてすぐに気がつく。あちこちに怪我をしている。

彼女は手際よく救急箱から応急セットを取り出した。

「お邪魔します」

何故か、警戒心なく部屋に入ってしまった。

有無を言わせない少女のものいいに逆らえるはずもなかったが、なんとなくシンプルなこの部屋が暖かい気がしたのだ。

「見せてちょうだい」

テキパキと処置をする。

こんな時間まで起きていて、警戒もなく怪しい男の手当をする少女は一体…。

「手足と顔に擦り傷と軽い打撲ね。あとは大丈夫そうよ」

あっという間に終わった。

赤みがかった茶髪。透き通る青い瞳と肌。小さな唇。

愛想はないがとてもかわいらしい。

しかし何処かで見た記憶がある。

「何処かで会ったことあるよね」

「さあ、何処かではあるんじゃない？」

そっけない声にフツと眼鏡のボウズの顔が浮かぶ。

ああ、そうだ。あの探偵ボウズの…

「今、お友達に連絡すれば、捕まえられるぜ」

「興味ないから」

あっさりと答え救急箱を片付ける。

どうやらこのまま見逃してくれるらしい。

不思議な少女だ。

小さいのに大人のような、いや。もつと深い何かを持っている。
一見クールで冷たそうなのに、優しく暖かい。

「今度はきちんと前向いて飛びなさい」

「…また来てもいいですか？」

よく解らないが、なんとなく次の約束をしたかった。

「また手当てなんて嫌よ」

「明るい月の晩に來ます」

「勝手にしなさい」

きつといつ来ても少女はいるような気がする。

「ありがとう」

キッドは笑って白くかわいらしい花束を出した。
その瞬間、静かな闇に消えた。

「工藤くんに似ているわ」

哀は花束の香りを嗅ぎ、空を見上げ小さく呟いた。

「キザなところが」

二十五夜（後書き）

ごめんなさい。基本コ哀（新志）しか興味ないので、他キャラがよく解りません。

コナンを絡ませられなかったので、知らないのにまた出してしまいかもしれない…

題名は勝手に作った言葉なので実在するか解りません。

誰も知らない白い翼(前書き)

引き続き(知らないくせに)キッドを出してみました。新志 キ?
って感じです。二十五夜と微妙に繋がってます。

誰も知らない白い翼

「愛してる」

工藤くんから、信じられない言葉が出てきた。
風が強い屋上。

「君を、愛してる」

これは、夢？

いいや、これは現実だ。

だから今この時に工藤くんがこんなことを言うのはおかしい。
大体いつここに来たのか。

その時、何かが飛んできて工藤くんの頭を掠めた。

サッカーボールだ。

工藤くんがニヤリと笑い、まどっていた雰囲気が変わる。

「もう来やがったか」

「ち、外した」

「く…工藤くんが二人？」

目の前の工藤くんと後から来た工藤くん。
二人が睨みあい緊張の糸が張り詰める。

「宮野離れる！そいつはキッドだ」

あとから来た工藤くんがそう言った途端、私はその怪盗の白いマントに包まれた。

今日の7時に鈴木家が所蔵する美術品を盗む、と予告を出したキツド。

外食をしようと出かけた矢先だった。

工藤くんは興奮して、美術館の警察官が沢山いる中に入っていった。私は騒がしい美術館から離れ、近くのビルの屋上に何か光るものを見つけた。

「気のせいだったかしら……」

簡単にビルに入れたのに、不信に思わなかった。

しかしこの屋上からの景色がとても綺麗で見とれてしまう。

東都タワーやビル群の夜景。

か細く小さく見える星。大きな満月。

ビルの下では警察のライトが強い光りを放ち動き空に反射している。

「いい穴場ね」

ふと、気配を感じて振り返る。

「工藤くん？」

.....

「宮野！」

消えた志保を捜して新一が叫ぶ。

屋上の更に高い給水タンクの上にキッドと志保はいる。

パチンと指を鳴らすと小さい白い花束を取り出した。

「これは…あのときの」

懐かしい思い出の花束。

志保が香りを嗅いで笑う。

「覚えてくれていたのですね」

少し驚いて怪盗は笑顔になる。

「あの時…小さな少女に私は助けられました。この景色は御礼のうちの一つです」

志保は再び辺りを見回す。

「…ええ、とても綺麗ね。ありがとう」

「宮野!」

工藤くんが私達を見つけたみたいだ。一瞬、白い怪盗が私を見つめ悲しそうな顔をした。

何?何か言いたいみたいだ。

「あなた…」

「また会いましょう。宮野志保さん」

「キヤア！」

「宮野！！」

抱き上げられ手を放されると、重力に引かれ落ち始める。

工藤くんが手を伸ばし私をキャッチした。

工藤くんの胸に飛び込む。

その間にボンツと音がして彼は消えた。

後は静かな闇夜が広がるだけ。

「大丈夫か？」

「ええ…。怪盗さんに逃げられちゃったわね」

「ああ。またチャンスはあるさ」

工藤くんが空を見て、再び私を見る。

「それより、何処も怪我はしてないな？何かされたか？」

「いいえ」

工藤くんはホツとして、私の頭を撫でて立たせてくれた。

「愛してる」

「へ？」

「君を愛してる。工藤くんの顔でそう言われたわ」

工藤くんの顔が赤く染まり、怒りで叫んだ。

「あんのヤローー！」

誰も知らない白い翼（後書き）

頑張って書いてみましたが、別人だったらすみません。（元々接点
あまりないしね）

本当は2作ともコ新にもつとヤキモ子妬かせたかつたんですが、空
気にしてしまい、キッド純愛なほうに流れてしまいました。

こりゃ駄目だ…

ヤキモチ(前書き)

コ哀。短いです。

ヤキモチ

探偵団と博士で出かけたサーカスで殺人事件が起きる。
今日も無事にコナンが事件を解決した。

「コナンくん！」

サーカス団には同じくらい歳の女の子がいる。

この事件で探偵をするコナンをすっかり気に入ってしまった。

今も腕を組んでコナンに猛アタックだ。

歩美はすっかり怒ってしまい、二人に割り込み対抗する。

歩美に気がある光彦と元太も面白くないので混ざる。

さつきから女の子がコナンに抱き着いたり、腕を組むたびこんな騒ぎだ。

哀はため息をついて、警察と話している博士を待っている。

「もう帰っていいそうじゃ。ワシは車を回してくるよ。」

戻ってきた博士が哀に言った。

「そう…。お疲れ様。皆！帰るわよ」

哀は腕を組んだまま騒がしい子供達に声をかける。

「えー！コナンくんもう帰っちゃうのー？」

「そうなの。さようなら！」

歩美が断然勢いづいて言い返す。

女の子の行動は素早かった。

「また、会いましょうね」

チュッとコナンの頬にキスをする。

あとは今日最大の嵐が吹き抜ける。

「あーあ…疲れた」

他の三人を送って博士の家の前。

探偵グッズを新しいものに取り替える為に、コナンだけ博士の家に寄っていく。

門の前でコナンと哀を置いた博士は車をガレージにおきに行った。

帰りの車の中でも歩美や元太光彦に責められ、コナンはだいぶ疲れしている。

同じシートベルトをしている哀は肘をついてずっと外を見ていて助けなくてもくれなかった。

「あーら。可愛い女の子にモテモテで鼻の下伸ばしてたんじゃないかなっか？」

腕を組み首を傾げてコナンに声をかける哀。

どこか声にトゲがある。

「オメーさあー……」

コナンが目を丸くして哀を凝視した。ニヤリと笑う。

「な、何よ」

「ヤキモチ焼いてるのか？」

腕を組んだまま灰原の肩が上がって固まった。

凶星だ。

「……どうして私がヤキモチなんか！」

顔を赤くして抗議しても、後の祭である。

コナンは更にニヤニヤして哀を覗き込む。

チュツ

「灰原可愛いな」

ニツコリ笑ってコナンは鼻歌を歌いながら、去っていった。

「……………なっ」

哀は更に顔を赤くしたままその場から動けずにいた。

ヤキモチ(後書き)

コナンが一枚うわての甘いお話でした。

紙一重（前書き）

新志です。過去のエピソードは記憶違いで間違いかもかもしれませんが、そついでとたしておいて下さい。

紙一重

プリンセスホテルのウエディングドレスの試着室で殺人事件が起きた。

志保と二人でビュッフェに来ていた時だった。

「相変わらず事件を呼ぶ体質ね」

とため息をつきながらも、彼女は事件調査に協力してくれる。

被害者は結婚式を控えた女性。犯人はその幼なじみだった。

「愛していたのに、何故殺してしまおうと思うのかしら？」

犯人が逮捕され、警察が撤収を始める。

ウエディングドレスが並ぶ試着室の部屋には、その小物達が綺麗に陳列されていた。

一つの見本ブーケを持った志保がぽつんと呟いた。

前に一度、似たような事件があった

その時、幼なじみの蘭は解らないと言っていた。

理屈では解っていても、俺も理解は出来なかった。

最近はよく解るような気がする。

軽やかなヴェールをふわりと志保の頭に載せる。

淡い光りがまとうように彼女の顔を被う。

日に当たらない白い彼女の肌が艶やかに更に白さを増した。

「…工藤くん？」

愛と憎しみは紙一重。

他の誰かのものになるのなら、いつそ自分のこの手で…。

「志保」

「なあに？」

切れ長の大きな瞳が真っ直ぐ俺を見る。

ヴェールの向こうに宝石のように光っている。

…失いたくない。

彼女が生きてるだけでそれで幸せなんだよな。

「志保」

「だから、何？」

「ずっと一緒にいよう。ずっと側にいてほしい」

彼女の目が丸く大きく見開く。

「……それってプロポーズかしら？」

「え？」

あれ？俺今なんて言ったっけ？

言った言葉を頭のなかで反芻して顔が真っ赤になる。

「殺人事件現場でプロポーズなんてムードも何もあつたもんじゃな
いわね」

「あ、いや…そのっ…」

そんなつもりじゃなかったんだけど、って今更言っても信用して貰
えないだろう。

「…でも…あなたらしいわ」

ヒラリとヴェールが動いてめくれる。

志保のピンク色の唇が俺の頬をかすめた。

悪戯っ子のように舌をだし笑っている彼女。

どうしようもなく愛おしさが込み上げてきて、抱きしめようとした
ら逃げられた。

いつかムードある場所で改めてプロポーズしよう。
そう誓った。

紙一重（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

制服と私(二)〜続(前書き)

新志。 制服と私の続き。

軽く書いたつもりが思わぬ長編になりました。連載にすることもなく、こちらに入れる事をお許し下さい。

制服と私(二)〜続

あの日。工藤くんに言われた言葉がひっかかっている。

「宮野と高校行きたい」

あの時は言い訳の一部だと簡単に流していたのに、時間が経つほど存在感が増す。

甘すぎるほどの幻想がそこに生まれる。

普通の高校生として工藤くんと通う。そんな日常。

…馬鹿みたい…。

いつまでもこんな馬鹿馬鹿しい考えをしてしまうのは、曖昧な今の状態のせいだ。

彼はいつまで生殺しにする気なんだろう。

早くくっついてくれれば楽になれるのに。

「ご飯は食べたの？」

あの日からも変わらずに彼はこの家に来ている。

今日は事件があったらしく、遅くに来た。

彼が何をしてもどうでもいいし、関係ないのに、つい聞いてしまった。

「まだ。腹減ってるけどなんかある？」

「何もないわよ」

残り物のご飯でお茶漬けを食べた彼の食器を片付ける。

「なあ、博士の研究もうすぐ終わるんだろ？」

工藤くんが麦茶を飲み干してキッチンについてくる。

「次のこと考えてるの？」

「…いいえ。まだよ」

本当は博士を通じて大学の研究や薬の研究所からの呼び声がかかっている。

でもまだ保留にして博士に口止めもしている。

何を迷っているのか、何がしたいのか自分でも解らない。

組織が潰れてまだ日も浅く、表に立ちたくないのかもしれない。

いいえ。言い訳ね。

少しだけ、私は普通の高校生になりたいのだ。

「そんな事より、まだ愛しの彼女に告白していないのかしら？」

またかよという工藤くんのうんざり顔が見なくても伝わってきた。

「俺の事はどうでもいいじゃん。オメーの事が心配で…」

私が心配だから告白出来ないの？
私のせい？

ふっと何かが合致した。

「宮野？」

もう、いい加減この状態に嫌気がさしてきていた。

自分の甘さが、工藤くんの曖昧さと優しさが、天使のような彼女が、モヤモヤからイライラ。

底無しの沼にハマったまま抜け出せないのは。

そう。

逃げないで立ち向かう必要があるのかもしれない。

「おい、宮野？」

「ありがとう。工藤くん」

ニッコリ笑う私の目は氷より冷たい。

私の次にやる事が決まった。

工藤くんが帰った後、私は博士にお願いをした。

「高校生になりたいの」

制服と私(二)〜続(後書き)

志保ちゃんに制服を着させたかっただけなのに、何故いつも暗い話になるのか…

新一もヘタレです。

制服と私(三)〜転(前書き)

新目線に変わります。

制服と私(三)〜転

「今日から新しいクラスメートが増えます」

教室から入ってくる人物を見て眠気が一気に吹き飛んだ。

朝のホームルーム。

俺は口を開けたマヌケ顔。

「宮野志保です。よろしくお願いします」

赤みがかった茶髪のハーフ美人が転校生。

もちろんクラスの男子は大喜びで、女子さえその容姿にどよめいた。

「席は…工藤の後ろが空いてるな」

「…はい…」

クラス中が浮足立って宮野を見ている。席についた途端後ろを向く。

「…おい、み」

「初めまして。よろしくね。工藤くん」

ニッコリ笑って言葉を遮断する。

宮野はすぐに横を向いて、隣の席にも挨拶した。

ホームルームを終えた途端、皆が寄ってくる前に宮野の腕を引っ張り、廊下の端っこへと連れ出した。

「どづいつことだよ!？」

制服に袖を通した彼女は新鮮で、透明感が増えて眩しい。

「あら、あなたが誘ったんじゃない。高校生にならないかって」

「…そう…だけど!一言言ってくれたら良かったんじゃないの?何も聞いてないからビックリしただろ!」

「それは良かったわ」

「オメー…」

半目で睨むと、クスツと楽しそうに笑った。

さっきから何か違和感を感じていたが、その顔にすぐ忘れて魅入ってしまう。

「新一」

振り向くと蘭がいた。

「新一、宮野さんと知り合いなの?」

伺うように意外そうに蘭が宮野と俺を見る。

なんて言えばいいか、戸惑った。

驚きすぎて忘れていた。

宮野は一旦他人の振りをしたが、どうするのか。

宮野を見ると相変わらず無表情。

蘭が宮野の視線に気づいて、自己紹介をしようとする。

「あ、私…」

「毛利蘭さん」

「え？」

「工藤くんの幼なじみで彼女」

違うから！と蘭と俺は一気に否定する。

顔を赤くしながら、蘭は疑問で首を傾げる。

「でも、どうして私を？」

「私、工藤くんの親戚なの。今博士の家に住んでるのよ」

サラッと嘘と真実を混ぜて宮野はいう。

前から考えていたのだろう。

「よろしくね」

「こちらこそ！あ、後で学校案内してあげる」

「ありがとう」

笑顔で話す二人に、ホッとした。

俺も一緒に案内すると言ったら断られた。

どうして宮野が急に高校生になったのか、俺の気持ちが届いたのか？解らないけど。

ワクワクした。

久々に充実した日々が来るような気がする。

単純だけど、宮野と高校生活が出来る。一緒にいられる。楽しみだ。

しかし、翌日。

一緒に登校しようとして博士の家に行ったら、宮野は既に出ていた。

「なんだよ。せっかく迎えに来たのに」

酷くがっかりして道に出ると、蘭が家の前にいた。

「新一！おはよ。博士の家に行ったのね。道理で呼んでも返事ないわけだ」

「…ああ、すまん」

蘭が来るなんていつもの朝の事なのに、忘れていた。

「別にいいよ。少し心配しただけ。博士に何か用だったの？」

「…ん、ああ。ちょっとな」

宮野を迎えに行ったとは言えなかった。

「宮野さん…」

「え？」

ドキリとした。

「宮野さんは？」

「アイツはもう学校に行っちゃったって」

「そう…」

蘭は一瞬間を置いて、遅刻するから行こうと歩きだした。

「でも、驚いたわ」

「何が？」

「宮野さんて、哀ちゃんのお姉さんなのね。誰かに似ていると思ったら」

昨日、園子と二人で宮野を案内している時に、そんな話になっていったのか。
多分、親戚なんて知らなかったと以前も疑問にしていた蘭が聞いたのだろう。

（口裏合わせる為にもちゃんとっておけよ…）

夜にご飯を食べに行った時も、そんな話題一言も話さなかった。
いや、むしろ昨日はほとんど喋っていない。

ちくりと針で刺されたような痛みが走り、少し気分が悪くなった。

「哀ちゃんにあんな美人なお姉さんがいるなんてね。でもどうして苗字が違うのかしら？」

「」

「新一？」

「……。家庭にはそれぞれ事情があるんだよ」

「新一……。そ、そうだね。むやみに詮索しちゃ失礼だよね！」

黙りこんだ俺に蘭は気を使いながら、話題を変えた。

学校に着いてすぐに宮野の姿を目で捜したが、教室にはいない。
ホームルーム直前のチャイムが鳴ってから、宮野は教室に現れた。

制服と私(三)↳転(後書き)

この話の新一はグダグダで屈折しています。
格好よくありません。ごめんなさい。

制服と私(四) 計(前書き)

続き。再び志保目線

制服と私（四）〜計

一日目は予測通りに終えた。

最初は初対面の振りをしようとしたが、やはり隣同士だし、不自然だ。

少し前に私だった灰原哀と姉妹なら、工藤くんとも遠い親戚としてなんとか言い訳が立つ。

博士の家に住んでいるのも、理由として成り立つと思う。死んだ親の事情かなんとかで姉妹離れ離れとでも言えば、誰も深くは詮索しないだろう。

さて、朝早く出てきて眠い。

学校もあちこち見て飽きてしまった。

避難するには屋上か図書館。

今日は図書館にしよう、欠伸をしながら向かう。

何処にいても本がある場所は静かだ。

本に囲まれるとホッとするのは、この静けさもあるかもしれない。本にはお喋りが要らないからだ。

図書館を一回りする。

暇つぶしにはいい本もありそうだ。

彼の好きなホームズシリーズが目に入った。

多分、一緒に登校しようと思えに来たかもしれない。先に出た私に何か言ってくるだろうか。

いいえ。彼女と楽しいお喋りをすれば忘れるわ。

「ホームズ好きなの？」

男性の声がした。
振り向くと男が立っていた。
眼鏡をかけた穏やかな顔の男。

「いいよね。ホームズ」

返事を待たずに、彼はしみじみ言った。

別に興味ないから、とこの場所から去ろうとしたのに、その間の悪さにタイミングを失った。

そして、ホームズの良さをぼつりと語りだす。

眼鏡をかけてホームズがすき。

小さくなっていた時、工藤くんにも何度も聞かされうんざりした。

あの時の江戸川コナンを思い出す。

フツと笑うと、男は慌てて謝った。

「ご、ごめんなさい。つい語ってしまっ

別に」

「君、見かけないけど、転校生？」

「ええ」

彼は隣のクラスの江川と言っらしい。
名前まで似ている。

「クラスの奴らが騒いでたよ。凄い美人が隣のクラスにいるって。
宮野さんと話したってバレたら殺されちゃうな」

のんびりとした人の良さそうな人だ。
時計を見るとそろそろ時間だ。
笑顔で別れて、教室へ向かう。
教室に入っただけで、工藤くんの視線を感じた。

「お昼一緒に食べない？」

蘭さんが誘ってきた。

私は笑顔で答える。

鈴木さんも加わって、机を合わせた。

工藤くんはパンを買いに行こうと立ち上がり、ちらりとこちらを見た。

蘭さんが、工藤くんを捕まえる。

「新一、パンだけじゃ体に良くないわよ。たまにはお弁当食べなさい」

どうやらお弁当を作ってきたらしい。

愛妻弁当だとクラスが沸き立つ。

ちげーよ。といいながら工藤くんは、弁当を持って逃げて行った。
…相変わらず不器用な人。

「お熱いわね」

「そうよ。この夫婦はアツイの」

「園子！違うのよ。そんなんじゃないんだから」

真っ赤になりながら、蘭さんは席につく。

「ねえ、宮野さんてハーフだよな？」

鈴木さんが私に質問を始めた。多分色々聞きたくてうずうずしてたんだろう。昨日も聞こうとしてきた。

「ええ」

「やっぱり！」

「確かお母さんがイギリス人だったよね。哀ちゃんも、同じ美人さんだもんね。綺麗な人だったんだろうな」

蘭さんがいう。

「…さあ」

両親の顔なんて知らない。

「えーじゃあ…」

「園子！さっき言ってたイケメンて何？」

蘭さんが話を反らした。

私の表情を察知したのだろうか、やっぱり天使のような人だ。

敵わない。

さつきから息苦しい。
でも、逃げる訳にはいかない。自分で決めた事だ。
まだ何もしていないのに、逃げるなんて。

お弁当を食べ終わり息苦しさを紛らす為に屋上へ行く。
もう少しでお昼も終わりだから、誰もいない。
ひとつ深呼吸。

「宮野」

1 番話したくない相手が話しかけてきた。
馬鹿ね。なんでちゃんと確認しなかったのかしら。
工藤くんは屋上の入り口の上にいた。

「奥さんの愛妻弁当美味しかった？」

「なんだよそれ」

工藤くんは機嫌が悪い。

「あら、夫婦だって鈴木さんが言ってたわよ」

園子のヤローといいながら降りてくる。

工藤くんが何か話したそうだけど、息苦しさがまた私を許さない。

「授業が始まるわ。急がなくちゃ」

「宮野！」

腕を捕まれる。

「オメー俺を避けてね？」

「・・・」

思っていたより自分は臆病で卑怯者だ。

逃げないで工藤さんと蘭さんをくっつけようと、その為に高校生になっただのに。

まだ、覚悟が足りないのか逃げだしてばかり。

「それとどうしてあの時断ったのに、いきなり高校生に……」

「あなたは自惚れ屋さんなのかしら？」

「え？」

「私に構って欲しい淋しんぼさんなのかしら？」

「はあ？」

スツと工藤さんの腕から逃れ私は走る。

また逃げてしまった。

何をしているんだろう。

どうしたら工藤くんは蘭さんに告白するかしら？

まだ、二日目。

そんなに事は上手くいかない。

帰りの時間。

一緒に帰ろうと蘭さん達に言われたけれど断った。
一人になりたかった。
図書館に行く。

「宮野さん」

今朝の男、江川くんだけ？が話しかけてきた。

「これ！」

「え？」

「僕の取って置きホームズの本です。返すのはいつでもいいので」

…いみが解らない。

しかし、彼は行ってしまった。

「…なんなの？」

ホームズが好きだと思われたのかしら？
なんとなく可笑しくて、笑った。
そして、涙が一筋出た。

家に帰ると案の定、工藤くんがくつろいでいた。

「…まるでここがあなたの家のようね」

「腹減った」

「探偵事務所に行けばいいじゃない」

そういうとまた工藤くんは機嫌が悪くなる。

「オメー今まで何処に行ってたんだよ」

「別に。あなたに関係ないでしょ」工藤くんが何か言っていたが、無視して部屋に行く。

今日は疲れた。

夕飯は簡単なものにしよう。

その夕飯で、私の目的を達成するチャンスがやってきた。

「遊園地のチケット？」

博士が4枚のチケットを見せる。

「ああ。研究会でいただいたきたんじゃよ。もったいないから、次の土日にも行ってこんか？」

「工藤くんあなた、蘭さんを誘ってデートに行きなさい」

即、私は工藤くんに2枚渡す。

「なんでだよ。あと2枚どうすんだ？」

チケットは来週の日曜日まで。

「宮野も一緒に行こうぜ」

「嫌」

とんでもない。なんでデートに付き合わなきゃいけないのよ。

「なら、俺も行かねー」

「……………」

なんとしても、二人をデートさせよう。

遊園地でムードが良くなれば告白して纏まる確率が高くなるかもしれない。

「解ったわ。行くわよ遊園地」

行く振りして当日具合悪くなって休むかなんかすればいい。

…と、簡単に思っていた。

土曜日。

「ごめんなさいね。体調が優れないの。二人で行ってちょうだい」

工藤くんが迎えに来て、私は演技をする。

一緒に行く予定の鈴木さんも具合が悪くなる予定だ。

「大丈夫か？」

と工藤くんが心配してくれる。そこまでは良かった。

「宮野が具合悪いのに、遊園地なんて行けない」

「…え？」

「またもや予定外な行動をされる。」

「そこに場違いな脳天気な声がした。」

「よう！工藤にねーちゃん。お久しぶり」

「西の探偵、服部平次である。」

制服と私(四)〜計(後書き)

後半テンポが早過ぎますが、話がもっと長くなってしまいそうだったのでカットしました。

目線もコロコロ変わり、読みづらくてすみません。

制服と私(五)ゝ妬(前書き)

続き。また新一目線になります。

制服と私（五）〜妬

「小つさかった姉ちゃん、偉く別嬪さんになったな」

毎回、報告もなく突然現れる関西弁の男。

空気も読まずにズカズカやってきた。

博士から貰ったチケットで遊園地に行く予定だった土曜日。

宮野が具合悪いと言ってきてその予定をキャンセルする矢先だった。

「…工藤くん。私気分良くなったから、遊園地いくわ」

「へ？」

「遊園地？なんのことや？」

その時蘭から電話がかかってきた。

園子が行けなくなったと。

「ちようどいいわ。あなたも一緒に行きましょう」

「何処へ？」

「遊園地」

元の身体に戻って、突然宮野が高校生として現れてから、数日。

宮野の様子がおかしい。

よく解らない。

ずっと避けられていたし、余り話さなくなった。

高校生にならないか？と誘った時は断ったのに。
そのあとすぐにクラスに転校してきた。

あの時は夜だけじゃなく、昼間も一緒にいられると単純に思ったの
に。

逆に遠くなったような気がする。

「行きましょう」

入り口に入っただけで、二手に別れようと宮野が言った。
そして服部とさっさと行ってしまおう。

「新一、何処から行くの？」

パンフレットを持った蘭が話しかけてくる。

多分、蘭と俺を最初から二人きりにさせるつもりだったのだろう。

「そっだねー」

何個か絶叫系やアトラクションを並んで、あっという間に時間が過
ぎる。

蘭が無邪気に楽しんでいる。

楽しいはずなのに、何か物足りない。

服部と二人で去っていく宮野の背中がちらついて頭から離れない。

「服部くんたち遅いね」

お昼の待ち合わせの時間。

混雑したなかで二人を待つ。

その時、遠くからでもよく解る赤みがかった茶髪が見えた。

笑っている。

宮野が楽しそうに笑っている。

あんな顔：見た事がない。

一体何があった？何を話しているんだ？

あんなに服部と仲が良かったっけ…？

俺の視線から、蘭が二人を見つける。

「服部くん。宮野さん。こっちこっち！」

お待たせと二人並んで来る様子はカップルみたいだ。

傍目から見れば俺も蘭もカップルにしか見えないだろうし、仲の良いWデートをする若者なんだろう。

ドス黒いものが胸に渦巻き始める。

「二人とも、随分楽しそうだったね」

蘭が聞く。

「目茶苦茶楽しかったわ。な、姉ちゃん」

「ええ、元気で強気な探偵さんの意外な部分も見れたし」

二人にしか解らない会話。

イライラする。

ドス黒いものが更に色濃くなる。

宮野がまた蘭と俺を二人きりにさせようとする。

午後は絶対四人でまわろうと俺は譲らなかった。

「新一…怖いから捕まっけてもいい？」

お化け屋敷で蘭が、震えた声で服を掴んできた。

空手有段者で普段は男勝りの癖に、昔から幽霊お化けの類いが弱い。実際キレたら、幽霊のほうに逃げて行くんじゃないかと本気で思うが、言ったら俺がボコボコにされる事だろう。

「キヤ！」

「おい蘭。あんまり引つ張るなよ」

「だつてえ…キヤ！」

お化けが出るたび、服を引つ張られるので、服が伸びてきたような気がする。

「じゃあ、腕に捕まっとけよ」

「…、うん！」

蘭とは対象的に、後ろの宮野は涼やかにお化け屋敷を歩いている。こんな作りものじゃ驚かないか。

「新一、出口！」

蘭の顔が明るくなった。

外に出てほーっと息を吐いている。

振り向いて後ろから来るはずの宮野達を待つ。

「！」

出てきた二人が手を繋いでいる。
また笑っている。

出口で…

カツとなって自分が何て言ったのかよく解らないが、二人の間に割り込んだ。

また、宮野の顔を曇らせた。
服部に向ける笑顔は、俺には向かない。

最後に観覧車乗ろうと蘭が言った。

また蘭と二人にさせようと宮野が画策したが、四人で乗る。
景色がどんどん変わって街や海が一望出来た。

ふと気づくと、また服部と宮野が楽しそうにお喋りしていた。
この二人は今日でかなり仲が良くなったと思う。
午前中に何があつたんだろう？

宮野が笑う。

他の男に笑いかける。

それが服部としても、こんなに辛いだなんて。
こんなに腹立たしいなんて。

嫉妬で狂いそうだ。

その後は余りよく覚えていない。
気がついたら家の前。

蘭ともいつの間にか別れていた。

「それじゃ、おやすみなさい」

宮野の声にハツとする。
既に遠くにいる。

「そや！」

服部が思い出したように、宮野の後を追いかけた。
何を話しているのか、二人はまた笑っている。

もしかして、服部は宮野が好きなのか？

宮野も…？

まさか。

服部には遠山さんがいる。

宮野だって服部の事なんて名前さえ呼ばないくらい他人行儀だ。少
なくとも今朝までは。

しかし、人の気持ちは解らない。

俺だってついこの間までは、蘭が好きだった。

でも、その心を一気に宮野が支配した。

ある日簡単に恋に落ちてしまう。

もし、服部がそうなら…

服部が戻って来た。

玄関を開けて家に入る。

制服と私(五) ～ 妬 (後書き)

関西弁が間違っていたらすみません。
話はまだしばらく続きます。

制服と私(六)〜見(前書き)

続きです。目線は服部に変わりますが、少し引きの三者目線でもあります(関西弁が良く解らないので…間違いな表現が多々あるかもしれません)

制服と私（六）〜見

最初に工藤に会った時から、よう解ったわ。

工藤はあの姉ちゃんを好きーちゅうのが。

隣に毛利の姉ちゃんがおるのに、小っさかった姉ちゃんしか見とらん。

ホンマ解りやすく俺に嫉妬してきて。

自分で気づいてないのもまたおかしいじゃあない。

まあ、普段から余裕なヤツが余裕ないゆーのもオモロイから。

たまにはええやろ。

「行きましょう」

突然降って湧いたWデート。

園内に入ってあっさり二手に別れようと志保は言った。

「じゃあ、お昼にまたフードコートに集合ということだ」

蘭が言うのと頷いてさっさと行ってしまふ。

置いて行かれないように、平次が後を追う。

一度、振り返ると新一がじっと志保の後ろ姿を見ていた。

蘭に話しかけられ、反対側に歩いていく。

「ええんか？」

追い付いて横に並ぶと平次は覗き込むように、志保に聞いた。

「何が？」

と、無表情の志保の心は解らない。

明らかに二人をくつつけようとしている志保。

失礼だが、柄に合わない遊園地まで来て協力しようとしているとす
ぐに解った。

真意を出さない彼女なりに焦っているようにも感じる。

だから、新一が志保に向ける視線に気づかない。

(さっきもエライ怖い顔しとったわ…)

「ごめんなさいね。巻き込んでしまって」

平次の気持ちを読んでいるのか、いないのか。

(…細かいことはま、ええか。よく解らんけど)

「せっかく来たんやから楽しまな」

「え？…つとちよつと！」

平次は志保の手を引いて、コースターに向かった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

…まさかのダウン。

あんなに高低差があったとは見た目には解らなかった。

出口を出てすぐのところやしやがみ込む。

絶叫系は得意だったはずなのに、どうしてこうなった。

志保は何ごともなかったように平然としている。

「おかしいな…」

気持ち悪さにクラクラしていると、冷たいものが頬に触れる。

「飲んだら少し良くなるわ」

いつの間にかジュースを買ってきてくれていた。

「サンキュー」

程よく酸っぱくて甘いレモンジュースは、志保に似ているような気がした。

「…乗る前あんなに嫌がってたのに、平気そうやな。姉ちゃん絶叫系苦手ちゃうんか？」

「乗った事がなかっただけよ」

「…さよか」

怖がる志保を見てみたいと思った平次のたくらみは失敗した。

クスツと志保が笑う。

それは自然な笑顔で、いつもツンツンした志保とはまるで違う。

改めて見ると、志保はとても美人だ。

小さい時も、今日の今までも、整った顔立ちだとは感じていたが、
気にしていなかった。

目鼻立ちのはつきりとした色白のハーフ。目立たない訳がない。

今も彼女をちらちら見ている男の視線を感じる。

レモンジュースと志保。

(なんとなく、工藤の惹かれた気持ちが解るような気いしてきたわ)

「よっしゃ、次行こう」

「もう、大丈夫なの？」

「ああ」

だいぶ回復したので、乗り物は避けてゲームコーナーに向かう。

せっかく遊園地に来たのだから楽しみたい。楽しませたいと平次は
思った。

いくつかのゲームがならび、いくつかの体験型アトラクションがあ
る。

「そつだ！姉ちゃん対決しようや」

正直自信がある。

今度こそ、格好いいところを見せようと平次は意気込んだ。

一回戦は圧勝だった。

鰐を叩いて点数を競う。

和葉にも負けたこともないので無敗だった。

女相手に本気を出して男らしくないのだが、勝負の道は厳しいのだ。ガッツポーズを作って次の射的に向かう。

今度は完敗だった。

おもちゃの銃を持った途端、志保は恐ろしく冷静に的確に商品を倒してしまう。

「お見事…」

さすが組織にいた女だ。

銃の扱いは手慣れている。

平次の背筋に冷たいものが走った。

しかし、これで一勝一敗。

射的を選ばなければ良かったと悔しがる。

一喜一憂を見せる平次に、志保の緊張感がとれ、素直に笑っていた。学校で見せる作り笑顔ではない。

「次は何にしよか？これで勝負が決まるから慎重に選ばなアカンな」

勝負に燃える平次に笑いながら、志保は時計を見る。
スツと笑いが消える。

「残念ね。そろそろお昼の時間よ」

「嘘やる。もうそんな時間か！」

「ええ、待ち合わせのところにいきましょう」

「うーん。勝負は午後に持ち越しか」

平次は気持ちいいくらい感情をストレートに出してくる。最近ずっと憂鬱だった志保の気持ちが解れて笑顔になっていた。

「まあ、私が勝つけれど」

と軽口をつい言ってしまふ。

平次は剥きになり、勝つのは俺やと更にテンションを上げて対抗してきた。

志保は心から笑った。

「服部くーん。宮野さーん。こっちこっち！」

先に新一と蘭が待っていた。込み合うレストランの行列に並ぶ。

「二人とも、随分楽しそうだったね」

蘭が笑いながら待ち合わせに来た二人に聞く。

「目茶苦茶楽しかったわ。な、姉ちゃん」

「ええ、元気で強気な探偵さんの意外な部分も見れたし」

「ちょ、それは……」

乗り物でへばったことは格好悪いので、隠しておきたいと平次は慌てる。

クスクスと志保が笑い平次もまた笑った。：笑った横目で新一を見る。

（おーおー。ものごつつ睨んどる）

待ち合わせに来た時から、新一の顔が沈んで暗い。面白くない。そう顔に書いてある。

朝、見た時は信じられなかった。

あんなに長い間新一が想っていたはずの蘭から、無愛想で冷たい志保に気持ちがるなんて。

確かに二人は奇跡のような経験をし、お互い誰にも解らないような関係で誰も入れない何かがあるのは解る。

しかし、それは恋愛とは違う絆みたいなものだと思っていた。

幼なじみですつと一緒だった蘭を好きな気持ちを聞いていたし、変わらずにいると思っていた。

だから、気持ちが変わるなんて理解できなかった。

しかし、この数時間で彼女の違う部分を見せつけられた。

いつだか、新一は志保は優しいと言っていた。

今なら納得せざる得ない。

笑うと花が咲いたような空気が和らぐ。

太陽のように明るい蘭の笑いの違い、満月のような静かで優しい笑顔。

そして、時折見せる切ないようなはかなげな顔。

(こりゃー工藤もほっておけない。ほっておけないから更にハマる
…アカンわコレは)

そして考えないようにしていたが、志保も新一が好きに違いない。

大方、組織や薬、蘭のことで気持ちを封じ込めようとしているのだ
ろう。

こんなに解りやすく二人が惹かれあっているのに…平次は蘭を見る。

(毛利の姉ちゃんが気づいてないはずがない)

午後は四人でまわることになった。

新一が譲らなかつたからだ。

絶叫系は「行列が嫌」と言う志保の優しい計らいで避けられた。

「ありがとう姉ちゃん」

こそつとお礼を言う平次。

「なんのこと？」

と知らん顔で言う志保に、ますます平次は感心するのだった。

大形スクリーンでのアトラクション、お化け屋敷と続く。

お化け屋敷では怖がる蘭が新一にくつついて、イチヤイチャしている
のが気になって仕方なかつた。

気になったのは平次のほうで、志保は無表情のまま機械仕掛けのお

化けを見つめている。

四人でまわりたいつて言ってた癖にこれでは見せつけているようなものだ。

新一のその鈍感さにイラツとした。

「姉ちゃん、怖かったら抱き着いてええんやで」

解っているけど、冗談めかしておどけてみせる。

「あなたこそ、怖かったら素直に言いなさい。抱き着くのはお断りだけだ」

無表情だった志保の顔が、暗闇でも緩むのが解った。

ホツとして、テンション高く平次は話しかける。なんとかして笑顔にさせたかった。

先が明るい。出口だ。

安心したのか、最後の最後に現れたお化けに志保は驚いてバランスを崩し倒れそうになる。

間一髪平次が受け止めた。

「大丈夫か？姉ちゃん」

「ええ。ありがとう。油断したわ」

手を引いて体制を整えると、お互い顔を見合わせて笑う。

「みつともないところを見られたのも、勝負もお互い引き分けね」

「そや、勝負がまだついとらんかったな」

勝負を思い出していた平次たちの前に、新一が割ってはいってきた。握手のように繋がれていた手が離れる。

「工藤…くん？」

「・・・オメーら出口の前で突っ立てたら、出てくる人に迷惑かかるだろ」

二人の顔を見ないで新一が低い声で言う。

ごめんなさいと志保は小さく返し、新一の後を追って蘭のところに行く。

一瞬、蘭が悲しい顔をしたのを、平次は見逃さなかった。

日が傾き最後に観覧車に乗ろうと蘭が提案した。

志保は二人に別れるつもりだったのだが、またもや新一が四人で乗ると言い張った。

「うわー綺麗ね！」

地上がどんどん離れていくにつれ、景色が広がる。

近くの海の水平線に太陽が段々赤く染まり近づいていく。

蘭が指す景色に新一も一緒にになって見ている。

二人を優しく切ない目で見ている志保に平次の胸が詰まる。視線に気づいたのか、志保が平次を見た。

「今日はありがとう。楽しかったわね」

夕日に照らされ、赤い髪の毛が更に赤く染まる。

気丈な顔して笑顔で素直にお礼を言う志保に平次は何も言えない。

「まあ、私じゃ物足りなかったでしょうけど。大阪の彼女とのデート予行練習と言うことで大目に見ておいてちょうだい」

「そんなことあらへん。ごつつ楽しかったわ。あと、和葉は彼女、ちや・う！」

「素直じゃないのね」

「お互いさまや」

視線を合わせて笑うと、やはりもうひとつの今日何回かの痛いくらいの視線を感じた。

観覧車は地上に戻る。

四人は無言で降りて、遊園地を後にした。

結局なにも出来なかったと、志保はため息をついた。

せつかく二人きりにしてあげたのに、進展が見られない。

むしろ何故か機嫌の悪い新一と蘭の間に微妙な距離が見えた。

喧嘩でもしたのか？

今日一日自分は何をしていたのだろう。

憂鬱の底に沈みこむ。

夕飯の用意をしなくちゃと帰る蘭を送って三人で歩く。

平次は今日新一の家に泊まる予定だ。

「それじゃ、おやすみなさい」

あっさりと別れを告げ門をあける志保。
無言になっている新一が歩きだす。

「そや！」

「服部？」

平次は思い出して、志保を追う。

「待って姉ちゃん」

「…？」

「勝負はまだ決まっておらん。また、今度対決や」

目を見開いてから、志保が呆れたように言った。

「…あなたそんなことわざわざ言いに来たの？」

「アカンか？」

「いいえ。よっぽど負けず嫌いなのね」

クスクス笑う。

さっきまで無表情ながら死にそうな顔をしていた。
だから、笑顔にホッとす。

「解ったわ。負けないわよ」

「望むところや!」

再びおやすみなさいと言い合って平次は工藤家に向かう。

(さて、問題はここからや...)

玄関の入り口に立つ新一の顔はこれでもかと言っくくらい青ざめていた。

制服と私(六)〜見(後書き)

前回と今回は同じ時間なので、話が進んでません。
まだもう少し続きます。10話くらいになる予定です。

制服と私(七)〜心(前書き)

続きです。目線は新一へ。志保は出てきません。

制服と私(七)心

帰宅して「あー疲れた！」と服部はソファーに沈んで伸びをした。

「遊園地オモロかったなあ」

「…ああ」

服部は宮野と楽しそうだったもんな。ずっと仲良く笑ってた。

「なんか飲むか？水しかないけど」

「いや、汗流したい」

服部がシャワーを浴びている間、服部の寝る為の部屋の準備する。しばらくして交代で俺もシャワーを浴びる。

リビングの冷房で涼んでくつろぎながら服部は手足を伸ばしていた。無言でキッチンへ行き一気に水を飲む。

「…工藤。さつきから、何か言いたそうやな」

服部が挑戦的な目で言うてくる。気づいていたのか。

生唾を飲み込んで、ソファーに服部と対峙するように座る。

「服部…オメー宮野の事…好きなのか？」

「ああ、そつや」

「!」

一瞬にしてシヨックが俺を襲う。
やっぱりそうだったのか。予想してた通りに。
服部は宮野が好きに…。

「そない、シヨックか？」

服部が表情を崩した。解りやすいやつぢゃない。とケラケラ笑いだした

何? どういうことだ?

「…服部？」

「好きは好きでも恋愛とはちゃう。友人としての好きや。恋愛としてあの姉ちゃんが好きなのは…」

真つ直ぐ真剣な顔で俺を見た服部。

「…お前やる? 工藤」

ビクツとした。

いきなり真実を突き付けられた。
恋愛として宮野を好きなのは…俺。

「今日一日いて、よう解つたやる。ずっと俺に嫉妬してたしな。お前は宮野の姉ちゃんに惚れとる」

宮野に惚れてる。

「俺は…」

初めて会った時。

涙を出して俺を責めた時。

腕を組んで皮肉を言う時。

探偵団を優しく見守る時。

心配して叱咤する時。

横に並んで歩く時。

姉や両親を思つて泣いた時。

成長して綺麗すぎるその顔を近づけた時。

いきなり制服で現れた眩しかった時。

遊園地での笑っている時。

事件を解決した後信頼しながら目線を合わせた時…。

『工藤くん』

色んな灰原と宮野がフラッシュバックする。

「宮野志保に惚れている。アイツが好きだ」

口に出して改めて思い知る。

好きだ。

独り占めしたい。誰にも渡したくない。

独占欲の塊がそこにあった。

宮野を思つて胸がきゅっきゅする。

今すぐ会いたい気持ちになる。

「…毛利の姉ちゃんはどないするんや？」

再び真剣な顔で服部が問う。

そくだ蘭…。

昂揚していた気持ちが一気に沈む。

幼なじみで大切な人だった。

太陽のようにいつも笑顔で照らしてくれる。

「蘭は…ずっと待たせて。出来れば傷つけたくない」

蘭は黙って待ち続けてくれた。

その蘭を好きじゃなかったなんて今更言えるだろうか。ましてや宮野が好きだなんて言えない。

「蘭になんて言ったらいいかまだ解らない。…まだ言えない…」

「でも、それはお前が傷つきたくないだけちゃうか？」

「え？」

「毛利の姉ちゃんに何も言わずに偽り続けて、それで傷つかへんと思ってるんか？」

何も言わないから蘭が傷つく？

「その曖昧さで、宮野の姉ちゃんも傷つけとる」

「宮野を…？」

「ああ」

「……………」

服部の言う通りかも知れない。

自分が傷つきたくないから逃げていた。

蘭の幼なじみとして今までと同じに隣にながら、独占欲で宮野を側にいさせようとしばらく続けている。

曖昧に微妙な関係が続けようと逃げていた。

誰も傷つかないなんて甘く考えていた。

「俺、最低なヤツだ」

「最低なのは今更や。後はこれからどうするかやな」

「…にやるー…」

半目で睨んでも、知らん顔をする服部。

オイオイ、少しはフォローしろよ。

…でも。

お陰ですつきりした。

自分の気持ちとはつきりやるべき事が解った。

これからだ。

「服部、ありがとう」

俺は幸せだ。

前置きなく突然現れたり引っかきまわしたりするけれど。

いつもライバルとして親友として、ビシッと言っべき事を言ってくれたり、助けてくれる服部に感謝する。

「…ところで工藤。腹減った」

「……………」

…冷蔵庫には水しかない。

制服と私（七）〜心（後書き）

次の話で腹を空かせた二人は志保の元に行きます。

この話の新一はどうやって生活しているのか…。毎日博士の家にたかりに行ってるような？

新一はただ志保に会いたいただけなんです。

でも金持ちなんだから、食費くらい出すべきだぞ！

制服と私（八）〜切（前書き）

続きです。目線は志保。話は急展開に進みます。サブタイトルに変なものをつけてしまいました…

制服と私（八）〜切

「腹減った。何か食わせて」

遊園地から帰って、博士とご飯を食べてお風呂に入ろうとしていた夜遅くに工藤くん達が来た。

「…あなた達今まで何してたの？」

罰の悪そうな顔して二人顔を見合わせる。

「うちは食堂じゃないんだけど」

ため息をついて、多めに作っておいた夕食を温めなおしにキッチンへ向かう。

「やっぱり優しいな。姉ちゃん」

何故か顔を赤くした工藤くんをからかう西の探偵。工藤くんは逃げるようにキッチンに来る。

「て、手伝おうか」

「結構よ」

断っても、キッチンから出ていこうとはしない。

やりづらいんだけど…。

無視して調理を続ける。高いところから物を取ろうと台の上のぼる。物が奥にあって取りづらい。

工藤くんが慌てて、近づいてこなくていいのに近づいてくる。

「何を取るんだ？俺が取るよ」

「大丈夫よ」

と意地をはった途端、バランスを崩す。

「危ない！」

咄嗟に工藤くんが私の身体を受け止めて一緒に倒れこんだ。

「どないした！…！」

大きな音に駆け込んできた服部くんの動きが止まる。

「…お邪魔やったみたいやな」

そのままそくさとリビングに消えていった。

「ってー」

「工藤くん！大丈夫？」

ハッと顔をあげると、すぐ目の前に工藤くんの顔があった。

助けてくれた工藤くんが自分をクッションにして横に倒れこむ。私の身体を守るように抱えて。

私は工藤くんの上に乗っていた。

お互いの顔が触れ合うくらい近い。

もう少し近かったらキスをしてしまいそうな距離。

慌ててバツと離れる。

血液が頭にのぼって、全身が心臓になってしまった。

「助かったわ。ありがとう」

なんとかそれだけは言えた。

変な沈黙を振り切るように立ち上がり、再び調理に取り掛かる。心臓が壊れそうだ。

ただ受け止めて貰っただけなのに、顔が近かっただけなのに…。

「うまそうやなー」

西の探偵が歓喜の声をあげる。工藤くんも嬉しそうに並べられた料理を見る。

「毎日この人が食べにくるから、多めに余っていただけで。いつも食べれるとは思わないでね」

「ありがとう。姉ちゃん！」

ニコニコ笑って食べはじめてる。解ってるのかしら…？

「片付けは自分達でやってちょうだい。食べたらさっさと帰ってね。鍵は気にしなくていいから」

私は息をついてお風呂に向かう。

「宮野！」

工藤くんが呼ぶ。

振り向くと優しい笑顔で

こちらを見て、ゆっくり心をこめた言葉を言った。

「ありがとう」

クルツと体をドアに向け、お風呂場に向かう。

脱衣所の洗面台の鏡に写る私の顔は真っ赤だった。

あんな顔はしないでほしい。

蓋をしている想いが溢れそうになる。

触れそうなくらい近かった彼の顔。

切ないくらい優しい笑顔でお礼を言った顔。

彼にはなんともない事なのに、自分だけ動揺している。

馬鹿みたい。

もう、嫌だ。こんな想いは早く終わりにしたい。

お風呂からあがると、素直に帰ったみたいで誰もいなかった。

食器もきちんと片付けられていた。

カチャリ玄関の鍵を閉める。

翌日の朝にも、工藤くん達はご飯を食べに来たが、事件が起きたと

電話が来て慌ただしく出ていった。

相変わらず彼等は事件に好かれているみたいだ。

そのまま次の日のお昼過ぎまで帰って来なかった。

「なーんだ。結局遊園地に行ったのね」

鈴木さんがおかずを食べながら言う。
お昼の時間。

「ごめんなさい」

「結局…って何よ。二人とも最初から行かないつもりだったの？」

蘭さんが私達二人を見回すと、鈴木さんが悪びれない様子で踏ん返り返る。

「そうよ。二人きりにさせてデートさせる予定だったの！」

「デートって…。宮野さんもそのつもりだったの？あ、だから二手に別れたいってずっと言ってたの？」

「ええ…」

「もー、二人ともー」

更に鈴木さんに何もなかったの？とからかわれながら、顔を赤くし困ったようにする蘭さんは可愛い。

こんな可愛い人をほっといて、工藤くんは馬鹿ね。

「全くあんた達は奥手なんだから。お膳立てしなきゃ何もしないでしようが」

「…蘭さんから告白してみたら？」

「え？」

突然の言葉に二人が私を見た。

そう、工藤くんが中々言わないなら、蘭さんから言えばいい。

「好き、なんでしょ？お互い。だったら、蘭さんのほうから告白してみたら？」

「……」

「そーよ蘭！あの旦那は待ってるってだけで何も言っ来ない。だったらこっちから仕掛けちゃえばいいのよね！宮野さんよく言った」

「ちょっと、園子」

慌てて興奮した鈴木さんを抑える。

一息ついて、蘭さんは考えるように飲み物を飲む。

「絶対大丈夫」

「本当にいいの？」

「え？」

「私が新一に告白しても、宮野さんはいいの？」

「蘭？」

「え？…ええ」

蘭さんはどうしてそんな事を言うのだろう？

「解った。新一に告白する」

わあっと鈴木さんが蘭さんの手をとり、喜びながら応援の言葉をかける。

これでいい。これで諦められる。

工藤くんは蘭さんのもの。

トイレに行くと立ち上がり、廊下に出る。

タイミング悪く工藤くんが登校してきた。

どうして顔を見たくない時程、顔をあわせてしまっのかしら。

「宮野！」

「工藤くん…今来たの？」

「ああ。昨日はごめんな。朝食途中で抜け出して」

「別に。ところで事件解決したの？」

「大分時間かかったけどな。今朝犯人捕まえた」

「そう。お疲れ様」

工藤くんが笑顔になる。

ああ、またあの顔だ。

私は目を背け、じゃあとその場を去ろうとする。

「そっだ、服部もお礼言ってた。勝負がどうのって言ってたがなん

の事だ？」

「・・・内緒」

「なんだよ、二人して！」

膨れる工藤くん、後ろから蘭さんの声がかかる。

遅刻の理由やその他の雑談の後、蘭さんは告白する為に工藤くんを誘うだろう。

私は早足でその場から遠ざかる。

月曜日放課後の誰もいない特別教室。

工藤くんを呼び出した蘭さんが立っている。

呼ばれた工藤くんが後から教室へ入っていった。

野次馬根性…本人いわく親友を心配して、鈴木さんがそつとドアに近づいて聞き耳をたてる。

「ほら、宮野さんも。聞こえるから」

シーッと嬉しそうに人差し指を口に当て中を覗く。

工藤くん達の声が聞こえてきた。

「なんだよ。こんな所に呼び出して」

「私、新一が好き。ずっと好きだったの」

「蘭…」

「新一は？新一は私のこと…」

「……………」

「新一？」

「……俺も、蘭が好きだ」

…終わった。私の計画は案外あっさり終わりを迎えた。

これで工藤くんは幸せになれた。

蘭さんも幸せになれた。

やっと肩の荷が降りた。

…終わった。

わあと笑いながら鈴木さんが私を見て、怪訝そうな顔になる。

「…宮野…さん？」

「良かった…」

本当に良かったと思っていたのに、どうして？

胸が張り裂けそうなくらい痛い。

身が引き裂かれそうなくらい辛い。

今更、私は何に傷ついているんだろう？

「良かった…」

私は走り出す。我慢していた涙がこぼれて後ろに流れていく。

制服と私（八）〜切（後書き）

え？なんで？って展開ですが、次話読めば納得出来ると思います。
未熟な文章で読みにくかったり意味解らなかつたらすみません。
次は新一目線に切り替わります。

制服と私(九)〜告(前書き)

新二目線で告白の続きです。あくまで新志です。

制服と私（九）告

「俺も蘭が、好きだ」

ついに、この時が来た。蘭から告白をされた。そして今その返事をだす。

「新一……」

「幼なじみとして」

蘭の顔が強張る。

「待つててくれと言った時の気持ちは本当だった。小さい頃から蘭一筋だったから、当然蘭の事を好きだと思ってた」

コナンになつてからずっと蘭の元に戻ると信じていた。それが当然だと。灰原が現れるまでは……。

「でも離れて見て解ったんだ。蘭は幼なじみとして好きで、恋愛じゃなかった」

好きなのは……愛してるのは違う人だった。

「恋愛じゃない……ってなんで解ったの？他に恋愛として好きな人ができたから？」

「……ああ」

「…宮野さん、でしょ？」

ドキン！心臓を捕まれたように身体が跳ねた。
どうして蘭が？

顔に血液が集まり、何て言えばいいか解らなくなる。
そんな俺を見て、フウツと蘭はため息をついた。

「…やっぱりね。宮野さんが転校してきた時、すぐに解っちゃった。
新一が誰を見てるか」

「蘭…」

「帰って来てからの新一は別人みたいだったもん。何処か心が遠く
に行ってた」

確かに無気力だった。元に戻ったのに、何故か嬉しくなくて。宮野
が隣にいないだけで何か物足りない感じがして、世界も色褪せてい
た。

「宮野さんを想ってたんだね」

苦笑いをしていた蘭が俯く。

「…俺が一人孤独だった時、彼女は現れた。唯一本音を言えて自分
を出せたのが彼女だった。同じ立場で同じ目線にいて、側にいてく
れた」

「それは、新一がいなくなっていた時の大きな事件の時？」

「ああ…事件が解決した時、彼女と離れると気づいた時、好きだ離れたくないと感じていたんだ」

あの時、組織を壊滅させて薬を完成させた彼女が、自分はもう一つの新しい人生を歩もうかと考えていた。

それを知った時の置いていかれるような絶望感と、どうしても向こうに行かせたくない焦燥感は今も胸に焼き付いている。

自分の側から離れてしまふ彼女をどうにかして縛りつけておきたかった。

小学生のままの彼女と、高校生に戻った俺が接点出来る事はほとんどなくなってしまふから。

そして、そこまで彼女が大事で必要な人なんだと思い知ったんだ。

「…もし。新一が孤独だった時私が側にいたら、宮野さんの事好きにならなかつたかしら？」

「…それは…ないと思う」

「私のほうが新一とずっと一緒にいて良く解ってるつもりだけど…違うのね」

「俺さ、皆やとくに蘭の前ではカッコつけよう、常にカッコイイ工藤新一でいようとしてたんだよな」

そう。コナンになる前から、ものごころついた時から、周りに弱みなんて見せない、完璧でいようと演出していた。

「新一凄いつて言われたくて、ホームズのようにクールなヒーローでいたかった。」

俺をじつと見ていた蘭が目線を落とし、瞳を揺らしていた。格好悪い俺を知って呆れたのかもしれない。

「でも、アイツは全部見抜いて。いつの間にかカッコつけなくても、無理しなくても自然体でいられた。格好悪くても平気だった。蘭が側にいても無理してカッコつけてただけだと思う」

だから今もこの先も、コナンだったとは言いつもりはない。あの生意気な眼鏡の子供はいい思い出として、蘭や皆の中でいてほしいから。

「事件が起きた時、考えてる事も同じでサポートしてくれる。言いたい事も言い合って、解りあえて、隣に要られるのは居たいと思うのは彼女だけなんだ」

「新一…」

「本当にすまない蘭」

思い切り頭を下げる。蘭は黙って涙を流した。

「俺逃げようとしてた。待っていてくれと言った手前何もできず、曖昧に幼なじみを続けてれば蘭は傷つかないと思ってた。自分は何もしないで蘭に告白させて逆に傷つけて…」

「私に告白しろって言ったのは宮野さんなのよ」

「え？」

宮野が蘭に？

俺が中々告白しないから、蘭に言ったのか。
胸がズキンと痛む。

「…そうか。アイツ俺と蘭がいつ恋人になるか、ずっと気にしてたからな。蘭の元に早く帰りたいたいと俺、ずっと言ってたし」

俺と蘭がくつついて幸せになる事が、薬で俺の時を止めてしまったと罪悪感を持っている宮野の、願いだっただ。叶えてやることは出来ないが。上を見て息をついた。

「俺も完璧フラれたみたいだ」

「…そんなことないよ」

「蘭…？」

「よく解った！私、まだここにいるから。新一は先に帰って」

蘭は向こう向いて、精一杯の明るい声を出した。

「…蘭、本当にごめん」

広い教室に響く俺の声。

「好きになってくれてありがとう」

蘭の肩が震えている。俺は静かに教室を出た。

パンツ

廊下にいた園子が思い切り頬を殴ってきた。

「蘭の替わりよ」

教室から蘭のすすり泣く声がする。園子も泣いていた。

「…ああ。蘭をよろしく」

「言われなくても、そうするわよ。・・・」

教室に入ろうとする園子の動きが止まる。

「・・・」

「？」

園子が悔しそうに唇を噛み締めた。

「あー。もう！宮野さん！あんたが蘭を好きって言った時、ここにいたの。」

彼女、勘違いして去って行ったわよ」

宮野が？

「多分泣いてる」

何かが弾けたようには全力で走り出した。

制服と私（九）〜告（後書き）

蘭とのことはどうするかいつも悩みます。新一がいつも自分勝手か
もしれない…

志保に対しても、どう頑なな心を緩ませるか更に悩みます。（新一、
コナンは単純にしているので比較的楽）

蘭に酷すぎると怒る方がいるかもしれませんが、ごめんなさい。

文章が下手で上手く表現出来ていませんが、ここまで読んで下さっ
てありがとうございます。

次回が最終です。

制服と私(十)〜終(前書き)

長くなりましたが最後です。目線は三者?です。

制服と私(十)〜終

今度こそ誰もいない屋上で志保は泣いた。崩れるように座りこんで、胸を抑えて泣いた。

元々見込みのない淡い想いだったのに、どうしてこんなに悲しいのか。

自分でそうなるように仕向けたのに、何故苦しいのか。

早く涙を止めて、あの二人を祝福してあげなくちゃいけないのに。この涙は一体なんだというのだろう。

「それは、俺を想って泣いてるんだよな」

志保がビクツと身体を強張らせる。

新一が屋上の入口に立っていた。

「蘭に告白されて、俺も好きだと言ったのを聞いたんだろ？失恋したと思込んで泣いてるんだよな」

なんでそんな事を知っているのか。

新一は何故ここにいるのか。

志保の頭は混乱していた。

「オメーは俺が好きってことだよな」

「ち、違う！これは…」

「俺は宮野が好きだ」

「！…！」

否定をしようとした志保の言葉を遮って、新一がストレートに気持ちを抱えた。

「な…に…言って」

涙でぐちゃぐちゃになった顔で新一を振り返る志保。解らない。解らない。

工藤新一は何を言っているのだろう。

ほんの少し前に蘭を好きだと言ったばかりじゃないか。

「くだらない冗談言わないで」

「宮野志保を愛してる」

「…！ふぎけないで！！蘭さんは？蘭さんのことが好きなんですよ？さっきそう言ってたじゃない」

「言ったよ。幼なじみとして好きだよ」

「…幼…なじ…み？」

「そうだ。蘭は幼なじみ。俺が愛してるのは宮野志保。オメーだ」

嘘…。

志保は人形のように固まって動きを止めた。

「…嘘よ。そんな訳ある訳ないじゃない。あなたは蘭さんが好きなのはなんだから」

「簡単に信じて貰えないのは解ってる。ずっと蘭、蘭言ってたしな。でも、今俺の胸の中にいるのは宮野なんだよ」

何故こんな事になったんだろう？

いつ新一の胸に志保がいるようになったのか？

「俺、宮野に側にいて欲しかった。元の姿になれと説得したのも高校生になろうと言ったのも朝から夜までずっと側にいたかったから遊園地では服部に妬き餅焼いてた」

新一が近づいてくる。

手を伸ばし志保を一気に抱きしめた。

「宮野がずっと欲しかった。触れたかった。

蘭は、妹や姉のような家族みたいなもので、こんな感情や要求は一切起きない」

「.....」

思ったより華奢で小さく柔らかい志保。

小さくなってた時は自分と同じくらいか、少し大きかったのに。

新一の気持ちさがさらに高まる。

こんなに胸を締め付け離さないのは志保だけだ。

「少しは解ってくれたか？」

腕の中で動かない志保を除きこむ。

その顔には再び涙が溢れている。

「蘭さんは…蘭さんはどうなるの？ずっと工藤くんを待ち続けて、

工藤くんに告白して」

「蘭とはきちんと話したよ。正直な俺の気持ち。どれだけ伝わったか、納得したかは解らないけど」

「彼女今傷ついて泣いてるのね」

「ああ、傷つけた。でも大丈夫蘭は強い。それに園子がいる」

「あなたがいないわ。蘭さんにはあなたが必要よ。今からでも遅くない。泣いている彼女のところ」

自分だつて泣いているくせに、志保は蘭を心配している。

「俺には蘭を助けられない。言っただろ？俺は宮野が好きなんだ。俺はお前しか見てない」

「.....」

泣き腫らした真っ赤な目に、また涙が溢れる。

泣いてる顔も可愛いと、悪いと思いつつも新一は頭の奥で思う。スツと細くてしなやかな白い手が新一の頬に触れる。

「...ここ赤いわ」

園子に叩かれて熱を持った頬に、志保の冷たくて柔らかい手が心地いい。

その手に新一は自分の手を重ねる。

「蘭を傷つけて、宮野の心を痛めてることに比べれば軽すぎるよ」

「…あなた馬鹿よ。最低の大馬鹿」

泣きながら諦めたような自重の笑みで、新一の胸に頭を預ける。

「…私も大馬鹿…工藤くんが好きだと言われて嬉しいなんて…蘭さん泣いてるのに…最低で卑怯な大馬鹿…」

「宮野!!」

新一の腕に力が籠る。

志保が息苦しいくらい強く抱き、志保も腕を新一首にまわして抱き着いた。

お互い存在を確かめるようにくっついた。

「なあ、オメーから好きだって聞いてないんだけど…」

しばらくして、抱きしめながら甘えるように新一が耳元で言う。

「…そうだったかしら?」

「うん。聞いてない」

志保は身体を硬直させた。顔は真っ赤で心臓が激しく動きだす。恐る恐る見上げると、柔らかい志保の髪の毛を撫でながら新一が言葉を待っている。

「…言わなきゃ駄目?」

「駄目。ちゃんと聞きたい」

耳まで真っ赤にさせて慌てている志保が可愛くて愛おしい。新一がそんな事を考えているとは知らない志保は、いざ好きだと言うのにもこんなな勇氣がいることなのだ、大きく深呼吸した。

「私…私も工藤くんが好き！」

新一が満足そうに笑って志保を抱きそしてキスをする。想いが溢れて止まらない。何度も溺れるようにキスを繰り返した。

その後。蘭は

「まだ祝福も応援も出来ない」

と二人に言ったが、それも時間が解決してくれそうだった。元々、新一と志保の気持ちに気づいていて半ば諦めていた。フラれたことはショックで悲しいのだが、不思議と幸せそうな新一を見てホッとしたのだ。

そしてとても蘭らしい天使のような心が、いつか失恋の傷が癒えたら宮野と親友になりたいと感じているのだった。

新一を奪った憎い相手なのに憎めない。むしろ自分より悲痛で死にそうな顔して蘭に謝ってきた。

その時蘭は誰が失恋したのか解らなくなって、吹き出しそうになった。

園子も同じように感じているらしく、宮野を嫌いになれずにいるみ

たいだ。後で蘭が聞いたら「蘭ゴメン」と言いながらそうバラしてくれた。

蘭は予感がした。幼なじみとしてこれからも、新一との関係が続いていきそうだ。

いや、そうなれたらいいなど。

数日後の誰もいない図書館で志保は人を待った。

図書委員の江川が現れ、志保を見て顔を赤くする。

「本ありがとう。とても面白かったわ」

「あ、あのよければ、この後一緒に帰りませんか」

ここ数日で、志保は更にその美しさを増していた。

クールで少し悩んでいた分暗かったが、笑顔で晴れやかな表情をするようになった。

柔らかな笑顔に、更にファンが増えた。

「一緒にホームズの話なんか…」

「悪いけど、先約があるんだ」

「く、工藤新一？」

突然現れた新一に江川がビックリしてあとさざる。

「ちょっと工藤くん。何しに来たのよ」

「何しにってヒデーな。迎えに来ただけだろ」

「ついて来ただけじゃない」

「…バレてたか」

江川がえ？と二人を指差すと、付き合ってるんだと新一にあっさり言われる。

「江川くん。誘ってくれてありがとう。でもごめんなさい」

「は、はい…」

有名人の美男。転校初日から話題の美女。に言われては、普通で地味な自分は何も出来ずスゴスゴと去っていくしかない。

「…どういづつもり？」

江川が去って、志保が呆れたように新一を見る。

「まだ、あまり付き合ってることを公にしないって話したじゃない？」

「解ってるよ」

蘭への配慮の為に。なるべく露骨なことは出来ない。でも…

「俺、最近気づいたんだけどかなり嫉妬深いから」

「え？」

本棚の間で新一は志保を抱き寄せキスをする。
抵抗しようとする志保が数秒経って力を抜いた。
確認した新一が、そのまま頬にキス、首筋へと移動する。

「ちよつと…！」

志保が慌てて身体を離しても遅かった。一瞬にして強く吸われ跡が付く。

確信犯は得意そうに笑っている。

「男避け対策」

志保の目が座り冷たく光る。

「しばらく半径3メートル以内に近づかないでちょうだい」

かなり怒っている。

首を手で隠して、早足で歩いていった。

「これはマズイ…やり過ぎたか」

新一は慌てて追いかけるが、彼女は許してくれるだろうか。
再び図書館に静寂が訪れる。
やわらかな西日が校舎を照らした。

制服と私(十)〜終(後書き)

終わりです。長々しい未熟な話を読んで頂きありがとうございます。

話がちゃんと着地できたのか不安ですが、無い頭を搾って努力しました。

ハッピーエンドのラブラブな新志を書けたでしょうか？(話が少々強引だったかな…)

次はあっさり脳気な話を書きたいです。

災難（前書き）

コ哀です。蘭が（別の意味で）ちょっと壊れてるので、ファンの方は避けたほうがいいかもしれません。

災難

組織の仲間がこの街に来ている。

怯える灰原を守りながら、連日組織への接触と調査で大忙しだ。

「えー、ぼく博士んち行きたい！」

「駄目よ！コナンくん。昨日だって一昨日だって、最近毎日行ってるじゃない」

「だ、だって…ゲームが」

「子供がゲームばっかしてちゃ駄目でしょ」

全くとりつく島もない。

明日から、夏休み。

本格的に組織の仲間を調査することが出来ると思ってた矢先、おっちゃんの仕事関係で一週間北海道へ行くと蘭が言った。

外で待っていた灰原が様子を伺いに、ドアを開けてこちらを覗いた。

コナンは哀の手を引き無理矢理部屋の中へ引っ張る。

「蘭ねーちゃん。ボク灰原さんといっしょにいたいなの」

「え？」

「は？」

「だめー？」

コナンはヤケだった。今、灰原を置いてこの街を離れる訳にはいかない。

いちかばちか。

哀はコナンに耳打ちをする。

「ちょっと、どういふことよ？」

「オメーも話合わせて」

コナンが再び子供のふりをして可愛い声をだす。

「ぼくー、一週間も灰原さんとあえないのいやだよー」

蘭が二人を見ている。

哀は凄く嫌な顔をして、そのあと子供の顔を作った。

「私も江戸川くんといたいの。おねがい」

うるうるとした目で蘭を見る。

蘭は無言で特に哀を凝視した。

凄く凝視した。

(何か…気づかれているのかしら?)

哀は不安になった。コナンの後ろに少し隠れる。

「じゃあ、哀ちゃんも一緒に行こう!」

「……はあ?」

コナンと哀の声が重なる。

「博士に許可貰えるか電話してみる」

「ら、蘭ねーちゃん?」

コナンが慌ててとりなそうとするが、蘭はあつというまに博士から許可を貰ってしまった。

(博士…、今がどういう状況か解ってないのかよ…)

「安心して、哀ちゃん。これでコナンくんと一緒に要られるわよ!」

ニコニコ笑いながら、哀の前にしゃがみ込み手をとる。

「ら、蘭ねーちゃん?そんなに勝手に決めて大丈夫なの?おじさんに聞かないと…」

「子供一人くらい増えても大丈夫よ。哀ちゃんは私と一緒にベッドで寝ましようね」

蘭はウキウキしている。

哀はどうするのよ。とコナンを見るが、コナンもどうしたらいいか解らなかった。

「ねー、哀ちゃん。私のお古なんだけど哀ちゃんに似合いそうなの

ンピースと帽子があるの。着てみない？」

「…え？え？」

強引に哀を連れ去っていく。

妹が欲しかった。

弟のような存在のコナンに、可愛らしい彼女がいる。しかも飛び切り可愛い。

普段クールな彼女にあんなにうるうるした目で見られちゃ、引き裂く訳にはいかない。

だったら一緒に連れて行っちゃおう。

ついでに（？）可愛い服や小物を着せて飾ってあげよう。自分とお揃いでもいいかもしれない。

妹がいたらそうしたかった。

と言うか哀が可愛いすぎて、蘭はメロメロだった。

「…蘭？」

訳が解らないコナンはひとり取り残されて、頭を悩ませていた。

災難（後書き）

ゴスロリの回に続き蘭が変です。多分これからも小さくて可愛い哀にデレデレで暴走する蘭を書くと思います。その設定が好きなのです。

紫陽花（前書き）

「哀です。」

紫陽花

昨日の夜から雨が降り続けている。

薄紫の傘をさして哀は家を出た。

雨はしとしと長く降り続けている。

通学途中の家にある、立派に咲いた赤紫の紫陽花たちが雨に当たって生き生きとしていた。

蝸牛が一匹顔を出している。

憂鬱な雨も情緒があって悪くないなと哀は学校へ向かった。

「紫陽花のおうちでしょ。歩美しってるよ」

休み時間。歩美と話していて綺麗に咲く紫陽花の話になったのだ。

「去年も青い紫陽花がキレイにいっぱい咲いてたんだよ。

優しいお姉さんがいてね、ママと一緒に見てたらお庭まで入れてくれたんだ」

「へー。毎年あんな風に綺麗に咲くのか。きっとよく手入れしてるのね。」

「僕も見てみたいです」

光彦が話に割ってきた。

何処のお宅なんですか？と歩美に聞く。

元太とコナンはまるで興味ないのだが、放課後紫陽花を見に行こうと言う話になった。

放課後にも雨はまだ降り続いていて、それぞれの色の傘をさしながら紫陽花のようにまとまって下校した。

見事に咲いた紫陽花は、雨に濡れつづけ色濃くそこにあつた。

「キレイですね」

「でしょ？庭だともっと綺麗に見えるんだよ」

「おい、かたつむりの親子がいるぞ」

「工藤くん？」

哀は真剣に紫陽花を見ているコナンに声をかけた。

「庭のほう綺麗に見えるのか」

「みたいね。でも勝手に入っちゃ…ちょっと！」

コナンが門に入ってしまう。皆が追いかけた。

「うわースゲー」

庭から見る紫陽花は更に綺麗だった。

一つつつの株が丸い宝石のように並ぶ。

外の道路に面した紫陽花は赤紫の色濃い花が咲き、次第にピンク水色の青い紫陽花と色とりどりだった。

「これは本当にすごいですね」

「でしょ？でも去年より色んな色があってキレイ」

コナンは紫陽花の下に座り込み地面を見る。
哀も庭を見て、コナンの横に座った。

「コラ！人の家の庭で何してる！」

この家の主人が窓を開けて怒鳴ってきた。
神経質そうに青筋を立てて怒っている。
庭に不法侵入されたら怒るのは当たり前。子供達がさわいでいるのだから。
しつげがなっていないと怒る主人に謝って庭から出ていく。

「コナンが勝手に入るから悪いんだろ」

元太がコナンを責める。

コナンは苦笑いしながら手を合わせる。

「悪い悪い」

「でも紫陽花キレイだったね」

歩美は嬉しそうだ。

光彦は写真に撮りたかったと言っている。

雨の中紫陽花は綺麗に咲いている。
哀の横に並んでくるコナン。

「灰原…」

「工藤くん…」

二人は紫陽花を見つめる。

皆と別れて雨があがった数時間後。哀とコナンは再びあの紫陽花の家にいた。

高木刑事に電話して、数人の警察官と来ていた。

赤紫の紫陽花の下の地面を掘り起こすと、中から女性の死体が出てきた。

この家の行方不明になっていた紫陽花が好きな奥さんだった。犯人はこの家の主人。

紫陽花の下には死体を埋めてはいけない。

リトマス紙のように、解りやすくバレてしまうから。

歩美は去年青い紫陽花が沢山咲いていたと言っていた。

しかし今年の紫陽花は、人ひとり分赤紫に染まっている。

「地面を掘り起こされて、紫陽花も可哀相に」

哀は紫陽花を見つめる。

大事に育ててくれた人が此処にいるよと教えてくれた紫陽花たち。

「もう、面倒を見てくれる人もいないのね」

「灰原…」

コナンは哀の手を繋ぐ。

「来年も見に来ようぜ」

来年？

来年まで自分達はこのままなのだろうか。
組織は。

来年には生きているのかさえ解らない。
でも…。

繋いだコナンの手の温もりが優しいから。

「ええ」

あてのない返事をした。

紫陽花（後書き）

実際の紫陽花に死体を埋めても、土や紫陽花に含まれる物質の科学反応次第でそんな簡単に色が変わることはないそうですが、話の都合そうしました。

コ哀度は薄い話でした。

相棒みたいに解りあってる感じは出せたかな？とは思いますが。

脳みその容量が少ないので、詳しい事件が書けないので毎回曖昧になってしまいます。

一回本格的に事件を書いてみたいけど無理だろう…。

紫陽花が綺麗な時期ですね。色んな花が次々咲く春夏が好きです。

無表情姫と愉快な7人の小人（前書き）

新志前提ですが、酷いおふざけ内容のパロディーです。

無表情姫と愉快な7人の小人

昔々あるところにとても麗しく美しいお姫様がいました。

しかし、お姫様は大変愛想が悪く無表情でした。

このままでは結婚相手が見つかりません。

そこで王様は姫を旅に出そうと考えたのです。

王様「そなたも年頃じゃ、そんな無表情だと婿一人こないだろう。
広い世間を見て成長してきなさい」

王妃「ねー優作うーこの衣装変じゃなーいー？」

王様「こら有希子、台本にない台詞を言わない」

王妃「えー。だってこの衣装が…。あら志保ちゃんこんにちは。その格好可愛いわよ」

なんだかんだで城を出たお姫様は、ため息をついて歩き始めました。本当はここで命を狙われる予定だったのですが、魔女役がまだ衣装にこだわっているので、カットします。

狩人「…あれ？ワシの出番は？」

お姫様は森の中に小さな家を見つけました。

おいしそうな匂い。

お腹が空いて疲れていたお姫様は、家の中へその匂いにつられるように入りました。

何もかも小さい家には、何もかも7つづつの物がありました。

鍋にはおいしそうなスープがあります。

少しいたただこうと、近くにあった小さい食器でスープとパンをひとつ食べました。

食べたらお腹が一杯で眠くなります。

1番近くにあった一つの小さなベッドで寝てしまいました。

そこにこの家の住人達が帰ってきました。

小人3「あ！ドアが開いています」

小人4「なんかうまそうな匂いがすんなー」

小人3「あー、駄目ですよ。元太くん。台本通りに喋らないと」

小人2「えーっと、歩美の台詞なんだっけ？」

小人5「…なーんで俺らが小人役なんや？」

小人6「ええやん。出させてもらうてるだけでも。なあ蘭ちゃん」

小人7「和葉ちゃん、その衣装可愛い。似合ってるよ」

小人6「ホンマか？蘭ちゃんも可愛いよ」

小人5「馬子にも衣装ゆうてなー」

小人6「なんやと平次いー。ちよい待ちいー」

小人7「二人ともお芝居！お芝居！」

家の中に入るとあちこちに人が使った形跡がありました。

小人2「やや。歩美の…じゃなかった。私の食器が使われている!」

小人3「私のスプーンも使われています」

小人4「パンにスプーンまそうだな。早速食おうぜ」

小人3「元太くん。これお芝居ですよ」

小人2「そうよ。ちゃんとやろうよ」

小人1「私のベッドに誰か寝ている…って灰原?」

眼鏡の小人が言うつと皆が集まってきました。

可愛らしいお姫様がベッドですやすや寝ています。

小人3「コナンくん何言ってるんですか。志保お姉さんですよ」

小人2「そういえば哀ちゃんがないね。何処へ行ったの?」

小人5「あのちっさい姉ちゃんは裏方にいるみたいやで」

小人6「…平次何慌てるん?」

小人7「まあ、なんて綺麗なお姫様でしょう!…コナンくん次の台詞なんだっけ?」

小人1「……………」

騒がしいのでお姫様は起きてしまいました。

姫「あなたたちは誰？」

無表情のお姫様は小人達に質問しましたが、逆にお前こそ誰なんだと返されました。

姫「勝手に家に入ってご飯を食べて寝てしまっでごめんなさい」

小人1「えらく説明台詞だな…」

小人2「お城を追い出されてしまったの？」

小人3「行き場所がないなんて可哀相ですね」

小人4「それなら、ここに置いてやろうぜ！」

小人5「ここにいるなら、働かなアカン…働いてもらわないといけないね」

小人6「お姫様には家事をやってもらいましょう」

小人7「そうしましょう。私も手伝います」

姫「ありがとう。嬉しいわ」

無表情でお礼を言ったお姫様は、意外にも料理が上手でカロリー計算が完璧なヘルシーで美味しい料理を作りました。

姫「特にあなたは太りすぎだから注意なさい。そのうち成人病になっってしまうわよ」

小人4「…は、はい」

小人1「おい、灰原。博士じゃないんだから…」

しばらく穏やかな日が続きましたが、お姫様の美しさを嫉む魔女がお婆さんに姿を変え、毒林檎を持ってやってきました。

魔女「この衣装地味すぎるわね。…ああ、台詞ね。解ってるわよ。お嬢さん、美味しい美味しい林檎はいかがかね」

無表情のお姫様は、いかにも怪しくいかにも毒が入った林檎に興味は向かなかつたので、お婆さんを体よく追い返しました

魔女「ひっどーい。こんなに美味しそうなのに！…一口食べちゃお」
なんと魔女は毒林檎を食べてしまいました。
家の前で倒れている魔女を見つけたのは帰って来た小人達。

小人1「全くこの人は何してるんだか」

姫「あなたの母親…」

小人1「言うなよ」

薬品の知識に長けていたお姫様は解毒剤をつくってあげました。
ついでに薬を作って小人達を大きくしてあげました。
台本と話が変わりすぎてナレーションのこちらでも戸惑っております。

小人5「実はわいは、関西王国の王子やったんや。姫さん、結婚し

てくれ」

小人…いや関西王国の王子がお姫様にプロポーズしました。

小人6「平次何ゆうてるん？うちが婚約相手やで」

小人5「うわ！和葉ドレス似合てへんな」

小人6「な・ん・や・てー？平次！」

追いかけてごっこをしている二人を隠れて見ていた小人1は眼鏡を取って、深呼吸しました。

彼もまた隣の王国の王子様だったので。

お姫様の手を取り、静かで雰囲気の良い場所で膝まづき、お姫様の手の甲にキスを落としました。

小人1「姫…結婚してください」

姫「…工藤くん」

？「ちよつと待った！」

急に現れた白い怪盗が、二人の間に立ちました。

花束を手品で出してお姫様に渡します。

怪盗「私と結婚してください」

小人1「…テメー！いきなり出てきやがって何言ってるんだよ！！
大体お前は何役なんだ？」

怪盗「何でもいーじゃん。俺と志保ちゃんがくっつけば」

小人1「はああ？何言ってるんだ…？」

小人7「…新一？新一なの？」

実は小人7もお姫様で二人は幼なじみなのでした。

小人7「新一が待ってるって言っただのよ。今まで何処ほ
つつき歩いてたのよ！」

小人1「蘭…」

怪盗「良かったな。これで俺は志保ちゃんと…」

小人1「そうはさせるか！待て！」

小人7「あ！新一待って！！」

さて、話がこんがらがってきましたが、台本を既に遠く離れているのでどうなるか解りません。
お姫様のドレス裾を誰かが引っ張っています。

小人2「志保お姉さん、歩美元の姿に戻りたい」

小人3「私もです。ていうか僕達が大きくなる必要なかったですよ
ね」

小人4「腹減ったー。うな重くいたい」

お姫様は三人を元に戻して、城に帰る支度をしました。外ではまだ運動会が続いています。元に戻った小人達はさようならまた来てねと手を振りました。お姫様は小さく笑い、手を振り返しました。お姫様初めての笑顔に、花が咲き小鳥が囀り始めました。皆がその笑顔に見とれました。

そこにサッカーで有名なビッグ大国の肥後王子が通りかかり、姫にプロポーズしました。お姫様は笑顔でお嫁に行きました。めでたしめでたし…

小人1「…ちよつと待てよ。なんだよ肥後選手エンドつて。俺達はなんだつたんだよ。というかこのお芝居はなんの意味が…おい、離せよ。お前ら誰だよ!」

お姫様は幸せに暮らしました。めでたしめでたし。

「…って言う劇を文化祭でやろうと思うの（内容は今回の出演者達が好き勝手したので、本番は全く別ものになるけど）」

園子名監督（自称）が得意げに説明する。

「……………はあ?」

志保は呆れた声を出す。隣の席に座る新一は既に寝ている。

「面白そう!」

蘭は手を叩いてノツてきた。

「でしょ? でしょ? もちろん姫役は宮野さん」

「…なんでよ」

露骨に嫌そうな顔で園子を見ると、今から役作りとは宮野さんはた
いしたものだと感じている。

「嫌よ…私やらない」

園子は聞こえてないのか、蘭や他の生徒を巻き込んで脚本を練りは
じめた。

「ねえ、私…」

「こりゃもう無理だな」

声のするほうをみると、机に俯せになりながら片目だけ開けて新一
が志保を見ている。

「…起きてたのね」

「…機嫌麗しくお姫様」

胸に手を当ててうやうやしく礼をする新一を、睨みつけて何か言お

うとしたが、志保はハツとして園子達のところへ向かった。

「私、やらないから！」

無表情姫と愉快な7人の小人（後書き）

文化祭で志保姫新一王子という話を書こうとしたら、何故かこんな感じになってしまいました。すみません。

園子監督が説明した劇は、白雪姫と笑わないお姫様を混ぜたような感じの話です。

小さい恋のメロディー（前書き）

— 応コ哀です。コナンは自分に芽生えた気持ちに戸惑います。

小さい恋のメロデー

ふとした気の緩みだった。

授業中にうたた寝をして怒られた直後、視界に入った灰原の笑顔に心臓が跳ね上がる。

クールな青い目元も薄く横にのびた唇も柔らかい茶髪の髪の毛も、いつも通りなはずなのに眩しく映る。

吸い込まれるように見つめると、心臓の音が全身に響き渡る。顔はもちろん赤いだらう。

「…何よ」

俺の視線に気づき、形の良い眉を潜めて横目で聞く。

その顔も可愛い。…ん？可愛い？

「な…なんでもない！」

慌てて視線を逸らして、絵だらけの教科書に視線を落とす。そしてまたチラツと哀をのぞき見た。

（…たくー。どうしちゃったんだ。俺）

そのもやもやを抱えながら（チラチラと隣を見つつ俺の胸はおかしなくらい痛みを感じ）授業を終えた。

「何か気になることでもあるの？」

俺の様子にいち早く気づいた彼女だが、まさかその原因が自分だとまでは思いつかないであらう。

「別になんでもないよ」

何げなく言ったつもりだが、少し顔が赤い気がする。

これじゃあ、まるで恋をしているようだ。

(.....恋!?)

絶叫しそうになった。

俺が灰原に恋？

なんでだ？

俺は蘭が好きはずだろ？

そんな馬鹿な…。

「あなたやっぱりおかしいわよ。何隠してるの？」

灰原が拳動不審の俺を疑って、その可愛い顔を近づけてくる。

その可愛い顔が近づいてくる。

心臓が飛び出しそうなくらい動く。

その可愛い…

「.....」

時間が止まった。

俺と灰原だけの時間が止まった。

正確には硬直したというのだが。

自分でやって自分で驚いた。

灰原を抱きしめている。

「二人とも何やってるんですか！」

光彦の声で我に返る。

下校中の帰り道。

ランドセルの小学生が小学生を抱きしめていた。

皆にどういふことだと責められても、自分でもよく解らない。

心なしか顔を赤くした灰原と目線があい、更に心臓が早鐘を打つのが解る。

逃げるように家に帰ると蘭がいた。

(俺の好きなのは蘭…だよな?)

「おかえりコナンくん」

笑顔の蘭は可愛い。

とても美人だし、料理は上手いし、優しいし、強いし。

「ら、蘭ねーちゃん」

「ん?」

しゃがみ込む蘭を抱きしめた(身体が小さいので抱きついたが正しい)。

「どうしたのコナンくん?お母さんが恋しくなったのかな?」

蘭にとっては、小さい子供がホームシックにかかったのかと思う程度らしい。

俺にとっては…

「ごめんなさい蘭ねーちゃん」

蘭の元から逃げるように走る。

驚いた。さつきとまるで違う。

心臓も普通に動いてる。

顔も熱くない。

気がつくくと博士の家の前まで来ていた。

無意識にここに足が向いてしまった。

そして、さつき別れたばかりなのに灰原の顔が見たくなる。

呼び鈴を鳴らすと、無表情の彼女がドアを開けてくれた。

「なんの用事？」

腕を組んで睨むように俺を見る。

透き通る彼女の声が鈴のように綺麗に響いて耳をくすぐる。

再び沸き上がる感情。

「灰原…」

試しにまた抱きしめた。

(やっぱり…)

心臓が壊れそうなくらい早くなった。

「ちょっと！なんなのよ！！…え？」

俺を突き飛ばした灰原の顔は赤い。
しかし、それより更に顔を赤くした俺に灰原は驚いたのだろう。
二人無言で見つめ合う。

真実はいつも一つ。

今日は自分の気持ちを確認、理解した。
時間かかり過ぎだけど…。

「俺は灰原が好きだ」

小さい恋のメロディー（後書き）

コナンが自覚するだけの話でした。
なーんの物語もなかった…。

七夕（前書き）

新志です。七夕記念。

七夕

七夕だからと商店街には大きな笹が飾られていた。近くの幼稚園児達がお願い事を書いた短冊が揺れている。全く日本人は毎月毎月イベントで忙しい。

「ちよつと買い過ぎじゃねーか？」

大きな荷物を両手に新一が、隣の志保に話しかける。笹をぼんやり見ていた志保が、ああと気づいて自分の荷物を持ち直す。

「日用品のストック買い溜めだから問題ないわよ」

博士が七夕記念で割引券を買った。

商店街だけで使えるお得割引券。

ちよつと男手が欲しかったので、新一に買い物に付き合っただけで買った。風がさらさらと笹と飾りと短冊を揺らす。

「彦星と織り姫って一年に一度しか会えないんですってね」

今日のお礼に誘った夕食の後、コーヒを飲みながらのリビングで志保は言った。

立ち上がり窓を開けると、梅雨の雲の隙間に小さく星が見えた。生暖かい夜風が、新一のほうまで流れてくる。

「今年の二人は会えたのかしら？」

志保にしては随分珍しいことを言うものである。
こんなお伽話のようなことを信じるタイプではないのに。
この間、歩美と遊んであげた時に何か話したのだろうか。
新一は立ち上がり、窓に立つ志保の横に行く。
見上げる上空は風が強いのか、夜目にも雲が早く流れていくのが見える。

「もし、私達が一年に一度しか会えなかったらどうする？」

空を見上げながら、志保は言う。

何処か遠くに行こうと考えているのだろうか。
FBIとか…。

「一年に一度は有りえねーな」

「え？」

志保は長い睫毛をパサパサさせて新一を見る。
自信を持った笑顔で志保を見る新一。

「お前が何処に行っても捜し出して何度も会いに行くから」

「……」

「あー。それよか連れて帰ってくるかな？」

平然とそんなことを言う新一に、志保は半目で睨んだ。
嬉しくない訳がない。

顔がほんのり紅くなるのが解った。

(うちの織り姫と彦星は、これからも毎日仲良く一緒にいるようじやな…)

良かった良かったと、細く開いたドアの隙間を静かに閉めて、地下室に降りていく博士だった。

七夕（後書き）

コ哀は書いてあったので、新一志保にしました。
現実の星は厚い雲に覆われて見えません。残念です。

言葉のない空間（前書き）

新志ですがかなりアダルトです。ご注意ください。

言葉のない空間

目が醒めると、身体を包むように工藤くんの腕が絡み付いている。毎回ここが厄介で、シャワーを浴びる為に上手くその腕を外さなくてはいけない。

ゆっくりとけだるい身体を動かして離れる。

起き上がるうとして、腕を掴まれた。

「行くなよ」

低く静かに声を出す工藤くんは縋るように私を見た。そして両腕をベッドに押し付ける。

「まだ、足りないのね」

私がそう言うのと覆いかぶさるように、身体を合わせ始めた。身体を繋げるだけの、心のない行為。

あの日。工藤くんに無理矢理襲われてから、このほぼ言葉のない行為は続いている。

きっかけは連日の研究が終わり徹夜帰りの朝だった。

博士は出張中で、私はシャワーを浴びていざゆっくり睡眠を取ろうとしていた時だった。

工藤くんが家に訪れた。

「工藤くん…？こんな朝早くにどうしたの？」

何日かぶりに見た彼は、かなり思い詰めたように憔悴していた。

とりあえず家に通して、ソファアに座らせようと肩に手をやる。
すると、私を見つめて驚愕したような絶望したような青ざめた顔を
した。
怒りで震えている。

「工藤くん…？」

突然身体をソファアに押し付けられて、自由を奪われた。
そのまま唇を塞がれる。

息がつけないう程口の中を荒らされ、痛いくらい首筋や肩を吸われた。

「やめて！工藤くんどうしたの？」

抵抗しても力強い彼はびくともしなかった。

着ていたパジャマは簡単に剥がされ、更に工藤くんの動きは激しく
なる。

一体彼に何があったのか。

とても苦しそうだった。

工藤くんが泣いているように思えた。

…だから、力を抜いた。

そのまま身を任せた。

（ずっと心の中にいた人。

好きになってはいけない人。

気持ちに蓋をしながら接していた人…）

少しずつ身体は反応し始め、勢いよく入ってくる工藤くんを拒むこ
ともなく受け入れた。

自然に涙が溢れ目をつむった。

工藤くんが私の名前を呼ぶ。

憎しみを籠めるような彼の激情を全て受け入れるしかなかった。
憎しみ……。彼は私を憎んでいるのか。
最初の山が来て彼は私の中で達した。

息を切らせて工藤くんの顔を見る。
彼の目は暗く濁り、まだ変わらない。

「もっと目茶苦茶にしているのよ」

再び彼は動き出す。

私の息の根を止めるように激しく口を塞いだ。
部屋のベッドに移動し、何度も何度も行為は続けられ、時間もどのくらい経ったのか、何もかも解らなくなっていた。
最後の時には私は意識を手放した。

意識を取り戻した時、悪い夢だと思った。

でも横には工藤くんが死んだように眠っている。
陽射しが弱くなっていて太陽の位置が低い。夕方近くになっていた。
ふらつく足に力をこめてベッドから立ち上がる。

身体が重い。痛い。

痛いのは心のほうだった。

お風呂場でシャワーを一气に出す。

私は声を出して泣いた。

部屋に戻ってもまだ彼は寝ていた。

今日はこれ以上顔を合わせたくない。

鍵とメモを置いて家を出る。

今日は行かなくてもいい研究所へ行く事にした。

数式と採取した植物や虫を相手にしていれば何も考えずに済むだろう。

休みのはずの私を見て、研究所の先輩は驚いた。

「あら？…うふふ。若いつていいわね」

しばらくして彼女は私を見て笑った。

鏡を見て身体が熱くなる。

首筋から肩にかけて、赤い跡がいくつも残っている。

そこが熱を持ったように赤い。

また胸が張り裂けそうになって涙が出た。

彼はもう帰っただろうか。数時間して家に戻る。

帰る途中に、信じられない光景に出会う。

蘭さんが男の人と腕を組んでいた。

見間違いかと思って後をつける。だが残念ながら本人だった。

蘭さんはとても幸せそうだ。

ああ…だから彼は…。

(私のせい…)

全ては私のせいだ。

家には誰もいなく暗い。スペアの鍵をあけて家に入り部屋に行く。

乱れたベッドが生々しく十数時間前の出来事を思いださせる。首筋が熱い。

リビングのソファー周りも片付けなくてはいけない。

だけど、身体が鉛のようで中々動けない。

次の日。仕事を休んでしまった。

昨日の事で身体も心も一気に疲労していた。

今日は静かに休もうとした。しかし、午後過ぎになって工藤くんがやってきた。

学校を早退したのか、制服のまま。

「鍵を返しに来てくれたの？」

平静を装いながら、鍵を返して貰おうと手を出す。

工藤くんは目を合わせないまま家のなかに入っていく。

今日はこのまま玄関で帰って欲しかった。

「昨日はゴメン……」

頭を下げる彼は、昨日とは違う。

「何もなかったのよ。私は忘れたわ。あなたも忘れなさい」

努めて平静にそう言った。

胸が切られたように痛い。

私のせいで、工藤くんにあんなことをさせてしまった。

「私達には昨日何もなかった」

何がいけなかったのだろうか？

その言葉で、また彼を怒らせてしまった。

ベッドに連れていかれ、全てを奪うように、平伏すように抱いてきた。

私のせいで、蘭さんと一緒になれなかった。

私の薬のせいで、彼等の間に空白の時間が生まれた。

私のせい…。

工藤くんは私を憎んでいるのだ。

何を言っても彼を逆上させてしまっただろう。

私は何も言わずに、ただ彼を受け止める。

工藤くんのしたいようにさせる。

工藤くんが私の名前を呼ぶ。

それは激しい息遣いとともに、空中に虚しく消えていく。

ほぼ毎日ほとんど会話のないままその行為は始まり、会話のないまま終わっていく。

博士が家にいる時は、私が工藤くんの家に行くようになった。

多分気づいているだろうが、何も言わない。

汗が体温を下げて呼吸が落ち着いてくる。

しばらく抱き合ったままだったが、工藤くんの携帯が鳴って離れる。

「はい。…はい。すみませんが警部、今日は用事があったて行けません」

携帯を切って再び私に抱きついてきた。

「今の電話…事件じゃないの？」

「ああ」

「行かなくていいの？」

「いいんだ。行かない」

驚いた。嘘みたいだ。

工藤くんは別人のように事件に興味が無くなってしまったのか。

「…………ごめんなさい」

何を言っても無駄だろうが。自然と言葉が出ていた。

「あなたをこんな風にしてしまったのは私のせいね」

横になった顔に涙が流れつたう。

工藤くんは私を驚いたように凝視していた。

「全ては私のせい」

「志保…」

「蘭さんはあなたにとってそんなに大事だったのね」

「え？」

「私があなたと蘭さんを引き裂いてしまった」

「……………」

「本当に酷いことをしてしまった。…どう償っていいか解らないの」

横を向くと、工藤くんは起き上がって私に眉間を寄せた顔を向ける。

「なんで蘭が出てくるんだ？」

「は？」

不可解な顔の工藤くと不可解な顔の私が見つめ合う。

「蘭は関係ないだろ」

「何言つて…蘭さんは関係そのものでしょ？」

「はああ？」

「…ちよつと待って！あなたが荒れてるのって蘭さんに恋人が出来たからじゃないの？」

思わず起き上がって、胸をさらけ出してしまつ。
慌ててかけシーツで隠す。

「荒れてるって…オメーを抱いたことか？」

「……ええ」

工藤くんの眉間のシワが更に深くなる。

「蘭は全然関係ねーよ。オメーのせいだろ！」

「私？」

「オメーが毎日朝帰りするから…他の男と…！」

言いくそくに顔を背ける。

朝帰り？

「徹夜で研究してた事かしら？」

「研…究？」

「ええそうよ」

「毎日男に送って貰ってたじゃねーか」

「夜行性の虫と植物を採取しに、連日夜に山へ行ってたわ。朝になって社長と主任が送ってくれるの」

「嘘だ。キスマークはなんだよ！」

「キスマーク？」

それをつけてるのは工藤くんじゃないか。

「何を言ってるか解らないけど、私あなた以外とこんな関係してる人いないから付くはずないわよ」

「はっ…オメー嘘つきだな。今日だっついてたぞ」

工藤くんは歪んだ笑顔で私引き寄せ、耳の後ろにある赤い跡を指した。

そこはさっき執拗に工藤くんが吸っていたところ。

「あなたが付けたんじゃない」

「違う！俺は消してただけだ。他の男がつけた跡をな！」

そういえばと…この部分に思いあたる。

「私、研究してるって言ったわよね」

「・・・？ああ」

「ある植物につく外来種のダニは大きくて素早い動きをするの。人間の皮膚につくと赤くなるわ。」

もしかして…工藤くんそれを勘違いして。

「毒性はないけれど、なるべく刺されないよう気をつけてはいるけど、何度も刺されているわ。今日も刺されたの…ここに」

「…ダニ？俺ダニに嫉妬してたのか？」

その顔が面白くて悪いが思わずふきだしてしまう。

見た目は変わらないから、区別はつきにくいと説明はしたが、頭を抱えてしまう。

ため息をついて工藤くんが横目で私を見る。

「…本当に男、いねーの？」

「誰も。そんな風に思う人なんて一人もない」

「…なんで黙って俺に抱かれるんだ？」

「……………」

「蘭への罪悪感なら、見当違いもいいところだぞ」

「え?」

「蘭とはとくに話ついてる。今の彼氏だって俺が相談にのってやってくつついたもんだし」

嘘…。

あれ?軽く受け流していだが話が噛み合わない。さつきから違和感が付き纏う。

「あなた…どうして私を…?蘭さん関係ないのなら…え?あれ?」

話の筋がふわふわと変わっていくようで混乱する。

工藤くんがうんざりして薄い目で睨む。

「だから、さつき言っただろ。蘭じゃねえオメーが他の男としてると思ったから…嫉妬したんだよ」

「…どうして…?」

「まだ解んねーの?オメーが好きだからに決まってるじゃん」

「…あなたは私を憎んでいるんじゃない?」

「憎む?…ずっとそんな風に思ってたのか?」

工藤くんがまたムツとして私を押し倒す。

「俺をずっとそんな風に見ていたのか?ずっと憎まれてると思って

る相手に抱かれていたのか？
そんな男にオメーは感じてたのかよ！」

「・・・私は・・・」

さつきから順序立てない話で混乱している。

言葉が出てこない分、瞳に涙の膜が張る。

蘭さんは関係なくて、研究の朝帰りが工藤くんを勘違いさせて・・・。
私を抱くのは工藤くんが私を好きだから・・・？

私は、工藤くんに憎まれてると思って黙って抵抗しなかった。

でも・・・それだけじゃない。

ふと、私を抑える力が緩む。

「悪い…。俺がそんなこと言える立場じゃねーよな。無理矢理…オメーを力付くで奪ったんだから」

あー！と髪の毛を掻きむしる。

「お前が毎夜誰かに抱かれているかと思っただらいてもたってもいらねなかった。

おかしくなってたんだよな。

無理矢理身体繫げればなんとかなると…いいや。それすら考えてなかったかもしれない。

宮野志保を自分のものになりたい、それだけだった」

工藤くんは、なんでこんなことになっちまったのだらうと後悔している。

私は起き上がり彼の背中に声をかける。

「後悔しないで。私はあなただから抱かれたのよ」

「…え？」

「他の人に同じ事されたら、舌を噛み切るくらい相手を殺してしま
うくらい抵抗するでしょうね」

そつだ。そんな事を考えたらゾクツとする。

「あなただから抵抗しなかった。工藤くんだから嫌じゃなかった…
感じたの」

「それつて…」

工藤くんが私を見る。

「私はずっとあなたが好きだった」

一生言わずにしようとしていた言葉。

まさか言つ日がくるなんて思わなかった。

「あなたが思うより、ずっと前からあなたが好きだったの」

工藤くんが息を飲む。

信じられないと言つ顔で私を見る。

やっぱり鈍感すぎて気づいていなかったのね。

小さくなっていた時から、私はあなただけを見ていたのに。

「本当か…？」

「嘘偽りない真実よ」

真っすぐ彼を見る。彼も真剣な顔で私を見た。

「…俺たち…何やってんだろうな…」

「ええ…馬鹿みたい」

二人吹き出して笑う。脱力感が襲ってベッドに横になる。

同じ気持ちだったのに。

両想いだったのに、言葉が足りないだけでうたぐり傷つけあった。

心はすぐそこにあっただのに、見ようとしなかった。

「志保…」

あの日からいつの間にか苗字から名前に呼び方が変わった。

顔を向けると、工藤くんがこっちを見ている。

今更、胸が高鳴る。

「愛してる」

言葉を噛み締めるように、そして愛しいものを見つめる瞳でそう言った。

「ずっと言いたかった。いつも志保を抱きながら心で思ってたんだ」

アイシテル。たったそれだけの言葉ががこんなに胸を暖かくさせるなんて。

何度目かの涙が溢れる。

でもこれは嬉しいから出る涙。
さっきまでとは全然違う。

「私も愛してる」

涙と一緒に自然と出てきた。

工藤くんの顔が近づいて私は目を閉じる。
まるでファーストキスをするように、ドキドキしながら不器用に唇を合わせた。

~~~~~

おまけ

今度は言葉も心ない行為ではなく、身も心も愛し合うことが出来る。  
ふとこんなに幸せでいいのかしらと不安になる。  
でも。

工藤くんが私を抱きながら何度も愛してると言っているので、その幸せに溺れて不安も吹き飛んでしまった。

「行くなよ」

呼吸も整い心地いい疲労を感じながらベッドから出ようとして、工藤くんが腕を引っ張る。

寝ながら後ろから私を抱き、拗ねたように顔をのぞかせる。

「初めての時もそうだった。オメーいつも俺を置いて一人にする」

「シャワー浴びに行くだけよ」

「それでも俺は淋しかったんだよ。孤独で。こつちでくつちいて  
いたいの」

子供みたいな工藤くんにビツクリする。

そういえば、いつも逃げるようにベッドから出ていた。

言葉もなく心が孤独だったのに、一人取り残される彼の気持ちが伝  
わる。

「ごめんなさい」

身体の向きを変え、工藤くんを抱きしめキスをした。

もう逃げなくていい。

ゆっくりゆっくり愛を育んでいこう。

## 言葉のない空間（後書き）

投稿するか悩んでた作品。

直接的描写はだいぶ避けたつもりですが大丈夫でしたでしょうか？  
その分解りづらくなっているかもしれません。

（カットしたところ入れたらかなり長くなっていただであろう…）  
またもや架空の生物を勝手に作ってしまいました。現実にはいません。

（カテゴリー）恥ずかしい話を読んでいただきありがとうございます！  
しました！

## 秘密の花園（前書き）

「哀です。エロい感じの題名ですが（違う？）そんな要素は全くありません。」



## 秘密の花園

遠足で小高い山を歩いている。

クラスごとにまとまりゆっくり移動していた。

普段は都会に住んでいるので、沢山の緑は新鮮で癒される。

「あー、とりさんだー！」

「あれは四十雀ですね」

子供にしては博学な光彦が説明するが、歩美は可愛いねと返すだけで通じていない。

木の枝で鳴いてる小さな鳥は、パタパタと高く羽ばたいて飛んで行った。

二人の後ろでは、お昼まだかなーと元太が腹をさする。

更に後ろにいたコナンと哀は子供達を、親のように優しく見守っている。

「たまにはこういうのもいいわね」

哀は帽子を少しあげて緑の群集を見上げる。

濃い緑はいつもパソコンと睨めっこしている、疲労した哀の目に優しい気がする。

哀を少し眩しそうに見てコナンはフツと笑う。

「さっきまで面倒だってぼやいてたくせに」

「あら、そうだったかしら？」

哀はしらばっくれて、遠くの山頂を見上げる。  
青い空に白く高い積乱雲が、山にひっかかるように伸びている。

「空気が美味しく感じるわ」

「そうだな」

いつもより表情が明るい哀を見て、コナンは嬉しくなる。  
コナンと哀は並んで子供達のところへ追い付く。  
もうすぐ小さい山の頂上だ。

お昼を食べてからゆったり景色を見ていると、遠くでコナンが呼んでいる。

「どうしたの？」

「いいからちょっと来て」

コナンに強引に手を引かれて、哀は皆がいる場所から離れた。

「ここ危ないから気をつけて」

小さい小川を渡る。

足を取られてこけそうになり、コナンが支えてくれた。  
顔が近づいて、哀の胸が少しざわついた。

「大丈夫か？」

「ええ。ありがとう」

一体コナンは何処までいくつもりだろう？

壁のような高いところを、木を登ってその枝から飛び移る。

上手く手を引いてもらい木に登り、ジャンプをしたらコナンが受け止めてくれた。

どうでもいいが、さっきからコナンと異様に触れ合っている感じがして哀は落ち着かなかった。

ジャンプしたときコナンの胸に飛び込んで、今体温を感じている。目をゆっくり開く。

「え？わ…」

哀は驚いた。周りは一面の花畑。

色とりどりの花が鮮やかに広がっている。

そのなかにある山花はところ所控えめに存在感を出していた。

「凄い…」

上手くいったとコナンは驚く哀を見てにんまり。

「ここ、俺の秘密の場所」

新一が小学生の時、同じように遠足で来て見つけたのだ。

あの時は数人の男子と後を追いかけて来た蘭と一緒に見つけた。

「オメーに見せたくてさ」

「え？」

どうして私に？と哀は聞けなかった。

またもや心臓がドキドキして五月蠅かったからだ。変わりに

「綺麗ね」

と、一言。

「だろ？」

得意そうにコナンは胸を張った。

山の中に夢のように綺麗な花畑。

綺麗だけれど…だからなんなのだ？

どうしてコナンは秘密の場所に哀だけ連れて来たのだろう？

花畑に感動しながらも隣のコナンが気になってしまい、哀は甘酸っぱい気持ちに包まれる。

(まさか、ね…)

頭に浮かんだ淡い期待を打ち消して哀は花を摘んだ。

頂上に戻ると、とつくに集合時間を過ぎていて騒ぎになっていた。

コナンと哀は担任にたっぷり怒られる。

帰りのバスの中、哀は隣に座るコナンをじっと見る。

視線を感じドキリとしたコナンは慌てる。

「な、なんだよ？」

「ありがとう。お花とっても綺麗だったわ」

「お、おう。また一緒に行こうぜ」

子供の足なので少し時間がかかったが、あの花畑は山頂からそんなに離れていないらしい。  
元の姿に戻ったら、哀…志保の手を引いて一緒に行きたいとコナンは考えていた。

「そうね…」

秘密の花畑の花をリュックから取り出す。

また…そんな日が来るのだろうか。

目を伏せた哀にコナンが気づく。

「灰原…」

コナンの手が哀の手に重なる。

そして小指を絡ませる。

「絶対約束な！」

「………うん」

やっと哀が笑う。

ホッとしたコナンの後ろに三つの顔が現れた。

「なにが約束なのー？」

「二人して何してるんですか？」

「お前らなんか怪しいぞ」

コナンと哀が固まる。

「さっきもお二人で何処へ行ってたんですか？」

「哀ちゃんそのお花何？すごいきれい！」

哀が歩美に花を見せる。

もちろん花畑のことは一言も言わなかった。

三人はコナンと哀を疑って真相を聞こうとしたが、後ろで男子の喧嘩が始まりそちらに気をとられて行ってしまった。

コナンと哀はため息をついて顔を見合わせ笑う。

(あらあら…)

喧嘩を止めようと後ろに向かった担任がコナンと哀を見て頬を染める。

ニヤニヤ笑い通り過ぎていった。

今日一日なんとなく甘い空気が二人の間に流れていたのが、本人達は気づいていなかった。

山は遙か後ろに小さくなっていた。

## 秘密の花園（後書き）

解りづらいでしょうが、コナンも哀もお互い微妙な距離って感じですね。

先生が気づいたように三者から見ればバレバレなんです。

コ哀は新志と違って、中々突っ込んだ話にならなくて難しいです。

ふしぎな関係（前書き）

新志ですが高木が主人公。



## ふしぎな関係

「あなたはよっぽど事件に好かれているようね。一度お祓いでもして貰えば？」

「毎回刺激があつて楽しいだろ、な。相棒」

「何言つてるのよ。お断りよ」

そう軽口を言いあいながら二人は事件現場を調べ始めた。

(…あれで、付き合つてないんだよな…)

ぽかんと二人を見て高木は思う。  
数ヶ月の空白を破り、再び高校生探偵の工藤新一が現れた時は驚いた。

相変わらずの洞察力推理力だったが、以前のような脳天気な目立ちたがりではなかったからだ。

生来の派手さで実質は目立ってしまったのだが、自身の推理を自慢げにマスコミに発表しなくなっていた。

何処か大人びて…自分よりかなり大人に思える。

そして、更に驚いたのが助手（相棒か？）を連れてきたことだった。  
ハーフの美人な女性。

透き通るほど白い肌に、赤みがかつた茶髪が映える。

切れ長の瞳は何処か影があり、冷たく青い宝石みたいだ。

薄いピンク色の唇は果物のようで、そこから紡ぎ出す声は鈴のようにかわいらしい。（ただ言葉は辛辣で要注意だ）

スラッとした手足にスタイルのいい身体。

頭が良く、特に薬に関してはかなりの知識があるようだ。一体どこから見つけてきたのかと凝視していたら

「高木くん……」

と佐藤につねられた。

そうそう。

驚いたことの一つに、工藤くんには毛利蘭さんというちゃんとした彼女がいたのではなかったのか？と云うことがある。それまでは公私ともに公認みたいなものだったらしいし、毛利蘭さんも工藤くんを待ち続けていた。

確かにこんな美人で知的な彼女が側にいれば仕方ない事なのかもしれないが……。

結局工藤くんと毛利さんは幼なじみでそれ以上でも以下でもないらしい。

「宮野。これ見て」

以前の彼は一人で事件を抱えていた。

知識があり、常に冷静でいられる彼女を信頼しているのか、工藤くんは時折彼女を呼ぶ。

宮野さんは口では文句をいいながらも事件捜査中は、毎回工藤くんを上手くサポートしたり、違う目線から事件の糸口を見つけたりしている。

たまに推理に夢中になりすぎて、無茶な事をする工藤くんをたしなめたりとストッパーな役割も担っている。

まあほとんどが工藤くんのやりたいようにさせて信頼して、頑張りなさいと言う展開なのだが。

そういえば、二人は雰囲気似ている。

何か後ろにとてつもないものを抱えてるような、二人にしか解らない空気がある。

(でも、付き合っていないんだよなあ…)

並ぶ二人はとてもお似合いで、俳優かなにかのようだ。お互いを見つめあう時は誰もその間には入れない。

(まあ、工藤くんが確実に宮野さんが好きなのはわかるんだけど…)

事件が終わった後や、普段の時に見せる新一の目線には赤面してしまふことがある。

志保を愛おしむように見ているからだ。

この間の警察関係者パーティーの時もそうだった。

いつもより着飾る志保は更に美しく、周りは褒め讃えた。

しかし目立つことの嫌いな彼女は困って俯いてばかりだった。

変わりに何故か新一が褒められ照れていた。

誇らしげに志保の横に立ち、眩しそうに彼女を見ている。

「パーティーに無理矢理連れてきたあなたのせいで…」

と志保に睨まれ文句を言われても、嬉しそうだった。

「大体この派手なドレスだってあなたのお母さんが強引に着せるから！あなたたち一家の近くにいと面倒なことばかりだわ」

小さな中庭で酔い醒ましに涼んでいたら、志保の怒りの声がした。

こうやって見ると甘い雰囲気は微塵もなく、志保が新一を好きなようには到底見えない。

付き合っていないのはやっぱりそういうことなんだろうなーと心で思ってたら口に出していたみたいだ。

「高木くんは女心が解ってないのよ」

佐藤がシャンパン片手に高木に言う。

「女心？ですか？」

高木には解らない。

神経質そうに仏頂面する志保の何処を見れば女心が解るのか。

「むしろ私から見れば、志保ちゃんのほうが工藤くんを好きで仕方ないって見えるけどね」

「えー。そうですかあ？」

「…あーあ、私苦労するわね」

大きくため息をつきシャンパンを一気に飲む佐藤だった。

「…じ、高木刑事！」

ぼんやりとしていたので、気がつくくと新一と志保が高木を心配そうに見ていた。

「どうしたんですか？」

「あ。いや…。ハハハ」

高木が笑ってごまかすと、二人に半目で睨まれる。

そのあと間もなく事件は無事解決し、本庁へ戻ることになった。

「君達のおかげでまた無事に事件解決できたよ。ありがとう」

「どういたしまして」

「高木刑事。今日はゆっくり睡眠時間とりなさいね」

どうやらぼーっとしてたのを勘違いしたようである。

新一は腹が減ったから何か食いに行こうと、志保の腕を引っ張って行った。

抗議しながらも、少し嬉しそうな志保の顔が見えた。

佐藤の言うことはほんの少し解ったような気がするが。

（あれでなんで付き合っていないんだろう？）

高木の疑問は疑問のままである。

## ふしぎな関係（後書き）

なんで付き合っていないのかは私にも解りません。

## 空色春時代（一）（前書き）

コ哀です。中学二年生くらいの探偵団の話。アダルト部分があるので注意して下さい。

## 空色春時代（一）

放課後の校庭では生徒たちが賑やかに部活をしている。

グラウンドのサッカー部では、パスを貰ったコナンが相手チーム数人を上手くかわし、ゴールを決めたところだった。

得意げに胸を反らし、隅にいるマネージャーのほうを向く。

「コナンくん凄い！」

「はい。お上手お上手」

素直に絶賛する歩美と面倒臭そうに手を叩く哀は正反対である。

中学生になった探偵団5人は同じ学校へ進んだ。

中学入学してすぐの時、部活は帰宅部と決めていた哀は、突然歩美にサッカー部のマネージャーにさせられた。

「お願い！哀ちゃん」

既に入部届けは出されて手遅れなのだが、歩美は哀にお願いする。明らかに順番が逆だ。

「コナン君がサッカー部に入るから、歩美もマネージャーとして入部したいの！」

「そうすればいいじゃない」

「だからー！哀ちゃんも一緒に入部して？」

「何故私まで……」



歩美の頬が染まる。

「だってコナンくんモテモテなんだもん。違う女の子がマネージャー狙って近づいて来るかもしれないし。」

ね！哀ちゃんが一緒なら心強いのだ。お願い！！」

哀はため息をついて承諾せざる得ない状況を受け入れた。

ずっと一緒の可愛い親友の頼みは断りづらい。

尚且つ、小さい頃から歩美がコナンを好きだと知っていたからだ。

飛び切り可愛い女子二人もマネージャーになる事により、サッカー部員は勢いを増し、男の入部も増えたのだった。

「お疲れ様」

哀達は部員達にタオルを渡す。

一度なったからには真面目にマネージャーとしての仕事をしている

哀は、顧問、キャプテンからも信用されている。

「はいコナンくん」

「サンキュー歩美」

仲良く笑って話す二人を横目に、哀はキャプテンである部長に今度の試合について打ち合わせを始めた。

「おーい！」

遠くで元太が呼ぶ。

益々その体格を大きくさせて柔道着を来ている。  
その隣には制服を着た光彦もいる。

「部活終わったんだろ？一緒に帰ろうぜ」

「中学二年生なのに一緒に帰ろうか。君たちは仲いいね」

部長が羨ましそうに言う。

「腐れ縁ですから」

「俺も君と腐れ縁になってたら、チャンスはあったのかな」

「…さあ」

淡々と用事を済ませて、哀は帰る用意をした。

先日部長をフツたばかりで、二人で話すのには居心地が悪い。

サッカー部の何人かもそうだが、哀はその容姿の為に告白する輩が後を絶たないのである。

彼氏でもいればその数は減るだろうが、哀はフリーなので期待する生徒が多い。

告白したらはつきり断るので、未だに目的を達成した覇者はいない。

「お待たせ」

「キャプテンなんだって？」

コナンが哀に聞いてくる。

「次の試合。相手チームの傾向と対策をまとめてきてって」

「…そうか。オメーも大変だな」

「灰原さん凄いですね」

「哀ちゃん、的確に相手を分析できるからキャプテンに一任されるのよね」

「的確な訳じゃないわ。ただのデータの積み重ねよ」

「灰原、柔道部に来てくれよー」

「アハハ。元太くんまた言ってる」

「だってよー。灰原が分析してくれたら強くなれるかもしんねーじゃん。」

次の団体戦勝ちたいんだよ」

「考えておくわ」

え？と皆の声が重なる。

コナンが哀の袖を引っ張る。

「お、おい。灰原サッカー部辞めちまうのか？」

「考えると言っただけでしょ」

「灰原さんも大変ですねー。」

「ええ。だから柔道部のデータを集めるのは円谷くんをお願いしよ

うかしら」

「え？僕がですか？」

「そついうことが…」

「よくワカンネーけど、サンキュー灰原」

「え？どういうこと？哀ちゃん」

「団体戦だけ分析してくれるんだとよ。優しい灰原さんは」

「江戸川くん。何よその言い方」

口論しそうになる哀とコナンを察知して歩美と光彦が間に入り、別の話題に変わっていく。

長年の経験である。

三人と交差点で別れ、コナンと哀は家路に帰る。

「灰原寄ってけよ」

コナンがドアを開けて待っている。

無表情のまま哀はコナンの元へ歩く。

数年前から工藤家の屋敷にコナンは一人暮らしをしている。

表向きは親戚のおじさんおばさんの工藤夫妻と住んでいるとなっているのだが、実際は海外にいるのでほとんどコナンは一人暮らし状態だ。

ご飯を食べに隣に住む博士と哀の家へしょっちゅう行き来している。

玄関のドアが閉まると同時に哀は口を吸われた。

遠慮なく入ってきた温かい舌を自分のと絡めて受け入れる。  
熱い吐息が交わされ水音が響く。  
しばらく続いて唇が離れた。

「汗や埃っぽいからシャワー浴びてからね」

「一緒に入ろうぜ」

「ばか」

風呂場から声が聞こえた後、二人は寝室へ消えていく。

コナンと哀は恋人同士という関係ではない。

ただの「男女の関係」なだけだ。

交わりはこの部屋だけでするのでこの関係は誰も知らない。

幼児化した薬の副作用なのか、成長する過程で性欲が強まってしまった。

1番近くにいるし、事情もよく解っている。

自然とそうになっていた。

そこには恋愛感情はない。

お互い割り切って関係が続けていた。

特に哀は複雑に色んな思いがあるものの、考えないようにしている。  
最近ではそれが普通になってきた。

この関係のきっかけとなった日は、コナンの初恋の人が結婚を決めた日だった。

「なあ、灰原」

「なあに？」

濃厚な時間が過ぎて、ベッドに裸のまま横になってまどろんでいると、コナンが哀に話しかけた。  
俯せになってた哀がけだるそうに頭をあげる。

「トロピカルランドのチケットが手に入ったんだけどさー、一緒にいかね？」

「パス」

「…言うと思った」

「当たり前でしょ。人混み嫌いなんだから」

「だよな。じゃあどうすっかなー」

「…吉田さん誘えば？」

「歩美？なんでだよ」

コナンの鈍感さは相変わらずである。

哀はため息をついて身体を仰向けにし、ふとんをくびまで引き上げた。

それを見ていたコナンは哀に覆いかぶさる。

軽くキスをして、再び哀の身体をまさぐり始めた。

「本当に貰ってもいいんですか？」

「ああ」

次の日コナンは廊下でチケットを光彦に渡した。

「灰原さんでも誘ってみましょうか」

「え？」

コナンが驚いて光彦を凝視する。

「お前、まだ灰原のこと…」

小学校の時に光彦は哀にフラれている。

そのあとは普通に仲間として友達として接してたはずだが…。

光彦が不適に笑う。

昔ならコナンにこんな顔はしなかった。

今更、長年の付き合いで遠慮もないのかもしれない。

「あいつ人混みが嫌いだぞ…」

「でも僕が誘ったら、OKしてくれるかもしれない」

昨日断った哀を思い出す。

まさか哀がOKするとは思えない。

「なーんちゃって。歩美ちゃんを誘うに決まってるじゃないですか  
！」

急ににこやかに笑う光彦に、コナンはずっこけそうになった。

「…冗談キツイぞ光彦」

半目で睨むが、「そうですね？おかしいなあ」と頭をかく光彦は気にしない。

「確かに灰原さんは益々綺麗になりましたね。でも、僕は歩美ちゃんが好きだから」

真剣な顔でコナンを見る光彦は男らしい。

最近身長が伸び成長が著しい光彦はひそかにモテている。頭も良く礼儀正しいので、先生からも信頼が厚い。

次の生徒会長は光彦になるだろう。ただ本人は気づいてないのだが。

「頑張れよ」

コナンは光彦の肩を叩くと、教室へ戻った。机で肘をついた哀と目があう。

「チケット光彦にあげた」

「そう」

興味なさそうなそっけない返事の哀に苦笑いしながら、携帯の着信に気付く。

事件だと目暮が協力を頼んできた。

「灰原！オメーも一緒に来てくれ」

「はあ？また私をサボらせるつもり？」



「毒に関係ある事件なんだ。頼むよ」

「私は誰かさんの便利屋じゃないわ」

抗議する哀の背中を押し、二人分のカバンを手際よく持つコナン。授業が始まる時間が迫っているので生徒達は慌ただしく歩いている。その波を縫うように二人は昇降口に向かう。

「江戸川くん。やっぱり彼女いるんじゃない」

茶髪の派手な上級生が声をかけた。

数日前、告白されてフツた人だとコナンは思い付く。

「吉田って子がそうだと思ってたけど、その美人さんが彼女だったのね」

「私、江戸川くんの彼女じゃありませんけど」

きつぱりとした哀の言葉に、一瞬間があく。

哀は面倒くさそうに先に行くわと去っていった。

「一緒に学校サボって帰ろうとしてるじゃない。何処が付き合っていないのよ!」

「事件なんですよ。先輩。彼女知識が凄いから」

「事件?」

「殺人が起きたらしいので、今から向かうんです」

「彼女は助手か何かなの？」

「ええ。立派な相棒です」

コナンはニッコリ笑い去ろうとする。

「ねえ、本当にそれだけ？」

背中越しにかけられた言葉にコナンは一瞬無言になる。

「…今のところは」

再び遠くなっていくコナンの背中を見て、先輩は呟く。

「先は解らないってことか。少なくとも江戸川くんの中では…」

校門で腕を組んで哀が待っていた。

「付き合う付き合い合わないって中学生は面倒臭いわね」

ため息をついて、長い睫毛をしばたかせる哀。

「そういう年頃なんだろ」

コナンは哀の嫌そうな顔に笑う。

二人は現場に向かって走り出した。

空の水色は淡くて、爽やかに中学生二人を見下ろしている。

空色春時代（一）（後書き）

探偵団それぞれの背景で話が終わってしまった。付き合っていないのに…パターンが多くてすみません。

ギリツギリ二人の気持ちが見え隠れするようにしたつもりですが、伝わりましたでしょうか？そのギリギリがメインです（なのに大人の関係で…）

探偵団たちの友達と恋心が交錯する微妙な話でした。

## 幸せの情景（前書き）

新志です。初の新婚設定。甘すぎな話かも。

## 幸せの情景

「みやの…じゃなかった。く、ど、う、し、ほ…っと」

書類にサインをして、志保はため息をついた。

まだこの名前に慣れない。

先月、宮野志保は工藤新一と学生結婚し、工藤志保となった。

だが、違和感と照れが馴染めずに志保を悩ませていた。

未だに「工藤くん」と自分の夫を呼んでいる。

大阪の友達や大学の友達におかしいと何度も注意されているのだが、直る気配は見えない。

志保の性格を知り尽くしている新一は、何も言わず笑って見守っていた。

「新一さん。新一くん。…新一」

口に出してもピンとこないし、顔が赤くなるだけだ。

新一という言い方は、かつて彼が好きだった幼なじみを思い起こさせる。

「工藤さん、工藤志保さん」

呼ばれて志保は立ち上がった。

新居は特別に新しくなく、工藤の家だ。

相変わらず工藤の両親は世界を飛び回っている。

娘が出来たと喜ぶ姑は、新婚の二人に気を回さずしばらく二人の邪魔をするように生活していった。

小説家の夫に引きずられるように去って行った時、新一は心から喜んだ。

「お帰りなさい」

エプロン姿の志保を見て新一の顔が緩む。

本当に結婚して良かったと幸せを噛み締める。

勢いでしたプロポーズだったが大成功だ。

結婚してれば志保に悪い虫も付かないし、志保は自分のものだ。

「ご飯出来てるけど」

「食べる。腹ぺこなんだ」

「その前に」

「？」

志保はリビングのソファに座った。

新一も横に座る。

「二ヶ月ですって」

お腹を抑える志保に、新一の目が段々大きくなる。

「赤ちゃんが出来たの」

「やったあああ志保！」

新一が嬉しそうに志保をギュッと抱きしめた。

「工藤くん…いいの？産んでいいの？」

「何言ってるんだよ？あたりめーじゃん」

「私達、まだ学生なのよ」

「そんなもん、なんかなるよ。いやなんとかしてみせる！」

その自信は何処からくるのだろうか？

お金持ちのお坊ちゃまだから脳天気なのだろうか？

呆れる志保の頬に、新一はキスをする。

そしてため息をついたその唇に甘い甘い口づけをするのだった。

「志保愛してるよ」

「私もよ。く…しんい…」

志保は考える。

まだまだ名前では呼べそうもない。

彼女が必死に自分に近づこうと悩んでいる。

そんな志保が可愛くて愛おしくて新一はキスの嵐を降らせる。

一生離さない。

一生大事に守る。

そう想いを込めながら。

## 幸せの情景（後書き）

甘すぎました。どうぞ吐いてください。

志保が新一と呼ぶ姿が想像出来なくて、こんな話を作りました。



## 七ふしぎ(前書き)

コ哀です。途中出てくるものは持論だったり、信憑性が薄かったり、絶対ではないので軽く流して下さい。

## 七ふしぎ

その雨の日は学校中で子供達がざわざわしていた。コナン達一年のクラスも、もちろん例外ではない。探偵団三人は集まって話こんでいる。

「隣のクラスの子が見たらしいですよ」

「俺も聞いた。音楽室だろ？」

「違いますよ。理科室です」

「歩美が聞いたのは家庭科室だよ」

怯えたように歩美は自分の腕を抱いた。

男二人も青ざめ不安そうにお互いの顔を見る。

「ねー、南校舎に大きな顔が見えるって！」

クラスの一人が駆け込んできて、三人も他の生徒と教室から出ていった。

「顔って…ただの雨染みだろ…」

コナンは肘をつきながら呆れた顔で一部始終を見ていた。その隣では、我関せずと哀が本を読んでいる。

「全く…。子供ってお化けとか幽霊とか好きだよな」

「あなたは死体とか殺人のほうがお好みよね」

本から目を離さず哀は憎まれ口を叩く。

間違っではないのだが…。

ジロツとコナンは哀を睨んだ。

「ニヤロ…しかし怖い怖い言いながら興味津々だよな。あいつら」

「お化け幽霊って人間の不安や恐怖から生まれたものでしょ。

電灯がなかった頃の暗闇に対しての不安や死などの未知への恐怖。

子供は大人に比べて未熟な知識と感受性が強いから、お化け幽霊に敏感かもしれないわね」

ほー。とコナンは哀を見て感心する。

自分は子供の時からそういう類いより、推理ものに夢中だったのでよくわからなかった。

哀も昔は怯えながら、幽霊お化けに興味津々だったのだろうか。

(いや。「非科学的な事は興味ないの」ってツンとする姿しか想像出来ない…)

「でも…なんで七不思議なのかしらね」

「そつえばそうだな。どの学校にもあるよな」

「ラッキーセブン…七が良い数字って西洋の考えなのかしらね」

ああ、それはな…とコナンが得意顔で説明する。

「1885年9月30日のシカゴ・ホワイトストッキングス(現シ

カゴ・カブス)の優勝がかかった試合で、7回にホワイトストッキングスのある選手は平凡なフライを打ち上げたんだよ。

このフライが強風に吹かれてホームランとなった。  
このホームランによってホワイトストッキングスは優勝を決め、勝利投手だったジョン・クラークソンはこの出来事のことを「ラッキーセブンス」と表現した。

これがラッキーセブンと言われる由縁のひとつと言われている」

「へー。知らなかった」

「ラッキーセブンは西洋から来たものだろうけど、日本には昔から七も良い数字だったんじゃないかな？ホラ七福神とか」

「ああ、そういえばそうね」

「それに日本だけじゃなく世界に七と言う言葉が存在するしな」

「七不思議でしょ。七つ道具、七宝、七つの大罪、七天使、七曜、七草

…七人の小人つてのもあるわね」

「七洋、戦国七雄、七星剣、北斗七星、七味唐辛子、七夕、虹…」  
「いっぱいあるのね。なんだか興味深いわ」

「確かに。調べたら面白そうだな」

騒がしく子供達が戻ってくる。  
教室が一気に賑やかになった。

「顔怖かったね」

「はい、本当に顔が浮かび上がってましたよね。何か起きるのでしようか？」

「何かあってなんだよ？」

「何か不吉な前触れとか……」

光彦がもつともらしく怖そうに言うので、元太は震え歩美は泣きそ  
うだ。

「オイオイ……」

コナンは飽きた顔、哀は面白そうに見ている。

「よ、よし！探偵団の出番だな」

「」「」「え？」「」「」

元太に皆の視線が集まる。

「学校の七不思議を調べるんだよ」

「えーっ。歩美怖い」

「そうですね。大体どうやって調べるんです？」

「夜学校に忍び込むんだよ。それで噂のお化けの正体をつかむんだ  
！」

元太が決めたように、拳を握る。  
怖いながらも反対をしない二人。

「どうやら肝試し大会に参加させられそうね」

「…ああ」

二人は机に並んでため息をついた。

「コナン、おめえ先に行けよ」

夜の学校に集まったところで、元太が命令する。  
怖いと顔に書いてある。

歩美は哀の服を掴み怯えている。  
光彦は黙ったままだ。

(怖いならやらなやいいのに…)

コナンはやる気なく歩き出した。  
哀歩美、光彦、元太と続く。  
こんなことなら、配役で犯人が解る2時間の推理ドラマでも見てた  
ほうがマシだ。

「とつとと終らせて帰るか…」

夜の学校は不気味である。  
広い廊下に足音が異様に響く。  
頼りない明かりに周りが見えづらく、窓は黒い紙を貼ったように何も見えない。

廊下の蛇口が緩んだ水道から、水滴がひとつつ落ちる。

「ひっ…」

その音に驚いた元太が声を出した。  
連鎖するように、光彦も歩美も驚く。

「元太くん。おどかさないで下さい!」

「…だつてよ」

「音楽室に着いたわよ」

コナンが既にドアを開けていた。  
音が響く静かな廊下から防音のある音楽室へと入ると、耳がおかしな感覚に襲われる。  
音がその場で吸収されるからだ。  
暗く静かな音楽室も不気味だ。  
夜というものはここまで変わるものなんだと改めて思う。  
コナンはライトの光をを上にあげる。

「確かベートーベンの顔が動くだっけ？」

「きゃああああ!」

三人が叫んだ。

コナンによつて光が当たった角度で動いたように見えたらしい。

「動きましたよ！」

「やっぱり本当だったんだ！」

「いやああ怖い！」

三人は叫びながら逃げていく。

「あ、ちょっと待ちなさい！」

哀の言葉も聞こえない。

コナンはフツと笑ってライトの光を下にした。

「全くあいつらは…。これで肝試し終了だな。灰原、俺達も帰ろうぜ」

コナンが音楽室を出ようとすると、慌てて哀が追ってきた。  
ドアを閉めて廊下を歩きだす。

ふと、コナンが哀との距離が近いことに気づいた。

(もしかして…)

「あー！」

コナンが大きく声を出す。

哀はビクッと身体を跳ねさせた。

「な、何よ。大きな声出して」



声が小さく震えている。

( やっぱりコイツ怖いんだな )

行きは歩美が哀に掴まっていたので、なんとか冷静でいたんだろう。今は誰とも接触してないので不安が倍増しているに違いない。

「今、あそこに何か白いものが……………え？」

ぎゅっと目をつむって力強く哀が抱き着いてきた。

冗談だったのに本気で怖がっている。

冗談が過ぎたかなと思って話しかけようとしたら、フワッと哀の頭から甘い香りがした。

というか、身体全体から甘い香りがするような気がする。

触れた部分の哀の身体は柔らかい。

密着している身体が熱い。

急にコナンの胸はドキドキし始めた。

哀は普段では考えられないくらい弱々しい顔をしている。

( コイツ意外に可愛いかも… )

瞳は潤んで、薄い唇は震えながら開いている。

更にコナンの鼓動が速くなる。

コナンの顔はトマトのように赤かった。

「あ、あのさ…灰原」

心臓の音が煩い。

きつくしがみつくと哀を離そうとすると、恐怖と不安が襲ったのだろ

う。

更に強い力で腕に抱き着いてきた。

「…お願い。置いて行かないで」

やられた。

今の一言で完全にコナンはやられた。

鼻血が出るところだった。

こんな哀は卑怯だ可愛すぎる。

「は、灰原…」

思わず抱きしめようと手を伸ばす。

「くら！！あなたたち！！」

当直の先生が懐中電灯を持って後ろから怒鳴ってきた。

叫んで逃げ出した三人は職員室にいて、逃げたことを謝り罰の悪い顔を見せた。

たっぷり搾られた五人は、それぞれの親を呼ばれて家路に帰る。

コナンは車の阿笠に送ってもらったことになった。

あとで蘭に怒られる予定だ。

「とんだ七不思議だったわね…」

さっきまでの怯えた可愛い哀は何処へ行ってしまったのだろう。

いつも通りの何を考えているか解らない、無表情の顔になっていた。

コナンがじっと見つめていると、哀は眉を小さくひそめた。

「…なによ？」

「いや。残念だと思ってさ」

「…あなた肝試し好きなの？」

呆れたようにため息をついて車に乗り込む哀に、苦笑いしてコナンも車に乗り込んだ。

（もう少し、あのままで居たかったなあ）

抱き着かれた哀の温もりを名残惜しく残しながら、発進した車は夜の学校を背に出て行った。

## 七ふしぎ（後書き）

数字は不思議です。考えれば考えるほど面白い。

…と言っても数学いや、算数でさえ苦手ですが（笑）

文章中にあった七不思議。どうしてどの学校にもあるのでしょうか？  
数えると七つ以上あったり…。意外に笑えるものがあったり。

現実小学生の時に、学校中がなんとなく怪談めいた雰囲気に入れ  
た事を思い出し、この話が出来ました。

怯える哀にドキドキするコナン。

このあと、また抱きつかれようと計画を立ててたりして…。

おもしろいなら(前書き)

新志です。長い…

## さよなら

元の生活に戻った新一は、久々に博士の家に訪れた。

高校も三年生になると受験や進路など何かと忙しく、事件も新一をほっといてくれなかった。

隣に住んでいるのに、随分志保に会っていない気がする。

あの不機嫌な顔で厭味をいう顔が懐かしい。

思い出すのは灰原哀で、宮野志保ではないのだがその顔が見たかった。

元に戻った彼女は綺麗な大人の女性オーラが出ていて、あまりちゃんと見たことがないのだ。

迎えてくれたのは博士だった。

「新一！久しぶりじゃのお」

「久しぶり博士。少し痩せたんじゃないのか？」

靴を脱いでリビングに向かう。

「中々忙しくて顔出せなかったけどさ、元気にしてるのかなってさ。気になってたんだよ」

「蘭くんは元気かね？」

「元気だよ。今日はおっちゃんと出かけてる」

何年も経った訳でもないから当然と言えば当然だが、何も変わっていない博士の家にホッとす。

「宮野は？地下室？」

博士の顔から表情が消える。  
悲しそうに俯いた。

「志保くんはいないよ。出て行った」

出て行った？

「…どういう…ことだ？」

「やるべきことを全て終えたから、もうここに居る必要がないと出て行った」

博士の目から涙が落ちた。

痩せたのはそういうことだったのか。

あれだけ気をつけて栄養管理してるのに中々体重落ちない、ってアイツが言ってたのに。

宮野がいない？

「何処へ…何処へ行ったんだ？」

「アメリカじゃが、詳しい場所は教えてくれなかった。FBIに保護して貰ってその後落ち着いたら連絡するとは言ってたが…」

「アメリカに…？」

「新…」

新一はカッつとなつて博士に詰め寄る。

「…博士！なんで今まで黙ってたんだよ！！」

「工藤くんには言わないでくれと志保くんに口止めされててのお。私が居なくなつて新一が家に来た時に伝えてくれと」

「どうして！どうして俺に何も言わずに行つちまつたんだ？」

新一の怒りを含んだ悲しい目が、博士の胸を痛めた。

こうなる事は解っていたが、志保との約束を破る訳にはいかなかった。

志保の痛いくらい悲しい気持ちを知っていたからだ。

「…新一に別れを言いくかつたんじゃない。二人はずっと一緒に戦ってきた戦友じゃからな」

「…だからって…水臭いじゃないかよ…」

足元が崩れていくように、新一はソファーに座りこんだ。

世界が真つ暗になったようだ。

泣きたくなつた。

それは何も教えて貰えなかつた悔しさなのか、大事な何かが欠けてしまつた喪失感なのか。

志保はもう近くにはいない。

いつ会えるのか解らない。

二度と会えないかもしれない…。

宮野が憎い。

裏切られた気分だ。



「どうして何も言わずに…」

別れを言いづらいからと、何も言えずに簡単に去れるものなのか。自分達の関係はそんなものだったのか？志保にとって新一はそんな程度の存在だったのか？

悔しい。

苦しい。

胸に大きな穴が空いたように隙間風が吹いた。痛い。

「なんでだよ…宮野」

「新一…」

博士がしばらく黙り込む新一を見守っていたが、思い出したように机の引き出しを探った。それを新一に渡す。

「……手紙？」

「志保くんからじゃ」

そう言うと研究室へ向かい新一を一人にしてくれた。その背中をぼんやり見て、手の平の手紙を見る。シンプルな白い封筒に”工藤くんへ”と書いてある。

見たいような見たくないような迷いが生まれた。  
志保がないシヨックに読む気が起きない。  
…何故こんなにシヨックなのだろう？

「何やってんだ？俺」

深呼吸を一回して封を開けた。

”工藤くんへ”

この手紙を見ていると言う事は、私はそこには居ないという事になるわね。

最初に謝ります。

何も言わずに行くことになってごめんなさい。

許してくれなくてもいいわ。

薄情な私だから。

意気地無しの私だから。

あなたに直接言ったら、決心が鈍りそうだったの。

居心地の良いこの町に残りたくなってしまふ。

あなたは逃げるなと言ってくれた。

でもね、元に戻ってもあなたみたいには誰も待つてくれる人はいないの。

宮野志保として生きて行くには、お姉ちゃんが居なくなった日本に居るのが辛い。

だから逃げるわ。

でも安心して、ちゃんと生きて行くから。

工藤くんと出会えて良かった。  
あなたに助けられ守って貰った。色々教わったわ。  
ありがとう。  
元気でいて下さい（あまり事件に夢中になって、蘭さんや博士ご両親に迷惑かけないこと！）  
お幸せに。

さようなら世界一の探偵さん。

宮野志保

最後の文字を書いて、大きい涙を零したあの日。  
全てを終えて、全部を流すように泣いた。  
1番最後に新一を見たのは、高校生の制服を着て博士の家に来た時だった。  
気を効かせた博士が、夕ご飯に呼んだらしい。  
志保は博士を小さく睨んで新一を迎えた。  
学校での話や、工藤新一に戻ってから解決した事件の内容。  
話しは取り留めなく、ほとんど新一の話で食卓の会話は終わった。  
蘭の事を一度志保が聞くと曖昧にごまかした。  
相変わらず奥手みたいで進展がなさそうだと、博士と目を合わせ笑った。  
そこに事件だと電話が来た。

「居酒屋で殺人事件だったよ。俺行ってくるわ」

「ええ。頑張つてね」

ずっと元気がない顔をしていた博士が、志保の後ろで更に暗い顔になった。

「じゃあ、またな」

「さようなら」

さようなら工藤くん。

新一は何も気づかなかった。

いつも通り帰っていった。事件が起きてワクワクしている目が、江戸川コナンの時と同じだった。

最後の最後に彼らしい彼を見て、志保は微笑んだ。

「博士、私は大丈夫よ」

「志保くん……」

「大丈夫。ちゃんと生きていける」

日本を発つ時、泣いてる博士をなだめて一人空港へ向かった。

途中、懐かしい三人の元友人が嬉しそうに走って行くのを見かけた。

「元気で」

彼らの未来が幸せでありますように。

色づいた木々は、湿気のある日本に比べると渴いて味気ないような気がする。

都会の中では、街路樹と大学内くらいしかないけれど。

志保は資料を抱いて構内を歩いていた。

赤井とジヨデイにお願いしてアメリカでの生活を始めた。

志保の知識はズバぬけて比較的簡単に大学の研究生になれた。

今度は人を助ける為の薬の開発研究をするのだ。

人殺しの私に出来るせめてもの償いに、沢山の人を助けたい。

高くなった青い空は、日本へ続いている。

今日も彼は事件で走り回っているのだろうか。

（人殺しなんてネガティブな事をまだ考えてるのか？と工藤くんに怒られそうね）

フツと志保は笑う。

（でも死のうとしないだけ前向きでしょ？  
って言ったらどんな顔するかしら？）

もう二度と会うこともない新一の顔を思い出す。

泣いたあの日に全部流したはずの気持ちはまだ残っていたらしい。  
胸を切なくさせた。

秋だから人淋しいのかもしれない。

黄色く色づいた銀杏の下のベンチに座る。

（博士は初恋の彼女と進展出来たかしら？また暴飲暴食して太って

ないかしら?)

博士には悪いけれどあえて連絡をしていない。

志保の事は忘れて自分達の平和で穏やかな人生をまっとうして欲しいから。

「志保！」

研究所の仲間が通りかかる。

「珍しいね。こんなところでどうしたの？」

「別に。紅葉を見てただけよ」

「そう。新人生が見学にくるらしいから志保も来なさいよ」

「解った。もう少ししたら行くわ」

去って行く仲間の金髪がはらはら落ちる銀杏の黄色と重なる。

「彼女との進展……」

もう一つの事からも志保は逃げていた。

元に戻った新一とその彼女蘭を見ていたくなかった。

二人の幸せは願っているのに、小さな淡い気持ちたちがそれを邪魔する。あれだけ一緒にいて守ってくれると優しく言われたら、そんな気持ちになるのも仕方ない。

(ごめんなさい。まだ、私の心は狭いみたい)

この気持ちを消すには、もう少し時間が必要だ。  
小さく傷んだ胸を抱えて立ち上がる。  
いつまでも感傷に浸ってられない。  
やるべき事がある。

「志保！」

またもや声をかけられた。

しかし志保は固まって振り向けない。  
嘘だ。

空耳じゃないのか。

こんな所にいるはずがない。  
信じられない。

彼を思ってたから似たような声に反応してしまっただけではないのか。

「志保」

もう一度、その声は言った。

間違いない。

志保の心から中々消えてくれない彼。  
志保が二度と会うつつもりなかった彼。

「工藤くん…どうして？」

震えた声で振り向くと、工藤新一が笑顔で立っていた。

「オメーを追ってきた。探偵なめんなよ」

不適に笑う新一に少しときめきながらも、この状況が理解出来ずに

動けないでいる志保。

聞きたいことも沢山あるのにそれさえ質問出来ない。

「俺、この大学に入学したんだ」

…どういうこと？どうして？

聞きたくてもまだ身体は硬直したまま。

「……………」

「入学おめでとくらい言ってくれよ」

新一が志保の近くまで歩いてきた。

近づいて見つめる新一の視線にいたたまれなくて志保は顔を伏せた。

「ごめんなさい」

やっと出た言葉は何に対しての謝罪なのか解らなかった。

新一は震える志保の顔を持ち上げた。

「顔よく見せて」

逢いたくて夢で何度も見た人が目の前にいる。

「元気か？」

「…ええ」

新一の顔を真っ直ぐ見られない志保は目を逸らす。

少女だった時と違って身体はスラッと伸び、大人びた顔は化粧もしていないのにきめ細かに綺麗だ。



新一は志保に引き込まれるようにまじまじと見つめた。  
言いたい事が沢山あるけれど…良かったとホッとした。  
…良かった。

「・・・？」

黙り込む新一に志保は目を合わせた。

新一が泣きそうに少し顔を歪ませて微笑む。

「逢いたかった」

志保の胸が苦しくなる。

「ずっと志保に逢いたかった」

「私も…！」

志保の瞳から涙が一筋こぼれた。  
そして新一を抱きしめた。

「どうして何も言わずに勝手に居なくなるんだよ」

「ごめんなさい」

「オメーが居なくなっただけショックだったか解るか？」

「…ごめんなさい」

「二度とこんな真似すんじゃねーぞ」

「…うん」

「二度と逢えないかと思った…逢えて良かった…」

「…工藤くん…」

新一が志保を抱きかえした。

聞きたい事も言いたいこともまだまだ沢山ある。

大事なこともまだ言っていない。

だけとお互いの存在を確かめるのに精一杯だった。

「そうか。それは良かったのお！」

電話を切った博士は鼻を嚙り眼鏡の奥の涙を拭った。  
本当に良かった。

手紙を読んだ後の新一は抜け殻のようだった。

そして、思い立ったように志保の行方を捜し始めた。

あの頃の新一は鬼気迫っていた。

夏休みにアメリカに渡り調べたらしい。

そして、卒業したらアメリカへ行くこと決めてきた。

幼なじみの蘭との決着もその時にしたと聞いた。

怠けていた勉強も人が変わったようにして、初めて普通の学生らしい新一だったと思う。

しかし時々、本当に志保はいるのか不安になっていた。

すぐにも会いたかったらうに、入学するまで会わないのは新一の意地だったのだろう。

「博士。俺絶対アイツを捜してみせる。  
逃げても追っ掛けて見つけてやる。  
アイツが好きなんだ」

新一がそう言った時、博士は泣いて喜んだ。

二人が会えたら、志保の気持ちが報われる（新一には悪いが新一の  
気持ちはあまり考えてない）

早くその日が来るのを願っていた。

そしてその日が来たのだ。

「本当に良かったのお」

名前も違っていた小さかった頃の二人の写真を見る。

眼鏡をかけて嬉しそうに笑っている男の子と、無理矢理引っ張られ  
て不満そうな女の子。

年末には大きくなった二人の写真を飾ることが出来るだろうか。

その前に、二人仲良く写っている写真を送って貰おうか。

どちらにしても嬉しくて楽しみだ。

今日はお祝いだ。

お祝いなんだから酒と肉が必要だ。

「今日は特別じゃよ」

誰かに言い訳するように呟いて、博士はキッチンへ向かった。

## さようなら（後書き）

蛇足につぐ蛇足で思った以上に長くなってしまった駄目作品。

バッドエンドにしようと思ったのですが、どうもそれは嫌だと頭が拒否しました。

まあ…コ哀新志の幸せラブラブなものを書き続けたいと思います！許せる人だけお読み下さい。

読んで下さってありがとうございます。

事故調査（前書）

です。

## 事故ちゆう

何が起きたのか哀には理解できなかった。

目の前にガラス越しの丸くなった大きな目がある。

探偵団が絶叫している。

唇に柔らかい感触。

学校を終えて皆が遊びに来る。

哀は途中買い物をして家に急いでいた。

「みゃー」

か細くて高い声が聞こえた。

公園の前。

以前もこんなことがあった。

声を頼りに探してみると木の上に子猫がいる。

「…全く」

周りも見渡してもあの時のように助けしてくれる探偵はいない。

助けというか踏み台だが。

大きく育った木。

たっぷりとした手入れされた枝が張っている。

今日はスカートではない。なんとか登って見よう。

「みゃー」

「大丈夫よ。すぐ助けてあげるからね」

哀は木に登る為にランドセルを下ろした。

「全く…身体が小さいと不便ね」

手足も短いので中々上手く木にのぼる事が出来ない。  
木になんて生まれて一度ものぼった事はないのだけれど。

「みゃーみゃー！」

子猫の声が大きく高くなる。  
不安で淋しいのだろう。

「もうちよつとよ」

足を枝に固定して手を伸ばす。  
あと少しで届くのに、子猫は怯えて逃げてしまう。  
もう少し身体を伸ばさなくてはいけない。  
片手を枝にかけてもう一度手を伸ばす。  
届いた。

柔らかくて繊細な毛と暖かい小さな温もりが、掌に重みを与えた。

「なにしてんだ？オメー」

下から急に声をかけられた。  
だから驚いた。

哀の手は木を離れその体重は地上に向かう。  
無意識に子猫を守るように抱きしめた。  
バサバサと木の枝や葉が身体に当たる。

「灰原！」

声をかけた少年、コナンは落ちてくる哀を受けとめようと走る。大きな衝撃が起きて、必死に哀の身体を捕まえた。

「コナンくん！！！」

「灰原さん？」

探偵団が驚いて駆け付け、絶叫する。

「オイオイ……」

「いやああ。うそー！！！」

「何やってるんですか！二人とも！」

痛みは思ったより少ないが、身体の下に感じる温もりと唇の温もりに目を開く。

ガラス越しの丸く開いた目。合わさる唇。

数秒間後哀が後ろに飛ぶように離れた。顔が赤く心臓の動きが早くなる。

「イテテテ」

「大丈夫？江戸川くん！」

哀は慌ててコナンの元に戻る。



「ああ、ちょっと背中を打っちゃった」

「私のせいで、ごめんなさい」

「助かって良かった。オメーは？怪我はないのか？」

「ええ」

杖等でいくつか切っただけで何処も痛くない。

「血出てるな」

「大丈夫よ」

「バー口、跡残ったらどうすんだよ！新出先生に見てもらおうんだ」

「……うん。ありがとう」

哀が立ち上がるコナンの肩を持つとした時、声がかかる。

「あのーお取り込み中申し訳ないのですが、お二人は大丈夫でしょうか」

光彦が遠慮深そうに、しかし怒りを含んだ声で聞く。  
歩美は涙目になっている。

面白そうな顔しているのは元太だ。

「お前からキスしてたな」

哀とコナンの顔が真っ赤になる。

「こんなのただの事故よ！」

哀は早口で否定する。

皆の目にいたたまれない。

そつえば猫は…と探すと哀達の後ろで平気そつに身体を舐めていた。

哀は子猫を抱きしめる。

本当は心臓が壊れそうなくらいドキドキしている。身体もわずかに震えている。

「事故ね…」

コナンは半目で口を尖らせた。

新出先生のところで治療している間、探偵団は子猫の飼い主を探していた。

子猫は公園の近くの家の猫だったらしく、後ですぐに飼い主が見つかった。

「大丈夫？」

哀がコナンの肩を支えて探偵事務所まで送る。時間が経つと背中が強く痛み始める。

「ああ」

とコナンが哀に顔を向けると、思いのほか顔が近い。  
唇に行ってしまう。

哀も同じことを思ったのか顔が赤い。

「工藤くん、ありがとう。助かったわ」

「…オメーも無茶なことすんなよ」

「ええ、あなたみたいに無茶はしないわ」

クスツと笑う哀。

「オメーはすぐ茶化すんだから」

と呆れる。

いつも通りの軽口。だけれど二人はまだ顔が赤いまま。

心臓はお互いが触れている分だけ早く動いている。

ただの事故。

でも、キスをしたという事実は変わらない。

しばらくは事あるごとにそのことを思い出し、お互いぎくしゃくするハメになる。

## 事故ちゆう（後書き）

なんて都合の良い偶然なんだろう。

他の皆様の素敵な小説を読んで、笑ったりドキドキしたり、切なくなったりしていると、自分の駄目さに悲しくなります。

こんなものでも読んで下さってありがとうございます。

## 夏のゆらめき(前書き)

新志です。付き合ってませんし、微妙な関係。

## 夏のゆらめき

クーラーのきいたりリビングで推理小説を読みながら、新一は氷の溶けかけた麦茶を飲み干した。

「いつまで此処にいるつもりなの？」

志保はパソコンから目を上げて新一を睨む。

夏の暑い日差しになりつつある午前朝、クーラーのついたリビングでパソコンと睨めっこをしていたら新一が来た。

せつかく博士もいないし一人でゆっくりしようと思ったのに、お昼も軽目に手抜きをするつもりでいた。

「博士んち涼しいから」

飄々としながら家の中に入って来た。

自分のお屋敷にだってクーラーくらいあるだろうに。

ため息をついて飲み物を出し終えたら、無視して自分の世界に入る。しかしそれから数時間。

全く帰る気配もなくゆったりしている新一。

「せつかくの休みなんだから、何処かに出かけなさいよ。蘭さんでも誘って」

「…嫌だよ。外暑いだろ」

本から半分にした目を出して新一が哀を睨んだ。  
いい若者が何を言ってるのか。

志保は自分を棚に上げて思った。

「デートしてれば忘れるわよ」

新一が話から逃げるように、麦茶のお変わりをしにキッチンに立つ。彼は一体何がしたいのか解らない。

元に戻ってとつと告白するかと思つてたが、未だにその気配もない。

特に新一は、コナンの時に蘭の気持ちを聞いて両想いだと知ってるはずなのだが。

(まあ私には関係ないけれど…)

小さく走る胸の痛みとモヤモヤに気づかない振りをする。

椅子から立ち上がりキッチンへ向かう。

そろそろお昼だ。

麦茶を入れてる新一をスルーして冷蔵庫を見るが、ろくなものがないかった。

一人なら別に問題無かつたし、夕方涼しくなつてから買い物に行けば済んだのに。

本当に人が一人増えるのは面倒だ。

新一も冷蔵庫をのぞき見て言った。

「どっか食いに行く？」

「…あなた暑いからって外は嫌だと言つてたじゃない」

「そうだったけ？」

持っていた麦茶を飲みながら、悪びれもせず去って行った。仕方ない。

簡単にそうめんでも茹でるだけにしよう。  
勝手に家に来るほうが悪いのだ。

火が点いたキッチンの温度が上がる。  
少しだけ志保の気持ちがいラツとした。  
さっきのモヤモヤがまだ消えない。  
なんで対した用事もないのに家になんか来るのだろう。  
蘭と海でもプールでも行けばいいのに。  
リビングで平然としている新一を睨む。

「あ。 そうだ！」

志保は決めた。

新一が午後も家にいるつもりならこき使おう。  
午後は大掃除だ。

お昼が終わり新一が特に嫌がらなかったので、家の掃除が始まった。  
高い天井のリビングや、本棚。  
切れかけた電球。  
大きな窓の窓拭き。

女年寄りじゃ中々出来ないの、この際良い機会だ。  
どうして早く思い付かなかったのだろう？

埃は何もしなくても溜まる。  
汚れはいつの間にかつく。  
自分の心も同じように綺麗に出来ればいいのに。

「ちょっと！ちゃんと押さえてなさいよ」

志保は脚立上り窓のサンを綺麗にしている。  
新一がちゃんと持たないのでユラツとして落ちそうになった。



「…俺がやるよ」

「いいわよ、これくらい。あなたがちゃんと押さえてくれれば済むでしょ?」

志保は気づいてないのだが、実は手を挙げたそのシャツの隙間から脇や下着が見えてしまっていた。

エプロンの結び目の辺でも、シャツが上に引つ張られ腰も見える。

新一は顔を赤くしながら見ないように顔を背けるが、視線は釘づけだった。

志保の白くて細い腰や意外にある胸をじっくりと間近で見ってしまった。

作業で動いて身体も熱いのに、更に熱くなる。

「もういいわよ。ありがとう」

急に志保の顔が目の前にあって驚く。

また顔が赤くなったが、脚立を降りている志保には気づかれなかった。

その後もあちこち綺麗に出来て志保は満足だった。

若い男手があるというのは頼もしい。

背が高かったり、力強かったり。

新一を見上げると、いつもより少しだけかっこよく見えて眩しかった。

早まる鼓動を慌てて抑えて、後は買物で許してやると志保は無理矢理考えた。

何を許すというのか。

「お疲れ様」

よく冷えたアイスコーヒーを出して一休み。

「後で買い物も付き合っつてね。あなたの奢りで」

こんな風にこき使えば、余り家に来なくなるかもしれない。好都合だ。

だが新一は特に不満もないようで、美味しそうにアイスコーヒーを飲んでいる。

まだこきの使い方が甘かったようだ。

日差しが弱まったとは言え夏の夕方は暑い。

玄関を出た途端、ムワツとした熱気に顔をしかめる。

さっさと買い物済ませようと志保は意気込んだ。

財布兼、荷物持ちの新一と並んでスーパーに向かう。

夏の雲は高く大きく伸びている。

幼児化していた時は、海に山に忙しかった。

断りたいのにあの元気な仲間達は許してくれない…でもお陰で夏を楽しめた。

暑くても面倒でも、そうやって外に飛び出せば楽しい思い出になれる、とあの子達が教えてくれたのだ。

組織の中にいた志保にとってあの時間は宝物だ。

「何考えてるんだ？」

新一が志保を見て聞いた。

「あの子達と海や山に行ったこと。楽しかったわね」

「ああそうだな。色んな所行ったな」

「色んな所で事件にも沢山合ったけれどね。あなたのせいであな

「オイ！なんで俺のせいなんだよ！」

お互い薄めで見合って、笑う。

「オメー海とか行きたいのか？」

「え？」

「連れてってやろうか？」

「……」

新一と海。

水着なんて恥ずかしくて着れない。着て行く水着もないし。

それにさっき暑いと言って出歩きたくないって言うてたくせに。

海水浴場は人ばかりで、もっと暑いだろう。

第一志保は余り泳ぐつもりもないから、海で新一もそんな楽しめないのではないのか。

と言うか何を行くつもりになっているのか。

しかも二人で……。

余計な考えを一瞬で霧散させた。

「…事件は嫌よ」

「……」

事件が無ければOK、と言う返事になってしまった事に志保は気づいてない。

新一は少し悩んで、いつにしようか考えた。

事件なんていつ起きるか解らないし、結局「海に行く。決定」ということにした。

楽しみに胸が踊る。

あのナイスバディが見られると、よこしまな考えもしてしまう。

同時に他の男の目にも晒してしまうから、気をつけなくてはいけない。

「工藤くん、何してるの？先行くわよ」

随分先に志保がいた。慌てて追いかける。

水着姿の志保の妄想時間が長すぎた。

「これ、安いわ」

「なー俺、刺身食いたい」

スーパーで言い合いしながらも結構買ってしまった。

なんとなく二人の距離も近い。

重くなつた荷物を持って帰る。

「新婚さんかい？いいねえ」

商店街の店先で客を呼んでた八百屋のおじさんに声をかけられる。

真っ赤になつて違つと否定しても、「いいねえ」と笑つて奥へ消えて行った。

目が合うとまた二人して顔を赤くする。

お互いそれは夕日のせいだと自己処理をした。

夏のゆらめき（後書き）

こういうのも、ちょっとエロに入りますか？  
不快な思いされたらすみません。

読んで下さってありがとうございます。

夏色天使（上）（前書き）

新志です。夏のゆらめきその後。かなり長くなりました。昔の少年誌のように新一がHでおバカです。注意。

## 夏色天使（上）

約束（？）はすぐに果たされた。

新一が海に連れて行ってくれると言った時、志保は曖昧に返事したのがOKという事になってしまった。

志保は慌てた。

心なしか新一は嬉しそうに浮かれている。

明後日迎えに来るからと新一は言った。

天気は快晴。

早朝から気温はぐんぐん上昇し、気分もそれと同じだ。

「おはよう！…てあれ？」

「おはようございます！新一お兄さん！！」

三人の小学生が元気よく玄関に出て来た。

そのあと博士が来てニコニコ笑う。

「…オメーらどうして？」

「いやー、新一助かったよ。ありがとう。ワシの変わりにこの子らを海に連れていってくれて」

「へ？」

新一の運転する車が都会を抜けて海へと向かう。

後ろに座る小学生達はワクワクテンション高く賑やかだ。

「機嫌悪いみたいね」

外を見ていた助手席の志保が、新一をのぞき込んだ。

「二人きりじゃないからガツカリした？」

わざとなのかいつもの冗談とは少し違う表情で聞いてくる。顔に熱を感じながら新一は強がった。

「べつつにー。あいつらと一緒にオメーが楽しいならいいよ。」

「そう。ありがとう」

小さく笑う志保を横目に、本当は凄く残念だがまあいいかと運転に集中した。

「どういづことだよ？」

新一がリビングに入ると志保を見つけて腕を引っ張り耳打ちをする。

「海、連れて行ってくれるんでしょう？」

「ああ、だから……」

「博士がね。研究にトラブルが出来て、子供達と約束した海に連れていけなくて困ってたのよ」

「だからアイツらも一緒に行くよ？」



「ええ」

新一は肩を落とした。

（そんなに私と二人で行きたかった？）

新一を見て志保の心に甘い期待が生まれてしまう。

二人きりじゃないのに少しガツカリしてるのは志保も同じで、新一が同じように思ってくれているのかもしれないと胸が高鳴った。そして車の中。

（私が楽しければいい）

期待させてしまう言葉を言われて、志保の中でまたもや期待が膨らむ。

有り得ないのに。

（馬鹿ね、私は）

車は順調に海に着き、人の頭ばかりの海水浴場が見えた。潮の匂いが充満している。

「海です!」

「わあああ!」

「行く!」

「おい、お前らあんまり遠くに行くなよ」

車から飛び出すように出ていく子供達に新一は叫ぶ。  
そのまま海まで突進していきそうな勢いだ。

「お疲れ様」

志保が荷物を取り出しながら新一を労う。  
そのさりげない一言がいつも新一の胸を暖かくする。  
見てないようでもいつも見ていてくれる。  
気づかってくれる。

「え？ええ？オイッ…！！」

新一が大きく慌てた。

志保が着ていたワンピースを脱ぎだしたからだ。

此処は車がひしめく駐車場。

顔を真っ赤にして止めようとすると、ワンピースの下から水着が見えた。

下に着てきたらしい。

パーカーとデニムのパンツを上から着る。

「…なんだ」

ホツとしたのと何故か残念な気持ちと、志保のスタイルの良い水着姿と新一の気持ちは複雑に入り乱れる。

「何ずっと見てるのよ、えっち」

顔を赤くして志保が怒る。

その顔も可愛いが、その下にあるビキニの谷間のほうが目に入ってしまう。

洋服では解らなかつたが、予想以上にはちきれそうな弾力で水着に収まっている二つの膨らみ。

細い癖に何故そこだけ成長しているのだ。

デニムの短パンの上くびれとその下のスラツとした足は白くなまめかしい。

赤くなりながら、周りを見ると男の視線に気づく。

ビーチに出れば更に増えるだろう。

「こんな所で着替えんなよ」

「別に下に着てるんだからいいでしょ。」

解つてない。

新一は志保の前に立ちパーカーのジッパーを上げた。

「何するのよ。暑いじゃない」

「行くぞ。アイツら迷子になっちまう」

二人でビーチに向かうと、子供達は海に興奮して走り回っていた。

場所を見つけ持って来たパラソルを開いていたりしている間に、子供達は志保と同じく服を脱いで家から着て来た水着になった。

そして海へダツシユする。

「全くアイツらは……」

「あの子達元気ね」

二人で元同級生の三人を微笑んで眺める。

新一も着替えて志保の所に戻ると、横になって本を持っていた。

男が二人話しかけているが、新一を見てすぐに去って行った。

「もうナンパされているのか」

パーカーの前はまた開いていた。

「あなたも泳いで来なさいよ。あの子達待ってるわよ」

「オメーが行ってこいよ」

「私はいいわ。まだ日差しが強いから」

あ。と志保が思い出し鞆を漁る。

「日焼け止めクリームを塗らなくちゃ。工藤くんも塗る？」

新一はパーカーを脱いで念入りに日焼け止めを塗る志保に釘づけだった。

さつきによりもその姿がよく見える。

腕を少し塗ったまま止まってしまふ。

触れたいという衝動にかられる。

その時、志保がとんでもない事を言い出す。

「背中塗ってほしいんだけど」

「……」

頭に血液が行き過ぎて倒れそうだ。

さつきといい狙ってやっているとしか思えない。

ひよっとすると自分が女だと（しかも極上の）自覚がないのではな

いのか。

鼻血が吹き出すかもしれないと思いながらも、素直な身体は喜んで志保の背中に触れた。

細くて華奢な背中は、新一の大きな手に触れられてビクツとした。

「くすぐったいわね」

くすぐったさに笑いを堪える志保と対照的に新一は真顔だ。

よく見ると顔は真っ赤で必死のだが、背中を向けている志保にはその顔は見る事も出来ない。

新一の手に吸い付くような、白く滑らかな志保の肌。

綺麗な曲線を描く細い腰。

髪の毛かきあげて見せたうなじもまた新一を誘う。

このまま後ろから強く抱きしめたい。そしてキスして…。

「ありがとう。…?」

志保が振り向くと、新一は真っ赤になって飛び上がり焦っていた。

「じゃあ次は工藤くんね」

今度は志保が新一の背中に回る。

もうさつきから、新一は大変なことになっていた。

このまま志保に触れられて平気でいられるか。

「だ、大丈夫だよ」

「何言ってるのよ。背中はず届かないでしょ」

慌てて新一は俯せになった。

志保はビツクリしたが、そのまま背中に日焼け止めを塗りはじめた。新一の程よく筋肉のついた背中は大きく塗るのも大変だ。余り触れた事のない新一の身体に触れていると気づいて、志保はドキキした。

幼児化した時と違い元の身体は自分より大きくガツシリ力強い。新一を男なんだと意識してときめいてしまう。

「はい。終わったわよ。…工藤くん？」

新一は寝ていた。

正確には寝た振りをしていた。

志保に背中を触れられて、それまでの行き場のない気持ちと混ざりあい動けぬ状態になってしまったからだ。

冷たい志保の手が優しく新一の背中を動かたびに新一は悶えた。

正直気持ちいいのだが、女性には解らない男の若さと性さがというものがある。

これを抑えるには時間が必要だ。

(よし！寝た振りをしよう)

志保は朝早かったし運転で疲れたのだと、解釈してくれるだろう。

思惑通り志保は黙って隣に座り、新一にタオルをかけて本を読み始めた。

混雑しているビーチは騒がしく、FMラジオが賑やかに音楽を流す。しかし、二人の世界はゆったり流れて波の音が心地良く聞こえた。時折、志保のめくるページの音がする。

「新一お兄さん寝てるの？」

歩美がやって来た。

「一緒に遊ぼうと思ったのによ」

元太と光彦がビーチボールを持って来た。

「志保お姉さん一緒に遊ぼう」

歩美に言われると弱い。志保が立ち上がるうたとすると、新一が起き上がった。

「よし、オメーら行くぞ」

走り出す新一は歩美達と同じ子供みたいだ。

志保は笑って皆を見守った。

泳いだりビーチボールで遊んだりしていても、気になるのは志保だった。

またナンパされていなかいかと心配で仕方ない。

海にくるだけで、こんなに大変だとは思わなかった。

まあ、ナンパごとき簡単に志保を扱えないだろうが。

「…新一お兄さん何やってるんですか」

「あはは。どんくせー」

ビーチボールが顔に直撃した。

ため息をついてボールを投げかえし、砂浜を見る。

やっぱり志保の元に数人の男がいた。

「オメーら、早めに昼飯すまずぞ」

元太がいち早く反応した。  
食べ物となるとその執着心はすさまじい。  
一直線に志保の元へ走っていった。

「元太くん待つて下さいよー」

「もー。浮輪置いてかないでよ」

ボールや浮輪を新一が持つて元太を追いかける。

「連れがいるの」

そう断つても今度のナンパはしつこかった。  
相手もこんな美人には中々出会えないので諦めない。

「おまえらなんだ？」

駆け込んできた元太が無邪気に声を上げた。

「なんだよ、ガキか」

「あっち行けよ」

元太を追っ払おうとするナンパ男達をすり抜けて、志保は元太を捕まえ肩を抱きしめた。

「私の子供よ」

「え？」



元太とナンパ男達の声が重なる。  
後から光彦歩美新一が来たのを見届けると、志保は更に続けた。

「今来る子供を入れて三人よ。その後ろにいるのが旦那様」

信じられない顔してナンパ男達は口を開けたまま。

そして遠くからすさまじい殺気を立てて睨んで歩いてくる新一を見て、忌ま忌ましく立ち去っていった。

元太は志保の胸の膨らみを感じながら顔を赤くして志保を見上げる。

「おれ、子供じゃねーぞ」

「ありがとう。お陰で助かったわ」

「????」

頭をぼんとされて元太は困惑する。

「お前大丈夫かよ？何かされなかったか？」

新一が心配そうに聞くと志保はおかしそうに笑った。

「ええ。三人の子持ちって言ったらさっさと消えたわ」

「はあ？」

「あなたと私じゃいくつの時の子供なのかしら？」

声を出して笑う志保に、新一の力が抜けた。

「ねえ、思ったんですけど…」

光彦が歩美にひそひそと声をかける。

「新一お兄さんと志保お姉さんは付き合ってるのでしょうか？」

「光彦くんもそう思った？歩美もそんな気がする。凄いお似合いだし」

「でも、新一お兄さんには蘭お姉さんがいたのではなかったでしょうか？」

「うーん。昔はそうだったのかもしれないけど、今は確実に新一お兄さんは志保お姉さんが好きだと思うな」

「え？どうしてそう思うんですか？」

「見てれば解るよ。志保お姉さんだってそう。あの二人は惹かれあってるわ」

ませたことを言う歩美は、大人びて見える。

光彦はぽかんと歩美を見つめた。

「ああ、でも付き合っただけじゃないかもしれないなあ…」

「歩美ちゃん？」

「おまえら何こそ話してるんだよ？」

元太が不機嫌そうに話に割り込んで来た。

「あ。元太くんあのね…」

三人が集まって顔を付き合わせ何か企んでいる。

「アイツら何やってんだ？」

「さあ？どうせロクでもないことでしょうけど…それより工藤くん、あなたももう少し離れてよ」

志保が不機嫌な声を出す。

歩こうとするたびに新一が前にかぶって邪魔をしてくるからだ。

「暑苦しいわよ」

志保にそう言われても新一はやめるつもりはない。

そこにも、あそこにも、向こうにも。

今すれ違った女連れの男も志保を見ている。

頼むからパーカーの前を閉めてほしい。

新一は自分でその谷間を見つつ、志保にそれを隠せと矛盾した事を願っていた。

お昼が終わり子供達がお願いするので、ビーチバレー対決が始まった。

歩美には弱い志保は、ついにパーカーと短パンを脱いでその身体をビーチに晒した。

周りの男達の視線は釘づけで、新一は面白くない。

元太光彦歩美チームと新一志保チーム。

一見圧勝に見えるが、新一と志保は海に浸かっただのハンデがある。

「いくよー」

歩美のサーブから始まった。

しかし海の中は身動きが出来ず、新一達は負けまくる。

「おい。これじゃバレーにもならねーよ」

「そうね。あの子達なに考えてるのかしら？」

光彦がサーブをする。

そつえば元太がいないと新一が気づいた時だった。

「おわっ！！」

「キャッ！」

横後ろから勢いよく押されて新一が志保の方に倒れこんだ。

新一が志保を抱きしめるように二人は重なる。

「やったあー！！」

と歩美と光彦はハイタッチをする。

夏色天使（上）（後書き）

長くてすみません。

歩美には弱い志保という設定が好きです。

この話。新一にはわざと志保を苗字か名前を呼ばせていません。年齢も曖昧にしています。

考えるのが面：いやいや。他の説明が長くなりそうだったので泣く泣くカットです。（大体2年後くらい。探偵団は3年生ですね）

志保の水着の色も曖昧なのはそれぞれ好きな色をご想像していただくサービスとなっております。

夏色天使（下）（前書き）

新志の続きです。かなり長かったなので分割しました。

## 夏色天使（下）

作戦は成功したかに見えた。  
しかし、しばらくして歩美はちえっと砂を蹴った。

「…あーあ。失敗したみたい」

ふにやりと一際柔らかいものが新一の手に当たる。

何かと思つてその感触を確かめると、下から物凄い力が新一の手を押しつけた。

「工藤くん…どういうこと？」

水面から顔を出すと、胸を押さえた全身びしょ濡れの志保が睨んでいた。

とても怒っていらっしやる。

「あ…いや。あの…俺じゃなくて…」

柔らかいものは志保の胸だったらしい。

無意識とはいえ揉んでしまった。

気づいて、ニヤケてしまふ真つ赤な顔を隠すように、新一は怒鳴った。

「コルアー！！元太ああああ！！」

取り残された志保はため息をついて、立ち上がりビーチへ歩いた。  
チャンスだと空気の読めないナンパ男が近づき、南極の氷より冷たい視線に即刻凍らされる。

タオルで頭を拭いていると、新一が元太を捕まえて怒っていた。

「馬鹿…」

新一を見てまたため息をついた。

そのため息は鳴り止まない心臓音のせいで甘かった。

倒れた時、引き締まった新一の身体に包まれて志保はこれでもかというくらいドキドキしたのだった。

好きになっちゃいけない人なのに、どんどんこの気持ちは大きくなるばかりだ。

新一には蘭がいる。

そう思つて気持ちに蓋をしてきたのに…。  
タオルを頭にかぶせ顔を被う。

「元太、オメーなんでこんな悪戯したんだよ」

新一が腰に手を当て怒っている。

「う…それは…」

「ああん？」

歯切れの悪い元太に、新一の怒りは更に大声をあげさせる。

本当は怒りというより、志保の手前怒る必要があったから怒鳴っている。

反対に嬉しいハプニングに感謝しているのだ。

いや…これは怒るべきなのだ。

余計な考えを振り捨てて、新一は元太を睨む。



「元太くんを怒らないで。私が考えた作戦なの」

「作戦？歩美が…？」

ひょうしぬけした新一が歩美に向いた。

日もだいぶ傾いて帰る時間になった。

あれだけいた人も何処かへ消えてしまった。

早めに着替えを終わらせた男達は、女性陣を待っていた。

元太と光彦はまだ元気に岩場で生物を見つけてははしゃいでいる。

あれから志保は新一を避けるようにしていた。

子供の悪戯で偶然とはいえ胸を揉んでしまったことであんなに怒るなんて。

でもそれだけだろうか？

『新一お兄さんは志保お姉さんのこと好き？』

歩美に聞かれたことを思い出す。

あの後歩美の希望で二人で話した。

『あのね、歩美。新一お兄さんと志保お姉さん見てると、お友達を思い出すの。』

うん。一年の時に転校してきた、コナンくと哀ちゃんだよ。

今は海外に行っちゃって全然連絡してくれないんだけどね。

二人とも元気かなあ？

そう。その二人を思い出すの。

二人して好き同士なのに意地張ってたから。

歩美はコナンくんのこと好きだったの。

でも、コナンくんは哀ちゃんを見てた。哀ちゃんが好きだったの。

…？新一お兄さん？どうしたの？

ああ、それでね。哀ちゃんもコナンくんのこと好きだって気づいて。哀ちゃんが転校してきてすぐの時に一回聞いたら、好きじゃないって言ってたけど、やっぱり違ってたの。哀ちゃんもコナンくんが好きだったの。

二人とも素直になれなくて、いつも言い合いしてた。

でも二人には歩美たちには解らないお話してて、その時コナンくんも哀ちゃんもとても楽しそうだったの。

真剣に話してた？なんで新一お兄さんが解るの？

…あ、うん。それでね。歩美はコナンくんが好きで悲しいけど、二人を応援しようと思ったの。

でも結局、コナンくんも哀ちゃんも素直じゃなかった。

今は素直になったかなあ？

うん。だって新一お兄さんは志保お姉さんが好きでしょ？歩美解るよ。

コナンくんたちと同じで素直になれないんでしょ？

歩美、新一お兄さんたちに仲良くなって欲しいんだ！。

…ごめんなさい。そうだよ。良くないことだった。うん。志保お姉さんにもちゃんと謝る。

え？ありがとってどうして？』

「志保お姉さん！」

着替え終わった歩美が罰が悪そうに志保の元に来る。

「新一お兄さんを許してあげて！歩美が全部悪いの」

「…え？」

「ごめんなさい！…歩美が考えた作戦なの。だから歩美を叱って。新一お兄さんは悪くないから」

「…どうしてあんなことしたの？」

「新一お兄さんと志保お姉さんにもっと仲良くして貰いたかったの」

志保はア然として、俯く歩美を見る。

「私達仲が悪そうに見える？」

「ううん！志保お姉さんは新一お兄さんが好きでしょ？新一お兄さんも志保お姉さんが好きだから、もっと仲よくなつて欲しかったの」

なんと子供にまで自分の気持ちを見破られていたのかと、志保は驚いた。

しゃがんで歩美と視線を合わせる。

「ありがとう。気持ちは嬉しいけど、ああいうことはやめてね」

志保は優しく歩美に笑いかける。  
間近にある志保の顔はとても綺麗で、将来こんな美人になりたいと歩美は思った。

「そうね。歩美ちゃんの言う通り、もっと工藤さんと仲良く出来るように頑張るわ」

「ほんと？」

「うん。工藤くんが私が好きなのは間違ってると思うけど、私はそ  
うだから」

「えー」

「歩美ちゃん。これは内緒よ。女同士の秘密」

しーっと口元に人差し指を立てる志保。  
小指を繋いで二人で笑う。

着替えを終えて新一達の元へ向かう。  
新一が気づいて岩場の二人を呼んだ。

「帰るぞー！」

二人は「えー！」と残念そうに岩場から離れ、採取した生物を歩美に見せに行く。

「工藤くん」

志保が新一を呼び止める。

歩美が気を効かせて二人を連れて駐車場へ走って行った。

「…さっきは悪かった。悪気がないとはいえ…」

「それはもういいの。…今日はどうもありがとう。とても楽しかった」

志保は素直にお礼を言った。

少し緊張してしまっただが上手く言えただろうか。

歩美と約束したので少しでも素直になろうとしたのだ。

「……………」

微笑む志保が愛おしくて仕方なくなる。

歩美に気づかされるとは思っていなかった。

さっきのさっきまで、自分の気持ちに気付いていなかった。

ずっと志保を見ていて、側に居たくて必死になり、些細なことで嬉しかったり、独り占めしたくてヤキモチ妬いたり。

あんなに触れたいと思ったのもそういうことだったのか。

全てはコナンの時から始まっていたのだ。

ずっと志保を好きだった。

「お前が好きだ」

「え？」

「好きだ」

新一が真っ直ぐ見つめるので志保は戸惑う。

「な…何言ってるの？工藤くん」

志保の顔が真っ赤に染まる。  
新一が近づいてくる。

「お前が好きだ。お前は俺のことどう思ってる？」

「蘭さんは？あなた蘭さんのことが好きなんですよ？」

「蘭のことより、オメーの気持ちが先だ」

「……………」

「俺の素直な気持ちは宮野志保が好き。宮野志保の素直な気持ちは？」

「…素直…？」

カチューシャの天使が笑った。

「私…」

波が満ちてきて足元まで来ている。

誰かの作った砂の城が無惨に崩れて波にさらわれた。

志保の作った壁も崩れる時が来たのかもしれない。

「私…も。工藤くんが好き」

志保が言ったと同時に新一に抱きしめられた。

「天使に感謝だな」

「どういうこと？」

「なんでもない。オメーが好きだ好きだ好きだ」

ぎゅっと抱きしめると更に愛おしさが湧いてくる。

そのまま顔を見合わせ志保の頬を包んだ。

志保が目を閉じた。

新一も目を閉じ唇を重ねた。

「なあ、また海に来ような」

夕焼けで赤くなった車内、新一が運転しながら言う。  
後ろの席では子供達が爆睡をしている。  
流石にはしゃぎ疲れたようだ。

「ええ。今度は二人で…でしょ？」

志保がフツと笑う。

また触れたくなくて、左手を伸ばして指を絡めた。  
志保も絡め返す。

「今度は俺が水着を選んでやるからな」

「はあ？」

あんな水着を着るのは自分の前だけにして貰う。

他の男には見せたくもない。

しかし志保は何を勘違いしたのか、新一が変態だと顔を険しくさせた。

絡み合う指も離れて志保は引いてる。

新一が焦って執り成そうとするが、冷たい視線を向けられるだけだった。

後ろの席で片目を開けた歩美がため息をついた。  
そしてまた眠りについた。



夏色天使（下）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。お疲れ様でした。初めはただの海に行く話でここまでするつもりもなく、告白もさせないつもりでした。

何故か歩美が動きだして目茶苦茶に…。

天使って志保のつもりだったのですが、いつの間にか歩美になってしまった…。しかも歩美…黒い黒い…。何故…？

途中歩美の一人台詞は読みにくかったらすみません。なんかああいう感じが面白かったのです。

お付き合いありがとうございました。ではまた。

## 夏祭りに行こう(前書き)

コ哀です。またまた蘭が壊れています。

## 夏祭りに行こう

今日学校で、夏祭りに行こうという話になった。

哀は人混みが苦手だし面倒なので、パスしようとしたら歩美がむくれ、光彦が行きましようよーと甲高く声をあげるので騒ぎになってしまい哀は行くハメになる。

よくは知らないが、人混みだらけのお祭りに何があるというのだから？

皆浮足立って楽しそうだ。

「コナンくん達もお祭りに行くのね」

学校帰りに蘭と園子に出会い一緒に歩いている。

蘭の横に歩いて、子供のフリをしながら喋るコナン。

「うん。だからご飯要らないよ。も、って事は蘭ねーちゃん達も行くんだね」

「もちろん行くわよ。園子と。毎年新一と一緒に行ってたんだけど、今年は駄目そうだから。」

「…し、新一兄ちゃん忙しいもんね」

「全くあの推理オタクは何してんのかしらね！」

「アハハハハ…（はあ…）」

哀は二人を後ろから見つめる。

幼い頃から毎年お祭りに一緒に行く二人が浮かぶ。

(私のせいで今年は一緒に行けないのね…)

コナンと蘭は二人仲良く話している。

時折園子が

「なにが侘しくて女二人で行かなくちゃいけないのよ」

とか。

「イイ男を見つけて見せるわ!」

と言つて、二人を苦笑いさせていた。

哀は伏せた横目でしばらく地面をポーッと見て歩いている。  
ふと気づくと隣の歩美が哀を見ていた。

「ねー、哀ちゃんは浴衣着ないの?」

「え?」

「歩美ね、浴衣作つて貰つて着ていきたいんだけど…哀ちゃんと一緒に浴衣着たいの」

「…そう。でもごめんなさいね。浴衣持つてないのよ」

「えー。そうなんだ…」

酷くがっかりして肩を落とす歩美に、哀は再びごめんなさいと言つ。  
こういふ素直で可愛い歩美がうらやましい。

「浴衣。私の小さい時ののでよければどう？」

突然のことで哀は目を丸くして声のほうを向く。  
蘭が近づいてくる。

「多分ちょうどいいサイズがあると思うんだ」

覗きこむように膝を曲げて、哀達に視線を合わせる。  
さっきの話が聞こえていたのか。

「ほんとー？蘭お姉さん？」

歩美が表情を明るくした。

「うん。そんなに腕通してないから大丈夫だと思うよ」

「良かったねー！哀ちゃん」

（え？ちよつと待って）

黙りこんでたら、いつの間にか決定になっていた。

：まあ、歩美が喜んでいいからいいかと、哀は複雑になりながらも諦めた。

元々強制なので哀に拒否権はないのだが…。

コナンが道の先で、キョトンと見ていた。

ランドセルを置いて、そのまま探偵事務所にUターンした。

蘭はまだ浴衣を探しているみたいで、哀は事務所の上の自宅で待たされる。

蘭に言われたのがコナンが麦茶を持ってきてくれた。

「ありがとう」

「蘭のやつ、たかが祭でなんであんなに燃えてるんだろっな？」

「…さあ？」

縁側の年寄りのように黙って（麦）茶を飲む二人。

「あつたわよ！さあ。哀ちゃんこっち！！」

しばらくしてそこに走りこんできた蘭に、哀は一瞬にして連れ去られた。

「きゃあ！よく似合う！可愛いわよ」

蘭がテンション高く写メを撮っている。

嫌な予感がしたが、白地にピンクの小花の浴衣は自分には似合っていない気がする。

「あの、そっちの藍色のじゃ駄目ですか？」

なるべく地味そうな浴衣はしつけ糸がついていた。

「えー。今着てるの可愛いのになあ。あ、でも帯をこれにすれば可愛いかも！」

(子供用いくつ持っているのだろう?...怖いから聞かないけど)

「きゃあ!これも似合うわね。可愛い!この花付けてみて!」

言われるがまま着せ替え人形、写真撮影タイムが終わりグッタリした哀は解放された。

藍地で白い朝顔の花模様。

藤色とピンクのひらひら帯。

頭は左側だけ斜めにピンで留めて耳の上でピンクの花飾りをつけている。

子供にしては大人っぽい感じた。

「じゃじゃーん!どう?」

蘭も浴衣に着替え、コナンにお披露目。

髪の毛をあげてうなじを見せて、白地に朝顔が大きく描かれた浴衣にピンク色の帯をしている。

コナンは顔を赤くしてぼーと見ていた。

「どうコナンくん?」

「...あ。あのっ。綺麗だよ」

「ありがとう。フフ。哀ちゃんとお揃いで姉妹みたいでしょ?」

「...うん」

(蘭さん、色っぽくて綺麗だもんね)

哀は無表情で二人を見ていた。  
顔を赤くしながら蘭と話すコナンと目が合い、哀は目を背ける。  
コナンがその後哀を見続けていたのだが、目を背けていた哀は気づかない。  
哀が蘭に連れられて小五郎にもお披露目に行く後ろ姿もコナンは見  
ていた。

「哀ちゃんかわいい！」

コナンと哀が待ち合わせ場所に着くと、待っていた歩美が哀を見て  
走って来た。

「あなたこそ可愛いわよ」

ピンク地の花柄に黄色と赤のの帯のかわいらしい帯をした歩美に、  
哀も素直に感想を言う。

光彦と元太は二人を見て顔を赤くしながら褒めた。  
探偵団皆で祭の行われる神社へ向かう。  
歩美を挟んで光彦元太が前を歩き、その後ろにコナンと哀が歩く。  
前の三人は祭への期待にはしゃいでいる。  
後ろは静かにそれを見守っている。  
時折、コナンは哀をチラチラ見ていた。  
日も落ちて視界が狭くなってくる。  
履き慣れない下駄が歩きづらく哀は躓いた。

「危ない！」

咄嗟にコナンが手を伸ばし支える。



哀がコナンにしがみつく。

「…ありがとう助かったわ」

コナンがまた哀を見つめる。

「…?」

「…あ…大丈夫か?」

「ええ」

微妙な沈黙の後、前の三人を追うように歩きだす。でも哀を気づかかってかコナンはゆっくり歩くので、差が広がるばかりだ。

またコナンがチラッと哀を見た。

流石に視線を感じて哀はコナンを見た。

「なによ?」

「え?」

「何か言いたいことでもあるの?」

睨むように哀を見るとコナンは慌てた。

「な、何もないよ。ただオメーがいつもと雰囲気ちげーから…」

「似合わないって言いたいんでしょ」

こんな可愛いらしい浮かれた格好なんて、似合う訳がない。

「んな訳ねーだろ！スゲー似合ってるオメー目茶苦茶可愛いじゃん」

「え？」

「あ、やべ…」

コナンが余計な事を言ってしまったと口を抑えたがすっかり哀の耳に聞こえてしまった。

頬に熱を感じた二人は視線を反らした。

(可愛い…)

コナンが漏らしたその言葉が嬉しくて、哀は口元を自然と緩ませた。神社に近づき周りに人が増えてきた。

哀は人にぶつかりまたコケそうになる。

「危ないな。はい」

「え？」

「はぐれたり、コケないように！」

コナンが手を伸ばした。

手を繋ごうというらしい。

哀は赤くなって戸惑ったが、コナンは強引に手をつないで歩き出した。

コナンも顔が赤かった。でも哀の角度から見えない。

神社の境内は参道両側が屋台や提灯が並んで明るい。  
繋がる手に熱を感じながら、先に行ってしまった友達を探す。

この人混みに紛れていつまでも見つからなければいいなと思う。  
ずっと手を繋いでいたいから。

## 夏祭りに行こう（後書き）

終わりです。

もっと可愛い浴衣を着せるべきだったか……。センスが無くてすみません。

最近書くことは難しいと痛感します。上手く言葉が出てきません。情けない。

補足で最後数行はどちらの心の声でもあります。コ哀主義なので。

## お大事に（前書き）

新志です。二人は付き合ってます。蘭とは付き合ってるか微妙なところ。新一はキャラ変わってるかもしれないです。今更か…。

## お大事に

事件が終わって夜も更けた時間。  
なんとなく一人になりたくなくて、家を素通りして新一は博士の家の前に来た。

「あら、どうしたの？」

玄関に迎えに来たのは、ついこの間まで同じ秘密を共有していた女。その秘密の原因を作った張本人のだが、その解決も見事一人ですべてのけた。

ほとんど同じ歳なのに薬学の知識が豊富で洞察力があり、冷静かつ大人。

ハーフで人並み外れた美人だが、クールで人を寄せ付けない。でも付き合おうと解るが、とても情有り優しい。

宮野志保。

新一のお隣りに住む隣人である。

「ちよつとな。顔出してみようと思って」

「そう。博士は出張で居ないわよ」

「そうか…」

まあ別に博士に会いに来たわけではないので、そのまま帰らず部屋に上がる。

「…工藤くん、顔色悪くない？」

後ろから志保が声をかけた。

ソファーに新一を座らせ、首筋おでことそのしなやかな手で触る。新一の下瞼を押しして中を見る。新一はぼんやり顔が近い志保を見た。

(やっぱりスゲー美人だなあ…)

きめ細かい肌。宝石のように透き通る大きな切れ長の瞳。通った鼻筋。薄くて淡いばら色の唇が全てバランスよく配置されている。柔らかい天然のウエーブがかかった茶髪が、綺麗な輪郭を覆ってふわふわしていた。

「熱があるみたいね。体温計持ってくるわ」

熱…。

そういえば今朝から身体が重くて仕方なかった。いつもなら簡単な推理も、妙にてこずった。

「よくこんな熱で平気でいられたわね」

体温計を見て志保は驚く。

「早くお家に帰って寝なさい。頭冷やしてちゃんと着替えてね」

喋るのも億劫で頷くだけの返事をして、立ち上がると意識が飛んだ。

「大丈夫？」

目を開くと心配そうな志保の顔が見えた。

「…俺？」

「あ、まだ寝てなさい。点滴終わるまで」

リビングのソファアームベッドに寝かされ、頭には冷えピタ。腕には点滴をしている。

「あなた熱で倒れたのよ」

「…着替えもしてくれたのか？」

サイズの合わないパジャマを着ていた。

「汗が酷かったから、博士のだけど我慢してね」

そう言つてタオルで首筋の汗を拭ってくれた。なんだか志保が、いつもより優しい気がする。

「熱はもう少ししたら下がると思つから、点滴に栄養剤も入れたけど何か食べる？」

首を横に振ると「そう」と言つて笑みを浮かべた。その笑顔は優しく美しい。

「あとは蘭さんに連絡して、介抱してもらいなさいね」



「蘭には連絡しなくていい！」

「どうして？」

「…心配かけたくない」

愛しの彼女には心配かけたくないが、私にはいいのか、と志保は呆れた。

自分の心配なんて新一にはどうでもいいのだろう。

新一を着替えさせる時に妙に顔が赤くなり、心臓がドキドキして中々うまくいかなかった。

新一に対して胸を痛める。

志保が時々そんな気持ちに悩まされるなんて彼は一生知らずに終わるのだ。

「じゃあ今晚は此処で休みなさい」

好きな人には格好つけてばっかの不器用な探偵を少し恨むような目で見て、新しい着替えを持ってくる為立ち上がる。  
その腕を新一は慌てて掴んだ。

「工藤くん？」

「あ…わりい。もうちょっと此処にいてくれねーか」

志保の腕を強く握る。

置いていかれるような淋しさが襲って、子供のように泣きそうになった。

傍にいて欲しかった。

「だいぶ弱ってるみたいね…」

ため息をついて諦めた志保は、新一の傍らに座った。タオルでまた汗を拭ってくれる。

新一はホツとして顔の緊張を解いた。でも、手を離さない。

「ちゃんと傍にいるから安心なさい。…全く。格好つけも不敏ね。私なんかより蘭さんのほうがいいでしょうに」

腕を離さない新一に再びため息をついて、布団を肩まであげて整えた。

新一はすぐ首を振る。

「ううん。宮野がいい」

志保の目が丸く大きくなる。

「な、何馬鹿な事言ってるのよ！熱あつて何言ってるか解ってないんでしょ」

志保はバツと腕を離すと着替えをとり部屋に行く。

ぼんやりした頭で新一はその後ろ姿を追いかける。

熱のせいでよく見えない。

無意識に手を伸ばす。

「宮野がいい…」

ぼたりと腕が力なく落ちる。

「何言ってるのよ馬鹿…」

志保は感情を振り切るように声を出した。

「ただの病人の戯言じゃない」

着替えを持って部屋を出る。

「馬鹿は私…」

こんな事で動揺してしまうなんて。

「どっどっ？」

点滴が終わり身体が少し軽くなったような気がする。

「うん。…いいみたい」

「じゃあこれ。また博士のだけど自分で着替えられるでしょ？ちやんとタオルで拭いてからね」

本当は着替えさせて欲しいと思ったが、志保はキッチンへ行っ  
てしまっ  
まう。

のそりのそりと着替え始める。

「…何やってるのよ」

戻ってきた志保が呆れた声を上げた。

脱いだまではいいが、新しいパジャマはちゃんとした場所に腕が通っていない。

ボタンも全開だ。

「全く……」

志保が一旦服を脱がしてタオルで拭き、パジャマを着せてボタンを閉めた。

目の前で一生懸命な顔をしている志保をじっと見て、新一は笑顔になる。

志保はそんな新一を横目で見て、肩で息をした。

「桃剥いたけど食べる？」

冷たく冷えた桃。

さっきからその甘いい匂いがした。

「うん」

新一は口をあーんと開けた。

「は？食べさせるとでもいうつもり？」

口を開けたまま新一は頷いた。

何処まで子供になってしまったのか。

からだは子供から大人になったばかりなのに、今はその逆みたいだ。一切れ切って口にいれる。

「冷たくて美味しい」

甘くてみずみずしい桃が口から喉を気持ち良く通っていった。  
新一が満面の笑顔になる。

志保は何度かのため息をついて、その無邪気な子供に優しく笑った。

「まだ熱が引かないわね」

喋られたり起き上がれたりしたので、解熱剤が効いたと思っていた  
がそうではなかったみたいだ。

体温計を置いて、血圧や心拍数など測り大丈夫か確認する。  
もう一度薬を投与しようか。

「もう少し熱があがりそうね。苦しい？」

「…大丈夫」

覗き込む志保の顔を見て、新一はまた志保に傍にいて欲しい気持ち  
になる。

手を出して繋いでほしいと言う。

「何処にも行かないで」

「…解ってるわよ。傍にいるから」

志保の優しい笑顔と声に安心したのか、新一は目を閉じた。

朝日が部屋を明るくして新一は目覚めた。

とてもすつきりした気分だ。

「ここ…博士んちか？」

自分の部屋ではない天井に気づく。  
変わった形の高い天井は新一の知るところ一つしかない。  
片手に温もりがある。

「み、宮野？」

新一は慌てた。

自分の手が志保の手を握っている。

そして新一の寝ているベッドに頭をのせて眠っていた。

そういえば昨日…頭がずっとぼーっとしていた。

あんまり覚えてないが、博士の家に来て倒れたみたいだ。

志保が看病してくれたのだろう。

どうして手を繋いでいるのかは解らないが。

「……………」

新一が横を向き肩のほうを見ると、丁度志保の寝顔が向き合うようにある。

長い睫毛が瞳を固く閉じ、規則正しい息をしている口元が少し開いている。

心がかがフワツと暖かくなった。

顔にかかった髪の毛を、手が繋がれた逆の手で直した。

ふわふわ柔らかい猫のような髪の毛は、朝日に当たり更に赤くなっている。

いつもは憎たらしい厭味を言う口元は小さい寝息を可愛く立てているので、新一はほほ笑みながらその唇をなぞった。

『何処にも行かないで』

『…解ってるわよ。傍にいるから』

頭の奥で自分と志保の声がした。

・・・？

胸が詰まるような甘い痛みが走る。

「ん…」

志保が身じろぎをして、新一は慌てて唇にやった手を離し目をつむる。

繋いだ手はそのまま。

志保は目を開けた。

「朝…」

志保は周りを見渡し繋いだ手を一瞬見て、新一の顔を覗き込む。頬や首筋を触り、熱を確認する。

新一の顔がまだ赤いようにみえて心配する。体温計を測り平熱に安心した。

眠っている新一の息も規則正しい。

志保は新一の顔を眺めた。

するとパチツと新一の目が開き、起き上がる。

「起きたの？具合は？どう？」

「…あ、ああ。…あ。大丈夫！」

新一の目が泳いでいる。  
顔は更に赤くなったようだ。

「そう良かったわ。顔赤いけど熱も引いたみたいだし」

ホツとした志保が笑顔を見せる。

その笑顔に新一は引き込まれた。

昨日この笑顔を何度も求めたような気がする。

「宮野：ありがとう」

「どういたしまして。だから…もうこれ離して」

繋いだ手を挙げた。

「わ、わりい！」

昨日の夜から繋いだ手が離れた。

新一はもう一つの手で、温もりのなくなった手を包んだ。

手が淋しいと言った気がした。

新一が志保を見た。

手が痺れたみたいで、片方の手で伸ばしている。

いつもの無表情で新一を見て、看病していた道具を片付け始める。

「宮野、本当にありがとう」

新一が御礼を言う。

さつきから胸のモヤモヤと甘い痛みがよく解らないけれど、志保に心から感謝する。



「新作バッグで手を打つわ」

「……………は？」

新一が間抜けな声を出した。

「楽しみね」

フツと笑顔で去っていく志保は聞く耳持たずだった。赤かった新一の顔は青くなっていた。

## お大事に（後書き）

またちよつと長めの話になってしまった。

もう一つのタイトルは無意識です。

この話の新一は、全部無意識の行動。

無意識に志保を求めている新一を書きたかったのです。

因みにここまでしてもまだ本当の気持ちは気づいてません。

君のために（前書き）

14・5才の悲哀です。

## 君のために

博士の家に上がってリビングに入ると彼女はいた。

大分伸びた身長と女性らしく円みを帯びた身体。赤みがかつた茶髪は肩の上で切り揃えられている。

背を向けても誰だかすぐに解った。

例え人混みでも一瞬で見つけられる自信がある。

彼女が振り向いた。

「…久しぶり。工藤くん」

「…灰原…」

五年ぶりの再開だった。

「元気そうね」

「オメーも」

テーブルには灰原が持ってきたお菓子と煎れたてのコーヒーが並ぶ。キッチンに背を向けて灰原が座り、その反対側に俺は座る。

博士はその間に。コの字の形だ。

「あの子達は？」

「アイツらも元気だよ」

「そう良かったわ」

久々に会ったのに、中々言葉が出て来ない。  
どうして急に帰って来たのか。

灰原も同じように言葉が出てこないのか、視線を下に向けてコーヒ  
ーカップを持ったままだ。

「哀くん。泊まる場所は決めてないんじゃない？今日はここに泊ま  
りなさい」

「ええ。博士がよければそうさせて貰うわ」

「よければって…何他人行儀なことを。遠慮する必要なんてないの  
じゃよ」

「ありがとう博士」

灰原が微笑むと博士は嬉しそうに笑顔になった。  
こんな顔は久々に見たかもしれない。

中学生になり、アイツら探偵団も中々顔を出さなくなった。  
博士は寂しかったと思う。

「じゃあ何か出前でも取ろう」

「久々に私に作らせて」

「本当か哀くん？」

「ええ。但しお肉無しのヘルシーなメニューでね。博士あまり痩せ  
てないみたいだし」

「そつ…そんな哀くん…。せつかくのお祝いが…」

情けない顔の博士に灰原はクスクス笑う。

昔と変わらないその態度に、五年もいなかったなんて信じられないような気持ちになった。

「冗談よ。腕を奮って美味しいものを作るわ」

「あ！」

と博士がキッチンへ駆け込む。

料理が苦手な一人暮らしの男の冷蔵庫にはまともなものがあるはずもない。

「出前しかないかのう」

「じゃあ私買い物に行ってくる」

灰原が立ち上がった。

「新一、お前さんも食べていくじゃろ？」

「ああ」

「それなら、哀くんと買い物行ってきてくれ。ワシは部屋の用意をせねばならんから」

「解った。行こうぜ、灰原」

「…ええ」

家を出て二人並んで歩き始めてからずっと無言。  
別れた頃より身長が伸びた俺は、灰原よりも頭が上にあつた。  
すると視線が合つて灰原は目を逸らした。

「身長伸びたのね」

「成長期だからな。まだ伸びるぜ。灰原は成長したか？」

ふざけて凝視すると、馬鹿じゃないの？と胸を隠して睨まれた。  
それなりに少し成長したようには見える。  
再び無言になつてお互い違うほうを見る。  
久しぶりに肩を並べて歩くのは、ほのかに照れ臭い。

「オメー何かあつたのか？」

急に帰ってくるなんてよっぽど何かあつたに違いない。  
あの時。組織を倒して薬の資料を処分され、二度と元の姿に戻れな  
いと判明した小三の夏。

灰原はこの街を離れる決心をした。  
何度も俺に詫びて泣いた彼女は肉体的にも精神的にも限界だつたに  
違いない。

赤井さんと日本を発つ時、人形のように感情を無くしていた。  
そんな灰原に一生懸命両手を振った。  
いつかまた戻つてくると信じて。

「蘭さん。結婚するのね」

「ああ」

「いいの？それで」

ああそれで灰原は…。

博士から電話か何かで聞いたのだろう。

「俺は心から蘭を祝福しているよ。蘭が幸せになるのが嬉しい」

迷いのない俺の瞳に灰原の瞳が揺れた。

歩く速度はゆっくりで、いつもの街が鮮やかに見える。

「…本当に…？」

「オメー。まだ俺が蘭を好きだと思ってるみたいだな」

「…だってあなた達はとても想い合ってた」

小学生が走って通り過ぎていく。

あの頃の俺達と同じくらいの年頃の子供達。

「もう全部終わった昔の事だよ。時が過ぎれば人も変わる」

「変わる？」

「蘭は今でも大事だよ。大事な幼なじみだ。でも俺は今江戸川コナ  
ンで、彼女はの同居しているお姉さん。」



「……………」

「蘭は大事な家族なんだ。だいぶ前から」

「家族…」

まだ納得してないのか、灰原は考え込んでいる。

本人からのアメリカからの連絡や赤井さんからの度々の報告で、灰原は少しずつ気持ちを整理し決着を着けたと聞いていた。

でも俺の事はまだだつたみたいだ。

「はつきり言うよ。もう俺にとって蘭は過去だ。女としては見ていない。灰原が気にする必要は全くないよ。俺の気持ちが自然にそうなつたんだ」

自然に気持ちが灰原に向いた。

ただその時の灰原は余裕がなかった。

俺を見る度辛かったに違いない。

だから俺は待つ事にした。

急に物分かりのいい人になって。

「オメーももう荷物を下ろそうぜ」

「荷物？」

「組織も工藤新一も宮野志保も過去の事だ。過去に捕われないで、今を見て生きないか？忘れるとは言わない。でも、もういいんじゃないか？」

「工藤くん…」

「俺は江戸川コナンだ。そしてオメーは灰原哀」

「私は…」

「戻って来いよ、灰原」

「…私はこの街に戻って来ても赦されるのかしら」

「赦すも何も、オメーの居場所は此処じゃねーか。博士もアイツらも待ってる」

笑いかけた俺に灰原は大きな瞳を潤ませた。

「俺も…ずっと灰原を待ってたよ」

「…」

「戻って来いよ」

柔らかい風が吹いて頬をかすめていった。

「うまそうじゃな」

テーブルに並べられた料理に博士は舌鼓を打つ。

「哀くん料理の腕前が上がったみたいじゃ」

「こんなに豪華なのは今日だけよ」

「え？」

「私が帰ってきたらずっと健康を考えたメニューだから」

「……哀くん！」

博士は泣きだした。

灰原が戻ってくる嬉しさと食事制限される複雑さと。

灰原は肩をすくめて俺を見る。

俺は灰原に笑いかけ、灰原は綺麗な笑顔を返した。

灰原が俺に笑顔を向ける為には、待つことが必要だった。

遠く離れても信じるしかなかった。

それも終わりを迎えたようだ。

これからはずっと傍にいる。

もう待たなくてもいい。

君のために（後書き）

良く解らない話だったかもしれない…。すみません。

## 熱帯魚（前書き）

新志ですが、新一は蘭と付き合ってます。

かなりのファンタジーでかなりオリジナルやっちゃってます。とても奇妙な話だと思います。要注意。話が長いです。

## 熱帯魚

熱に浮かされ  
着飾る

都会の熱帯夜は暑く何処までも続いていくようだ

「・・・志保？」

ざわめく雑踏の中で宮野志保に似た人を見かけた。  
隣人であり数奇な運命で出会い、他の誰とも共感できない同じ体験をした者。

しかし派手を好みとしない彼女である。  
あれは鮮やかなドレスを来ていた。  
ヒラヒラと揺れるドレスの裾。

(・・・まさかな)

人違いだ。

髪の毛の色が似ていたからそう思ったに違いない。  
夜なのに気温は下がらず蒸し暑い夜。  
頭も鈍っているのだ。

そういえばしばらく会っていない。  
いつも眠そうで、口を開けば可愛くない厭味を言う彼女を思い出す。

「新一、お待たせ」

店から新一の彼女である蘭が出て来た。

買い物に付き合っつてとせがまれた。  
いつも事件ばかりでデートもままならない。  
新一達は早めの夕食も済み時間のあいた数時間、ショッピングと言  
う名前のデートを楽しんでいた。

「新一？」

反応がない新一を見て蘭は首を傾げる。

「新一！どうしたの？」

「…あ。いや何でもない」

夏の夜はいつもよりもより人が沢山いて、皆居場所を探してさ迷っている  
ような気がする。

冬のように早く家に帰ろうと、足速に人は流れていかない。  
涼を求めてさ迷う。

新一と蘭はその人の群を縫って家路に帰っていった。

次の朝、布団を干している隣人を見た。

昨日の事が引つ掛かっているのか、朝早く目が冴えてベランダで隣  
の家を見る。

「おはよう」

声をかけると志保は驚いたように目を丸くした。  
すぐに彼女らしい不敵笑いになる。

赤みがかかった茶色の髪の毛に色白の肌は化粧つ気もなく、着ている  
服も地味な黒。

「あら、珍しいこともあるのね。あなたが早起きなんて」

「まあな。珍しい事ついでにそつち行つていいか？コーヒー飲みたい」

「うちはモーニングやってないわよ」

「いいじゃねーか。お隣りのよしみつてやつで」

「好きにすれば？」

そう言つて家の中にサツと入つてしまふ。

相変わらず素直じゃなく淡泊な女だ。と新一はいなくなった隣の家  
のベランダを少し見ていた。

大声で話してたので、玄関先を掃除してた近所の主婦がこちらを見  
ていた。

慌てて家に入り隣に行く支度をした。

「久しぶりじゃのお新一」

玄関では博士が迎えてくれた。

志保は迎えには来ない。

「二ヶ月ぶりだっけ？元気そうで良かった」

大学生になつて余りこの家に来なくなつてしまった。

昔から変わらないふくよかな体型の背中を追つてリビングに入ると、  
朝食のいいニオイがした。



「うめー。やっぱり和食だな。味噌汁お変わりしていいか？」

朝食を食べるのも久々だが、和食なんてどのくらい振りだろうか。朝からお腹にガツンと来てそれでいて厭味がない。

和食は身体が求めていたものという感じで素直に入っていく。

「志保さんの味噌汁は絶品じゃぞ」

「いいなー博士は」

「工藤くんは朝ご飯を彼女に作って貰ったらいいじゃない」

「なんでだよ。朝まで一緒にいねーし」

「……」

三人に微妙な空気が流れ、黙々とご飯を食べる。

「志保朝ごはん旨かった。サンキューな」

出かける時間になり、コーヒーを飲みきって立ち上がる。

「どういたしまして」

小さく微笑むとカップを片付けてキッチンへ消えて行った。送ってもくれないか。

「じゃあな」

と家を出る。

例の如く事件が起きて解決した帰り道。

相変わらず夜は蒸し暑い。

終電過ぎの人まばらな街に、ヒラヒラカラフルなドレスの女。

あの日から数日置きに何度か見かけた。

いつも見つけたと思っただら、人混みに紛れてすぐに消えてしまう。

男と話し、別れて歩きだした。

「…やっぱり志保に似ている」

後をつけた。

その鮮やかな色は、赤みがかかった茶髪と良く合っている。  
人混みでも目立つ。

良く知っている彼女とは雰囲気は正反対だが、何故気になるの  
だろう。

噴水のある公園に入っていく。

「え？」

ジャバジャバと噴水に入り身体を濡らしている。

泣いていた。

遠くから見ているし、公園の頼りない明かりなので詳しくは見え  
ないが、泣き顔は志保そのものだった。

公園入口の木の影から、乗り出してその女を見る。

雰囲気は別人だが、あれは志保なのだろうか。

「嫌だ、怪しい！」

通り掛かりの女子高生が変な目で新一を見ていった。  
新一は知らん顔をした。  
視線を公園に戻す。

「！」

公園には誰もいない。

姿形もなかった。

ピチャンと水音が一度して振り返っても、静かな噴水があるだけだった。

彼女は何処へ消えたのか。

次の日。博士の家で朝ごはんを食べる。

「毎日タカリに来るつもり？」

不機嫌そうな彼女を凝視する。

夜の彼女とはやはり違う。

「何よ」

「昨日夜中に公園にいた？」

「公園？昨日は外に出てないわよ」

透き通った宝石のような瞳をパチパチさせて、首を少し傾げる。  
赤みがかかった茶髪が揺れた。

「…そうか。志保に似た人を見かけたから」

新一はやっぱりあれは人違いかと思いつつも、何処か引つ掛かっていた。

博士にそれとなく聞いてもやはり志保は家から出ていないらしい。

熱帯夜は今日も都会を包んでいる。

夜に隣の家を二、三日観察しているが動きはない。

あれは志保じゃない。

なのに、どうしてこんなに気になるのだろうか。

カラフルなドレスが脳みそに染み付いて消えない。

事件もないし蘭とのデートが出来るチャンスなのに、それを断って自分は何をしているのだろう。

静かな隣の家は相変わらずで、観察は諦めてベッドに転がるが眠れない。

「コンビニでも行くか」

纏わり付く湿った空気は昼よりはマシだが、気分を深く沈ませる。

時折吹く風が、ほんの少し心地良くさせた。

これでもかと言うくらい明るいコンビニは夜に浮いて人を待っている涼しい店内はやる気のない店員と、幾人かの生気のない人がいるばかり。

脳天気な店内放送が流れる。

余り興味ない雑誌をパラパラめくり、ふと通りに目をやるとカラフルなドレスが見えた。

「志保!!!」

急いで店を飛び出すのが、右も左もそんな色はなかった。

「綺麗」

連日朝食に通いつめていたので、志保の買い物に付き合う暇になつた平日の昼間。

もちろん支払いもさせられる。

デパートは涼しくて、すぐには出たくなくなる。

ペットコーナーの熱帯魚が涼しそうに泳いでいた。

「いいわね」

彼女にしては珍しく興味を持つたみたいだ。

しばらく二人で色とりどりの熱帯魚を見る。

その色とりどりに、ふとあのドレスの女を思い出した。

何度も見かけては消える志保に似た彼女。

噴水で泣いていたあの顔は、今横にいる志保そのものだった。

水槽を見つめる志保が急に消えそうに感じて、新一の心臓がドキリとした。

「行きましょ」

志保は熱帯魚を惜しみつつ横目で見ながら歩きだした。

その時蘭から電話が来た。

「え？今から？」

蘭が暇なので家に来ると言う。

説明する前に志保は早足で歩き出した。

「早く帰りましょう」

電話で察知したらしい。

相変わらず感じがいいし、蘭の為に空気を読もうとする。

数時間蘭と過ごして夜中に家へ送る。

その帰り道。

生温い空気の中、またもやあのドレスの女を見掛けた。  
そして確信する。

「志保だ」

薄々感づいていたが、何人もの男と接触していた。  
そしてまた違う男と一緒にいる。

「志保！」

腕を掴むと驚いた彼女が新一を見た。

初めてみる化粧をした志保は切ないくらい輝き綺麗だ。

あの噴水の公園に志保を連れて新一は来た。

二人して無言のまま。

噴水の脇に志保は座る

カラフルなドレスが水面に映りゆらゆら揺れる。

「オメーどうして……」

「あなたには関係のないこと」

感情のない声に、背中に氷を入れられたようにゾクリとした胸がさつきから凍ったように痛い。

「関係…ないって…:…こんなほつとけねーだろ！」

新一は志保を見ているが、志保は新一を見ようとしもしない。ただ水面を見つめている。

「……………」

「なあ、どうしちまったんだ？何か悩みでもあるのか？」

「軽蔑でも何でもすればいい。私の事は放っておいて頂戴」

「志保！」

「あなたには解らない！」

宝石のような瞳から涙が一筋流れる。

暗い夜に光るそれは小さく地面に砕けた。

いつもと違い化粧をした顔は涙によって更にその美しさを増した。

カラフルなドレスが一際輝いたような錯覚に陥る。

震える細いその肩に触れなくなる。

「どうして…」

「え？」

「あなたには知られたくなかった」

瞬きをした一瞬、志保の身体が後ろに下がって噴水に落ちたように見えた。

「志保？」

新一が驚いて辺りを見回す。

公園には彼一人。

他には誰もいない。

その瞬間、彼女は忽然と消えてしまった。

志保が消えて三ヶ月が経った。

あれから博士も新一も一生懸命探したが手掛かりは全くない。目の前で彼女は消えた。

新一は毎日その事を考えていた。

「ねー新一、たまには何処か出掛けよう？」

蘭が心配そうに新一を気遣う。

新一はぼんやりしながらも蘭と出掛けた。

そこは志保と出掛けたデパートだった。

ペットコーナーに自然と足が向かう。

あの時、熱心に熱帯魚を見つめていた志保。

「うわー綺麗ねー」



蘭が声を上げた。

そしてその向こうの犬猫がいるコーナーに気をとられた。子犬子猫は愛らしく人気だ。

新一は再び水槽を見る。

ユラツとあのドレスが見えた。

「！」

新一は追いかける。

必死に追いかける。

「志保！」

青い空間が水の中のような廊下を走る。

「志保！！」

白く華奢な腕を掴んだ。

振り向く志保はあの日と同じく着飾っていた。

「どうして追いかけてきたの？」

悲しそうに志保は新一を見た。

「あなたは私を忘れるべきだったのに」

「バーロー！なんでそんな事いっただよ。オメーが居なくなっただけ心配したと思ってるんだ！！」

「何も言わなくて博士には申し訳なかったと思う」

志保は俯く。

「今まで何処にいたんだよ？博士も心配してるから帰ろっ」

「帰れない」

「どうして!?!」

新一が声を荒げる。しかし志保は深く暗い瞳を新一に向けた。

「あなたが好きだわ」

「え?」

突然の事で新一の頭は真っ白になる。

今なんて言った?

「あなたと蘭さんが幸せになるのは嬉しいけど辛かった。ずっとずっと苦しかったの。」

工藤くんを好きだったから」

あの日と同じ宝石のような瞳から宝石のような涙が流れる。

無理に作った笑顔で志保は笑う。

「あなた達を見かける度に胸が張り裂けそうだった。あなたが蘭さんとの事を話す度に息が苦しくて……だから逃げるように夜を歩いたの」

新一の胸がギシリと痛んだ。

夜の街で見掛けた志保を思い出す。

「でも、あなたに見つかった。壊れてしまった。もう全て手遅れになったの」

「…何がだよ」

「宮野志保は死んだわ」

空気が一瞬止まったような気がした。  
しばらくの沈黙を新一は破った。

「…はあ？何言ってるんだよ。オメーは此処にいるだろ！」

「私は此処にいる。でも宮野志保は死んだの。だからあなたは忘れなさい」

「意味わかんねえ！オメーの言ってる事がさっぱり解らねえ！」

「解らなくていいわ。忘れなさい」

ヒラリと艶やかなドレスをひらめかせ志保は向こうを向いた。

新一は慌てて肩を掴む。

そのまま抱きしめた。

「行くな！」

行かせては行けないと直感的に感じた。

「離して」

「離さない。一緒に帰るまで離さない」

「あなたまで囚われてしまうわ」

新一が囚われているとしたら、あの日街で志保を見掛けた時からで  
…。  
すでに手遅れだ。

「お願いだから離して。あなたには待つてる人がいる。大事な…」

「オメーにだって待つてる人がいるじゃねーか。博士に…俺が！」

背中を向けていた志保が新一の腕の中で振り向く。  
そして新一を深く暗い瞳で見上げた。  
甘い香りがして新一はクラツとする。

「あなたの1番は私じゃない」

1番…

新一の1番は蘭…蘭？

何故だか疑問形になった。

彼女であるはずの蘭の顔が浮かばない。

そういえばしばらくまともに蘭の顔を見ていなかった。  
ずっと志保の事を考えていたからだ。

「私が居なくても大丈夫。何も変わらない」

志保は新一の腕の中から飛び出す。

しかし新一はまた志保の腕を掴んで抱きしめた。

「やめて！駄目よ！」

志保が暴れる。

ヒラヒラとドレスが揺れた。

甘い香りが強く辺りに撒き散らされる。

「変わる！変わりすぎて頭が変になる！志保が居なくなるのは嫌だ  
！！」

新一は叫んだ。

「解んねーけどオメーが居なくなっって悲しくて辛かった。ずっと捜してた。ずっと考えてた。オメーが居なくて毎日、毎日」

「駄目よ。そんなの……」

志保は頭を強く横に振った。

「夜の街で見掛けた時から志保の姿が焼き付いて離れないんだ！一緒にいた男達が許せない！ぶっ殺してやりてえ！！」

「止めて！もう止めて！」

「オメー、さっき俺を好きだって言ったよな？」

「……」

ピタリ志保の抵抗が止まる。

「嬉しかった。スゲー嬉しい。それで解ったんだ」

「言わないで！」

志保が怒鳴ったが、新一は笑顔で志保を見る。

志保の瞳が新一を見て揺れた。

「俺も志保が好きだ。離れたくない」

「…ああ…どうして…あなたには大事な人達がいるのに」

志保が悲しく絶望した。

「蘭の事は後でなんとかするよ。だから帰ろう」

「無理よ」

「え？」

志保の声色が変わり、妖艶な雰囲気彼女の身体から発せられる。

「だから言ったのに。あなたは自分から踏み込んでしまった」

深い海の色の宝石のような瞳と赤く光る唇。

甘い香りとともに、新一の頬に手を触れる志保。

新一の喉が鳴る。

「もうあなたも戻れないのよ」

志保の瞳から真珠が一粒落ちる。

新一はその顔を両手で挟み、吸い込まれるように唇を合わせた。

「新一？あれ…いない。何処へ行ったのー？」

蘭が水槽ひしめくこの場所に戻って来た時には、新一の姿はなかった。

「何処行つたのよ。新一？」

蘭は新一を捜しに歩きだした。

その後ろの水槽の一つに、二匹のカラフルな熱帯魚が泳いでいることなんて気づきませずに。

## 熱帯魚（後書き）

すみませんすみません。なんじゃこりゃー？って話ですみません！！  
妖艶な志保とそれに囚われる新一を書きたかったのです。（の割に  
はその部分の描写はすいぶんあっさりですが）

二人は一体どうなってしまったのか？（ただの魚になりました）  
これはハッピーエンドでありバッドエンドなのかもしれない。

ここまでお付き合い下さりありがとうございます。

読んで下さる方々に感謝します。

次はいつも通りになる…はずです。予定です。…未定です。



黄昏れ時に蝸の声（前書き）

コ哀ですが恋愛は殆どありません。

## 黄昏れ時に蝸の声

夏の日の夕暮れ。

探偵団と博士は田舎に来た。

博士お決まりの車の故障。

道の真ん中で立ち往生していた。

親切な夫婦が車で通り掛かり、歩美光彦元太を先に載せて行った。

三人を下ろしたら次に迎えに来てくれるらしい。

近くの山で蝸が鳴いている。

良く聞く昭和の少年時代の夏休みを思い出す、一匹の風流な鳴き声ではない。

山に生える木のあちらこちらで競うように鳴いているのだ。

一呼吸置いては鳴きつづけ、一匹が鳴けは連鎖する。

ミンミンジージーと違う蝉の声や田んぼから大合唱する蛙の声とで賑やかだ。

蝸の代表的な鳴き声は「カナカナカナ」と言われているが、コナンの耳にはそう聞こえない。

高い声で「キキキキ」とか「ケケケケ」と笑い声のようにも聞こえる。

日が落ちて、空気が青い。

その声も何処か響いて不気味なような気がしてくる。

見渡す山の緑も濃くて、その鳴き声ますます夜の闇へ連れていく案内人のような不気味さを醸し出した。

コナンの隣に立っている哀も賑やかな蝸の声を聞いていたらしい。

「蝸の鳴き声は、亡くなった者があの世からこの世の者に呼びかけている呼び声なんですって」

小学一年生の日本人とイギリス人ハーフの可愛らしい顔で、らしからぬ表情をし。

鈴が転がるような透き通る声で、不気味な事を言いはじめた。

「だから同じとき・同じ場所で鳴き声を聴いていても、人によって聴こえる力ナカナカナの数が違うらしいの。死期を察した人にはどう聞こえるのかしら？」

遠い山を見ながら哀が言った。

コナンは眼鏡の内側で薄く目を開けて哀を見る。

哀は冗談よとはぐらかしながら、いつも死期を考えているような言葉を発する。

組織から逃げている身なので仕方ないのだろうが、後ろ向きの彼女の考えにコナンは頭を抱えてしまう。

哀に言わせれば、同じ組織から身を隠す立場のコナンの前向きさの方がおかしいらしいが。

「オメーなあ……」

コナンと哀の立っている後ろでは博士が車を見ている。

やはり駄目らしくコナンがちょうどため息つく前に、ため息をついた。

「死者の声ならお姉ちゃんが私に呼びかけているかもしれないわね。なんて言ってるのかしら？」

「灰原…」

灰原の姉、明美さん。

コナンの胸に残る傷が疼いた。

助けられなかった女性<sup>ひと</sup>。

哀の目が伏せられて光を失う。

「志保、あなたはあなたの人生を楽しく生きなさい」

高い声がして哀はハツとする。

「あと、少し暗いから明るくなりなさい。笑ってれば可愛いん…」

「…ちょっと」

哀がコナンを睨む。

コナンが声を変えて話していたのだ。

見つけたコナンはアハハと頭に手をやって笑って胡麻かした。

哀はため息をついて再び蝸の声に耳を傾けた。

「カナカナカナ…」

それはただの蝸の声。

死者からのメッセージではなく、夏の生物の精一杯生きる声。

「精一杯生きなきゃ…」

お姉ちゃんのも。

コナンが哀を見つめた。

周りにはもう暗いので詳しい表情は見えないが、哀の瞳には光がある。

「殺されるまではね」

コナンはずっこけた。

哀はクスクスとコナンを見て笑う。

その笑顔でコナンも笑う。

道の先に車のライトが見えた。

遠くで虫と鳥の音がする。

この夜の闇のように先は見えないけれど、隣にいる人さえいればきつといつか光は見つかる。

「行こうぜ灰原」

「ええ」

並んで二人は光に向かって歩いていった。

「ワシの事忘れてる…」

ぼつん…と老人が一人取り残されていじけてしまう。

黄昏れ時に蝸の声（後書き）

驚きです。気がついたら50回目。

こんな未熟な文章達を読んで下さってありがとうございます。

何処まで書けるかわかりませんが、出来る限りコ哀と新志物語を作り考えていきたいと思っております。

## 夏視線（前書き）

新志です。付き合っておりません。

## 夏視線

アスファルトからの熱気で身体が圧迫される。

炎天下の昼間に道を歩く地獄。

今日は曇り空で昨日より暑さは和らぐでしょうと言っていた天気予報はなんだったのか。

志保は前に下がりすぎた帽子を直して、歩く速度を速めた。

タオル持って汗を拭くサラリーマンが通りすぎる。

プールに行くのか水着袋を持った小学生が走っていく。

部活帰りの中高生は団手でアイスを食べている。

信号待ちの中年女性は紫外線対策で全身布を纏わせ周りを更に暑くさせていた。

その傍を夏の着物を着て日傘をさす女性が涼やかに通り過ぎる。

「志保！」

聞き慣れた声に呼び止められて夏スカートを翻して振り返る。

「工藤くん」

隣に住む高校生の工藤新一が制服でこちらを向いていた。部活帰りの団体から飛び出てこちらに笑顔で歩いてくる。

「何処いくんだよ？」

「家に帰るのよ」

「じゃあ一緒に帰ろっぜ」



「嫌よ。なんであなたと」

「同じ方向なんだからいいだろ」

新一はそういうことだから、と集団に手を振る。

好奇心旺盛の年頃な彼らは、暑苦しい視線を新一と志保に向けながら騒いでいる。

(誤解されてなきやいいけれど…しない訳ないか…)

志保は暑さにどうでもよくなり考えるのをすぐ止めた。

どうせ何噂になっても彼等とは接点もないし、その噂の洗礼を受けるのは新一自身だ。

ただのお隣りさん。

志保と新一はそれだけの関係だ。

「これ半分やるよ」

二つに分かれたアイスの一つを新一は志保に渡した。

部活帰りに皆で買ったのだろう。

さっきの集団もみんなアイスを持っていた。

猛暑の暑さでそれは既に溶けている。

「ありがとう」

志保が口にすると、冷たく甘い液体になりかけたものになっていた。

「買い物してたのか？」

志保の持つ荷物を見て新一が言う。

「ええ。こんなに暑くなるなら出掛けなきゃ良かったわ」

吸うようにアイスを飲み込む。

新一はじつと隣の志保を見る。

「オメーって全然汗かいてないよな。暑さなんて気にならないんじゃないかねーの？」

「何言ってるのよ。暑いものは暑いに決まってるじゃない」

横目で睨むように志保は新一を見た。

まるで志保がロボットか何かとでも言うのか。

「そっか？」

と新一は少し考えて手を伸ばし、志保の背中を触る。

志保は驚いて飛びのいた。

「何するのよー！」

「本当だ。やっぱり汗かいてるな」

触れた手が湿ってるのを確認すると、新一はアイスを食べるのを再開した。

それはすぐに無くなり「暑い」といいながら額のあせを拭う。

志保の熱が更に上がり鼓動が早くなっているのは驚いたせいに違いない。

志保はそう思いこもつとした。

原因を作った当の本人は、悪いとも思わない平然とした態度で志保はムツとした。

「今度触つたら、ただじゃおかないわよ」

眼球一杯に力を入れて睨む。

「…ただじゃおかないって具体的には？」

新一がニヤリとする。

「…」

「なー。具体的には？」

志保を覗き込み顔を近づける。

新一の予想外の反応に志保は言葉が出て来ない。

暑さのせいか、いつもはすぐに出てくる毒が浮かばない。

新一は更にニヤついて、志保の右首筋に手を触れた。

志保は固まったまま動けない。

「あーあまた触っちゃった。ホラここも汗かいてる」

ツツツと首筋を移動する指に、志保はビクツと反応した。

新一は企むような視線で志保を見つめる。

志保は息が出来なくてクラクラした。

少ししか出ていない唾液を飲み込んで喉がなる。

「こんな事したらどんな、ただじゃおかない事、になるのかな？」

ニヤケた新一の顔が一気に近づいて唇を奪われた。  
新一の熱い唇が一度強く志保の唇に吸い付いて、何度も角度を変えてくる。

「…ンッ」

灼熱が志保を焼き尽くす。

食べたばかりのアイスの甘さなのか、沸き上がる甘い気持ちのせいなのか。

その激しいキスが蕩けるように甘い。

頭が真っ白で抵抗さえ忘れていた。

「…ちょっとした出来心で…」

博士の家の地下室。

新一が懇願して謝るように正座をしている。

しかし志保の氷のような冷たい視線を向けられ黙り込む。

「ただじゃおかないって言ったでしょ」

手に持つのは怪しく光る注射針。

表情のない顔が不気味だ。

手足を拘束されて新一は顔を青ざめた。

「存分に実験台として活躍して頂戴ね」

「わあああ。ごめんなさい！ごめんなさい！！」

新一の絶叫が夏の空に吸い込まれていった。

## 夏視線（後書き）

たまには新一がうわてに…と思って書いたらやっぱり志保の勝ちに。  
何故かいつも情けない新一ばかりだ…。

## 時がゆけば（前書き）

コ哀ですが歩美が主人公。中学1年生です。

## 時がゆけば

どうしてかなあ？

お互い二人共、同じ気持ちでいると思う。

同じ目でお互いを見てるのに。

どうして微妙な距離のままなんだろう？

「あのお二人はとてもよく似ています」

前に光彦くんが言ってた。

幼い頃から、私達三人と違って二人はとても大人びていた。家庭の事情だったのか、それは解らない。

二人共両親と住んでいないし。

家庭の話はほとんど聞いたことがない。

昔から話す言葉も難しく、博士とか大人と対等に話してたような気がする。

時々二人だけしか解らない会話をしたり。

いつも私達三人が無邪気に騒いでいるのを、後ろから夫婦のように見守っていたわ。

そう。

同じ歳なのに、子供か年下の弟妹を見るようだった。

「歩美、帰ろうぜ」

同じクラスのコナンくんが声をかけてくる。



皆が待っている待ち合わせ場所に並んで向かった。  
隣を見上げる。

（また身長が伸びたような気が…）

中学生になってからコナンくんは身長がどんどん伸びはじめている。  
その見た目から入学してすぐにモテていたけれど、最近はさらに凄  
い。  
幼なじみで同じクラスの私は勘違いされて、何度恨みを買っただろ  
う。

（確かに初恋の人ではあるけれど）

幼い小学生の時、コナンくんは私のヒーローだった。

賢く行動的で運動神経もよく、いつも皆を守ってくれて優しい。

正義感溢れる彼は格好良かった。

それは今も同じだけれど、恋愛の気持ちはもうない。

初恋の人だから、甘酸っぱい気持ちがないと言ったら嘘になるけ  
れど。

いつからだろう？

彼がいつも見ている人に気づいたのは。

「歩美？どうした？」

ポーっとしてたから疑問に思ったらしい。

顔を覗きこまれた。

「なんでもない。あ、もうみんないるよ！」

待っていた三人に走り寄る。

「…灰原どうした？」

一見いつも通りの表情に見えた。

後ろから来たコナンくんがいち早く哀の異変に気づく。相変わらず哀しか目に入らないみたい。

「一昨日灰原さんにフラれた先輩が、しつこく誘ってきたんです」  
代わりに光彦くんが答えた。

「俺達が追っ払ってやったけどよ」

最近また身体を大きくした元太くんが得意げに言った。

「灰原さん容赦ないですからね。普通はすぐ諦めるんですけど、たまにしつこい人がいますから」

経験者だからなのか光彦くんの言葉には説得力がある。  
小学生のとき光彦くんは哀に憧れていた。

母親がイギリス人らしくその容姿は子供の時から何処か違っていた。  
透き通るような白い肌と、赤みがかった茶髪。  
切れ長の大きな瞳は、翡翠色した宝石のよう。

鼻も厭味なく高く、ピンク色の唇も厚くも薄くもなくちょうどいい。  
美人。

小学校高学年から美人に成長し始めて、哀は注目されている。  
目立つ事が嫌いなのにその見た目は派手なので、中学ではそれで嫌

な目にあっているみたい。  
告白されて振り、振った男子に恨まれて、時々告白してきた男子を  
好きな女子にも恨みを買って。  
哀を見るとモテる女も大変だなんて思う。  
ちよっとだけうらやましいけど。

「なんかあつたらすぐに呼べよ」

コナンくんが哀に言う。

「大丈夫よ」

哀はそっけなく答えた。

コナンくんは肩をすくめてみんなで苦笑いをする。

「彼氏を作ればトラブル減るのに」

「え？」

哀が不意をつかれたような顔をする。

男子三人は前で何かの話題で盛り上がっている。

「彼氏作っちゃえば、変な男も寄ってこないよ」

私はもう一度言う。

ちらっと前を見た哀は、私に視線を向け小さい声で話す。

「歩美…前も言ったけど私は江戸川くんとは…」

何度か哀とは話した事がある。

ほとんどは私の恋愛話なのだが、二人を見て業を煮やした私が何度か話題にして聞いたのだ。

返事はいつも曖昧で、最終的には

「私には彼を好きになる資格がないのよ」

それは既に哀がコナンくんを好きだということと同じ意味になるのだが、哀は認めようとしなかった。

(資格って何よ？恋愛に資格なんて必要ないわ)

昔から哀はコナンくんが好きなはずなのに。

何に遠慮して、何から逃げているのだろう？

自信がない？

二人ともお互いの態度を見れば一目瞭然なのに。

哀はそもそも恋愛なんて柄じゃないとかなんとかいつも胡麻かす。

「別にコナンくんの事なんか言っていないわよ。哀はより取り見取りじゃない」

目を丸くして首を傾げ私を見る哀は何処か幼い。

「カツコイイ先輩とかさー軽く付き合っちゃえば？」

私は時代劇の庄屋のような悪い顔で哀を見る。

「嫌だったらすぐ別れればいいんだし。ほら、この間バスケット部の副部長に告られたじゃない？あの人結構モテるんだよ」

「いいわよ別に」

哀は興味ないと手を横に振る。

そして思いついたように横目で私を見た。

(あ、反撃してくるな)

と直感した。

「円谷くんでもいいのかしら？」

…やっぱり。

「あーいー？」

「冗談よ」

半目で睨んだ私に、クスクスと笑い満足気。

「でもさー。私が哀ならモテライフを満喫するけどなー」

「興味ないわ」

「いやいやもつたいない」

なんだかさつきから私オヤジになったようだ。

「…もつたいないか」

おや？

哀が意外な反応を見せた。  
もしかしてその気になったとか？

「そうよ。私達は若いんだから色々な経験しなくちゃもったいない」

「…まるであなたのお嬢さまみたいな事いうのね…」

「え？」

「なんでもない。…そうね若いんだから色々な経験しなくちゃね」

「誰かと付き合う気になった？」

「考えておくわ」

クスクスと笑いながら私を見る哀に、またはぐらかされたみたいだとため息をついた。

ふと気がつくとコンビニに元太くんが食べ物を買いに店の中において、コナンくんが光彦くんが入口で待っていた。

コナンくんがこちらをじっと見て、哀に近づいてきた。

「歩美ちゃん」

光彦くんが私の腕を引っ張る。

「何？」

「また灰原さんに余計な事言ってたでしょう？」

「あれ？聞こえてた？」

「ええ。若いから色々な経験しなくちゃって…。歩美ちゃんがそんな考えをするとは知りませんでした」

半目で光彦くんは睨んでくる。

「歩美ちゃんは告白されたら経験の為に付き合っただけですかね」

「ち、違うよ。あれは哀を刺激しようとして出た言葉のアヤで…」

夏休みにプールか海へ行つて、二人でナンパされてみようかとなんて、ちよっとしか思っていないから！

と余計な事を頭の隅で考えて、光彦くんのご機嫌を取る。

「私には光彦くんしかいないよ」

「……………」

赤くなった光彦くんが可愛い。

私がニコニコ笑うと、コホツと咳をした。

「…まあ、それは置いとくとして。歩美ちゃん、あの二人は長い目で見守るうと決めたくないですか」

「うん。そうだけど…やっぱり焦れっなくなっちゃって」

「コナンくんも充分考えているんですよ。あんまり慮めないで下さい」

「そんなつもりじゃ…」

ちらつとコナンくんを見ると余計な事をしたなと睨んでいる。  
へへっとかまかして笑うとため息をつかれた。

「俺、彼女と帰るから。また明日な！」

「ええ？」

コンビニから出てきた元太くんの爆弾発言に皆驚く。

隣にはかわいらしい女の子：あれは柔道部のマネージャー？

コナンくんが隣の哀に聞く。

「オメー知ってたか？」

「知らなかったわ」

「僕だって知りませんでした！」

「私もよ。明日元太くん問い詰めなくちゃ！」

後は元太くんの話題になって、私はさっきまでのことは忘れていた。

「しっかし驚いたな。元太も知らないうちに彼女作るなんてよー」

コナンが頭の後ろに手をやってソファアに座る。



「ええ。縁遠いタイプかと思ってたけど」

哀が煎れたてのコーヒーを持って来て座る。  
制服のまま二人はリビングでコーヒーを一服。

「彼等もいつまでも子供じゃないのね」

さつき歩美と話していた事を思い出す。

妹みたいな存在だった歩美は最近姉のように世話を焼いてくる。  
随分年下なのにいつの間にか成長して追い越されてしまった。

時だけ過ぎて自分だけ変わらなくてうずくまっている哀を、歩美は  
心配なのだろう。

「もったいない…か」

もう一つの人生を生きて  
数年。

（私達は若いんだから）

子供から大人になる途中。

（色んな経験しなくちゃ）

哀が呟いた一言にコナンは反応した。

「俺以外の誰かじゃ駄目だぞ」

「…」

「なあ。灰原…」

コナンが哀の横に座る。

「おはよう!」

今日も朝からいい天気だ。

光彦くんが迎えに来て一緒に登校する。

道の先にコナンくと哀が歩いているのが見えた。

「おはよう!」

二人は笑顔で返してくれる。

「あとで元太くんに突撃ね!」

朝練している元太くんはもう学校にいるはずだ。

私は元気に歩き出す。

「歩美!」

コナンくんが私を呼んだ。

「ありがとうな」

「?????」

コナンくと哀が笑顔だが、私には意味が解らない。  
光彦くと顔を見合わず。

「どうということ？」

聞こうとしたら二人が先に歩きだした。

「ちょっと！」

「もしかして…！」

光彦くんの咳きは私の耳には聞こえなかった。  
二人を追いかけて私は走りだした。

時がゆけば（後書き）

見切り発車な話になってしまった…

夜花（前書き）

付き合っている新志です。

## 夜花

ドドーンと地を揺らして音が鳴る。  
数秒置いて闇のキャンパスに花が咲き、パリパリと火の光の粒が弾けて消えた。

夏の夜空の風物詩。

花火大会。

この時期は日本の何処かで毎日上がっているだろう。  
日が沈んで間もない西の空に夕焼け色がわずかに残り、それが段々白く青く濃くなつて夜が始まる。

花火大会会場には人が沢山集まっていた。

浴衣に身を包んだ新一と志保が来たのはそんな時間。  
既に身動きがままならないほどの人、人、人。

遠き懐かしさを思い出させる放送。

道端には屋台もひしめきあつて、人気の屋台には行列が生まれさらに人を密集させていた。

「大丈夫か？志保？」

新一が人に押され気味な志保を気づかう。

元々人混みが苦手な志保だ。

人にぶつかり新一と離れそうになる。

「なんとか大丈夫そう。…だけど凄い人ね」

髪の毛を結びあげた頭を動かし辺りを見る。

襟足の後れ毛が色っぽいうなじが見えて新一はドキリとする。

母、有希子に無理矢理着替えさせられて志保が登場した時も、いつもと違う清楚な色気にボーっと見とれてしまった。それを指摘されてからかわれても、穴が開くほどじっくり見てしまった。

それくらい志保が可愛かったからだ。

「ほら」

志保の手を取り、新一は自分の腕に絡ませた。

「こつしたらはぐれないで済むだろ」

「…」

志保が少し顔を赤らめた。

その時、大きな音が轟いて花火が始まる。

「スゲー」

「ええ本当」

新一志保だけではなく周りの歩く人々も足を止めて見上げる。

色とりどりの大輪の花が空に幾つもあがる。

お腹に響くほどドーンと音が鳴り響く。

菊のように開き柳のように流れる花火。

見上げる志保の顔が花火に照らされて明るく見える。

その笑顔に新一は来て良かったと思う。

東京を抜けだして、地方で行われる打ち上げ数が多くて有名な湖面

の花火大会に来ている。

自宅でもいつも通り新一と志保は軽口から口論になりかけた真夏の昼間。突然両親が帰ってきた。

両親の神出鬼没は既に慣れていたが、いきなり花火を見に行くと連れてこられたので二人で顔を見合わせ抵抗した。

いつ予約したのか、湖沿いのホテルの最上階の特等席が待っていた。そしてこれまたいつ作ったのか、特注の浴衣に着替えさせられる。

有希子と志保はお揃いの浴衣。

新一と優作は色違い。

「姉妹みたい？」

とはしゃぐ母親を白けた目で見ながら、新一は志保とテラスに出る人々が湖に向かって集まっっていく。

都会にはない涼しい風が吹いて心地いい。

新一が渡してくれた飲み物を一口飲んだ。

「なんだか信じられないわね。さっきまで猛暑の東京にいたのに……」

新一の返事が無く、浴衣を着た志保を見ていたので志保が決まり悪そうに聞く。

「…変？似合わない？」

頭をブンブンと振って慌てた。

「むしろ似合いですぎてヤベーよ。すっげー可愛い」

「……」



志保が顔を赤くし笑顔になる。

「ありがとう。工藤くんも…す」

と言い終わらないうちに、母親がわりこんでからかってきた。ここにいると邪魔される。

新一はすぐに戻るからと言って志保を連れ出した。

有希子が騒いでいたが、無視して下に降りたのだった。

花火は次々と打ち上げられる。

一段落するとスポンサーの名前を読み上げる放送の声。

次のテーマを説明し終わると再び花火が上がる。

新一と志保は人混みから抜けだし、小さなスペースを見つけて二人で立つ。

組まれたままの腕はそのままに花火を見上げる。

「こんなに綺麗な花火見たの初めてよ」

新一の耳に口をよせて志保が珍しく興奮したように言う。

「俺も」

「素敵な夏のプレゼントね。あなたのご両親に感謝しなくちゃ」

笑顔を向ける志保に新一の胸がキュウと締め付けられる。

彼女がこんな笑顔が出来るようになったのだという嬉しさと、その笑顔が自分に向けられている喜びと。

何より志保が愛おしくて仕方ない。

「志保…」

新一が見つめているのに気づいて、志保は新一を見上げた。

「工藤くん…」

二人同時に目を閉じてキスを交わす。

一際大きい花火が上がリ、二人を照らした。

そして二人を邪魔するように母親から電話が入る。

「わあーっ たよ。今から帰るから。え？タコ焼きに焼きそばにわたあめ？今から夕御飯食うんだろ？…ああハイハイ」

新一がため息をついて携帯を仕舞う。

「気分味わいたいから買ってこいって」

クスクスと志保が笑う。

花火はまだまだ咲き光り続けている。

二人は腕を組みながら歩き出した。

光と闇が交互に辺りを照らす。

夏の夜はまだまだ長い。

夜花（後書き）

…書きたかった事が上手く書けないです。  
うーん

## 遠幻郷（前書き）

コ哀のつもりですが、新哀、新蘭の部分もあります。悲恋です。話が長い！

## 遠幻郷

「あ…」

徹夜明けの朝、家の門を潜ろうとすると小さな高い声が出て振り向く。

小さな少女が俺を見ていた。

隣に住む小学校一年生の灰原哀ちゃんだ。

博士の遠い親戚で（俺の遠い親戚でもあるらしいが）家庭の事情で、博士の家に預かられている。

赤みがかった茶髪と白い肌は、白人の血が流れている。きっと将来は美しい女性になると想像しやすい。

切れ長の鋭い瞳は何かを見通しているようで、その落ち着いた態度といいおおよそ小学生には見えない。

時折見せる影のある表情は、家庭の事情のせいだろうか。

「おはよう」

「…おはようございます」

笑顔で挨拶すると、少し間があつてから返ってきた。

そして俯き早足で歩いていく。

だいたいいつもそつだ。

俺は嫌われているのか、いつも顔を背けられている。

博士の家に行つても挨拶をするくらいで顔を見せない。

彼女自身余り社交的ではないにしても少し傷ついてしまう。

彼女と同じ歳の歩美、元太、光彦は無邪気に懐いて来る分それは対称的だ。

親戚の兄ちゃんである俺が以前何かをしてしまったのだろうか？

ランドセルを背負った小さな後ろ姿が遠ざかる。

不意に襲う胸の痛みと、昔何処かで見たような光景に頭が白くなる。

「新一おはよ！」

明るい声がした。

幼なじみであり彼女である蘭だとすぐ解る。

「こんな所に突っ立てどうしたの？学校遅刻しちゃうよ？」

「事件でさー、今帰ってきたんだよ」

「えーじゃあ寝てないのね……」

真夏の太陽のような眩しい笑顔で俺を見て蘭は絶句した。

「……新一……何があったの？」

「え？」

「泣いているよ」

言われて気づいた。

頬が濡れている。

瞳からまた一粒涙が零れた。

「……あれ？おかしいな？」

別に泣きたくないのに涙が溢れた。  
蘭は俺が事件で疲れているのかもしれないと考え、学校を休むようにと言った。

言われるがまま部屋のベッドに沈む。

徹夜明けだが身体は疲れてはいない。

でも何故か胸が痛んだまま。

何故こんな気持ちになるのか、涙が出たのか解らない。

(親戚の子にそっけなくされたから?)

そんな馬鹿なと笑う。

「？」

ふわりと浮かび上がる映像は一瞬で消えた。

何だろうと考えようとしても霧がかかったように解らない。

何となくあの少女のような気がするが、それを思った途端拒否するように頭が痛んだ。

それは俺が記憶を失った数ヶ月を思い出す時と同じで、その先を考えるなど大きな圧力が脳みそにかかる。

そう。

俺は数ヶ月の記憶がない。

大きな事件を追っていて行方知らずで、戻って来たらその時の記憶が無かった。

考えようとするとうとすると激痛が走り、医者からは無理に思い出そうとする  
と身体に負担がかかり命まで危険に及ぶと言われた。

両親や博士は無理に考えないようにしたほうがいいと言った。

隣の女の子もその友達も、大阪の親友だと言う服部もその彼女も。俺が数ヶ月の間に会った何人かは記憶にはない。今では新しく関係を築き親しい友達になったが。余り心配をかけないように、無くなつた記憶は曖昧のまま。

俺が戻つて1番喜んだ幼なじみは、そんな俺を優しく世話してくれた。

約束も忘れていると言つて悲しい顔をしたりしたが、戻ってきただけで嬉しいと言つて泣いた。

そしてついこの間、長年の想いを伝え晴れて恋人になったのだ。

「灰：原」

遠ざかる意識に浮かぶ少女の顔にまた涙が溢れた。それはすぐに白い闇にのまれた。

「ホンマにこれでええんか？」

色黒い探偵が小さな少女に聞く。

無表情な少女が見下ろす傍らには眠りながら姿形を変えていく少年がいた。

年齢一桁の小学低学年の子供から十代後半の男性に変わる。

身につけていた服が破れ始めたので近くにあつた布団を被せる。

「ええ。これで彼が目覚めたら何も覚えていないわ」



完璧な解毒剤と共に作った記憶を消失させる薬。

新一に黙って飲ませたのだ。

一日眠った後、ここ数ヶ月の記憶を無くしているはずだ。

少女に相応しくないなにもかも諦めた表情にそこにいた者は皆胸を痛めた。

「哀くん…」

「これでいいのよ」

少女が暗くなる養父の気持ちや軽くさせようと明るく言う。

「そやけど姉ちゃんは辛くないんか？堪えられるんか？」

少女は色黒少年の優しい人柄をひしひし感じながら、不敵に笑顔を浮かべる。

「本当は口が1番軽そうなあなたにも飲んで欲しいんだけど」

「なっ…!!」

冗談よとクスクス笑うと、「洒落にならへん」と泣きそうな顔をした。

そしてずっとしばらく無言で見ていた夫婦を見る。

「長い間息子さんを苦しめてしまい申し訳ありませんでした」

小さな少女哀は、深々と頭を下げる。

「私の事恨んでも恨みきれないと思います。時間を奪った上、今度は記憶まで奪ってしまうから」

頭を下げたまま哀は続ける。

「でもこれで彼は余計なことを考えず、元の生活に戻れるんです。闇を知らない普通の高校生に」

頭を上げると新一の母親である有希子が泣いている。彼女を責める涙ではなく、彼女の為に泣いている。

「謝らないで。私達はあなたが心配なのよ」

元女優の美しい顔は涙で溢れている。

「哀ちゃんも新ちゃんが好きなんですよ？新ちゃんも本気であなたのこと…」

「この間も言いましたけど、彼はこの状態で私に頼らざる得なかった。その異常な生活の中で私を好きだと勘違いしただけ。すぐにそんな気持ちは無くなります」

哀は淡々と話す。

そこには震えもなく迷いもない。

既に彼女の涙は流し続けて空っぽだった。

そしてその強固な意志は誰にも変える事が出来なかった。

「私達が恨むとしたら君が新一の気持ちを無視した事だよ」

「え？」

「組織の事や薬の事に比べれば数ヶ月の記憶は軽いかもしれない。でも新一はその無くなった記憶に一生悩み続ける。」

「一番愛してた人の記憶を消されたんだからね」

「…」

父親である優作の喋りには怒りや恨みはない。ただ悲しい顔をしている。

哀は俯く。

阿笠が哀を庇うように何か言おうとすると優作がそれを止めた。表情を優しくさせて哀と目を合わせるようにしゃがみ込。

「私達の力不足で君の気持ちをもどうしても助けてあげることが出来なかった。謝るのはこちらだ。すまない」

「止めて下さい！」

哀は首を振る。

「今は、君には何を言っても無駄だろうが、私達は君の力になりたい。いつでもこれからもそう思っているよ」

「そうよ。私達は哀ちゃんの幸せを願っているのよ。だから自分から不幸になる選択はこれ以上もう止めてね」

優しい両親の思いに胸が詰まる。

なんてお人よしな人達なんだろう。

息子を酷い目に遭わせた哀の幸せを願ったり力になりたいと言った

り。

その息子も哀を恨むどころか、愛してると言ってくれた。

「この選択で私もけど…息子さんもきつと幸せになるはずですよ。心配かけてすみません」

哀は頭を下げながら部屋を出る。

検査道具を取りに地下室へ下りていく。

静かで暗いコンクリートの地下室に一人。  
力がぬけたように床に沈みこむ。

「私達は見守る事しか出来ないのね」

「ああ」

工藤夫妻が寄り添うように、哀が出て行った扉を見つめる。

無理強いしたら壊れるのは彼女だ。

その解決は時間を置いてみないと解らない。阿笠はどうしようもない気持ちに胸が張り裂けそうだった。

平次が眠る新一の涙に気づく。

微かに小さく呻いた言葉は、少女の名前だったのかもしれない。

「俺、灰原を愛してる」

「ハイハイもう解ったから」

ソファーに座って灰原を抱きしめる。

組織を倒して無事薬が完成する。

その過程で気づいた気持ち。

いつも側にいて守りたい女。自分から初めて必要とした女性。

考えてみれば守って貰う事ばかりだったけれど、これからもずっと

彼女を守っていききたい。

一緒に生きていききたい。

「なー灰原は？」

気持ちを交わしあって俺は浮かれていた。

まだ幼なじみである蘭との問題も残っている。

それは俺が一足先に元の姿に戻った後で話しあわなければいけない問題だった。

今はまだ通じあった気持ちを確かめるのに一杯で、灰原にくっついていたいのだ。

「新ちゃん、哀ちゃん困ってるわよ」

「邪魔すんなよ母さん。明日元に戻ったらしばらくイチャイチャ出来ないんだからよ。息子さんロリコンよって近所に噂されちゃうし」

二人一緒に戻ることはコナンも哀も同時に消える事だ。

探偵団の皆や他をあまり刺激させない為にも、一人づつ戻ろうという話になった。

それは最低でも一ヶ月待たなくてはいけないらしい。

「だからってトイレ行くのにも支障あるのはどうかと思うわよ」

「この姿も明日で終わりなんだぜ。灰原も充分…あれ？」

「トイレに行ったわよ」

有希子は紅茶を一口飲んだ。

博士が笑っている。

「そっぴいや服部は？」

「せつかく大阪から出て来たのに、新一が構ってくれないからむくれてたぞ」

優作が廊下から来た。

少し疲れた顔をしている。有希子が優作の手を取って悲しい顔をした。

(小説息詰まってるのか?)

息子の為にという理由で、また締め切りを逃げ出して日本に来たらしい。

さっきまで部屋に閉じ込もり缶詰で、灰原が昼飯を運んでいた。

そろそろ隣に温もりが欲しい。

気持ちに素直になってからは禁断症状のように哀を求めてしまう。

両思いになって哀が抵抗なく側にいて可愛い笑顔で笑ってくれるので、どんどん好きになっていく。

しかしそれはなんとなく張り詰める不安な空気のせいかな。

気持ちを確かめあった哀が時々泣いた後のような顔を見せるからか。コナンは無意識にその不安を払拭しようと哀に触れていたくなるのだ。

愛してると彼女は言ってくれた。  
告白した時、ずっと好きだったと照れながら教えてくれた。  
一生側にいてくれると約束してくれた。

なのに…この不安はなんだろう？

「今ならまだ…」

廊下に出ると服部の声がした。

何を話しているのか灰原の肩を掴んでいる。  
顔が近くてムツとした。

角度的にキスしているみたいだ。

「何してんだよ」

つい出てしまった不機嫌な声で二人はハツとした。

「あなたが相手してくれないから、西の探偵さんがヤキモチやいて  
るみたいよ。工藤くん相手してあげなさいよ」

「はあ？」

二人して間抜けな声をあげた。

灰原はクスクス笑いながらリビングに行く。

「おい！姉ちゃん」

「…服部」

半目で服部を見ると服部は慌てた。

「ちゃうで、ちゃう」

「…そんなに淋しいからって灰原に当たるなよ」

「そやから…」

「言うなら俺に言えよ。陰でこそこそさー」

と一息ついて半目のまま自分の狭い心を出す。

さっきの顔を近付けていた姿が気になっているのだ。

「オメー灰原に近づきすぎなんだよ」

「はあ？」

「灰原は俺のだからな」

「…さいですか」

服部は目を点にさせて呆れた顔をし、ため息をついた。

「工藤は本気であの姉ちゃんが好きなんやな」

「ああ。愛してる」

臆面もなく言う俺に服部は真顔になり、それから悲しい顔をした。



「何だよ。その顔」

「…」

俺の頭に手を乗せてニツと笑う。

「江戸川コナン最後の夜や。邪魔せんからあの姉ちゃんと思いきや  
ことなくイチヤつくんやな」

「服部！」

笑いながら服部は行ってしまった。

「何なんだよ…たく」

そして本当に皆気を使ってくれて、夕御飯を食べた後は灰原とふたりきりになる。

リビングで隣同士に座る。

「灰原」

「何？」

なんだか照れてしまってそわそわする。

この角度で眼鏡越しの灰原を見るのも後少し。

「明日でこの姿ともさよならだな」

「そうね」

「なんだよー淋しいわくらい言ってくれよ」

俺はむくれる。

「そつだ！オメーが元に戻ったら、宮野と志保どっちで呼ぼうかな。彼女だから志保？いきなりで名前呼び付けは照れるなあ」

「え」

「愛してるよ志保…なーんて」

「…工藤くん」

「え？おま…何泣いているんだよ」

いきなり泣きだしたので慌てた。

その泣いた顔も可愛いので抱きしめ頬にキスをした。

「…愛してるわ…工藤くん」

初めて彼女からのキス。

顔が一気に赤くなる。

熱烈なキスで彼女の甘い舌が侵入してきた。

「ん…！」

ゴクリと喉を何かが通って行った。

「今…何を飲ませた…？」

嫌な予感がする。灰原は厳しい顔で俺を見ている。

「解毒剤と記憶を無くす薬よ」

「…記憶を無くす？」

「ええ。ここ数ヶ月の記憶をあなたは忘れるの」

「ふざけんな！何勝手なことをしてんだよ！どういつつもりだ？」

激昂する俺と反対に灰原は冷静に言う。

「組織、薬、…あなたは忘れたほうが幸せなのよ。」

「オメーの事も…忘れるのか？」

「ええ」

灰原を忘れるなんてありえない。

俺が簡単に忘れられると思っているのか。

どうしてこんなことを灰原はするんだ？

怒りたいのに身体が意識が鈍り始めた。

…嫌だ眠りたくない！

眠ったら灰原哀を…宮野志保を忘れてしまつ。

…そんなの…嫌だ。

「工藤くん…ごめんね」

力が出ない。  
意識が遠くなり泣いている灰原がぼやける。

「灰ば…」

ケータイの着信音で目覚めた。  
起き上がるとまた泣いていた。それは止まらずに次々溢れる。  
何か夢を見たのだからが全く思い出せない。  
ディスプレイには蘭と言う文字。

「新一、具合大丈夫？」

心配してくれた蘭だった。学校が終わったら家に来るらしい。  
震える声を抑えて待つてると言って電話を切る。

「……………」

何故だろう？まだ涙は止まらない。  
何か大事なものを無くしたように、胸に大きな穴がずっと開いてい  
る。

無くした。

記憶…無くした記憶の中の想いが溢れているのだろうか。

「……………」

また頭に痛みが襲う。

そして再び泣きながら意識を失う。

次に目覚めた時は蘭が側にいた。

ぐっすり眠った俺は何も無かったように起きて、蘭が作ってくれたご飯を食べる。

そして昨日の夜起きた事件の話を夢中になって蘭に伝える。楽しく談笑をした。

そのあとは家に帰る蘭を門まで送る。

「じゃあまた明日迎えにくるね」

「ああ。気をつけて帰れよ」

笑顔で去っていく蘭を見届けながら、隣の家の明かりが目に入った。俺は静かに門を閉じた。

遠幻郷（後書き）

書いていて悲しいです。

## 焦燥と壁（前書き）

新志です。一緒に住んで付き合っています。

## 焦燥と壁

「あれ？志保さんじゃない？」

蘭が言った言葉に驚いてそちらを見る。

学校帰りの途中。

ビルの前の広場に、明日何かイベントをする予定なのか幾人かの人が集まっていた。

大きなトラックからは機材が運びこまれ、簡易のテントや舞台などが作られている。

その中に、いた。

白いタンクトップにベージュのロングカーディガンを羽織り、黒のクロップドパンツ姿で低めの太いヒールの靴を履いている。

アースカラーの地味な服装の彼女なのに、何故かそこだけ明るく輝いて見える。

日差しの暑さも感じさせない涼しい顔でシャツを着た数人と打ち合わせをしていた。

資料を見ながら指図している。

「何だか格好いいわね。デキル女って感じで」

蘭が憧れの眼差しで志保を見る。

志保のピシッと伸びた背中に涼しい瞳は、いつも傍にいる彼女と違い大人っぽく遠い人に見えた。

制服の自分達が妙に子供に感じた。

同じ研究所の人だろうか、志保よりも年上の男に声をかけられて寄り添うように話している。



仕事だと理解してはいるのだが、気になって仕方がない。その笑顔を向けられもの全てを遮りたくなる。それはやはり自分がまだ子供という証拠であるのだろう。新一は沸き上がる苦い思いでいっぱいだった。

「新一？」

顔を背けるように歩きだす新一を蘭は追いかけた。

夜、仕事から帰ってきた志保と夕食を食べて、リビングでくつろぐ。

「何？」

資料を見ながら、志保は隣にいる新一の視線にきづいて聞く。新一がこんなに見ているのに、志保は目もあげようとしない。昼間の嫉妬は蘭にすぐに気づかれ、からかわれた。

「新一は本当に志保さんが好きなのね」

呆れたように幼なじみは笑った。

そう。志保が好きだ。

なんだかいつも志保の事を考え見ている気がする。俺ばかりが好きなのか。

「仕事忙しいのか？」

「ええ。明日研究発表のイベントがあるから」

志保はやつと顔を上げて資料を置き飲み物を飲んだ。

「そついえば今日あなたと蘭さんを見かけたわ」

「え？」

「×ビルの前通ったでしょ？」

あの時、志保に見られていたのかと新一は思った。

「制服姿のあなた達が眩しかった」

目を少し伏せて持っていたカップを手で転がす。

トンとカップがテーブルの上に置かれた。

「蘭さんが羨ましかったわ。ちょっとヤキモチ妬いちゃった」

フツツと笑う志保に、新一の胸がギュッと締め付けられた。  
手を伸ばし強く抱きしめる。

「工藤くん…？」

志保が戸惑ったように声を出す。新一は腕に力を籠める。

「工藤くん…くるし」

「愛してる」

気持ちが溢れて止まらない。

素直にヤキモチを妬いてくれたと教えてくれた志保。

大人の顔で仕事する昼間の顔とは違う、新一だけに見せる顔。華奢なその身体を壊してしまいたい程強く抱きしめないと、どうにかなりそうだった。

志保は苦しさを軽減するために、新一の背中に手を伸ばし自ら身体を押し付ける。

「愛してる」

「私もよ」

ずっと自分のものだ。誰にも渡したくない。

子供かもしれない独占欲だけれど、新一はそう思った。

なだめるように、志保が新一の背中を撫でる。

少し落ち着いて力を緩め柔らかな志保の髪の毛を梳くと、志保は新一を見上げる。

顔を確認するように見つめあい自然に唇を重ねた。

焦燥と壁（後書き）

新一が志保を好きで仕方ないって描写したかったのですがイマイチ  
上手くいきませんでした…。  
頭が滞っています。

## 空色春時代(二) (前書き)

コ哀です。空色の続きですが単体でも読めると思います。

…すみません。アダルトな部分(？ばかり)なので苦手な方は避けて下さい。

## 空色春時代（二）

（いつまでこの関係は続くのだろうか）

ベッドの上で快樂の余韻を引きずりなが息を整えて哀は思った。  
不毛な関係は長く続くものではない。

二人がお互い違う大切な人を見つけるまでだろうか。

頭を上げて目を合わせるとコナンは満足したように笑顔で哀を見て  
髪の毛に触れた。

いつもかけている伊達眼鏡はない。

その素顔で見られると妙にそわそわして落ち着かなくなる。

ふいつと目を反らし、胸に頭を預ける。

哀の背中にコナンが腕を回した。

（…私の場合、他の誰か大切な人が出来ることはないでしょうね）

この関係のきっかけは、コナンの初恋であった彼女が結婚を決めた  
日だった。

コナンがまだ、彼女に未練があるのかは解らない。

新しい人生の出会いの中で、誰か気になる女の子がいるかもしれな  
い。

どっちにしろ、この関係を終わらせるのはコナンだろう。

割り切った関係だからあっさりと終わるはず。

でもその日が来たら自分はどうなってしまうのか、と哀の胸をかす  
める。

実は割り切れていない想いがあることは、死んでもコナンには知ら

れたくない。

哀はコナンの体温を感じながら、いずれ来る孤独の闇を見つめていた。

「あああ！」

サッカー部対抗試合の前半。

敵のチームに囲まれそれを突破しようとしたコナンと、阻止しようとした相手の選手がぶつかる。

倒れたコナンに歩美やフアンの女の子が声を上げた。

コナンが立ち上がり試合が再開される。

前半終了間際、キャプテンからパスを受けてコナンがシュートする。

「やったあー！先制点！！」

喜ぶ歩美の横で黙って試合を見ていた哀が立ち上がった。

「江戸川くん。足を見せて」

哀が選手の中で椅子に座っているコナンを見つけ、腕を組んで見下ろした。

「灰原……」

コナンは引き攣った顔で逃げようとしたが、哀の鋭いその目に諦めて足を出す。

哀はしゃがんでコナンの足を膝に乗せ、靴を脱がせる。

足を持った瞬間コナンの顔が歪んだ。

「灰原どうしたんだよ。江戸川に何か…」

キャプテンが哀の行動が理解出来ずに聞く。

「やっぱり…これじゃ痛みが酷かったでしょ」

「え？」

コナンの足首が紫色に腫れていた。

「無理したから酷いわね。江戸川くんあなた後半も黙って試合するつもりだったの？」

哀の呆れたような視線にコナンは苦笑いをする。

「江戸川あの時怪我してたのか？全然そんなそぶり見せなかったじゃないか」

「足の痛みを避ける為に利き足じゃないほうばかり使ってたわ」

「灰原にはバレてたか」

哀は救急箱からコールドスプレーを取り出し思い切りかける。強めに包帯を巻いて手際良く終わる。

「サンキュー灰原」

「これは応急処置。病院へ行くのよ」

「オメーのお陰で大分痛み無くなったぜ」



試合に出たいと言うコナンに、哀はため息をついて半目で睨む。

「このまま試合を続けて悪化させて一生サッカー出来ないようになる？それとも今日は諦めて病院に行く？」

「そんな大袈裟な」

「……………」

「…諦めて病院に行きます」

「キャプテン、いいですか？」

哀が振り向き聞くと、哀の威圧に気圧されていたキャプテンがハッとした。

「身体の方が大事に決まってるだろ。灰原、江戸川を病院に連れて行ってやってくれ」

「はい」

「先生が車回して来るって」

部員の一人が出口から顔を出した。

「すみませんキャプテン」

申し訳なさげにコナンが謝る。

「何言っただよ。お前がいなくても勝ってみせるよ」

キャプテンが言うと部員全員がそうだと口々に言う。哀がコナンの腕を引き、肩に回してコナンを支える。

コナンの顔間近に哀の顔があり、コナンはドキリとした。長い睫毛が下がり瞳が揺れている。

その横顔から哀がコナンを心配してたのだと解る。

廊下に出ると歩美が心配そうに口に手を当てていた。

哀はじっと歩美を見て少し考えた。

「吉田さん。悪いけど江戸川くんを病院に連れていってくれないかしら」

「え？」

コナンと歩美の声が重なる。

「でも…」

歩美がちらりとコナンを見る。

コナンは哀を見ている。

「病院に着くまで足をなるべく高くしてあげて。頼むわよ」

コナンの腕を歩美に預けて哀は試合は任せてと去っていく。

「灰原ありがとうな」

コナンは思わず声をかけたが、哀は振り向きもしなかった。

体重を預けた歩美を向いてコナンは礼を言う。

「歩美もありがとう」

「私…コナンくんが怪我したこと解らなかった」

コナンを気遣いながら歩き出した歩美の表情は暗い。

「皆、気づかなかつたみたいだぜ」

「哀ちゃんだけ気づいたのね」

「アイツ鋭いところあるからな」。誰も見てない所気づくんだろ。すげーよな」

コナンがフツと笑った。

「優秀なマネージャーと元気で明るいマネージャーが二人いてサッカー部は安泰だな」

「う…うん」

表情の晴れぬまま歩美はコナンを連れて車へ向かう。

哀が戻ると部員達は試合に向かう為には歩いてきた。キャプテンが哀を見て驚く。

「灰原、どうした？」

「吉田さんをお願いしてきました。後半も頑張ってくださいね」

「あ、ああ」

「みんなも江戸川くんがいないから負けたって言われないうちに、頑張って勝ってね！」

哀に応援されて部員達の士気があがる。

試合は一点取られたものの、果敢に攻め続け2 - 1で勝つことができた。

「おめでとう」

勝ち試合に喜んでいる所に、コナンが帰ってきた。

「怪我はどうだった？」

「捻挫だって、全治二週間」

部員に囲まれて小突かれているコナンを遠くから見て、哀はホツとしたように息を吐いた。

哀の隣にキャプテンが並んでコナンを見る。

「君は江戸川が好きなんだな」

「は？」

哀が眉を寄せてキャプテンを見上げる。

「よく解った」

キャプテンが納得して頷く。  
清々とした顔で哀を見る。

「ちょ、ちょっと勝手に決めつけないで下さい」

「そうかい？間違ってるんじゃないと思うけど」

「間違ってます！」

そう言いながら哀は少し顔に熱を感じる。  
キャプテンは面白そうに哀を覗き込む。

「君だけ江戸川の異変に気づいた。それって江戸川をよく見ているからじゃないか？」

「選手の体調を見るのはマネージャーとして当然な事です。江戸川くんはエースでもある訳ですし」

「そうかなー？俺達が怪我しても気づいてくれるかな？」

「…彼は昔から知ってる幼なじみだし気づきやすかったとか。たまたま…」

ハハハとキャプテンが突然笑いだした。

「……？」

「灰原そんな顔するんだな。いつもクールで落ち着いた灰原しか知らなかったから。慌てるの、可愛いよ」

「なっ…」

「そっかぁー灰原も普通に恋する女の子なんだな。ちょっと不器用みたいけど」

「だから違っつって言ってるでしょう!」

哀の大声で皆が注目した。

腹を抱えて笑うキャプテンと顔を赤くして怒るマネージャーに、部員達がぽかんとする。

夕方コナンは例のごとく博士の家で寛いでいた。

怪我を口実にしばらくこの家に居ようと決めていた。

私服に着替えて来た哀がソファーに据わり麦茶を飲む。

「キャプテンと何話してたんだ?」

コナンの言葉に哀の胸の鼓動が跳ね上がる。

キャプテンに気持ちを指摘されたなんて言える訳がない。

「…別に」

「ふーん」

哀はコナンの視線に堪えきれず、夕食を作る振りをしてキッチンへ逃げる。

小さく息をして野菜を刻み始めた。

「灰原…」

コナンがキッチンへ来た。

そして哀を後ろから抱きしめた。

「ちょっと、包丁持ってるから危ない…」

コナンが哀の首筋に顔を埋め、手を哀の身体に這わせた。

「博士が帰ってきたらどうするのよ」

包丁を置いて哀は振り向く。

すぐに口を塞がれ中に舌を侵入される。

「……じゃ駄目よ……」

一通り哀の口中を味わったコナンの唇が離れた。

息も荒いまま哀が言う。

交わるのは工藤の家の部屋だけだったはずなのに。

怪我のせいで、薬の副作用である性的要求が強く出てしまっているのだろうか。

「ん……」

聞いていないのかまたキスをしてきた。

そして服の裾から手を入れてくる。

遠慮のないコナンに、哀はされるがまま。

結局最後まで終えて、乱れた息だけがキッチンに響く。

シンクに手をつき、後ろにくっついたままのコナンを横目に睨む。

「博士が帰って来たらどうするつもりだったのよ？」

「たまにはシチュエーション変えてやるのもいいな」

コナンはまるで知らん顔だった。

哀の髪の毛の香りを嗅いで頭にキスをする。

「…っ！」

「ぐおっ…！！」

哀がコナンの腹に肘を食らわせた。

服装の乱れを整えて哀がリビングに逃げる。

いつもと変わらない終わった後の、甘くけだるい時間が堪えられなかった。

キャプテンのせいで普段では有り得ないくらい動揺し心臓が早鐘を打っている。

表情の仕方が解らない。

コナンがリビングへ顔を出す。

「急に何すんだよ」

「は…博士が帰ってきたら困るでしょ。もう終わったんだからいつまでもくっついてたって仕方ないし」

ふーんと口を尖らせたコナンが薄目になる。

「…痛っ…痛たたた」

コナンが足を抑えてうずくまる。



哀はコナンが足を怪我していたのだと思い出した。

「大丈夫？」

哀が慌てて駆け寄ると腕を捕まれた。

コナンは顔を上げてニヤリとする。

「捕まえた」

「…騙したわね」

睨んでも遅い。

コナンが哀にキスをする。

さっきまで怪我なんてなんのそのと哀を抱いていたコナンだったではないか。

心配する必要がなかった。

「本当に痛いんだよ」

そういつて哀の肩を借りながらリビングのソファーに座る。

哀の手を引き膝に乗せた。

「だから…灰原が上になって」

「はあ？博士が帰ってきたら…!!」

哀の言葉は続かなかった。

口は塞がれ整えたはずの服はあつと言つまに脱がされる。

実はさつき博士から電話が来ていて、夜遅くまで帰れないとコナンは連絡を受けていた。

だからゆっくりと哀との時間を過ごせるのである。

『おい、灰原さんとキャプテンと付き合ってたんのか？』

『この間告白してフラれたって聞いたぞ』

『でもさ、イイ雰囲気じゃね？』

『確かに』

『あーん俺の女神がー』

『お前のじゃねーよ』

『どっちにしる俺達じゃ無理矢理』

さっきの光景がコナンの頭に過ぎる。

何を話していたのか、哀は教えてくれなかった。

あの時の哀は彼女にしては表情が豊かだったような気がする。

合わせた所を強く下から突き上げると、哀は甘い声をあげた。

コナンにしか見せない顔をしてしがみついてくる。

（俺だけを見て

俺だけを感じて

俺だけを考えて…）

他の何も考えさせないように夢中で哀を慶ばせる。

哀がこの関係を止めたいと言わせないように。

離れて行かないように。

コナンは溶けるほど深くを求めた。

高みまでのぼりつめて、コナンに体重を預けぐったりとした哀をコナンが抱きしめる。

荒い息が首筋に当たってくすぐったい。

フツツと息を吐いて哀が離れようとする身体をコナンが引き寄せる。

「もう少しこのまま」

「…まだ足りないの？」

(怪我すると性欲が強くなるのかしら…?)

あとで採血してみようかと哀が考えているのを遮るようにコナンがキスをする。

(いつまでこの関係は続くのだろう)

空色春時代(二) (後書き)

エロばっかですみません…。

前回より二人とも気持ちが解りやすくなっていると思いますが、お前ら何してんだ？って感じですかね…。

お似合いよくフタリノキヨリ（前書き）

新志です。お大事にという話と繋がっていますが単体でも読めると  
思います。

## お似合いよ〜フタリノキヨリ

「ごちそうさま。美味しかったわ」

食後のデザートを終えて、コーヒーを飲みながら志保は言った。

新しく建設されたビルの展望レストラン。

眼下に広がる夜景と落ち着いた店内の明かりで幻想的な雰囲気で大人の気分を味わえる。

少々高めの料金なので、周りの客も落ち着いた年配者が多いかもしれない。

「それは良かった」

新一はカップを置き、志保を見た。

いつもと違い女性らしく華やかに着飾る志保。

柔らかな色彩のワンピースを来て、化粧をした顔は引き締まりその美しさを際立たせていた。

家に迎えに行った時、思わず見とれていたら、「何よ」と睨まれた。店内の明かりで正面から見る志保は白く浮かび、何処か匂い立つような色気がある。

「本当は新作のバックが良かったんだけど、ま。これで手を打ちましよう」

「ハハ…」

苦笑いをする新一が頬をかく。

先日風邪の看病をして貰った御礼に志保を誘ったディナー。

新しいお店なので不安だったが、来て良かったと思った。

雰囲気も料理も良く、志保の機嫌も良さそうだ。

志保は飽きることのない夜景を見ていた。

伏せがちの長い睫毛に隠れた翡翠色の瞳がキラキラしている。ふわふわしたボブの髪の毛が揺れて、新一の胸がギュッと捕まれたような気がした。

新一の視線に気づいた志保が、夜景から新一に向けた。

新一の胸がますますドキリとした。

「あ…。えとー。この後どうする？」

せつかくのいい雰囲気之夜。

このまま黙って帰るのがもったいないような気がしていた。

志保は丸く目を開いて少し沈黙し、フツと笑う。

目が一瞬にして光を無くした。

「帰るわ。あんまり貴方を独り占めにしてたら蘭さんに悪いし」

「え？なんで蘭…」

考えてみればこれは立派なデートだ。

端からみれば、二人は恋人同士だろう。

もし、クラスメートや知り合いに見られたら確実に噂になる。

告白をしたものの、これといって恋人の関係にはなっていない幼なじみの耳にも入るかもしれない。

何故か今日の事、この間の風邪も言わずにいる。

新一の胸に針で一点を刺されたような痛みが走る。

御礼は終わった。このまま帰れば済む。だけれど…

「キヤー！」

つんざくような女性の悲鳴がした。  
条件反射で立ち上がり声のする方を向く。  
店は悲鳴でざわざわと落ち着きがなくなる。

「宮野！」

「ええ」

二人は更に声が上がった騒がしい場所へ向かう。

エレベーター付近で男性が殺されていた。

見つけたのは若い女従業員で、怯えたように腰を抜かしている。  
集まった店内のやじ馬をすり抜けて、死体へ近づく。

この店の店長が死体に触れようとしていた。

「遺体には触らないで下さい」

新一が止めると、店長は驚いたように振り向いた。

「君は…」

「探偵です。これは殺人です。皆さんも遺体やその周りに近づかないで下さい」

「今、警察に電話したわ」

志保が携帯を持って、店長ややじ馬に説明をしていた新一の側に来た。



「サンキュー」

二人で死体や現場を見る。

「あれ、高校生探偵の工藤新一じゃないか？」

「本当だ。生きてたんだな」

「この間もなんか事件解決してたぞ」

「うっそーマジカッコイイ」

いくつかの声がした。

群集は死体への恐怖から、有名人がいるという浮ついたざわめきに変わる。

好奇心の目で新一は見られているが、全く気にならないようだ。もちろんその隣にいる美人な女性にも注目は集まる。

「恋人かな」

「すげー美人だな。おい」

「美男美女カップルかーうらやましい」

あー煩いと、志保はため息をつく。

新一と志保はそんな関係でもなんでもない。そんなんじゃないのに…。

「宮野？」

新一が志保の異変に気付くと、志保は睨んだ。

「あなたといると事件に巻き込まれるし、注目されるし散々ね」

「…何だよソレ」

新一が眉をしかめた時、志保が被害者の首の下にあるものを見つけた。

ハンカチで取り新一に見せる。

そこに警察が到着した。

「いやー君達がいってくれて助かったわ」

ショートのはつらつとした女刑事が笑顔で新一志保に御礼を言った。身体が元に戻ってからいくつかの事件を二人で解決した事があり、新一だけではなく志保とも面識がある。

佐藤は大人びた志保を年下ながらも一目置いて、仲良くなりたいと思っていた。

彼女の部下で恋人でもある高木によって、犯人の店長はエレベーターで連行されていく。

金銭トラブルによる恨みだった。

「いつもスピード解決してくれてありがとう。デート中に災難だったわね」

そう言われて新一も志保も固まる。

デートではないのに。

違うと軽く言えば済むことだった。

「フフ…あとはごゆっくり。じゃあまたね」

志保にボソツと何が伝えて、女刑事はニヤニヤとしながら手を口に当てエレベーターに消えて行った。

「なんて言われたんだ？」

気になった新一が顔を赤くした志保に聞く。

「別に。私達も帰りましょう」

夜の喧騒の中二人で歩く。

食事をしてた時の夢みたいなお困気は全くない。

華やかな街が賑やかすぎるほどに、二人の微妙な距離は遠いような気がする。

新一は隣の志保を見る。

新一のせいで事件が起きた訳でもないのだが、せつかくのお困気の水をさしてしまった。

申し訳なさど何かひっかかる苦しさに胸が詰まる。

少し俯いた横顔の表情はよく見えない。

コナンだった時、同じ高さの視線だった。

今は頭一つ分新一の方が高く志保を見下ろしている。

細く頼りない肩。

いつも醒めた目で毒舌を吐くそれとは違いはかなく消えそつだ。

志保は一見強そうに見えるが、実はとても脆い部分がある。

あの時小さな子供の身体でも、守ってやらなきゃと自然に思った。

組織が無くなって心配はなくなったが、今でもあの約束は有効であ

ろうか？

不意に伸びた手が志保に触れそうになりハッとして握りこんだ。

(俺今何をしようとしたんだ…?)

ゴクリと飲み込んだものは、唾液とともに体内に落ちていった。

一方志保は先程の佐藤の言葉がぐるぐると頭を回っていた。

『今日の志保ちゃん凄く可愛いわ。貴方達お似合いよ。だから頑張って！』

あの女刑事は何か勘違いをしている。

新一と志保がお似合いな訳がない。

事件を追う度に女のカンが良いみたいで、志保の気持ちを見抜いた。そして何を考えているのか、それを応援したがっている節がある。

お似合いな訳がない。

まっすぐに正義感の強く太陽の光が似合う新一と。

闇の中で生きて来た、屈折している影の志保。

第一、新一にはその明るい光の道を一緒に歩けるお似合いの彼女がいるではないか。

天使のように純粹で誰にでも優しく、そして折れる事もなくいつまでも彼を待ち続けた強さ。

新一が明るく輝くように照らす太陽のような人。

諦めたはずの切ない想いが溢れ、絶望と悲しみが襲い目を閉じた。少し離れた横に感じる新一の気配。

目を開けるとうつすら瞳に涙の幕が張り視界がぼやけた。

今日は嬉しい誘いに浮かれ過ぎてしまった。

自分が馬鹿みたいだと自嘲の笑みになる志保。  
もう少しで家に着く。

(…大丈夫。この邪魔な気持ちはまた鍵をかけて閉まうから)

志保が横を向くと新一と目が合う。

「……………」

「…今日はありがとう」

口角をあげて見上げるように志保が笑う。

また新一の胸から沸き上がる痛みと息苦しさを。

このまま別れがたい。

「その…すまなかったな。せつかくの御礼だったのに事件なんか起きて」

「クス…貴方のせいじゃないでしょ」

「また別な形で御礼させて貰うから」

「いいわよ。もう充分だわ」

「それでも…」

新一もなんで自分がこんなに必死なのか解らない。  
息が上手く吸えなくて酸欠気味だ。

「…じゃあ」

志保が新一を見つめた。

志保の目が哀しい色をしている様に見えるのは、新一の気持ちが哀しいからだろうか。

その瞳に吸い込まれそうになる。

「工藤くんが煎れたコーヒーが飲みたいわ。高い豆の」

「へ？」

「嫌なら別にいいけれど」

「…嫌じゃアリマセン…！」

慌てて志保を掴んで、新一は家の門を開けた。

コーヒーの煎れ方には自信があり、志保も気に入っている。

今日は腕によりをかけて、美味しく煎れてあげたい。

少なくともコーヒー一杯分は二人でマツタリとした時間を過ごせるだろう。

博士が心配するまでには送らなくてはいけませんが、今はそんな事は考えないようにしたい。

目の前にいる志保を見て、笑顔で家に招いた。

新一の中に起きた感情の変化の正体を、彼が知るのもう少し後の事になる。

大きな屋敷に点く明かりは暖かく優しい色をしていた。

お似合いよ〜フタリノキヨリ（後書き）

想いあっているけれど、新一はその気持ちに気付かず、志保はその気持ちに蓋をする。

この二人ならではの切なさがあるような気がします。  
ドラマでもいいから新志が見たいです。

想い人へ（前書き）

コ哀です。曖昧な話ですみません。



## 想い人へ

好き。

あなたが好き。

そう言ったら彼どんな顔するのかしら？

全く気づいてないのだから、かなり驚くでしょうね。

そして困った顔で、申し訳なさそうに謝るの…。

ねえ、お姉ちゃん。

私好きな人がいるの。

お姉ちゃんが早く好きな人見つけなさいって言ってたでしょ？  
やっと見つけたわ。

でもその人には大事な人がいて…私はその人に告白することは絶対  
ないでしょうね。

彼は鈍感だから私に気付くこともないだろうし。

この気持ちは墓場まで持っていくしかないの。

ごめんね。お姉ちゃん。

組織にいた私には、その分野で幸せにはなれないわ。

皮肉よね。私がつった薬で迷惑かけた人を好きになってしまったん  
だから。

でもね。恋つてものを初めて出来て、何だか心が温かいの。  
とても温かいの。

こんな穏やかな気持ちは初めてよ。

一生縁がないと思ってた。

小さな親友と仲間達もいるし、毎日が楽しいわ。  
本当はこんなに気を抜いてる立場ではないのだけれど。

ねえお姉ちゃん。

もう少ししたら側にいくから、その時はお姉ちゃんの好きな人の話  
も聞かせてね…。

「灰原」

「工藤くん…！どうして？」

声に驚いて振り向くと、眼鏡の彼が立っていた。

私の隣に座り手を合わせる。

倉庫に私が置いた花束と線香の煙がゆらゆらとのぼる。

お姉ちゃんはどこで亡くなった。

「花屋で見かけて。それから博士から聞いて。もしかしたらと思っ  
たんだ」

工藤くんが目を開けて私を見た。

「そう…」

もう一度私は手を合わせた。

お姉ちゃん、この人が私の好きな人よ。

倉庫から出ると、博士が車の前で立って待っていた。

「哀くん…」

「迎えに来てくれたのね。ありがとう」

私は笑って車に乗った。

工藤さんと博士は目を合わせ、何も言わずに車に乗った。

8月の中旬。

日本ではお盆という亡くなった先祖達を迎えたり送ったりお墓参りをしたりする期間らしい。

それを聞いて、墓のない姉の亡くなった場所へ来た。

花束と日本式に線香を持って。

賑やかな都会の街が窓の外を流れていく。

夏に黒い服を着ているので暑い。

「何処かでお昼を食べて帰ろう」

博士が運転席のミラー越しに言う。

何故か私の隣の席に座っている工藤くんが私を見た。

「ええ」

車はゆっくりと夏の街を走る。

夜、探偵団の皆と花火大会に来ている。

三人は並ぶ屋台に夢中だ。  
私と工藤くんはそれを後ろから見守るように歩いている。

「なあ灰原……」

工藤くんが立ち止まり私を見た。

「何？」

「俺、ぜってーオメーを守るから」

「え？」

「守るから」

眼鏡の奥の真剣な瞳に釘づけになる。

あの時の約束。

逃げるなど言われたあの時。

私が未だ簡単に命を投げ出す気持ちでいる事を、優秀な探偵は気づいたのかもしれない。

でもね、それはあくまで最終手段よ。

万が一何かがあった時、あなたや他の人達を守りたいから。

そのためには私の命なんて惜しくない。

特に工藤くんを死なせる訳にはいかない。彼女の為にも。

私はあなたに守られて黙って待つつもりがないだけ。

まあ、そんな事を言ったらまた怒られそうだけど。

「宜しく頼むわ」

少し首を傾げながらフツと笑うと、工藤くんの表情が和らいだ。

「コナンくん。哀ちゃん」

吉田さん達が呼んでいる。

パーンと最初の花火が鳴った。

「行こうぜ」

「ええ」

夜空にパラパラと色とりどりの花火が大きく開く。  
二人並んで歩きながら見上げる。

\*\*\*\*\*

明美さん。

俺はあなたの妹さんを守ります。

ずっと。

一生。

焦がれて(前書き)

新志です。同じクラスで高校生。

焦がれて

「この公式を当て嵌めて…そう正解」

「宮野さん、この問題が解らないんだけどさ」

志保の席周りには数人のクラスメートがいる。

テストが近いと言う事もあるが、勉強を教えて貰う以外も目的のありそうな男子が何人かいるみたいだ。

今も一人が近づき肩に触れた。

「宮野さん、これ教えて」

先程から薄くした横目で新一は見ている。

いや睨んでいる。

何もかも面白くない。

今すぐにでも志保の近くに行って、奴らを追っ払いたい。

近づくな。触れるな。

まがまがしい黒いものが胸をチリチリと焼く。

(それは俺の…)

「次は…」

再び志保の肩に触れようとした男子の腕が掴まれる。

「…く…工藤？」

志保も含めそこにいた皆が驚いて新一を見る。

無表情だが怒り全身に漲らせていた。

一瞬青い炎のような鋭いオーラが出てるようで、掴まれた男子は怯む。

「どうしたの？」

志保が見上げた。

パツと腕を離して、新一はおどけた顔になる。

「悪い。事件でき。宮野借りてくわ」

「え？」

抗議する間もなく志保は新一に連れていかれ教室から出て行った。

ポカーンと見送ったクラスメート達。

一部始終を見ていた蘭が悲しそうな顔のため息を零し、持っていた本に視線を落とした。

「事件って？」

早足の新一を追うように志保がついていく。

質問しているのに返事がない。



「ねえ、工藤くん！」

「.....」

何か怒っているようだ。

志保は斜め後ろから新一の顔を様子見るが、よく見えない。

新一の様子がおかしい。

理由は解らないが、とりあえず事件へ向かうつもりで早足でついていく。と、突然その足が止まる。

「？」

少し先に公園がある。

事件現場はここなのだろうか？

しかし警察もパトカーも見当たらない。

新一も公園に入ろうとししないで立ち止まったまま。

「どうしたの？工藤くん…え？」

志保は新一の前に回って見上げる。

新一は泣きそうな顔をしていたので志保は混乱した。

「工藤くん…」

「ごめん…事件なんて嘘なんだ…」

「嘘？」

「あんなことでもどうしても我慢出来なかった。苦しいんだ。俺…」

「どじいじい」と。」

志保には言ってる意味が解らない。

「自分で自分が嫌になる。こんなに心が狭いなんて」

「工藤くん？」

見つめる新一の瞳が悲しく濁っている。

志保はドキリとした。

何を考えているのか？言おうとしているのか？

(まさか…)

うつすらと浮かぶものを即座に否定する。

そんなはずがない。

「俺…」

「キヤー！！」

遮るように悲鳴が上がる。

ハッとして目を合わせて二人走り出す。

\*\*\*\*\*

主婦が起こした殺人事件は夕方には解決した。

「あなたの事件を引き付ける体質が呼んだのかしらね」

新一は博士と志保の住む家に寄りソファ―に座っている。  
志保が厭味をいいながら珈琲を持ってきた。  
新一は半目で睨む。

「本当にあなたといると事件ばかり起きるわね。特に最近多いわよ」

「俺のせいか」

「何か呪われているのよ。お被いした？」

「あのかな」

フツと志保が悪戯を成功させたような子供の顔で笑う。  
困っている新一の顔が楽しいのだろう。  
その憎らしいはずの性格も顔も何故か可愛く見えてしまう。  
新一は珈琲を一口飲む志保の姿も愛おしく見つめる。

確かに最近事件が多い。

その度に志保が隣にいてくれて（連れ出すのは新一だが）事件を一  
緒に解決してきた。

学校はクラスが同じ。

この家にしょっちゅうご飯を食べにくる。  
考えれば志保とはずっと一緒にいた。

事件の時はその距離がとて近くなる。  
お互いの気持ちが手に取るように解り、目だけで会話が成立する事  
もある。

阿吽の呼吸で証拠を見つけたたり推理をする。

事件を解決に導く中で、二人で一人になっていた。以前、脳天気な刑事がぼつりと呟いた。

「工藤くん達、長年連れ添った夫婦みたい」

志保が隣にいただけで居心地がいい。

いつからか新一はそう感じていた。

そしてその居心地のいい正体もすぐ解った。毎日思い知らされる。

（宮野が好きだ）

気づけば転がる雪だるまのように気持ちは膨らんでいく。もっと傍にいたい。近づきたい。でも…。

その心を言葉に出せずにいる。

蘭。

幼なじみの新一の初恋の人。

確かにずっと好きだった。

ずっと蘭を想い、蘭の元へ帰ろうと頑張った。

そしてその願いは達成されたが、直接的な告白までには至っていない。

蘭は今でも好きだし大事な人だ。

しかしそれは穏やかな愛情で、志保のように刹那的に心を支配しない。

肉親に対するそれと同じ愛情。

長年好きだった幼なじみへ恋していないと気づいた。  
同時に自分は誰に恋しているのか気づいてしまった。

今更：。

今更志保が好きだなんて言えない。

志保はコナンの時にどれほど新一が蘭を想っていたか知っている。  
無神経に蘭の事を言うあの頃の自分が憎らしい。

気持ちはとくに志保へ向いているのに、今も新一の蘭への気持ちは揺るがないと思っっているだろう。

志保だけではない。

昔から周り全てがそうだった。

家族ぐるみの幼なじみで隣にいるのが当たり前だった。

だから新一自身もそうだと思ったのだろうか。

志保は蘭を亡くなった姉と重ねている。

蘭の幸せを願っている。

仮に新一の気持ちは伝えたら志保はどうするだろう。

信じてくれない。或は蘭への罪悪感が生まれて何処かへ消えてしま  
うかもしれない。

それだけは駄目だ。

：いや、そもそも志保の気持ちはどうなのだろう。

言えない分恋は大きくなる。

毎日一緒にいると尚更その想いが強くなってしまった。

独占欲が支配して、今日みたいな事が我慢出来なくなっている。  
苦しい。

言いたい。

この気持ちを今すぐにでも吐き出せたらいいのに。

「工藤くん？」

考えこんでいた新一に気づいて志保が声をかけた。小首を傾げて真つすぐに新一を見る。

その姿に新一の胸がギュツツと締め付けられた。

「宮野…」

立ち上がり大股で志保に近づく。

志保の目が大きく見開いた。

「ちょ…ちょっと待って！」

何か察知したのか、志保は両手の平を向けてストップをかけた。

新一の動きが止まる。

伸ばしかけた腕が宙ぶらりんとしている。

「あの…えつと…」

志保が口ごもり、新一が志保を見つめる。

愛おしさと淋しさが見える瞳は志保を捕らえて離さない。

志保は困った。

なんて言ったらいいのか。

さっき消したはずの有り得ない考えが浮かび始める。

考えてはいけないこと。

確かに今新一は志保を抱きしめようとした。

だからその前に阻止した。

事件が発覚する直前、新一は何を言おうとしたのか。  
最近そんなそぶりが新一から感じてはいた。  
自惚れた考えが支配しそうになる。

(工藤くんは少し疲れているだけだろう)

無理矢理考えて新一の顔に焦点を合わせる。  
どうしようもならない気持ちに新一の顔が歪んでいる。  
今にでも泣きそうだ。

「!.....」

志保は立ち上がり新一の背中に腕を回し、ヨシヨシと宥めるように  
背中をなでる。

この行動の意味は志保にもよく解らない。  
新一の泣きそうな顔を見ていられなかった。

「.....」

新一は志保を強く抱きしめた。  
柔らかくて壊れそうなくらい華奢な志保。  
腕の温もりに甘い髪の毛の香り。

それだけで新一の中にあつた黒い塊が、溶けるように消えていく。

「工藤くん」

「少し。もう少しこのままで」

志保は押し付けられた新一の暖かい胸の中瞬きをして目を閉じた。  
また新一の背中をなでると、志保を抱いた腕に力が籠る。

志保の猫の毛のような髪の毛に顔を埋め、ゆっくり手の平で触る。

志保が腕の中にいる。

落ち着いた気持ちの中にまた膨れあがるもの。

恋心

愛情

（オメーが好きだ！！）

心で叫んでも口からは出ない。

こんなに近くににいるのに。

触れあっているのに。

まだもう少し抱きしめていたい。

離れたくない。

新一しばらくそのまま志保を抱きしめていた。

ガチャガチャ

玄関が騒がしい。博士が帰ってきたのだろう。

スツと志保が離れた。

翡翠の瞳を新一に向け、後ろ髪引かれるように玄関へ消えていく。

新一はソファーに倒れこむように横になり顔を覆った。

心臓が痛いくらい早く動いている。

志保の温もりが腕に強く残る。

触れたら更に抑えが聞かなくなった。



「好きだ」

小さい呟きは帰ってきた博士の大声で掻き消された。

「ただいま新一」

「…お帰り博士」

毎日のように来ているので新一が家にいてもなんの疑問もない。

博士の後ろから志保が来て目が合い、体温が上がり鼓動も速まる。

志保はふと目を反らし夕食を作るとキッチンへ向かう。

新しい発明を表彰されて博士はご機嫌だった。

新一と志保の微妙な空気には全く気づかない。

二人も普段通りになっていたので、いつもの博士でも気づいたかどうかは解らないが。

夕食を食べて片付けをしている志保の近くに行く。博士は風呂へ行  
った。

「宮野…」

志保の動きが止まる。

短いウエーブの髪の毛。細い肩。白い肌。

このまま後ろから抱きしめたい衝動にかられるが我慢した。

「御馳走さま。俺帰るよ」

「そう」

振り向くこともなく洗い物を再開した志保。

新一は数秒見つめて、諦めたように去っていく。

「おやすみ」

玄関で靴を履いてると志保がやって来た。  
見送りに来てくれたのだと嬉しくなった。

「気をつけて帰りなさい」

「気をつけてって…隣だぜ」

「あなたの場合事件を呼び寄せるほうが心配」

腕を組んで志保らしく軽口を始めた。

「俺をなんだと思ってんだよ…」

フツと笑うと志保も笑った。

「おやすみなさい」

「おう」

しばしの沈黙に見つめあう。  
甘い空気が流れているようなむず痒さが志保を落ち着かなくさせていた。

新一の腕に残る志保の温もり。  
新一の腕が志保の顔に伸びた。ビクツとした志保が目をギュツとつむる。

「泡、ついてる」

髪の毛についた洗剤の泡。

志保は勘違いに気づいて顔を赤くした。

泡を取った新一の手が志保の頬に触れる。

「…っ。じゃあな」

火傷したような熱を感じて手を退けると、新一は玄関の扉から出て行った。

志保は触れられた頬を抑えて立ち尽くした。

（心臓が壊れそうだ）

外にいる新一は志保の頬に触れた手に熱を感じて、愛おしそうに口づけた。

焦がれて（後書き）

少し間が空いてしまいました。

いくつかの話を書いては消し、上手くいきません。（今特にそんな状態です）

時間はかかるかもしれませんが話を仕上げたいと思います。（気が  
のればなんとか）

こんなものでも宜しければ、気長に待っていただければ嬉しいです。  
ありがとうございました。

かくれんぼ(前書き)

コ哀です。息抜きに書いた割には長いです。

かくれんぼ

「いち、にーい…」

壁に腕をかけ目を隠した元太の声が響く。

探偵団である他四人は一斉にばらけて思い思いの場所へ移動する。

「さーん、しーい…」

所謂かくれんぼ。

実際の年齢だったら絶対やらないであろう遊びである。

しかしコナンは今小学一年生である。

夏の暑い中、外にも出れずにテレビゲームばかりしていた。身体が鈍っている。

元気な子供達は動きたかった。

かくれんぼは外でやるものだが今年は酷暑の夏。

外には出られないので、博士のいない家でかくれんぼをする事になった。

普通の家とは違う博士の家。咎める大人はいない。

コナンは断れなかった。

同じく中身と外見の歳が違う哀もそうだった。

推理小説と雑誌を取り上げられて三人に詰め寄られる。

断るつもりでいたコナンと違い、哀はフツと笑いすぐに了承した。

「仕方ないわね」

「お、おい！灰原…」

孤立したコナンに勝ち目はない。  
間もなくジャンケンが始まり元太が鬼になる。

「ごーお、ろーく」

元太の声が少し遠くなる。

何処に隠れようか。

コナンは家を見回す。足音をたてないように静かに歩く。

懐かしいなと子供の頃を思い出した。

蘭やクラスメイトと遊んだ記憶。

新一が鬼になるとすぐに見つけてしまい、よく文句を言われた。

一度だけ蘭が隠れているのを鬼が見つけれずに困ったことになっ  
た。

あまりに見つからず退屈した友達は皆帰ってしまい、新一は一人で  
搜した。

夕方も過ぎてやっと見つけると蘭はまだじつと隠れて待っていた。

あの時は辛抱強く待っていた蘭に驚かされた。

自分なら帰っていただろう。

見つかったのに嬉しそうに笑う蘭を新一は見つめていた。

灯台元暮らしであろうか。

光彦がリビングのカーテンの後ろに隠れた。

歩美も身体を小さくしてキッチンの奥に隠れた。

「なーな、はーち」

廊下の奥の小さな物置。

前には荷物があり、そこに扉があるとは解りにくい。

その向きは死角なっている。  
コナンはその扉を開けた。

「は…灰原？」

「おあいにくさま。先着順よ」

哀は小さな声で、コナンへ不敵に笑った。  
考えが同じだった。とコナンは諦め扉を閉めようとした。

「きゅーっ、じゅっ！」

元気な声が途切れた。

「やべえ！」

「え、ちょっと…」

すぐに元太は捜しにくる。

コナンは慌てて哀のいる物置へ隠れた。  
元々狭い物置である。子供とは言え二人入れば狭すぎて密着しなければ入れない。

哀に被るようにコナンはぐいぐい入り込み扉を閉めた。

「…何勝手に入って来てるのよ。違う場所に隠れなさい」

「静かに！！」

抗議する哀の口を左手で塞ぎ、口元でシートと右手の人差し指をたてる。



せつかく隠れても声がしたら見つかってしまう。

「……………」

二人の目線が合いながら耳をすます。まだ鬼の声や足跡はしない。やがてハツとした哀が首を振ってコナンの手を退かす。

「ちょっと離れてよ」

小さい声で囁く哀の顔が近くにあるとコナンは気づいた。しかし狭い物置で身体を動かすこともままならない。

「…狭くて無理」

コナンが苦笑いして答えると、半目で睨んでいた哀がふいと横を向いた。

「……………」

「……………」

暑い。

狭い物置で身体のひとつを密着させているので、段々お互いの体温が高まり汗ばんでいく。少し浅くなった呼吸も感じる。コナンの心になんともいえないモヤモヤが生まれる。

(……………?)

鼓動が早い。

顔を逸らして違う事を考えようとしても、汗で匂いたった哀の香り

が鼻をくすぐる。

小学一年生なので香水は使っていないと思う。

物置が哀のシャンプーか石鹸の甘い香りに包まれたような気がする。視覚を逸らしても触覚聴覚嗅覚に哀の存在を感じられずにはいられない。

（いい香りだなー。何使ってるか後で聞いてみよう。）

ぼんやりとした頭で呑気にそんな事を考えたコナンだったが、横を向き続けて黙っている哀をついチラリと見てしまう。

薄暗い物置で浮かび上がる白い肌に大きな切れ長の瞳。赤みがかつた茶髪は汗で首筋に張り付いている。

心なしか顔が赤いのは暑さの為だろうか。

結んでいた桃色の唇を開き、フウツと小さく息を吐いた。

「.....」

柔らかく甘かった唇。

先日、あの唇に触れたことを思い出した。

それは木から落ちた哀を助ける為に起きた事故の副産物。

ふっくらとしてみずみずしい唇がコナンの唇に重なったのだ。

同時に怪我もしたのだが、それよりキスは衝撃的だった。

哀は事故だとクールに否定したが、コナンはその態度が面白くなかった。なので何も言わなかった。

そしてしばらく哀を正視出来なかった。

哀も何処か意識していたようで、二人してなんとなくぎくしゃくしていた。

最近やっと普通に接するようになり、忘れかけてきていたのに。

(まあ、あれは事故だったんだけどさ…)

コナンの目線が哀の唇から離れない。

コナンが喉を鳴らす。唇も渴いたように何かを求めた。無意識で吸い込まれるように顔を近付ける。

哀が気配に気づいてコナンの方を向く。

あまりに近いコナンの顔に驚いたように目が開く。唇がほんの少しでくっつきそうだった。

「みんなどこにかくれたんだあ？」

野太い元太の声が近くでした。すぐそこにいる。

「どこだー？」

ドタバタと大きな音がして次第に遠ざかる。

「ぶはあっ…」

つい息を止めていたので、苦しくて大きく息を吐き出した。

哀も同じように息をゼイゼイ言わせている。

(今、自分は何しようとしたのか?)

はたと気づいてコナンは顔を赤くする。

どさくさ紛れに哀の細い肩に手を回して、驚いてガタンと音をたててしまう。

「あ」

再び訪れたピンチかとコナンも哀も身をかたくした。

「……………」

しかし気づかれなかったのか外は静かだった。

少し遠くで元太の嬉しそうな声がした。

続いて歩美の残念な叫び声が聞こえる。

「吉田さん見つかったみたいね」

「ああ…」

もういい加減こちらも見つけて欲しいと哀は思った。

そうじゃないと心臓が持ちそうもない。

暑いし汗ばむし、息もまともに吸えない。

コナンが近すぎてうるさいくらい心臓が動いていた。

さっきのキスするくらい顔が近い距離を思い出し赤らむ顔をどうにも出来ない。

(馬鹿みたい、私。何してるのかしら…)

こんなことで何を意識する必要があるのか。

小さくため息をついた。

「……………」

沈黙はまた余計な考えを生む。

相変わらず暑いし辛いのに、なんとなくこのままいたいと感じていることに気づく。

二人の視線が交差する。

「灰…」

「見つけたぞ！」

元太の声。

今度は光彦が見つかったらしい。  
残念そうな光彦の声がした。

「後はコナンと灰原だな！」

意気揚々とした元太の声が少し遠くで聞こえる。

歩美と光彦の賑やかな声もする。

まだ近くにはいない。緊張していた身体を緩ませた。

「…私達、イイ歳して何してるのかしらね？」

「…言っなよ」

しばし沈黙でふと何度めかの視線があい吹き出すように笑う。

「本当だな。俺達二人してこんな何してんだろっな」

「イイ歳の男女が密室にふたりきりだなんて、聞こえだけはいいけどね」

「何だよそれ」

「ほら、この状態がそうでしょ」

言われて見れば確かにイイ歳の17、18の男女（見た目は小学生だ）が密室にふたりきり。

（あ…）

せつかく治まっていたコナンの心臓がまた早く動き始めていた。哀の体温が意識を支配する。夏服から覗いた汗でしっとりした肌はぴたりと吸い付くように接触している。

なんでこんな意識してしまうのかよく解らない。

距離が近く密着しているらか？

もし、歩美だったとしてもこんな風にはならないと思う。

イイ歳の男女だから…？

…哀だから？

顔を赤くしたコナンを見て、哀もつられたように意識してしまう。余計な事を言ってしまったと哀は頭の奥で後悔した。熱を持った顔を胡麻かすようにコナンを睨みつける。

「なに考えてるのよ」

「…べ、別に」

腕が伸びて哀の背中に回ろうとしていたコナンがぎくりとした。コナンはバランスを崩して哀に体重がかかる。

「え？」

「ぎゃ」

ガタンと大きな音がして扉が開いた。  
二人は涼しい風を肌を感じた。

「みーつけた！」

元太が勢いよく走ってくる。

物置の外で倒れ抱き合うようなコナンと哀は絶句して、そして慌て離れた。

鬼としてやり遂げた元太はニツと笑った。

「どうして二人して同じ所に隠れていたんですか？」

あとから来た光彦と歩美が顔を曇らせ、薄目でジッと睨んだ。

「私が先に隠れていたのに、この人が無理矢理入ってきたのよ」

「…ハハ」

哀の言葉は間違っていないので、コナンは何も言えない。

「ふうん」

コナンに嫌な汗が噴き出る。

哀は腕を組んで知らん顔をしていた。

後ろめたいことがある訳でもないのだが、なんとなく光彦と歩美の目線が痛い。（まあ…灰原にキスしようとしたけど…）

なんであんなこと…

「喉が渴いたわ。お茶にしましょう」

哀がスタスタとキッチンへ歩きだす。  
元太は喜んでついていった。

「僕達も行きましょうか」

「うん。コナンくんも行こう」

コナンは皆の後ろ姿を見送り、物置を振り返る。  
薄暗いそこはまだ少し甘い気配が残っているようだった。  
コナンは静かに扉を閉めた。



## かくれんぼ（後書き）

文章内容共に未熟ですみません…。

今、都会の小学生はかくれんぼを知らないかもしれない、とふと思いました。

静かな夜（前書き）

ご無沙汰しております。いつも拙い作品をご覧下さる方々に間を開けてしまったお詫びと時間を割いて下さることに感謝しております。勢いで書いてしまったのでおかしいかもしれませんが。新志です。

## 静かな夜

クリスマスイヴ21時。呼び鈴が鳴って玄関へと向かう。

同居人でこの家の主、阿笠は初恋の人で恋人であるフサエさんと旅行中だった。

まさかまた、自分を心配して戻って来てしまったのだろうか。前科があるので「ない」とは言い切れない。

クリスマス、年末と一人にさせてしまうから心配だと何度も旅行に同行しないかと言われた。

その度に「前のような」子供じゃないんだからと断った。

せつかくの恋人との時間、しかも気の遠くなるような時間想い続けていた相手との貴重な時間を、自分の為に駄目にされるのはとてつもなく辛い。

たまたまいた隣人の自称探偵が上手く言ってくれたので何とか出発に向かってくれた。

父親がわりの保護者は、娘以上に可愛がってくれるが過保護気味だ。いつか恋人に愛想つかれないか、娘としては少し心配である。

「宮野！」

ドアに手を出そうとして止まる。

再び呼び鈴と志保の苗字が呼ばれた。

外は急激に気温が下がり身体に冷たさが染み込む。

空は晴れて放射冷却で明日の朝はかなり冷えるだろう。

しかしその冷たさは空気が澄んで見えるようで、家々の明かりや飾られたイルミネーションが綺麗に夜を浮かび上がらせていた。

かじかみ始めた手を擦っていると、ガチャリとドアが開けられた。

「…何しに来たの？」

実に不機嫌そうに宮野志保は訪れた客に対応する。

「メリークリスマス！」

ニツコリ笑う客は隣人であり、探偵に忙しい工藤新一だ。

「うー。さっびーなあ」

いつものごとく我が家のようにズカズカと家の中に入っていく。溜息について志保は玄関の扉を閉めた。

「あなた酔っているのね」

家の暖かさに緊張した身体を緩ませている新一に声をかける。すれ違う時に酒の匂いがしたからだ。

「お茶でも飲む？」

「サンキュー」

満面の笑顔の新一を横目に志保はキッチンへ向かう。

（一体何しに来たのか。）

今日はイヴ。

日本ではイヴが大事で恋人と過ごす日である。…らしい。

今日新一はあの人と一緒にいるはずじゃなかったのだろうか。  
夕方にお嬢様である鈴木財閥のパーティーがあつて、その後は長年の幼なじみでもうすぐ恋人になるうとしている彼女と過ごす……。  
そこで志保は思考を止めた。

「私には関係ない」

そう。あまり関わらないそう決めたのだから。  
熱めにした湯を注いだ。

酔いを醒ましながらゆっくり飲めば悪酔いにはならないだろう。  
リビングに茶を持っていくと、うつらうつらと新一は眠りに入ろうとしていた。

「ちよつと工藤くん」

揺り起こすが、

「んあ？」

と一言言っただけで目を開けようとはしない。  
顔は赤く、酔いがだいぶ回っているみたいだ。

年末。犯罪事件が多発して、新一は睡眠不足が続いていた。

パーティーで飲んだ（飲まされた）酒に酔ってしまったのだろう。  
元々あまり酒も強くない。

普段探偵で正義を気取っているが、未成年飲酒は甘いのは何故だろうか。

「ちよつと工藤くん。何しに来たのよ。眠るなら家に帰りなさい」

再び揺り起こすと目をゆっくり開けた。

「…宮野」

「ほら、お茶よ。熱いから気をつけて飲みなさい」

言われるがまま口に含むと熱いながら、ふわりと緑茶の香りがした。熱さが喉を通って胃に流れていくのが解る。じんわりとした優しさが新一を包んだ。

「何?」

ジッと志保を見つめる新一に志保は表情を変えずに聞いた。

「美味しい」

「そう?」

新一がゆっくりとお茶を飲む間、静かな時間が流れる。

「そうだ!」

と新一が思い出したように目を開いた。着たままのコートのポケットへ手を入れてがさごそと探る。

「はい」

「…?」

「クリスマスプレゼント」

渡された手には小さなラッピングされた箱。

「私に？」

「つたりめーだろ。開けてみるよ」

困惑したままりボンを取ると銀色のネックレスが入っていた。

「オメーに似合うと思ってさ」

少し照れたようにニツと笑う新一にまだ志保は反応が無い。  
呆気にとられたままネックレスを見ている。

「どうして？」

「…気に入らなかった？」

「……」

新一は覗き混んで志保の様子を伺おうとする。

「…あなたにしてはセンスいいわね」

「どつという意味だよ」

「そのままよ」

全く素直じゃないんだからと新一は溜息をついた。

じつくりプレゼントを見る顔は嬉しく思っているに違いない。

「事件が立て込んでたのによくこんなものを買う時間があったわね」  
皮膚が次々に出てきた。

「ハイハイ。いいからつけてみるよ。ホラ」

志保の後ろに周りネックレスを付ける新一。  
首筋に触れるくすぐったさとすぐ後ろに立たれる緊張感。  
強い胸の高まりに志保は気が遠くなりそうだった。

新一の指が志保の白いうなじに触れる。  
華奢な肩といい抱きしめたらすっぽりつつめそうな身体。  
幼児化した時は同じくらいの体型だった。  
元の身体は男女の差がこんなもの出ているのだと改めて思う。

「…？工藤くん？」

黙り込む新一に志保が振り向いた。

「やっぱり似合うな」

新一が志保を優しく見ていた。  
志保の胸が再び高鳴り切なさ言葉に詰まった。  
どうして新一はこんなことをするのだろう。



(ますます諦めきれなくなってしまうじゃない)

「宮野？」

「…ありがとう」

なんとか言えた御礼。志保は小さく息を吐く。

「おう」

「言っておくけど、私は何も用意してないから」

「べつにいいよ」

新一は気にしてないと残りのお茶を飲み干した。

「お返しは期待しないでね」

少し遠くに志保の声が聞こえる。

お返しを考えてしまう志保は案外律儀なのかもしれない。

いや、本当にクリスマスプレゼントが嬉しかったのだろう。ネックレスを付けたまま何度も無意識に触っている。

まだアルコールの酔いは醒めずに新一の身体を支配していた。

プレゼントを渡せたことの安堵感と身体が温まり緩んだことで、再び眠気が襲ってきた。

「工藤くん？」

志保の翡翠色の瞳が大きく開いた。

アルトソプラノの声が心地よく新一の名前を呼ぶ。

連日の事件で忙しく身体は疲れていた。

パーティーで出されたシャンパンがこんなに身体に染みるとは思わなかった。

しかし、今日どうしてもプレゼントを渡したかったのだ。

一目見て志保に似合うと思った。すぐに買って今日まで大事に持っていた。

「…本格的に寝ちゃったみたいね」

起こすのも大変だ。志保はすぐに諦めて行動をする。

新一のコートを脱がし、ソファーに横たわせる。持ってきた毛布を二枚かけた。

風邪ひかなければいいけれど。明日二日酔いになるだろうから薬も用意しなくては。

ふと志保はなんだか幸せそうな新一の寝顔を見つめる。

目を閉じる顔はどこか幼く感じた。

「…ありがとう」

志保の優しい微笑みは誰にも見られる事はなかった。

「メリークリスマス。お休みなさい」

志保は新一の頬に小さくキスをする。揺れたネックレスがキラリと

光に反射した。  
それから少ししてリビングの明かりが静かに消えた。

## 静かな夜（後書き）

どうしてもX・masの話を書きたかったので勢いで投稿してみました。

連載ではないのにいくつかの続編を書いてあるのですが、中々思うようにいかず時間ばかり過ぎてしまいました。

また近々投稿が続くかもしれませんが、原作無視、キャラ違つというくだらない文章に寛大な方達に甘えて書ききりたいと思います。

コ哀新志主義でごめんなさい。

更新せずにいた間、アクセスやお気に入り登録して下さいました方々感謝を込めて。

良い聖夜をお過ごし下さい。

いつもそこに君がいた（前書き）

恥ずかしながらコッソリ戻って参りました。コ哀です。話、長いです。

いつもそこに君がいた

表紙をめくると子供5人が並んだ写真、一枚。

左に大きな体のいがぐり頭で、皆より少し後ろに立っている元太。その隣前に、少し背が高く髪の毛を真ん中でキッチリ分けてソバカスが特徴の光彦。

真ん中には切り揃えたボブカットにカチューシャをし、くりっとした目で満面の笑みをしている歩美。

そして、赤みがかった茶髪で隣にいる歩美と寄り添うように立っている少女。

普段あまり見せない笑顔をして翡翠の瞳でこちらを見ている。右端に立っている眼鏡をかけた俺との微妙な距離をあけて…。

微妙な関係だった俺達

\*\*\*\*\*

終わりの鐘が鳴って哀が席を立った。手際よく授業の道具を片付けて、速足で教室を後にした。少し伸びた茶髪は、あの頃から数年経っても変わらず鮮やかに靡いている。

「やっぱり噂は本当なんですかね」

いつの間にか光彦が側に立っていたのに気が付かず、驚いてコナンは眼鏡をずらしてしまう。

「哀ちゃんまた山口くんのところに行ったのかなあ」

眼鏡を直している間も、歩美もいたのかよと気付いて再び驚くコナン。  
出会った時より二人とも身長も伸び、顔つきも大分大人になってきていた。

「勿論そうでしょう。毎日会いに行ってるんですからね」

「でも…哀ちゃん。違っつて言ってたのにな」

「どう見ても付き合ってる雰囲気ですよ。あれは」

「どうして何も言ってくれないんだろ」

「……………」

コナンは二人の会話をぼんやり聞いていた。

暫く沈黙が続いて、歩美と光彦はまだ机に突っ伏したまま寝ている元太を起こしに行く。

灰原哀がふたつクラス隣の山口と付き合っている、と噂が流れてきたのは数日前。

「灰原さん！彼氏が出来たって本当ですか？」

光彦が息を切らせて、勢いよく教室に入ってきた。教室の窓際に歩美と笑って話していた哀に、詰め寄るように近づきとんでもない事を言い出す。

「は？」

哀のとぼけた高い声。

（灰原に彼氏？まさか…）

と思いながら、コナンは自分の席で読みかけていた本から哀へと視線を移した。特に彼女の表情は変化していない。

しかし、光彦は真剣なそのものだった。首を傾げて哀が聞く。

「円谷くんどうしてそんなこと…？」

すると遅れて教室へ来た元太が答えた。

「昨日、大谷達がお前がデートしてるのを見たって言ってたから」

（…デート？灰原がデートだった？）

コナンはプハツと吹き出して、慌てて読んでいた本を口に当てた。誰にも気づかれていないようだ。

コナンは湧き出る苦笑いをハハツという言葉で消化した。

「本当なの？哀ちゃん？」



歩美が横を向いて哀に聞く。

「……」

「哀ちゃん？」

目を閉じ黙っていた哀が、目を開けてキツパリと答えた。

「いいえ」

その態度、言葉に張り詰めていた緊張の糸のようなものは弛んだ。コナンも何故か、力の入った肩を下ろしていた。そして哀と目が合つて、慌てて視線反らし本を読んでいるフリをした。

「……？」

何故ホツとしたのか、何故慌てたのか、自分でもよく解らずにコナンは戸惑つた。

光彦達は（特に光彦は）良かったと喜んでいる。

「なんだー。灰原に彼氏が出来たって勘違いかよ」

「ええ」

「でもどうして山口くんと一緒にいたんですか？」

「哀ちゃん知り合いだったっけ？」

「彼とは一丁目の空き家で会ったの。ほらあそこに猫…がいるですよ？」

ああ！と三人が声を出した。  
なるほどとコナンも頷く。

哀は捨て猫や野良猫を見ると放っておけないのだ。

「あの猫が妊娠したの。様子を見に行ったりしてるところに話すようになったのよ」

「あいつ、メスだったのかよ！」

「まだ産まれてないんですか？」

「一昨日に産まれたわ」

「えー。歩美、子猫見たい！」

無邪気に言う歩美に、哀はフツツと笑う。

「今はまだ親猫が気を立ててるから、もう少ししたら一緒に見に行きましょっ？」

「うん！」

「付き合っていない」そう言ったはずの次の日、哀はまた山口に会いに行ったのだった。

「哀ちゃん、放課後遊ぼう」

歩美が哀に声をかけたが、哀は断った。

「ご免なさい。用事があるの。また今度ね」

哀が教室から出ていくのをコナンはただ見ていた。近くの席にいる元太と光彦と歩美が話している。

「やっぱり彼氏じゃねーのか？」

「付き合っではないってのは本当なのでしょうが…」

「哀ちゃん山口くんが好きってことなのかな？」

「おそろく…」

「……………」

組織の居場所を突き止めるのもままならず、解毒剤も完成出来ないまま、数年の月日が経っていた。その間に周りの子供達は確実に成長をしているが、まだまだ子供だから、その中で哀が誰かを好きになることがあるなんて、…考えもしなかった。

コナンにとって実年齢がかなり下となる誰かを、恋愛対象になんて考えもしたことがない。

しかし、絶対なんて有り得ない。

そんな対象の男が、哀に出来たことはコナンをとて驚かせた。

なんと言おうか、コナンと哀、二人の間に特に何かがある訳でもない。高校生探偵と組織に属してた女が出会って数年、幼馴染みとして生きていく。

時には軽口やそれ以上の言い合いで喧嘩をしたり、時には事件が起きて助け合う。

付かず離れずを繰り返した。

何かを言わなくても意思が通じる不思議な関係だった。

歩美達と同じように、友人とも幼馴染みとも呼べるはずだが、何か違う。

同じ秘密を共有するという少し特別な関係。

「哀ちゃん恋をしてるのかな？」

「.....」

コナンには、コナンじゃなかった頃から恋い焦がれていた女性がいだが、彼女は大人になり新しい道を歩き始めていた。

随分待たせていた。彼女も限界だったのだろう。数年前の約束と告白になんの意味があるのか。

コナン自身、その気持ちも風化していくように変化していると感じていた。

そして彼女を開放させてあげたのだった。  
それが半年前。

未だ哀にはそのことを伝えてはいない。  
哀の性格上、きっと抱えこんでしまっただろうから。

（まあ、いつかバレちまうんだろうが）

とにかく。恋愛ことなんて欠片も感じなかった幼馴染みが、恋をした。

哀だって一人の女性だ、恋くらいするだろう。他の男に魅力を感じるだろう。

でも実際の年齢よりかなり若い異性に惹かれるような哀とは思えない。

いや、それはコナンの勝手な物差しなのかもしれない。  
現に哀は山口に毎日会いに行く。

色んな事を諦めてやる気が薄く生きていた哀にとって、恋をするのは良いことではないか。

解毒剤の為に夜中まで地下に籠ってるよりずっと、普通の女の子でいいことだ。

しかし、それで何故コナンの心はモヤモヤとしているのだろうか？  
鉛を飲んだように胃が重い。

「……?」

今日、何か悪いものでも食べたのだろうか？とコナンは胃の辺りをさする。

よく考えたら、事件や何か起きたとき意思の疎通は出来ても、二人の間で心を割って話すことはなかったように思う。

彼女が何を考えるか解らないことはずっとだし。

それで彼女を怒らせるのはしょっちゅうだ。

改めて考えて見る彼女の気持ち、コナンは推測出来ないと気づいた。

数日が経っていたある日。哀が山口といるであろう都立図書館へコナンは向かっている。

またもや誘いを断った哀に、光彦が我慢出来なくなったのだ。

光彦は哀のことが気になっているので、今の状態が我慢ならならしい。

「本当のことを確かめましょう！」

「なんで俺まで……」

歩美のことも気になる光彦は、歩美には内緒にしている。

元太は家の手伝いがあるのでいない。

つまりコナンだけ付き合わされる羽目になった。

しかしコナンは乗り気ではなかった。

正直見たくないのだ。

哀が恋をしているところなど。

しかし、その考えを無視するように、目の前に現実が立ち塞がった。図書館に入っつてすぐ、哀と山口は仲良さそうに机に並んでいるのが目に入った。

コナンは足をすくめてしまう。

「コナンくん、こっちです」

本棚に隠れた光彦が小声で呼ぶ。

コナンも同じように隠れると、光彦が指をさした。

山口が色紙を哀に渡す。哀は笑顔でそれを受け取る。箱には色とりどりの色紙。

何か話ながら手を止めて二人で箱を覗く。

ニッコリと笑いあう二人にしか解らない世界がそこにあつた。

「.....」

「あれはデート以外なものでもありませんよね。僕、もう我慢できません。灰原さんに聞いてきます!」

「待て、光彦!」

コナンが止めた。

「どうしてですか?何故止めるんです?コナンくん」

「もう少し待ってみようぜ。多分もうすぐ本当の事が解るかもしんねえよ」

\*\*\*\*\*

「あら懐かしいわね」

洗濯物を取り込んだ彼女が、俺のしているアルバムを後ろから覗きこんだ。

フワリと彼女の甘い香りと洗濯物の日向の匂いが鼻をくすぐった。

「貴方がそんなもの見てるなんて珍しい」

フツツと笑う唇が横に開く。

日当たり良いリビングの大きな窓は、綺麗な青空を見せていた。

午後の柔らかくなった日射しが、部屋の一角に飾ってある写真立てを照らす。

ウエディングドレスを来た彼女と俺が映っている。

\*\*\*\*\*

「千羽鶴？」

皆の声が綺麗に重なる。



「ここ何日間ずっと山口さんと千羽鶴折っていたんじゃないか。そうだろ？灰原？」

「ええ」

哀が頷く。と

「でもなんで何も言わなかったんだ？」

「願掛けしてたの」

「願掛け？」

歩美が首を傾げる。

「山口のお姉さんが早く退院できますようにって」

子猫を見ている時に、誰にも言わずに一人で折ったら、お姉さんは退院できるかもしれないと山口くんは考えた。

そこで哀は自分からお手伝いを買って出たのだ。

…自分の本当の姉である彼女を思い出し重ねたのだろうか。

その時の哀を思い、コナンの胸は詰まる。

「二人でやれば早いし、願いも二倍になるかもしれないわよって言ったの」

「それでボク達にも言わなかったんですね」

「ええ。ずっと誘いを断ってしまっただけごめんなさいね」

哀が素直に謝った。黙っていた歩美が哀を見て真剣な顔をする。

「哀ちゃん、千羽鶴は完成したの？」

「ええ」

それを聞いてほおつと表情を崩し歩美が笑う。

「良かった！これで山口くんのお願ひ効くといいね」

「吉田さん……」

「でも歩美にも言ってくれば」山口くんのお姉さん退院できますように”っってお願ひしながら一緒に折ってあげられたのに。

…歩美、哀ちゃんが何も言わないのさみしかったよ

「……」

「そうですよ。水くさいです」

「おれたち仲間じゃねーか」

「……」

三人の笑顔に驚いていた哀の瞳が揺れた。戸惑ったような嬉しいような顔をして笑う。

「ごめんなさい…皆ありがとう」

少しだけ潤んだ瞳の哀を静かに微笑みながらコナンは見つめた。

数日後。

コナンと哀が探偵団三人と別れて一人で下校中の時だった。

「灰原さーん！」

山口が笑顔で走ってくる。

「どうしたの？」

全力で走ってきたのか息も絶え絶えの山口が肩で息をしてしゃがみこむ。それを覗きこむ哀。  
息を整えた山口が顔をあげた。

「あのね！」

「あ

「え？」

山口が嬉しそうに哀の手をとる。

「お姉ちゃんが退院するんだ！」

「…退院…？本当に？」

「うん！ー！」

「そう。それは良かったわね。おめでとう」

笑顔になる哀と繋がった手を唾然と見てるコナン。  
お礼を言われてますます笑顔になる山口。

「灰原さんのお陰だよ。ありがとう！」

「私じゃなくて、あなたの願いが通じたのよ」

「でも灰原さんが手伝ってくれたから、二倍になったんだよ！」あ  
のさー」

哀と山口の間にコナンが間に入ってくる。

「良かったな。お姉さん退院おめでとう」

「…」

「きみは？」

きよとんとした顔で山口がコナンを見た。

「え？あ…」

コナンは何て言ったら解らず慌てる。  
そう言えば山口と面識なんてない。

「この人のことは気にしなくていいわ。でもお姉さん本当に良かったわね」

「うん!!あのね、ぼく灰原さん大好き」

いきなりの告白にコナンはギョツとし目を見開いた。

「ええ。私もよ」

フツッ笑いサラッと哀も返事をした。嬉しそうに笑顔になっている。

「……………」

「じゃあ、お友達になってくれる?」

「もうそのつもりよ」

「…へ?」

「やったー!!」

コナンは混乱した。

「え?え?ちょっと待った」

「何よあなた、さっきから五月蠅いわよ」

哀が横目でコナンを睨む。不思議そうにした山口がコナンを見る。

「灰原さんのお友達?」

「え?」

言われてすぐに何故か答えられないコナンと哀は目を合わせた。探偵団も含めればすぐに答えられるだろうに。何故か一対一になると何か違うような気がして仕方がない。でも一般的に見れば友達なのだろう。

「…ええまあそうね」

哀が歯切れ悪く答えると、山口がニコツと笑う。

「じゃあ、今度は…ええと…名前なんて言うの？」

「江戸川コナン」

「江戸川くんを大好きになれば、お友達になれるね」

「え？」

「…言う子なの」

ニコツと哀がコナンに耳打ちをする。

「…あ、ああ」

イマイチよく解らない気持ちのまま、苦笑いしたコナンは山口と握手をした。

「灰原さんありがとう！また明日ね…！」

山口くんが手を振って笑顔で走っていった。哀もやさしい顔でそれを見送る。

そして間もなくその顔が無に戻り目付きが鋭くなった。視線を感じるコナンの方を見ずに低い声で聞く。

「…何よ」

「俺てつきり…」

コナンは脱力していた。本当に心からホッとしている。

落とした肩に疲労を感じながら、こちらを見ない哀の横顔を見続けた。

フウツと息を吐いて口角を上げた。

「…いや。オメーは心が優しいな」

「…」

驚いて振り向いた哀の丸く開いた瞳が、徐々に半目になってコナンを見る。

「…何よ気持ち悪いわね」

ひとつ溜め息ついて、哀はスタスタと歩いて先に行ってしまった。コナンは自分の中に生まれている気持ちを自覚し始めていた。

\*\*\*\*\*

「あの子達、今何をしているのかしらね」

洗濯物をたたみ終えた彼女が俺の隣に座ってきた。

あの時のような少女ではなく、

美しい女性へと成長した。

「あいつらのことだ。元気でやってるだろうよ」

「そうね」

遠い地になってしまった米花町を二人で思いを馳せる。

「なあ…」

「私、あなたの側にいつもいるのね」

アルバムを覗きこみページをめくって彼女は呟いた。

写真の中で、彼女と俺は常に一緒に写っている。

肩を抱き寄せて柔らかく甘い彼女の髪の毛に唇を落とす。

「今度、博士や皆に会いに行こうか」

「…ええ」

目を開いて彼女は俺を見てふんわりと笑った。その唇を塞ごうとしたとき、遮るように泣き声が響いた。

「ああ、起きちゃったのね」



彼女は立ち上がり向こうの部屋へ行ってしまった。

それを見送り再びアルバムに目をやる。

生意気そうな眼鏡の少年の横で、薄く微笑む茶髪の少女。

いつもそこに君がいた

## いつもそこに君がいた（後書き）

ご無沙汰しております。その間にアクセスやお気に入りとしてくれた方々感謝致します。

題名と同じ曲を聞いたら、話がダーツと浮かんでしまい書きました。

（某有名柔道アニメのEDです）

成長無くてすみません…。

書きたいものと続編がまだいくつがあるのですが、中々形にならずに時間だけが過ぎていきます…。

が、気の長い方だけお付きあい下されば幸いです。

コ哀新志が大好きです。

## 風の通り抜ける街（前書き）

続けて更新。新志です。が蘭目線になります。

幸せの情景と言つ話の続きと言えば続きですが、単独でも読めると  
思います。

（短編集というくりのはずが沢山続編がある「こちやこちや」ですみ  
ません）

今更ですが、原作主義の方は避けて下さい。

## 風の通り抜ける街

「あ……」

「え……」

高く青い空が広がっている晴れた日。  
シヨッピングをしていた街中で、出会ってしまった。

「蘭さん……」

人混みの中でもその存在感は何処かはかないようで光っている。  
赤みがかかった茶髪と透き通るほど白い肌。  
驚いた丸い目は翠に澄んで長い睫毛が揺れて美しい。  
宮野さん……あ、今は違うんだっけ。

「お久しぶりです、志保さん」

最後に会ったのはいつだっただろう。  
その頃より更に綺麗になったのは、愛されているからかな？  
最初見た時、冷たい影のようなものがあつたけれど。  
今、志保さんを纏う空気は柔らかく暖かい。  
華奢な身体に不似合いなお腹の膨らみ。  
私の視線に気づいて、志保さんは遠慮がちに答えた。

「ああ。予定日は来月なの……」

「……そうなんだ、おめでとつございますー！」

衝撃は小さいながらも、忘れかけていた疼きを生んだ。

風の噂で結婚したとは聞いたのだけれど。

まだ、本人達に会うまでは信じられなかったのかもしれない。

新一：制服を着て不敵に笑う新一を思いだす。

：幼なじみの彼は前に進んでいるのだ。

「少し時間ある？」

近くの喫茶店で向かい合うように座り、注文をする。

お腹が膨らんだ志保さんは、座った時大きく息をついた。

「大丈夫ですか？」

「ええ。慣れてる事だから平気よ。ありがとう」

柔らかく笑ってお腹をさする志保さんに見とれてしまう。

そうだった。

この人の笑顔は引き付ける何かがあった。

容姿のクールな雰囲気とまるで違う包み込むような優しい笑顔。

だから新一が好きになったのだろう。

「新一は元気ですか？」

「…ごめんなさい…」

「志保さん？」

高校二年生の時、幼なじみで好きだった新一が事件に巻き込まれ数ヶ月行方知らずだった。

必ず帰ってくるから待っているとわかれて、素直に待っていた。

あの時… どうして私はただ待つていただけだったのだろうか？  
新一はその頃に運命の人と出会ってしまったのに。

数カ月後、突然新一は志保さんを連れて戻ってきた。

そして新一は「好きなヤツが出来た」と正直に話して謝ってきたのだ。

私は裏切られたと新一を詰り、口もきかなくなった。

そのあとは卒業して進路も別々になって、お互い連絡もとらなかった。

私は子供だった。

「私が二人を引き裂いてしまったから。蘭さんを沢山傷つけた」

「もう昔の事です」

「本当はもっと早く謝るべきだったのに。ごめんなさい…」

「あの時、志保さんが謝りに来てたら私、逆上して何も話にならなかったと思います」

「…」

「終わった事。でしょ？」

「…そうね。謝罪はただの私の自己満足。今更こんな事言われても厭味でしかないわね」

志保さんは自嘲しフウツと息を吐いた。

「私って何処までも嫌な女…」

この人は私の事が気になつてずっと傷ついていたのかもしれない。きつと、とても不器用で純粹な人。もうそんな必要ないのに。

「ごめんなさい…」

また、謝る。

そんな態度を取られたら、少し意地悪くなってしまう。

「志保さんは新一を返してって言ったら返してくれるの?」

「!?!」

大きく見開く目と動きを止めた志保さん。でもすぐに迷いのないきつぱりとした姿勢になった。

「駄目よ。彼は譲れない」

私は少し切ないながらも、嬉しくなった。この凜とした綺麗なひとが新一をずっと大事にしてくれる。簡単に譲るなんて答えたら、ひっぱたいていただろう。

「新一を愛してる?」

「ええ、とても。彼無しでは生きていけないわ」

「それは」馳走さまでした」

にんまり笑う私に少し顔を赤くした志保さんが、とても可愛い。

「良かった」

「え？」

「今日志保さんに会えて。」

「蘭さん……」

忘れていたものの、何処かひっかかっていた私の初恋。

それは本当の意味でいい思い出になれたかもしれない。

今の新一が幸せなら嬉しい。

心からそう考えられるから。

「やっぱり、あなたはAngelなのね」

「え」

志保さんのケータイが鳴る。

ごめんなさいと志保さんが通話を始めると、懐かしい声が聞こえた。  
新一だ。

出掛けたまま帰ってこない志保さんを心配して、掛けてきたらしい。

「今、蘭さんと喫茶店にいるの」

『蘭？』



驚いた新一の声が響いて二人で笑う。  
志保さんが私にケータイを差し出した。

「新一久しぶり」

『蘭?... オメーどうして志保といるんだ?』

「ふふ。さてどうしてでしょう?」

十数分後、新一が志保さんを迎えに喫茶店へ来た。

「蘭、久しぶりだな。電話でビックリしたぜ」

久々に会った新一は男らしさが増して、更に格好良くなっていた。  
隣に座る志保さんを気づかう優しい目に、また少し切なくなる。

もう恋ではないけれど。

新一の横には私が立つことはないし、その瞳に私が写ることもない  
と思い知らされるのは...

...少し胸が痛む。

きっとそれは新一と過ごした幼い過去がそうさせるのだろう。

過去が輝いていたからこそその痛み。

でもあくまで過去は過去。

名残の痛み。

過去という甘い思い出に引きずられてるだけの気持ちは、もう要ら  
ない。

「新一、おめでとー」

「蘭…」

「言っでなかつたから」

「…ああ」

「お幸せに」

「ありがとう」

色々あつてしばらく音信不通だった私達だけれど、久々に会つてその時間もたいしたことない気がした。長く幼なじみをしてきた。だからその縁は何年経つてもずっと切れないだらう。笑いあふ私達を、志保さんは優しく見ていた。

「赤ちゃん産まれたら、見せてね」

「ええ」

「遠慮しねーでいつでも来いよ」

「うん！どうせ推理オタクの新一は事件でいないだらうけど」

「そうね。この人は鉄砲玉みたいに出て行ったら帰つてこないから」

「全く！新一は父親になるのにまだそんな事やってるのね。」

「自覚がないんでしょ」

「オメーらさつきから黙って聞いてればな…」

尽きない話で時間はすぐに経つ。

次会う事を約束し「じゃあ」と別れた。

遠ざかる二人の後ろ姿が同じ雰囲気で、寄り添うように歩いている。私から自然に笑みがこぼれた。

「いーなあ」

なんだか無償に彼に逢いたくなかった。

優しく穏やかな私の1番愛しい人。

落ち込んでいた私のずっと傍にいて、優しく包んでくれた。

彼にものすごく甘えたくなった。

愛してると言ったら、どんな顔するかしら？

ケータイを取り出していると、風が私の髪の毛をふわりと揺らす。

気のせいか、さつきより街が明るく輝かしいものに見えた。

今度、幼なじみに彼氏を紹介しなくちゃ。

きつと驚くだろう。

呼出しのコール音が鳴る。

私の胸が期待に高まる。

「…私。今大丈夫？あのね…」

## 風の通り抜ける街（後書き）

結婚してる繋がりですら連続投稿しちゃいました。

一年以上前に書いたものなので、告白はなかったことになっています。

ああ、志保ちゃんを幸せにしてあげたい。

## 誓い（前書き）

哀一人称で哀 コ？って感じですよ。

## 誓い

鈴木財閥が開いたパーティ会場で起きたテロ事件は数時間の死闘の上、終わりを迎えた。

表向きは現場にいた毛利探偵の名推理で解決したかに見られるが、もちろんその裏で彼が動いていたのは間違いない。もちろん探偵団もある程度活躍したと、周りの大人は思ったかもしれない。

運悪く犯人グループに捕まった彼の最愛の人を助け出す為に、彼はまた無茶をする。

すっかり我を忘れて、小学生としても度を越えた行動ばかりしてた気がするけども…。

まあいつもの事かしら？

真実を追う為に

彼女の為に

彼は真つ直ぐに事件の謎に立ち向かうのだろう。

「灰原」

刑事さん達と建物から出てきた工藤くんは、私に近づいてきた。

「サンキューな。オメーのお陰で助かったよ」

果敢に犯人に近づいた工藤くんは、後ろにいた仲間の犯人に見つかり危うく撃たれそうになる危険な状態だった。

小さい身体を利用して身を隠した私は、彼にその事を伝えたに過ぎない。

「別に」

皆危険だった。過ぎてしまえば、忘れたかのように和やかになるいつものメンバー。

事件馴れと言うか、平和ボケしてるのか。

…どちらにしても良くないと思うんだけど。

探偵団を見ていた視線をちらりと工藤くんに向けた。

彼は呆れた顔で目を開き眉毛を下げている。

「素直じゃねーな。どう致しましてくらい言ってみろよ」

「どう致しまして（棒読み）。…そう言えば珍しいわね。あなたが  
お礼なんて」

「え？」

「お礼なんて初めてじゃないかしら？」

いくつかの事件で、命の危険に晒された彼を助けたことがある。

別にお礼を言われたい訳ではないし、それは当然の行動だった。  
工藤くんになれては困る。  
死なせる訳にはいかないから。

「…そうだったっけか？それは悪かったな」

思い出すよう考えて頭を掻いている。

「助けて貰っていつも感謝してるんだぜ。オメーには」

「…」

「なんかオメーにいつも守られてる気がすんな。」

工藤くん笑った。

私は目を反らせず、思わず手のひらを握りこむ。

「コナンくん！」

遠くにいた蘭さんが手をあげてこちらに来た。

「蘭姉ちゃん！」

すると、彼は途端に子供のように甘えた声と、あどけない表情に変わる。

「全く、いつもどっか行っちゃって心配させるんだから！」



「…えへへ。ごめんなさい蘭姉ちゃん」

余計な言い訳と、嘘を。

工藤くんはどれだけ重ねるのだろう。

私のせいで自分を殺し、好きな人へ偽りを続ける。

私がつった薬さえなければつかずに済んだ偽り。

仮の姿でしか、好きな人の側にいられなくなってしまった。

陰からでしか彼女を守れなくて、何度悔しい思いをしてるだろうか。

真っ直ぐに生きてきた彼には地獄のような苦しみかもしれない。

でもそれを微塵も感じさせずに、小学生を演じる工藤新一。

「私は」

貴方を…

…貴方を…

「絶対に戻すから…」

彼女の元へ。  
それが私の全て。  
私が生きる意味。

「灰原！」

工藤くんがまた私を呼んだ。

「おっちゃんは何処か寄つてくらしいんだけどさ、ご飯一緒に食べていくか？」

少し遠くで無邪気にこちらを見て笑う蘭さん。

目の前の工藤くんは口の端をあげて返事を待っている。  
二人とも同じ澄んだ目をしている。

立場が違つても二人は同じものを見ているのかもしれない…。

「灰原？」

「…博士が。博士が待つてるから帰るわ」

もうそろそろ特別大学講師の出張から帰ってくる頃だ。

「そっか」

工藤くんが蘭さんたちに伝えると、残念そうに蘭さんがこちらを向いた。

「じゃ、またね。哀ちゃん」

「ええ」

手を振ってすぐ、くるりと背を向け家まで送ってくれると言っ高木刑事の車へ向かう。

「灰原！」

工藤くんがまた呼び止める。

「？」

「また明日な」

子供らしくない不敵な笑顔を残して、蘭さん達のあとを追っていく工藤くん。

「…また明日…。か」

私は前を向いて再び歩き出した。



## 誓い（後書き）

この短編集につけた題名の割りにそういう話が少ないなと思いついてみました。

まあ原作にない恋愛を読みたくて読み足りなくて、書いているものなので恋愛ばっかになってしまふのですが。

そもそも、最近原作を…

取り合えず表題らしい(?)話だったと思います。

読んで下さってありがとうございます。

感想、お気に入り、評価励みになります。

ではまた。

君が見た夜明け（前書き）

新志で色々曖昧。アダルトと言えばアダルト。

## 君が見た夜明け

夜が終わりを告げると朝の空気が世界を満たす。

狭かった視界が広がった。

まだ、日の出ない刻。

世界は青く、もっとも静寂。

東の空がゆっくりと色づき始める。

「宮野…？」

腕を組んで窓際のサンにもたれ掛かっていた志保は、名前を呼ばれて振り向いた。

白い長めのシャツ一枚の裾が引つ張られて、太もも上で更に短くなる。

脱ぎ捨てられた服の向こうにあるベッドの上で、うつ伏せの半身を起き上げて新一が見ている。

まだ夢の向こう側にいるのか、焦点は合っていない。

寝癖なのか元々なのか、跳ねた毛が間の抜けた感じだ。

世間で言われている、知的でカッコイイ工藤新一ではない。

「まだ、早いからもう少し寝られるわよ」

「宮野」

甘えるように新一は志保を呼び手招きをする。  
白いシーツに埋もれた新一に手を引かれ、志保は後ろから抱き締められた。

「…何見てたの？」

志保の肩に頭を預けて新一が聞く。

耳に吐息がかかって志保はくすぐったさに身を振った。

「朝…かしら？」

曖昧だけどそれしか答えが見つからない。

「へえ」

新一は少し力を強くして抱き締め、首筋にキスをする。

「あんなに暗かった夜が、ある刻を境に朝になるの」

志保は窓を見る。

東の空は紫から紅へと変化して染まってきた。

朝は確実にやってくる。

明けない夜はない。

使い古された言葉だけれど。

「あなたに会った時、私にも朝が来たわ」



フフツと志保は笑う。

「宮野」

志保が振り向くと、新一が深く青い瞳で見つめている。  
見つめあって唇を合わせた。

向かい合わせでシートに潜り込む。

「もう少し眠ろうか」

闘う、その時まで。

強い光が地上に顔をだして、ビル群を照らし始めていた。

空色春時代(三) (前書き)

中学ノ哀の続編です。長いのが嫌な方は避けて下さい。

### 空色春時代（三）

怪我したコナンは練習には参加出来ずに、上半身だけ体力作りをしていた。

歩美がそれに付き合っていた。

「吉田さん、江戸川ばつかずるい」

一人の部員が水を飲みながら羨ましそうに言った。

その言葉をきっかけにして、数人がコナンへ嫉妬の目を向ける。

「あら、私だけじゃ不満かしら？」

哀がその部員達の前を通る。

洗いたてのタオルを配りながら、大きな目を動かして一人一人横目で見ると部員達は慌てる。

「そんな事ないです!!」

哀のフツとした笑いに部員達は更に顔を赤くした。

「お前達、何サボってたんだ」

キャプテンが威圧するように来たので、部員達は蜘蛛の子を散らすように去っていく。

その姿に哀がフツツと笑うとキャプテンも笑った。

そしてわざとらしく、チラッとコナン達を見て哀を見たので、哀はカチンとする。

「何ですか？」

「…いいのかなーと思ってさ」

「…何がでしょう？」

「余裕ですねーハイバラサン」

腕を組んでおどけたようにキャプテンは哀を見た。  
哀はジロリと睨んで呆れたように言う。

「キャプテンがそんな性格だとは知りませんでした」

「魅力的でしょ？」

「…そんな事微塵も言ってますが」

冷たく言ってもキャプテンは意に介しないでにやにや笑う。

「コナンくん？」

歩美が、顔の表情が険しくなったコナンに気づいた。  
コナンの視線を辿ると哀とキャプテンがいた。

「…」

「…コナンくん！」

大きく呼ばれてコナンは振り向く。

「…ああ。わりい」

筋トレを続け始めるコナンに、歩美は黙って傍にいた。

「え？」

日曜日。歩美とショッピングに来ている哀は、持っていたフォークにシヨートパスタを刺したまま動きを止めた。

お昼の食事処は込んでいて、イタリアンレストランは女性率の高さを誇っていた。

選り分けられた皿にはクリームとチーズが絡まり、野菜とサーモンの彩りが綺麗に熱々と湯気が立っている。

パスタとサラダと季節の魚介と野菜のピザが真ん中に並んでいる。

歩美はそれらに手をつけず、ジュースを片手で持ってストローをぐるぐる回して哀を見た。

「どう思う？」

「…」

哀はフォークを置いて歩美を見た。優しくしつかり目を見つめて答えた。

「いいと思うわ」

「…」

「ずっと好きだったんでしょ？鈍感な彼に知らせるいい機会じゃない」

「哀ちゃん…それでいいの？」

「？」

歩美は首を傾げる哀が可愛いと思いつつ、何か納得出来ない。

「私の許可なんて必要ないでしょ。あなた達も大人になって来たんだから、そういう風になるのは自然だと思うわ」

「…なんか哀ちゃん…。大人みたいで同じ年におもえない…。」

「冷めるから食べながら話しましょう」

目を丸くした歩美に、ハツとして哀は誤魔化すようにピザを切りわけた。

歩美は渡されたピザをそのまま口にして、美味しさに笑顔になる。そしてまた笑顔が消える。

「…でもね。ちょっと怖いんだ。今まで幼馴染みとして側にいたのにそれが無くなりそうで…」

「…」

「小学一年生の時からずっと一緒にいたから…関係壊したくないって気持ちもあって怖い」

「好きなんでしょ？もう一段階近づけるチャンスじゃない」

哀はフォークにパスタを刺しながら言う。

「あなたが真剣に想いを伝えたら、彼はきつと真剣に向き合ってくれるわ。結果がどうか無責任なことは言わないけれど」

哀はパスタを口にした。少し冷めてしまったけれど味は美味しい。

「きつと心配することなんてないわよ。江戸川くんなら」

「…」

「それに。あなた達ってそれくらいで壊れるような関係だった？ずつと長く一緒だったじゃない。」

「…哀ちゃん。随分コナンくんの事解ってるのね」

たまらなくなつて目を反らしつい口に出してしまった。歩美は嫌味を言ってしまったと後悔した。嫌な気持ちが生まれてぐるぐると回る。

でもそれを気づかない哀は目を丸くして一瞬考えこんだ。

「んー、そうね。お隣だし腐れ縁だし。そういうものじゃない？円谷君も小嶋君の事も他の人より解ってる気がするわ」

それかもしれない。哀の言ってることは解る。

でも何か違う。五人は幼馴染みだけれど、コナンと哀の間に流れる空気は何か違う。

「勿論、あなたのこともね。他の誰より理解してて負けないつもりよ」

「え？」

歩美が顔を上げると、少し照れたように哀が顔赤くしていた。

「私は貴方の一番の親友。そう思ってただけ。違ったかしら？」

「ううん！正解！！」

フワリと笑う哀に歩美は赤面する。中学生になって更に美しくなった幼馴染みはの顔は見慣れてはいるけれど、それでも時々同性としても綺麗だと思う。

この親友が大好きだと心から思う。だからこそ、嫉妬してる自分が醜くて仕方ない。

「…ありがとう哀ちゃん」

照れて笑顔になる歩美をまた優しい笑顔で見て、…哀は目を伏せる。

「…お礼を言うのは私のほうよ。私みたいなのと友達になってくれて」

「…え？」

「取り合えず…。告白頑張ってるね。何かあったらすぐに駆けつけるから」

「うん！」



二人は食事を再開する。ひと通りお腹に入れると歩美が思い出したように言う。

「やっぱりキャプテンと付き合ってるから、大人びて考えられるの？」

「は？」

「最近、仲良さそうに見えるからさ。付き合ってるのかなーって付き合ってたらいいなと願望を込めて歩美は、ちらりと哀を見た。口を開けていた哀はこめかみを抑えて、フウツとため息をつく。

「吉田さん…あなたまでそう言うとは思わなかったわ。告白、されはしたけれどちゃんと断ったのに」

薄目にして睨むように歩美を見て、再びため息をつく哀。  
男女が隣にいとみんなそう思われてしまうのが、日本の中学生なのか。

「私は誰とも付き合うつもりないわ」

「えへへ。ごめんごめん。でも最近いい雰囲気だからさ」

「…吉田さん？」

「……………」

これ以上何か言えば身の危険だと歩美は察して口をつぐんだ。

夕方になって哀は家の前に立っていた。しばらく考えこんで家へ入る。

「ただいま」

「お帰り」

予想通り。我が家のように寛いで小説を読んでも、哀はため息をついた。

「歩美と買い物楽しかった？」

「ええ、とっても。博士は？」

「遅くなるってさ。ご飯も要らないって」

「…そう」

荷物を置いて部屋で着替えているとコナンが入ってくる。

「着替えてるんだけど」

下着姿の哀が冷たい視線で睨んでも、コナンは気にせず哀を抱き締めた。

「脱がす手間省けて。ちょうどいいだろ」

「…私疲れてるの」

怪我をしてからだろうか。コナンはところ構わず頻繁に求めてくるようになった。

新一の部屋でだけと決めていたはずなのにウヤムヤになっていた。色々調べては見たのだが、怪我をして性欲が強くなるという仕組みが未だに解らないままだ。

「じゃあ寝てるだけでいいぜ」

「…そういう事じゃ！」

塞がれた唇と押し倒された事により、哀は抵抗出来ずに流された。熱いコナンの身体を感じながら、罪悪感が激しく襲う。

自分からは離れるつもりはなかったけれど、大好きな親友を裏切りたくはない。

(既に裏切っているのに調子が良すぎるわね…)

自嘲の笑みが浮かぶ。

でもあの子の笑顔を壊したくない。それは自分が迎える孤独より大事なものだった。

「灰原…」

まだ少しあどけないけれど、元の工藤新一と同じくらい成長をしてきたコナンの顔が、哀を見つめる。

あの頃と違って声も低くなっている。

この関係は潮時だ。

コナンの為にもそれがいい。

元々コナンが新しい恋愛をするまでの、性欲を充たす為の繋ぎだったのだから。

哀の役目も終わりなのだ。

「……」

この胸の痛みは気のせいだと、哀は感情を殺す得意技を發揮した。

「ねえ。工藤くん」

事が終わって絡み付くように横になっているコナンの体温を感じながら、哀は切り出した。

極めて感情を入れないように。

「私達そろそろ……」

「嫌だ！」

コナンが急に大声を上げる。哀はまだ何も言っていないのに、それを知っているかのように遮った。

哀がコナンの胸に預けていた頭を持ち上げると、深く蒼い瞳が哀を見ていた。

「え？工藤くん……」

「こついつのもう止めようっていうんだろ？断る」

最高に不機嫌な顔をしたコナンが不貞腐れて横を向いた。

探偵の性なのか、哀が解りやすかったからなのかコナンには哀の考

えてることが解っていたらしい。

しかし、もう時間は残されていない。親友の為に、親友を裏切りたくはないから。

歩美が告白する前にこの関係を終わりにしなくては。

「…終わりにさせるべきよ」

哀の言葉に横を向いたままのコナンの目が見開いた。瞼を閉じてしばらく無言になりキツパリとした声で答えた。

「…駄目だ。許さない」

「…！」

許さない。

その言葉は哀の胸を激しく揺さぶった。

コナンは哀を許してはいないのだ。工藤新一の人生を止めて、初恋を壊してしまった哀…シエリーを。

「…ごめんなさい」

忘れてはいけないものを突きつけられて哀は目の光を失い下を向いた。

「…」

コナンは哀の顎をあげて激しく口づけをする。

哀が逃げるのを認めないといでも言うように強く抱き締めながら。

「……………」

激しく感じた口づけが次第に優しく甘く感じたのは、哀の逃避した  
い心の気のせいだったのかもしれない。

同時に苦く苦しいもので胸が張り裂けそうになっていったのだから。

空色春時代(三) (後書き)

書いててよく解らないです。すみません。

このシリーズはよく解らないままダラダラ続く予定です。

## ぬくもり(前書き)

新志です。付き合ってます。



## ぬくもり

「犯人はあなたですね。西野さん」

腕を組んで不敵な笑みを浮かべながら、高校生探偵工藤新一が犯人を特定した。

周りにいた人々はその人物を避けるように後ろに下がる。

犯人と言われた西野は驚いた顔を無理矢理笑顔にし周りを見回した。

「な、何を言ってるの？私が犯人な訳ないじゃない。第一殺された時間、私はみんなと一緒にいたのよ」

誤魔化す言葉は焦ったように早口で、周りの人々が無言で見守る為、西野の笑顔はどんどんひきつっていった。

新一は落ち着いた表情と声で、推理した西野のアリバイトリックを披露する。

「そして肝心の殺害方法ですが…」

「工藤くん！」

高校生探偵の話に割り込んで来た人物は、赤みがかった茶髪の美人だった。

スラッとした細身の体形で、シンプルなパンツスタイルにロングのニットパーカーを着ているが、その涼やかな顔と同じく少し寒そうだ。

白い雪のような肌は透明感があって、一体彼女は誰なのかそこにいた参考人達全員が思った。

「おお、ちょうど良いタイミングだな。持ってきてくれたか？」

「ええ。全くあなたいつも突然なんだから」

新一に呼ばれて来たのか、持っていたものを渡したため息をついた。美人だがその不機嫌そうな表情で、性格はキツそうだと誰もが感じる。

「サンキューな」

しかしその態度も新一には気にならないようで、先ほどまでカッコつけていた顔を崩して、笑顔でその美人を見つめた。

「…ほら、みんな待ってるわよ」

少し低めの心地よい可愛らしい声が新一を促す。ポカンと見ている観衆を見回して、新一は顔を引き締め改めて事件のトリックを証しと言った。

彼女の持ってきたものを使って実験すると、西野は崩れるように座り込んだ。

「アイツが悪いのよ…私を好きだと言った癖に他にも女がいたなんて」

被害者がどれだけ酷いことをしたかと語り泣き出す西野を、警察官数人で立たせてパトカーへ運んでいく。

「いやあー。工藤くんのお陰でまた事件が無事解決したよ」

警部と呼ばれる恰幅のよい男が高笑いしながら新一を賞賛する。

一時は身を潜めていたが、やはりその頭脳は変わらずに色んな難事件を解いていく。

「お役に立てて何よりです」

当然という顔をして賞賛を受け止めていた新一が、傍で新一達のやり取りを聞かずに景色を見ていた彼女を見た。

初冬の街路樹はすっかり葉が落ちて裸になり、赤黄緑の色とりどりの絨毯が辺り一面を覆っていた。

肘に両腕をクロスしながら当てて立っている。小さな風が柔らかい茶髪の毛の先を持ち上げた。

「すみません警部」

断りを入れて新一は彼女の傍に行く。

「宮野」

名前を呼ばれた途端に首元にフワリと暖かさを感じる。

「…?」

宮野志保が振り向くと、新一が身に付けていたマフラーを志保に巻き付けた。

「寒そうなカッコしてんな。せめて暖かい格好で出てこいよ。オメーすぐ体調を壊すんだから」

「工藤くん…」

口調は荒いが瞳は優しい。

普通にしていたつもりだったのに、冷たい風の寒さに少し身震いしたのを新一は気づいたのだ。

志保は翡翠の瞳で新一の蒼い瞳を見上げる。

「俺が呼んだからって慌てて出てきたんだろ？」

「…違うわ。そんなに寒くないし」

志保は強がって横を向くと、首元に巻かれたマフラーから新一の匂いがした。

「何言ってるんだよ。こんなに手冷たいくせに」

「…っ」

志保の手を取り、新一は自分の温かい手で包んだ。

志保の氷のように冷えて冷たい手。

また風が吹いて服に染み込むように寒さがやってきた。

「これで寒くないなんて嘘だろ？」

真っ直ぐな目で志保の顔に近づくと、凶星の志保は目を合わせられなくて俯く。

ハアアッと新一は志保の手を暖めるように息をかけ手を擦った。

「…ちよつと工藤くん！」

志保は驚いて手を離そうとするのだが、新一の力が強くて離してくれない。堪らない。

「…工藤くん。解ったわよ離して」

「ほらな」

やっと認めた志保に、新一はニツと笑う。

そして腕を伸ばして志保の肩を寄せて、こちらを見守っていた刑事達に顔を向けた。

「すみませんが、調書は後日でいいですか？こいつ送りたいので」

顔を真つ赤にしながらぼんやりしていた刑事達は慌てて首を縦に振っていた。

「ああ、工藤くん帰っていいぞ。宮野くんも協力感謝する」

「じゃ、お願いします」

「ちょっと！工藤くん私一人で帰れるわよ。子供じゃないんだし」

志保も慌てて言うが、新一は聞いてないようで志保に巻いたマフラーを整えた。

目少し細めて笑いながら志保を見る。

「…宮野。今日は来てくれてありがとうな」

「…」

とても勝てないと志保は観念して息を吐く。その顔に弱いのを志保は自覚していた。

「どういたしまして…」

返事をした志保に満足した笑みを浮かべて新一は、また志保の手を取った。

志保の片手を握ったまま、新一の着ているコートのポケットへ手を入れて歩き出す。

「よし、早く帰ろうぜ」

新一はただ純粹に志保を心配してくれているだけで、別にそんな気はないのだ。

志保は自分に言い聞かせる。

握られた手の温もりから浮き立ちそうな気持ちに志保は必死に抵抗する。

元に戻ってから、新一はことあるごとに志保と接点を持つとした。それは、宮野志保として居場所を作ろうとしてのことだった。

事件で志保を頼るのも、志保の頭脳を知っているからだ。

「…」

二人並んで歩く。

木枯らし吹く街並みだけれど、繋いだ手と心が暖かくて家に帰るまで寒さを感じなかった。

「腹減ったな。身体があたたまるもん食いたい」

家に入って暖房をつけリビングで寛ぐ新一へ珈琲を渡すと、お願いするように新一は志保を見た。

どうやら今夜もまた夕御飯を食べて行くらしい。

「今日はシチューよ。肉なしの」

博士用にカロリーオフの食事をアピールするが、新一は楽しみに待っているみたいだ。

新一を追い出そうとして無駄と悟り、志保は食事を作る為に立ち上がる。その目にマフラーが映った。

「工藤くん」

「ん?」

「これ、ありがとう」

照れたように微笑んで丁寧にたたんだマフラーを新一へ渡す。

あの時、志保は本当に寒くて奮えていた。それに気づいてくれたことはとてもありがたかったのだ。

新一の温もりは少しだけ志保の心を溶かしていた。

「.....」

新一は驚いて目を丸くして志保を見つめたので、柄にもないことをしたと気づき志保はクルリと向こうへ向いた。

「さて、誰かの便利屋さんの私はご飯作らなくちゃ」

キッチンへ向かう志保の心はまた閉ざされる。

新一は受け取ったマフラーを持ちながら、ソファへ倒れ込み沈んだ。

「あー…もう」

お礼を言った志保は本当に可愛かった。

あんな笑顔は卑怯だと新一は赤くした顔を埋め隠す。

「便利屋さんじゃねーよ」

あんなに解りやすく接しているのに、まだ彼女はそんな風にしか感じていないのか。まだ素直に言葉を言えない自分にも腹が立つ。キッチンの方からいい匂いが漂い始めた。

「…いい加減気づけっーの」

呟いた新一の言葉は志保には勿論聞こえなかった。



ぬくもり（後書き）

…色んなのすつ飛ばしてただイチャイチャさせたかった。（ただし  
自覚無し）それだけです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9427/>

---

相棒以上恋人未満

2011年11月24日00時48分発行